愚者達の戦記２

藤森応輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愚者達の戦記２

【Ｎコード】
Ｎ７８５７Ｕ

【作者名】
藤森応輝

【あらすじ】
大国コスティラ王国を西に接するバルバール王国は、一敗地にまみれれば後が無い小国である。
だが攻め寄せるコスティラ軍に対し天険の利を活かして連勝記録を伸ばしていた。
その生き残る為には勝ち続けるしかないバルバール王国の東に接する大国ランリエル王国に不穏な動きが見られた。
ランリエル王国は今まで数百年にわたり宿敵カルデイ帝国と戦い続けていたのだが、遂にその戦いに終止符が打たれたのだ。

宿敵カルデイ帝国を倒したランリエル王国稀代の名将サルヴァ・アルディナ王子と、バルバール軍総司令官フィン・ディアスとの戦いが幕を開ける。

愚者達の戦記1の続編ですが、2から読んでも大丈夫と思います。

プロローグ

「サルヴァ殿下は何処！」
「総司令官は御健在なるか！」
ランリエル軍の各所から悲痛な叫びが発せられた。

大陸歴６２８年も開けてすぐ、ボルディエス大陸の東方に位置するランリエル王国、ベルヴァース王国の連合軍９万４千は、そのさらに東に国境を接するカルデイ帝国帝都ダエンと攻め寄せた。
カルデイ帝国軍は４万５千。

連合軍は帝国軍の２倍を超える勢力を誇り決戦すれば勝敗は明らかだったが、長大強固な塀に囲まれた城塞都市であるダエンに篭られては攻略は困難である。

しかし帝国軍が堅牢な帝都に立て篭もるであろう事など、ランリエル王国第一王子にしてランリエル軍総司令官であるサルヴァ・アルディナには本国を発した時どころかカルデイ帝国侵攻の計画を立てた段階から予測出来た事だった。

その為カルデイ帝都攻略の「ある秘策」を持ってカルデイ帝都ダエンまで進撃し、一ヶ月間帝都を包囲しながら秘策の準備を行なったのである。

そしてその秘策は実行された。勝利の確信を持って……。

だが帝国軍を率いる敵将は、サルヴァ王子必勝の秘策発動の隙を突いて攻勢に転じ、逆にランリエル軍を窮地に陥れたのである。

その秘策が見破られる事は無いと確信した上でさらに万全を期し、秘策の準備中に敵に攻撃されても撃退出来るだけの備えも整えられていた。

にも拘らず、かの帝国の敵将は王子の策を読んだ上でその策の準備作業を放置し、策が発動した瞬間に攻撃に転じてランリエル軍に痛撃を与えたのである。

ランリエル軍は総司令官の所在不明という大混乱に陥り、全軍敗走せずに持ち堪えられているのはベルヴァースの老将セデルテ・グレヴィが指揮する軍勢により何とか敵を食い止めているからに過ぎない。

いつまでも持ち堪えられるものではない。いずれはベルヴァース軍も戦線を維持できなくなるだろう。

グレヴィが敵を防いでいる後方で、総司令官不在にもかかわらず必死で体勢を立て直すべく兵士を叱咤している幕僚達に泥だらけの兵士が近づいた。

「貴様！　こんな所でうろちょろせずに自分の所属部隊の指揮下に戻れ！　指揮官の場所が分からないならあそこに固まっている兵士達と合流し、その指揮下に入れ！」

叫ぶ幕僚に兵士は泥だらけの兜を脱ぐと、泥にまみれた憮然とした顔を見せ付けた。

「でっ殿下！　申し訳御座いません！　しかし良くぞご無事で！」

ランリエル軍総司令官はその幕僚に「ああ」と短く返答すると、

水を持ってこさせて頭から被る。そして他の者にも自分の鎧に水を浴びせる様に命じた。

総司令官が泥だらけでは軍勢の士気にかかわる。兵士達の前には毅然たる姿を見せなくては成らないのである。

あらかた泥が落ちるとサルヴァ王子は改めて兜を被り、用意させた馬に跨り、将兵を鼓舞すべく前線へと戻ろうとした、その時、王子の従者が呼び止めた。

「殿下！　これを御身に着け下さい！」

従者が差し出したのは、総司令官の印である外套と普段王子が被っている兜である。万一の場合にと予備が用意されていたのだ。

王子は外套を脱ぎ捨てており、兜も普段被っている王子に相応しい精緻な装飾がなされた兜ではなく、なぜか実用一点張りの不恰好な兜でその頭を守っていたのである。

王子は馬上から外套を引っ掴むと馬の腹を蹴りその場を飛び出し、そして馬を走らせながら外套を身に付け前線へと急いだ。

第1話：小国の総司令（1）

大陸歴６２８年秋。

秋の夕日に照らされ赤く染まりながらバルバール王国軍の総司令官たる将軍フィン・ディアスは、馬上からコスティラ王国の軍勢が退却していく様を眺めていた。

コスティラ王国とバルバール王国への国境に攻め寄せたコスティラ王国軍は数千の死傷者を出したにもかかわらず遂に国境を突破する事叶わず、敗北したのだった。

バルバール軍の損害はその１０分の１にも満たない。

「毎度の事だが、よく飽きもせずに攻めてくるものだ」

ディアスは呆れながら胸中でごちた。

しかし彼の乗馬が彼の心中を察したかの様に小さく嘶くと苦笑し、乗馬の首の当たりを撫でる。乗馬は気持ち良さそうにまた嘶いた。

茶色の髪と同じ色の瞳を持ち武将としては小柄な体格だが、一般的には中肉中背と言ったところだ。

今年で３５歳になるこの男は、バルバール王国の王族に名を連ねるでもなくこの年齢で一国の実働部隊の頂点に立っている事からもその有能さが伺える。

ひとしきり乗馬の首を掻き峯ると、ディアスはコスティラ軍へと視線を戻した。

バルバール王国は西にコスティラ王国、東にランリエル王国に隣接し、北にはコルス山脈があり、南は海である。

コスティラ王国とランリエル王国の国力を比べれば、ランリエルの国力はコスティラの9割ほどと言われているが、バルバール王国の国力はコスティラの約半分でしかない。

確かにディアスはバルバール王国の武門の名流の血筋ではあるが、強大な2国に挟まれているバルバール王国の現状をかんがみれば、血筋だけで地位を得られるほど甘い状態ではないのである。

ディアス自身は特に軍人になりたい訳でもなかったが、武門の名流に生まれた以上他の人生の選択肢はすべて閉ざされていたのだった。

だが、積極的に軍人を目指したのでない以上武術の鍛錬に身が入る訳も無く、戦時に徴収され訓練もそこそこに出陣させられる一般兵にはかろうじて勝てるだが、日々鍛錬している本職の騎士にはまったく葉が立たない体たらくなのである。

その所為もあり、一国の総司令という身分でありながら、身を固める鎧は鉄板を張り重ねた極平凡な物だった。

「もし敵に本陣まで攻め込まれた時、目立つ鎧なんて着ていたらかっこうの目印になって危ないじゃないか」

ディアスは平然とそう嘯(うそぶ)いていた。

ではそのディアスがなぜ実働部隊の頂点に上り詰める事が出来たかと言えば、皮肉にも武門の名流に生まれたからだった。

ディアスはその初陣にしてから、ディアス家一族挙ってはせ参じ数百の私兵を率いた仕官として出陣したのだ。当然幕僚も経験豊富な一門の将軍揃いであり、それを率いるディアスを除けば国軍を率

いるに足る面々なのだった。

元々指揮する事に天賦の才を持っていたディアスは、それら経験豊富な将軍に囲まれ才能を開花し、一門の者達がもう良かろうと独り立ちした頃には武功を重ね出世して一族の力を借りなくても一軍を率いる身分となっていたのだった。

毎年の様に攻め寄せるコスティラ軍に対し、バルバール軍は同じ数だけ迎撃を行ってきた。今回の戦いも、何度目か誰も把握していないと言われるコスティラ王国からバルバール王国への侵攻が行われ、バルバールの連勝記録は更新された。

コスティラに比べ、国力が約半分でしかないバルバールは、一敗し国境を越えてコスティラ軍に雪崩れ込まれれば劣勢を挽回する事は不可能に近く、一度の敗北でバルバールは地図から消滅する。

つまりバルバール王国が存続している間は連戦連勝でしかありえないのである。

もちろん、バルバールの王都が占領されバルバール王国国王が討たれても、王族の血を引く貴族や民衆が数年に渡って抵抗するであろうが、元々の国力で太刀打ちできず他国から支援を受けられると言うわけでもない状況では、いずれ鎮圧される事になる。

しかもバルバールは西のコスティラだけではなく、東には……。

「敵もよく飽きもしないものですな」

ディアスが己の思考は中断させた声の主へと視線を動かすと、先ほどのディアスと同じ感想を洩らし馬で近づいてきたのは、バルバ

ール軍の猛将グレイスだった。

こちらはディアスとは違い短く刈った黒髪に無精髭を延ばし鍛えられた体躯を持つ如何にも猛者と言った貫禄である。背もディアスより頭半分ほどは高いだろう。

「ああ。まったくだ。もっともおかげで我らは廃業せずにすむというものだがな」

肩をすくめ、不謹慎な言葉を悪びれず吐き出したディアスに、グレイスは大きく笑った。

「はっはは！　相変わらずですな。確かに奴らが攻めて来ねば、後はめったに無い叛乱ぐらいなものですからな」

コスティラとの戦いが毎度の事とはいえ勝利で終わり気が高ぶっているのであろう。グレイスはすこぶる機嫌が良い。

無精髭の奥から白い歯を覗かせながら豪快に笑う。

「しかし、これで今年の戦いは終わりですかな？」

「そうだな。コスティラだって年に何度も侵攻する力は無い。年内にもう一度攻めてくる事はないだろう」

「では、後はゆっくりと寝て過ごしますか」

グレイスはさらに豪快に笑ったが、ディアスの表情に気付き再度口を開く。

「どうなされなしたか？　表情が優れないようですが」

「いや、コスティラは良いとして、反対側のご隣人が気に掛かってな」

ディアスの言葉にグレイスも顎に手をやり考え込む様な表情になる。

「ランリエルですか……」

「ああ、グレイス将軍も聞いているだろ？　ランリエルは去年宿敵カルデイ帝国を征服する事に成功した。そうなれば今度はこっちに攻めてきかねない」

バルバールは西の大国コスティラに攻められているだけではなく、東にもバルバールよりも遥かに国力に勝るランリエルと接している。

今までランリエルに攻められなかったのは、ランリエルがさらに東にある宿敵カルデイ帝国と戦いに手こずっていた為だった。しかもその両国にはさらにベルヴァース王国という小国も隣接し、戦いは複雑さを増し今まで決着が付かなかったのだった。

だがその戦いに決着がついたとなれば、ランリエルが次に狙うのはバルバールだろう。

だが意外にもバルバールで、それを案じている者は少なかった。

グレイス将軍もその一人だったのだ

「ですが……。それは杞憂と言う物では無いですか？」

ディアスに遠慮がちに言ったが、しかしこれはグレイスが能天気の楽天家という訳ではない。

実はランリエル、カルデイ両国の長い戦いの歴史では、今までも

ランリエルがカルデイ帝国を征服しかけた事も、さらになんとカルデイがランリエルを征服しかけた事すらあったのである。

だが両国の国力はほぼ同等だった。

征服されそうになるたびにそれぞれの王家、皇家の血を引くと称する貴族達が新国王、皇帝を名乗り立ち上がり、さらに民衆もあちこちで蜂起する。しかもである、そこに両国の戦いに決着が付いては次は自分達が狙われると考えるベルヴァースも介入し、形勢不利な方に援助を行う。その為、結局は国が再建されるという事を繰り返していたのだ。

それゆえ、今度のランリエルによるカルデイ征服もどうせ最後には失敗すると考える者が多く。それどころかランリエルは帝国との戦いにてこずり、むしろバルバールの東の国境は安全になるという考えが主流だったのだ。

「しかし、もしランリエルがバルバールに攻め寄せてきては、我々は2倍の敵を前後に受ける事になる。しかもコスティラが我が国に攻め寄せる時は陸海の両路とも天険の地形が我が国に利するが、ランリエルはそうはいかない。陸路はともかく海路に地形の恩恵はない」

ディアスが言うとおり、陸路においてバルバールとコスティラの国境は険しい渓谷が続き、バルバールはこの渓谷に強固な関を築き少数の軍勢で易々と守る事が出来たのである。

そして海路も、コスティラとバルバールとの国境付近の沖合い近くにはマレビアナ半島がせり出している為、バルバール王国沖は非常に狭い。

特にコスティラ王国沖からバルバール王国沖へと入る海道は１０隻も船が並べば互いに衝突しかねないほどだった。

海戦は艦艇の船首に衝角と呼ばれる金属の角を取り付け、敵艦に体当たりして穴を開けて敵艦を沈めるという衝角戦法が主流だった。そして衝角戦では敵船の船腹を突く事が重要である。

この様な戦いでは船の旋回能力が重要な鍵となる為、軍艦の殆どは帆船ではなく多数のこぎ手を必要とするガレー船である。帆船では風向きによって旋回方向や進行方向が制限される。

コスティラ海軍が船団を縦に並べて狭い海道を突破すると、その出口を封鎖する様にバルバール海軍の艦艇が待ち受けているのだった。

海道を出たところで包囲され、敵艦から船腹を隠す事もままならず、コスティラ艦隊は次々と海の藻屑と消えていくのである。

このあまりにも不公平な地理条件にコスティラ軍部は神を呪ったが、バルバールにしてみれば国力に差があるのだから地理条件ぐらいこっちに有利にして貰わないとたまらない。これで釣り合いが取れているだろうよ。と言う所だった。

そしてランリエルに対しても国境付近の陸路は山々に囲まれ守るに易いが、しかし海路はコスティラとは違い大きく開け放たれているのだった。

「それはそうですが、ランリエルにはコスティラの様な海軍はありません」

「それは分かってはいるが、我々の様な小国に油断は許されない。万一の事にも対策は考えて置くべきだろう」

「確かに……」

とは言うもものグレイスの表情は何か納得しかねるものがあった。

ディアスは微かに苦笑した。

ここでグレイスと議論してもしょうがない。

「まあいい。とにかく今日はコスティラには勝ったんだ。敵が引き上げたのならこちらも退却……と行きたい所だが、敵が引き返して来る事も考えられる。今日はこのままここで夜営をしよう」

「確かに。では早速その準備を致しましょう」

ディアスの言葉にグレイスは素直に頷く。

グレイスはディアスからの指令を自らの部隊と同僚の諸将へと伝えるべく馬首を返し、馬の腹を蹴ってその場を立ち去った

第1話：小国の総司令（2）

数日後ディアスは、バルバール王国王都チェルタに凱旋し、さらに王城へと馬を進ませる。

バルバール王国国王が座する王城は付近で産出される石の色の為褐色の肌を持ち規模も小さく、一国の王城としては残念ながら威厳や荘厳、ましてや優雅といった表現とは無縁だった。

遠くから王城にふさわしい白石を運ばせるにも、巨城を建設するにも小国バルバール王国の財政では不可能だったのだ。

ディアスは入城するとすぐさまバルバール王国国王ドイルに謁見し、膝まずいて戦勝の報告を行う。

国境へと攻め寄せたコスティラ軍を撃退した。という簡潔な内容を多少の装飾を施すして報告した。

ディアスにしてみれば「コスティラ軍を撃退してまいりました」とだけ報告して終わらせたいのはやまやまなのだが、そこは宮廷作法という物なので仕方がない。

それに対しドイル王から労いの言葉を賜った。

「そなたの此度の働きまことに見事である。しばらくはゆっくりと身を休ませるが良い」

まことに独創性の欠片もないお言葉であるが、度重なるコスティラ王国との戦いで、歴代の国王が気の利いた台詞を言い尽くしまった。と言われている。

気の利いた台詞を使った挙句先人の真似と言われるくらいなら、何度使い回しても非難されない無難な言葉を下す方が楽と言うのである。

昇進や恩賞についての言葉はないが、ディアスに不満は無い。

ディアスは総司令官であり軍事においてこの上の位と言えば、軍務大臣しかない。だが軍務大臣とはいえば聞こえが良いが、実際は裏方の総元締めであり、ディアスにとってはなりたいと思う役職でもない。

そして他者からも、ディアスは総司令官としての才覚は認められているが、裏方の総元締めなどという任務には向かないだろうと評されていたのだ。

そして勝ってもなんら得る物のない防衛戦で恩賞を出す経済的余裕は、小国バルバールには無いのである。

もっともこの事についてもディアスには不満は無い。

「その分戦争の無い時は楽をさせて貰っているからな」と考えているのだった。

もっともまじめな軍人であれば、平時にこそ自己を鍛錬するときと、楽をさせて貰っていると言うディアスの考えを真っ向から否定するであろうが。

ディアスのドイル王への人物評価は言うなれば「お人よし」と言うものだった。とはいえ、ドイル王の評価が低いというわけでない。むしろその逆である。

臣下を疑うという事を知らず、政治、財政そして軍事のあらゆる国家運営について任命した人材にすべてを任せるこの国王は「賢王」と言っても良いだろう。ディアスはそう考えていたのだ。中途半端な知識で口を出されては現場の者がやり難くて仕方が無い。

「国王陛下のお言葉、ありがたく承ります」

ディアスは跪いたまま型どおりの礼儀に則った返礼の口上を述べ、さらに礼儀に則った一礼をしドイル王の前から退出した。

自身の邸宅へと帰ったディアスとディアスの従者を、数人の使用人、それに従弟のケネスが

「ディアス将軍お帰りなさいませ」と出迎えた。

ケネスはディアスの叔父の次男で17歳の少年だった。

ディアスの父の弟であるケネスの父は、どうせ武門の名流であるディアス家を継げないのならと商家へと婿入りしたのだが、叔父のふたりいる息子達は父と同じ考えにはならず、軍人になりたがったのだ。

だが長男は商家を継がせない訳には行かない。そしてその事は長男も十分承知していた。その為、それならばせめて弟だけでもと兄弟共々叔父を説得したのだ。

こうしてディアスの元へと預けられたケネスだったが、残念ながら軍人として恵まれた体格とは言い難い。

軍人としては小柄なディアスより身長こそはケネスの方が高いのだが、体の厚みはその身長に見合ったものではなかったのである。

ディアスよりもさらに薄い茶色のケネスの髪は、その頼りなさげ

な体格をさらに弱々しい印象に補完しているのだった。

その体格のひ弱さは身体を鍛えればどうにかなるというものではなく、骨格からして苛烈な戦闘には耐えられそうになかったのである。

いくら肉を鍛えても、その骨は敵が渾身の力で振り下ろす大剣を支える事が出来ないだろう。

その為17歳という年齢にもかかわらずケネスはまだ初陣を迎えておらず、今回の戦いでも邸宅の留守を守っていたのだった。

だがケネスはそれでも軍人になる事を諦めず、ディアスの元で軍略の勉強に励んでいたのだ。

「ディアス将軍の様に帷幕の中で勝利を決する武将になりたい」

これがケネスの目標だった。だがこの言葉を聞いたディアスは、何を言っているんだ。とばかりにため息を付き首を振った。

「それは実際の戦場での私を知らない者が言っている事だ。戦場に出た私がいかに勇敢に先陣を駆け戦っているのか、お前に見せてやりたいものだよ」

ケネスはこの言葉にディアス将軍の事を見損なっていたのかと赤面したが、後日長年ディアスと共に戦っているというある武将から次の様な言葉を聞いた。

「ディアス将軍が先陣を駆けるだって？　将軍が敵の矢の届く距離に入った事すら見た覚えが無いぞ？」

この言葉を聞いたケネスは驚き改めてディアスに問いただすと、ディアスは悪びれずに肩をすくめた。

「私は総司令官なんだぞ？　私が討たれれば戦は負けなのに、どうして死ぬ確率が高い場所に行かなくてはならないんだ？」

そう言って不思議そうにケネスを見つめたのだった。

「それは確かにディアス将軍が仰るとおりかも知れませんけど、どうしてわざわざ僕に嘘をつく必要があるんですか！」

普段は大人しいケネスもさすがに怒気を発したが、それに対してもディアスは悪びれる事も無くもっともらしくケネスを諭した。

「軍人を目指すなら、策を立てその策を持って勝つという軍人を目指すなら、まず人から聞いた事を素直に信じるのではなく、ちゃんと事実を確認する癖をつけた方が良いからさ」

こう言われてはケネスもぐうの音も出ず、引き下がらざるを得ない。

もっともこの話を聞いたディアスを知る多くの人々は、ディアスが単に素直で真面目な少年をからかっただけに違いないと信じて疑わなかった。

とはいえ、ディアスもケネスを邪険に扱っているわけではなく、それなりに可愛がり兵法について色々と教授する事もある。

例えばこう言う事があった。

ケネスが兵法の書物を一生懸命に読んでいるとディアスが不意に

話しかけた。

「守る方は攻める方の１０倍の兵力が必要と言う言葉を知っているか？」

ケネスはキョトンとし、そしてしばらく考え込んだ後笑い声を上げた。バルバール王国軍総司令官ディアスたろう者が、兵法の講釈で言い間違えたのだと思ったのである。

「それは攻める方が。の間違いですよね？　勿論知っていますよ。城や砦に篭って守る方が有利と言う事ですよね」

すると、ディアスは上手く引っかかったとほそく笑んだ。

「間違いではないんだ。守る方が攻めるより兵力が必要なのさ」

戦いとは守る方が有利である。これがケネスが今まで勉強した兵法での常識だった。だがディアスはそれが違うという。

いくらディアスのいう事でもにわかには信じられないという様子のケネスに、ディアスは机上演習の用意をする様に言いつけた。

「あまり複雑ではない地形の地図と駒を沢山持ってきてくれ」

そして地図と駒を持ってきたケネスから、ディアスは５つだけ駒を受取り、他の駒はすべてケネスに持たせる。

「この地図全域をお前の領地としよう。地図の真ん中がお前の城だ。そしてその周りには多くの村々があるとする。私は国境から駒を進ませて村々を略奪するので、お前は略奪されないように守るんだ」

ディアスの説明通りに机上演習が始まったが、ディアスは5つの駒を駆使して攻め込んでくる。
ディアスが1つの駒で突っ込んできたのでケネスも1つで迎撃に向かうが、地図の真ん中の城から出陣してもディアスの駒はすぐに逃げ去ってしまう。

なので国境付近に駒を一つ常駐させる事としたが、するとディアスは駒を5つに増やして攻めてきた。
仕方が無いので常駐させる駒を5に増やす。

するとディアスはまったく別の方向から領地に侵入してきた。やむを得ずケネスは四方八方に駒を5つずつ常駐させねばならなくなった。

「これで何処も攻められませんよね？」

ケネスは得意げに言ったが、もっともこの時点ですでに守るのにディアスの数倍の数の駒を使用しているのだが10倍までには達していない。一応面目は保ったと思ったのだ。

だがディアスは意地の悪い笑みを浮かべるとさらに机上演習を続けた。

まずディアスは一つの駒で出撃して来たので、ケネスも近くの拠点に置いた5つの駒の内から一つの駒を出撃させた。
するとディアスは増援を派遣し、1対5でケネスは負けてしまいその後村はディアスに略奪された。拠点に残る4つの駒では、ディアスの5つの駒に勝てないのである。

次にまたディアスが一つの駒で攻めてきたので、今度はやられないぞとケネスは拠点から5つの駒を出撃させた。
するとディアスの駒はそのまま国境を越えて逃げ去ってしまい、ディアスの残りの４つの駒は手薄になった拠点付近の村を略奪してしまったのだった。

結局完全に守りきる為には各拠点に１０以上の駒が必要となり、ケネスが使用した駒はディアスの１０倍を遥かに超えたのだった。

「どうだ、守るのに１０倍の兵力が必要だっただろ？　もっとも実際の戦争ではこうも上手く部隊を連携させて動かすのは難しいがな。こう言う考え方もあるという事さ」

ディアスは肩をすくめてそう言ったが、ケネスが唖然としたままなのに気付いてさらに説明を続けた。

「これが兵法の「吾が与に戦う所の地は知るべからざれば、則ち敵の備うる所の者多し」という考え方だ。確かに城や砦という「点」を攻める時は守る側の方が少ない兵力で守れるが、領地という「面」を攻める時、こちらの攻める場所を敵が察知できないなら守る方が兵力を必要とする時があるんだ」

ケネスは改めてディアスに尊敬の眼差しを送り、ディアスはその様子を見て満足したのだった。

しかし、ケネスは気付いていなかった。この様な兵法の授業はディアスがケネスをからかって怒らした数日後に行われる傾向がある事を。

第1話：小国の総司令（3）

邸宅に帰ったディアスは、コスティラとの戦いについて聞きたがるケネスに、勿体ぶりながらも居間で聞かせてやっていた。

勿論その話の中でのディアスは、敵陣に一騎で踊り込み雲霞の如く攻め寄せる敵兵をばったばったと切り倒し、幾人もの敵将を討ち取った事になっているが、ケネスもそのあたりはわきまえたものだ。

ディアスが自ら剣を取って戦ったという部分については話半分ならぬ話零分で聞いていた。

常に敵からの矢が届かない距離に居る人間が、雲霞どころか1人の敵とも戦っている訳が無いのである。

だがそれでもケネスは楽しくディアスの話を聞いていたが、ディアスの従者がランリエル王国について調べさせていた者から連絡が入ったと伝えてきた。

「この話の続きはまた今度にしよう」

ケネスは話が中断される事に残念がったが、ディアスの職務を邪魔する訳には行かないと大人しく引き上げた。

ディアスはすぐさま自分の書斎へと部下を招きいれる。

強国2つに囲まれた小国の将軍として情報の収集と分析は、実際に軍勢を率いる事に劣らぬ重要な任務なのである。

部下がもたらした報告とは、バルバールの東に国境を接するランリエル王国の動向についてだった。

ランリエル王国とさらに東にあるカルデイ帝国とは過去数十世代に渡り相争って来た間柄である。

だが近年ランリエルがカルデイの軍勢を決戦にて打ち破り、国内深く進攻してその帝都まで占領する事に成功したとの情報が入っていた。その為さらなる調査を行うべく部下を派遣していたのである。

もっとも、長いランリエルとカルデイとの戦いの歴史の中で一方が他方を滅亡寸前まで追い詰めるたという事は幾度と無くあった。だがそのたびに滅亡寸前のランリエルなりカルデイの貴族と民衆は徹底抗戦を続け、数年間をかけて遂には勝利者を追い払うことに成功する。という事を繰り返していたのだった。

そしてその結果、勝利者だったはずの国が数年間に及ぶ国外出兵に国内経済が破綻し国家が弱体化した。という事態が発生するのである。

それ故バルバール王国の軍人の中には、ランリエルがカルデイの国内奥深く軍勢を侵攻させた事について「これで我が国の東の国境は十年は安心していられる」と発言した者も存在した。

どうせ今回も数年間戦った挙句失敗すると考えたのだ。そして同意見の者は少なくなからず存在したのである。

だが部下からの報告は、ディアスにとってあまり愉快なものとは言えないものだった。どうやらランリエルは長年争ったカルデイを、夫に逆らえぬ力ない貞淑な妻にする事に成功しそうだと言うのだ。

「なぜ、その様な事が可能なのだ？　ランリエルの支配を不服とし

てカルデイの貴族や民衆達はなぜ抵抗しない？」

だがその疑問に対する部下の答えはディアスの想像を超えていた。

なんとランリエルは、強引にカルデイ貴族達の独立を認めたのだった。こうして「大国」カルデイ帝国は、複数の小国に周りを囲まれた「中国」となり果てたのだった。

そしてさらにカルデイに毎年多額の賠償金を支払う様に命じた一方、増税はしないように言い渡したのである。

あくまでランリエルに対抗し続けるなら、カルデイは多額の増税をおこない軍備増強に励まなくてはならない。だがそれでは民衆にはたまったものではない。

ランリエルが増税しないように言ってくるなら、それに従えば良いのだ。

こうなってはランリエルに抵抗しようにも、カルデイは民衆すら敵に回しかねない。

そして増税をせずにランリエルに多額の賠償金を支払うには、カルデイは軍備を大幅に縮小するしかなかったのである。こうしてカルデイはランリエルに対抗する力をまったく失ったのだった。

当然、この様な手段をとれば、カルデイ帝国全域を支配する事に比べれ実入りは減る。

「だが、支えきれぬほど大きな果実を無理に取ろうとするより、手中に納まる獲物を確実に取りにいった……。と言うわけか」

「はい。それでもランリエル王国の国力はかなり増強されたと思われます」

そして部下からさらに詳しく報告を受けた結果、どうやらランリエルの国力は3割増にはなるであろうと推測された。

だが3割増とはあくまでも現時点での話である。これから数年から十数年をかけてランリエルのカルデイ支配は強まっていくだろう。

未だカルデイに組する貴族達に難癖をつけて取り潰し、ランリエルに組したカルデイ貴族とて隙あらば取り潰してランリエル領へと組み入れる。

カルデイ帝国の存続は民衆の叛乱を懸念しかろうじて許されるだろうが、その領土はやはり無理難題を押し付けてでも削り取っていくに違いない。

そうなれば今の3割増どころか5割増、6割増の国力となり、その時西に強敵を有するバルバール王国はさらに東にも強敵を抱える事になるのだ。

だがディアスはランリエルの国力が増すという事よりもさらに恐れるべき事に気付いた。ランリエルに長年のカルデイとの戦いに終止符を打つ事が出来た「人材」が出現したという事にである。

「カルデイ侵攻の計画と指揮を執ったのはどのような人物か？」

「ランリエル王国の第一王子です。名はサルヴァ・アルディナ。歳は27で御座います」

「王族、しかも第一王子という事は次期国王か……」

なるほど、それでここまで大胆な方法を取れたという訳か。

いくら有能でも一将軍ではカルデイ帝国征服について過去の政策からあまり逸脱した事は出来まい。軍人にして次期国王であればこそ、ここまで自由な裁量が振れたのだ。

だが勿論、軍人且つ王子であれば誰にでも出来た事ではない。

ランリエルによるカルデイ支配が安定するであろう十数年後、まだかの王子は４０代の働き盛り。その時バルバールは嘗て無い危機に直面するだろう。

ランリエルを刺激しない様に細心の注意を払いながら、密かにバルバール王国のランリエル王国側国境に迎撃拠点を建設する必要がある。

暗雲たる気持ちでディアスはそう考えたのだった。

第2話：灼熱の王子（1）

「エクエル子国のファシェル子爵にグリエス男爵の討伐を命ぜよ」

ランリエル王国の第一王子サルヴァ・アルディナはランリエル王国王都フォルキアにある軍部の執務室にて、カルデイ帝国の支配体制を強化すべく配下のギラルデ・ムウリ将軍ら幕僚達に指示を与えていた。

しかし……とサルヴァ王子は自身の言葉に皮肉な笑みを浮かべる。

王が治める国が王国である様に、公爵が独立し一国をなせば公国、侯爵ならば侯国である。当然子爵が一国をなせば子国なのであるが、自分が認めた事とはいえ子国などというものが存在するという事に、笑い出しそうになったのだ。

もっとも実は子爵より下の爵位の男爵にすら王子は独立を認めており、男国も存在するのだが……。

王子は頭を一振りすると脱線しそうになった思考を軌道修正させた。

鍛えられ長身といえる体躯、漆黒の長い髪を後ろで束ね、瞳の色も同じく漆黒に輝く。このサルヴァ・アルディナ王子こそがランリエルの長年の宿敵たるカルデイを組み敷き、貞淑な妻にしようとする張本人だった。

もっとも組み敷かれた方も大人しくしていると見せかけ、時おり背に隠した刃にて斬りつけようとするので油断は出来ない。

今回の処置も、後何本隠しているか分からない隠された刃の一本を取り上げる為のものだった。すべての刃を取り上げた時こそ、真に貞淑な妻へと変貌するだろう。

王子は未だカルデイに忠誠を誓うカルデイ帝国貴族への監視及び討伐は、カルデイ帝国から独立した各独立国に命じる方針をとっていた。

ランリエルへの実入りを考えればランリエル軍に制圧させる方が当然実入りは多い。独立国に命じれば恩賞としてそれなりの分け前を与えねばなるまい。だが、王子は長期的な国力強化よりも、短期間での支配力強化を狙ったのだ。

確かにカルデイ帝国貴族の討伐をランリエル軍で行えば丸々その貴族の領地を手に入れる事が出きるだろう。では、独立国に討伐させればどの様な利点があるのかと言うと、カルデイ帝国の分裂の促進だった。

今回ランリエルからの依頼でグリエス男爵を討伐するファシェル子爵は、二度と他のカルデイ帝国貴族及びカルデイ帝国自体と相容れる事は出来ない。

独立国の戦力が参戦しない以上、カルデイ帝国は以前と同等の戦力を整える事は不可能になる。

そして独立国は今後さらにランリエルに擦り寄っていかざるを得ない。そうなれば所詮独立国など名ばかりとなり、ランリエルの要請に応じて軍勢の派遣すら断れまい。

王子にとっては独立を認めた分税収が減ろうが、軍勢さえ提供するのであれば独立国も他のランリエル王国貴族と変わるところはないのだった。

もっともそれはさすがにまだ先の話だ。それにはまだまだカルデイと独立国の関係を悪化させる必要があった。

「しかし、この様に性急に事を運んで大丈夫なのですかな？」

ムウリ将軍がサルヴァ王子の指示に疑問を呈した。ムウリは王子配下の将軍の中でも思慮深さに定評があった。

「早急にとは？」

「カルデイを征服し、またすぐにバルバールを攻めるという事についてです。我らがバルバールを攻めている時に、折角征服したカルデイに叛かれては元も子もありません」

そう、ディアスはランリエル王国によるバルバール王国侵攻は十数年先と考えていたのだが、ランリエル王国第一王子サルヴァ・アルディナは準備が整い次第バルバールへと攻め寄せる計画だったのだ。

その為に、カルデイ帝国への支配力強化を急いでいるのだ。

王子の身体には飽くなき覇気が満ちていた。

ランリエル王国の北にはベルヴァース王国があり南は海。東にあるカルデイ帝国のさらに東と南には海が広がっている。

ベルヴァース王国、カルデイ帝国との三竦みの状態から抜け出したものの、今またベルヴァースにまで手を出せば、弱体化したとはいえ帝国も黙ってはいまい。帝国が大人しくし従っているのは曲がりなりにも存続が認められているからなのである。

ベルヴァースにまで手をさせば帝国はその存続にすら危機を覚えるだろう。

カルデイ帝国の北はコルス山脈が途切れ草原が広がっているが、その地域は遊牧民が暮らすのみでサルヴァ王子の征服欲は刺激されなかった。そもそも帝国領土を越えての遠征など成功しても統治が難しい。

次に攻めるならばランリエル王国の西に接するバルバール王国。王子はそう定めたのだった。

「問題ない。その為にも多くのカルデイ貴族達の独立を認めているのだ。彼らは十分我らの防波堤の役割を果たしてくれるだろう。彼らは今更カルデイと手を結ぶ事は出来ないのだからな」

「しかし我が国にはバルバールに対するだけの海軍がありません」

商船の行き来は盛んだが、今まで主敵だったカルデイ帝国とは小高い山岳地帯を国境として接し、その戦いも陸戦が中心だった。

ランリエル・カルデイ双方の王都、帝都も内陸にあり船舶で運べる程度の軍勢を海上から移送しても効果的な奇襲が行えるわけでもなく、その為両国とも海軍は発達しなかったのだ。

そしてランリエル王国とバルバール王国の国境は、ランリエル王国とカルデイ帝国よりもさらに険しい山岳地帯で区切られていた。

もっともこれは奇しくもと言うほどでもない。

国境とは山なり川なり海なり、そして時には砂漠なりで、人々の生活圏が区切られたところに自然と成り立つものだ。国境が踏破困難な地形なのは珍しくないのだった。

まったくの平地に国境が引かれる事があるとすれば、それは戦争や政争の結果、領土が割譲された場合だ。

そして陸戦が主だったランリエルとカルデイとの戦いに比べ、コスティラと海戦も行っているバルバールは海軍も整備されている。その為、国力はランリエルより遥かに劣るにもかかわらず、バルバール海軍はランリエル海軍よりも多数の艦艇を揃えているのだった。

「勿論それは分かっている。その為急いで海軍の増強を行っているのだ。なに私も軍艦の建造が一朝一夕で出来ない事など分かっている。それはでは辛抱強く待つさ」

サルヴァ王子の言葉に、ムウリ将軍は引き下がった。

王子は秘中の策を他に漏らさぬ傾向がある事を、長年王子に仕えてきたムウリ将軍はわきまえていた。何の策も無く行動を起す方ではない。自分が懸念点を進言し、それでも王子が実行するというならば何か考えがあるのだろう。

すべての指示と裁決を終えると、サルヴァ王子は執務室においてある自らの兜を一瞥し執務室を後にした。

鎧の他の部位は戦時に備え保管されているのだが、兜のみは常に執務室の机の傍に置かれているのだった。

大国の次期国王である王子の鎧は金銀で見事に細工がなされ、曇り一つ無く磨かれた見事な物だった。だがこの兜は奇異な事に一切の装飾が無く傷だらけで実用一辺倒の物だった。

鎧とは兜から籠手やすね当にいたるまで統一されて作られるものであって、兜のみまったく別の作りという事は通常ありえない。王子も初めは鎧の胴体部分に見合った兜を使用していた。

だがカルデイ帝国との最終決戦時ランリエル軍は一時劣勢に立たされ王子も所在不明になるという事態が発生したのだが、王子の所在が知れたとき、王子は装飾がなされた兜ではなく現在の兜をかぶっていたのだった。

その後体勢を立て直したランリエル軍はカルデイ軍を撃破し、それから王子はこの兜を常に手元の置いているのである。

その為人々は「王子の身代わりとなる為、王子と兜を交換し戦場で散っていった騎士」の存在を夢想しその美談を噂したが、その噂を耳にしたサルヴァ王子は苦笑した。

そして本当のところは？　と問いかけられた王子は「そんなにいい話ではない」と一言洩らしただけで真相を語ろうとはしなかったのだった。

第2話：灼熱の王子（2）

配下の者達への指示が終わった後、執務室から王城内にある自室へと向かったサルヴァ王子だったが、途中で気が変わり王城に建つ４つの塔のうち西側にある塔へと昇った。

そこから西を、つまりバルバール王国の方角を眺めた。

勿論バルバール王国が見えるわけは無い。いや、それどころか王都の外すら見えない。

ランリエル王国王都フォルキアは長年続いたカルデイ帝国との戦いの歴史で何度も攻められた経験から、王都の周りを高い塀でぐるりと囲んだ城塞都市なのだ。

これはカルデイ帝国も同じ事だが、それはもはや過去の話だった。カルデイがランリエルに屈した時にカルデイ帝都の塀はすべて撤去された。いざという時に立て篭もって抵抗されない為だ。

王城から外を眺めても見えるのはその塀だけなのだが、王子の思考は塀どころか距離すらも超越しバルバール王国へと飛翔した。

バルバールには自分の強敵たらんとする名将が存在するのであろうか？

カルデイ帝国は征服した。しかしその戦いは接戦だった。

カルデイとの最終決戦時、それまでの戦闘の結果、戦力は2対1にまで有利となっていた。にもかかわらずサルヴァ王子は、最終決

戦で敗死寸前まで追い込まれたのだ。

しかもその戦いでカルデイ軍を指揮した将軍を討ち取ったかと言えば、討ち取ることすらも出来なかったのだ。

カルデイ軍に大打撃を与えカルデイ帝都の塀を突破し帝都内に突入はしたものの、敵将は残った僅かな軍勢をまとめ帝都の奥に位置する城に立て篭もったのだ。

戦いが終結したのは、カルデイ帝国皇帝が劣勢に恐怖しサルヴァ王子の降服勧告に応じた為なのだ。

サルヴァ王子はその将軍を助命し、我が部下にならないかと誘ったがその将軍は首を振った。

「ランリエルに仕えればカルデイ兵士と戦う事になるかもしれない。そしてそれは出来ない事」

その将軍はそう言ってサルヴァ王子の誘いを断ったのだ。

最終決戦時にカルデイ軍を指揮したカルデイ帝国の将軍に、自分は勝てたといえるのだろうか？　バルバール王国にもそのカルデイ軍の将軍に匹敵する者が居るのだろうか？

バルバールの国力はランリエルの半分ほど、いや今回ランリエルがカルデイを屈服させたことによりその差はさらに広がっている。

だが油断は出来ない。バルバールにかの将軍に匹敵する者が居ればその優位を覆される事も考えられるのだ。

だが覇気あふれるサルヴァ王子も当初から軍人を目指していたわけではなかった。軍人を目指したのはある時期からだった。

サルヴァ王子の父である現国王クレックスは今年４０歳となった。サルヴァ王子は２７歳である。親子の歳の差は１３歳でしかない。

現国王の祖父の時代ランリエル王国は大規模なカルデイ帝国討伐を計画し、当初は成功するかと思われたが、先例に洩れず数年間カルデイ帝国で戦った挙句撤退し、ランリエル王国は戦費の負担により経済が破綻した。

その為王室は、ランリエル王国内で屈指の資産家だったとある公爵家からの援助を受けることになったのだが、その公爵が自分の孫娘と当時まだ１２歳だったクレックス王子との結婚を条件に付けたのだった。

しかもすでに老齢だった公爵は孫娘が王家を継ぐべき男子を産むのを見届けねば死んでも死にきれないと、１２歳のクレックス王子に見合う年齢の孫娘ではなく、７歳も年上の出産に適した１９歳の孫娘マリセラを引き合わせたのだ。

クレックス王子は反発したが財政難は乗り越えねばならない。結局結婚は強行されそして翌年にサルヴァ王子が生まれたのだった。

もっとも幸いな事にクレックス王子は年上の妻マリセラに愛され夫婦仲は良好である。

結局クレックス王とマリセラ王妃の間にはサルヴァ王子を筆頭に、３人の王子と２人の王女に恵まれていた。

だがマリセラ王妃と関係が良好とはいえ、クレックス王も財政難の所為で臣下に結婚を強要された。という事についてはやはり納得できず不満を洩らし続け、サルヴァ王子もその父の姿を見て育った。

そしてバルバール王国を財政難に陥らせた曽祖父の時代の戦争について知れべているうちに、勝気な王子が自らも軍人を目指すようになるのに時間は掛からなかったのだった。

サルヴァ王子は１５歳の時に初陣を向かえた。

一国の王子らしく初陣にもかかわらず、大隊長「格」として一隊を授けられたサルヴァ王子は「持ち場から一歩も下がらず持ち場を守り続けた」と伝えられている。

だが事実は「未熟な為まったく戦況がつかめずいつの間にか戦闘が終っていた」のだった。持ち場から下がらないも何も、真実は敵が王子の所まで攻め寄せてきさえしなかったのだ。

それを次期国王たるサルヴァ王子におもねる臣下達が、都合の良い部分だけを虚構の額縁に入れ、さらに真実の上から賛美の絵の具で塗りつぶし事実を作り上げたのだった。

自らの未熟さに人知れず嗚咽を洩らした王子が、真に軍人を目指したとはこの時だったかもしれない。あまりにも無残な初陣を飾ったサルヴァ王子は、それ故稀代の名将たらんと誓ったのだ。

サルヴァ王子の胸中には矛盾が存在した。国々を征服し領土を広げようという征服欲と、自分と匹敵、いや凌駕するほどの強敵と戦いたいという欲求がせめぎあっているのだ。

領土を広げるならば強敵など居ないにこした事はない。しかし稀代の名将たらんとする少年時代の誓いが、強敵を欲するのだ。弱敵に勝ったからと言ってそれがどうだというのか。

だが稀代の名将であるなど厳密に証明出来るわけも無い。各国すべての名将と呼ばれる武将達と同一条件で戦って勝つなど現実には不可能なのだ。だがサルヴァ王子に取ってそれは生理的欲求と言ってよいほどの渇望だった。この世に生理的欲求に抗えるものなど居るだろうか。

そして遂にランリエル王国の悲願だったカルデイ帝国討伐を成功させたサルヴァ王子だったが、その覇気は治まるどころかさらに燃え上がったのだ。

カルデイには勝利したが完勝には程遠い結果が、王子が内包する炎を燃やしつくし昇華させるどころか、さらなる戦いを欲した。

だがサルヴァ王子には、存在的な更なる矛盾を察しながらも、あえて無視している事があった。

苦戦しない敵に、自分に完勝を許す程度の敵に勝ったところでこの炎が燃え上がる事など無いという事を。

完勝せねば燃え尽きず、完勝では燃え上がらないとなれば、その先には世界を征服しきるか、それとも自分が敗死するしかのどちらかの結末しかないという事を。

第3話：総司令の花嫁

その日ディアスは叔父の訪問を受けていた。

とはいってもケネスの父親ではない。ディアスの父親は三人兄弟の長男であり、ケネスの父親は三男である。

今日訪ねて来たのはディアスの父のすぐ下の叔父ゲイナーだった。ゲイナーはディアスと違い武芸に励み、身長はディアスと同じ程度ながらも、ディアスよりよほど逞しい体つきをしている。髪の色は血縁なだけあって、ディアスと同じく茶色だった。

「お前ももう35だ。嫁の一つも貰って死んだ兄を、いやお前の父を安心させてやろうとは思わないのか？」

「二つも貰ったら重婚ですよ」

テーブルを挟み葡萄酒を満たした杯に手も付けず熱心に結婚を勧める叔父に、ディアスはうんざりしながら答えた。

これがまったくの善意からというなら多少は真摯に耳を傾けたであろうが、ディアスには叔父の心底が見え透いていた。

つい最近まで叔父は、ディアスへ結婚の話などまったく持ち込んでこなかったのである。それが結婚を勧めるようになったのは、ディアスの邸宅にケネスが住むようになってからだった。

すっぱりと軍人への道を諦めて商家へと婿入りしたケネスの父と違い、ゲイナーは軍にしがみ付いていた。

そしてもしディアスが結婚もせず跡継ぎを残さずに戦死でもすれば、武門の名流ディアス家を継ぐのは自分だ。

ゲイナーはそう考えていたのだが、なんとゲイナーの弟、つまりケネスの父親は息子をディアスの元へ送り込んできたのである。

ゲイナーは、弟がディアス家を乗っ取ろうと目論んでいるのだと看破した。少なくともゲイナーはそう思った。

そうさせてはならぬとゲイナーはディアスの元へ結婚話を次々と持ち込んでくるのだった。

自分が家督を継げないなら、自分が結婚を世話して恩を売った方が良いだろうと考えたのだ。ゲイナーにも娘はいたが残念な事にすでに結婚しているのである。

恩と言ってもディアスが素直に恩を感じる手合いではないとは分かっているが、ディアスと結婚する嫁の実家は十分ゲイナーに感謝するはずだった。

ディアスは次々と持ち込まれる縁談をそれと同じ数だけ断っているのであるが、ディアスは武門の名流の現当主にしてバルバール王国軍の総司令官である。

まさに引く手あまたの優良物件であり、叔父からの縁談を断り続けているにもかかわらずいっこうに玉切れを起こす気配が無い。

娘の意思などより「この相手と結婚指せた方が我が家の為である」と親が考えた相手と結婚させるのが当然の時代である。

現在決まった相手が居ない妙齢の女性の親なら、誰もが娘をディ

アスに嫁がせたいと望むといっても過言ではないのだった。

特に上流階級の者ほどその傾向は強く、ゲイナーにとって恩を売るに足る名族を選りすぐってもまだまだ持ち玉は豊富だったのである。

とはいえディアスも「自分の身分ではなく自分自身を愛してくれる女性と結婚したい」などと考えるほど純情ではない。

ちょうどディアス自身もそろそろ身を固める必要を感じ、結婚相手の女性を適当に見繕う心算だったのだ。ではなぜゲイナーがもってくる縁談を断り続けているのかと言えば、単に気に食わないからである。

ゲイナーが密かに、ディアスが戦死すれば自分がディアス家の家督を継げると考え、ディアスが戦死する事を願っていた。と言うことはディアスも察していたのだ。

それをケネスが来たからと言って今度は縁談を進めるゲイナーの魂胆に、ディアスは「お前の思い通りにしてやるもんか！」という子供じみた意地になっているのである。

「お前はディアス家の当主なのだぞ！　跡取りも残さず戦死してしまってはどうするというのだ！」

自分自身つい最近まで望んでいた事をあまりにもぬけぬけと言い放った叔父に、つい笑い出しそうになったディアスだったが、何とか葡萄酒を満たした杯に口をつける事で笑いを誤魔化す事に成功した。

だがここまで言われると断るだけでは飽き足らず、反撃をしてみたいという欲求に駆られる。

この様なときに行う反撃と言えば、やはり絶対に不可能な条件を突きつける事だろう。ディアスは内心にやつきながら、神妙な表情を作りおもむろに口を開いた。

「信頼する叔父上だからこそ打ち明ける事なのですが……実は私は女性の趣味が特殊でして結婚など出来ないと諦めているのです」

「趣味が特殊だと？　いやいや、お前に娘を嫁がせたいと考える者などいくらでもいる。遠慮せずに言ってみろ」

「いえ……。そればかりはいくら叔父上でも言うわけには行きません」

「いやいや、いいから言ってみろ。わしが必ず世話してやろう」

ディアスはさらに神妙な表情を浮かべて見せながら重々しく口を開いた。

「そこまで仰るなら……実は年甲斐も無く若い娘が好きなのです」

「わっはははは！　なんだその様なことか。お前もなかなか……。いやいや、嫁は若い方が良いものだ。安心しろわしが責任を持って縁談を紹介してやろう」

ゲイナーは重々しく口を開いた割りに、ディアスのいう特殊な趣味が他愛も無い事に拍子抜けした様子で機嫌よく笑ったが、勿論ディアスもここで話を終らす気は無い。

「ありがたいお言葉ですが、叔父上は何歳くらいの娘を私に世話してくれる御心算なのですか？」

「うーん。そうだな……。二じゅ……いや十代の……１６ではどうだ？　十分であろう。いやさすがに若すぎるか？　ん？」

だが自信満々で答えたゲイナーにディアスは大げさにため息を付いた。

「やはり……。叔父上にも無理なようですね……。もっと若い方が良いのです……」

ディアスの言葉にゲイナーは目を見開いて驚きの表情浮かべたが、一瞬で表情を改め、そして再度口を開く。

「心配するな。じゅう……しの娘を用意しようではないか」

だがディアスはがっくりとうな垂れるばかりで答える事すらしない。

「まさか１２、１３の娘が欲しいなどというのではなかろうな！　いくらなんでもその様な話、どの親にも話を持ちかけられんわ！」

王族同士の多分に政略的意味合いの強い結婚ならば、１２歳の娘と３０過ぎの男との結婚も珍しくは無い。奇異に感じても人々は政略結婚なのだからと納得する。

それに人とは当然歳を取るものである。１２歳の娘も１０年経てば２２歳であり妙齢の女性である。

だが、政略結婚ではなしに１２歳の娘と結婚したいというなら、それは１０年後ではなく現時点で１２歳の少女を抱きたいという事であり、娘の親とすればその様な変態に娘を嫁がせたいと考えないであろう。

なにせ娘が年齢を重ね少女ではなく「女」となれば、少女好きの変態に娘が棄てられるのは目に見えているのだから。

ゲイナーは、ディアスがうな垂れこちらを見ていない為、自分の甥がその様な変態だったのかと嫌悪感もあらわにディアスを見つめた。

「ですから、いくら叔父上でも無理だと申し上げたのです……」

ディアスはがっくりとうな垂れたまま力なさげな言葉を吐いたが、その実うな垂れゲイナーから隠れているディアスの顔は、まさに笑いを堪えるのに必死であり爆笑寸前だった。

「もう少し、年上で我慢する事は出来んのか？」

なだめる様に言うゲイナーに、ディアスはうな垂れたままやはり首を振った。

「これはどうしようもない事なのです。それが可能であれば私はとっくに結婚しております」

そしてなんとか笑いの衝動を抑えきり、神妙な表情を作って顔を上げると、ゲイナーを正面から見据えてとどめの一撃を放った。

「ですから私はもう結婚というものを諦めているのです。家はケネ

スにでも継がせます」

「ケネスに継がせるだと！　その様な馬鹿な話があるか！」

あまりの事に色をなして叫ぶゲイナーに、ディアスは諭す様に宥めた。

「何が馬鹿な話なんです？　仕方が無いではないですか、他に継がせられる相手も居ない事ですし」

ゲイナーは二の句が継げず強く歯を噛締め沈黙していたが、不意に席を立つとディアスから背を向けた。

自分から背を向けた叔父に、表情を作る必要がなくなったディアスは、にやにやと笑いながら口調だけに気をつけ叔父の背に声をかける。

「お帰りですか？」

「……ああ」

振り返りもせず力なく答え邸宅を後にした叔父に、ディアスは自分の放ったとどめの一撃の言葉の威力に満足したのだった。

もっともディアス自身本当にケネスに家を継がせようと本気で思っている訳ではない。叔父が諦め叔父からの縁談の話が来なくなれば自身で嫁を探す心算だ。そして息子が生まれればその息子に家名を継がせるだろう。

もし息子が生まれなければその時こそケネスに継がせる事になる

であろうが、それはまた別の話である。

それから数日後ディアスは新兵の訓練の視察に向かった。

コスティラとの戦いで大勝したものの損害が皆無というわけも無く、損害を出しただけ新兵を召集し、訓練しなければならないのである。

王都から７０００サイトほど離れたところにある訓練地で数日間新兵の訓練状況を視察した。

兵士に求められるのは際立った武勇ではなく、如何に統一された動きが出きるかが重要である。槍の穂先を並べ敵に突進し、盾を並べて敵の攻撃を防ぐ。その時に１人勇猛果敢に戦われては隙が出来るというものだ。

ディアスは、士官の号令に従い、槍を水平に並べ盾を構えて前進する新兵達の姿に満足げに頷いた。

「訓練は順調の様だな」

ディアスが訓練の責任者である武官に労いの言葉をかけると、総司令官直々のお褒めの言葉を賜ったその武官の面目は大いに保たれ、武官は「これからもいっそう励みます！」と力強く答えた。

その後ディアスは、訓練地から邸宅へ帰る道すがら、見事に新兵の訓練を行った武官を、あれだけの統率力があるのならば一軍の部隊長として抜擢すべきか、いやいや新兵の訓練は重要なのだからこれからも新兵の訓練を任せるべきだろうかと、思案を重ねた。

ディアスが邸宅に戻るとケネスが困惑した表情で出迎えた。

「どうした。私が留守の間になにかあったのか？」

ディアスの言葉に遠慮がちにケネスは「それが……」と口を開く、そしてケネスから話を聞いたディアスは、自室へと急いだ。

ディアスがゲイナーに放った「ケネスに家を継がせる」という一撃は、確かにゲイナーに打撃を与えた。だが与え過ぎた。

ディアスの一撃はゲイナーの世間体、嫌悪感、その他諸々の常識と感情を打ち抜き通り過ぎてしまったのである。

ディアスが自室に辿り着くと、そこには腰まである長い黒髪の美少女が待ち受けていた。そう１２歳くらいの。

第４話：王子の兜

サルヴァ王子が執務室でその名称にふさわしく執務を取っていると、副官のルキノが来客を告げた。

「ほう。どの様な用件だ？」

ランリエル王国第一王子たる自分の仕事を中断させるほどの重要な来客ならば、誰が来たか？　ではなく、どの様な用件か？　が重要なはずだった。たとえ公爵と言えども重要な用件でなければ王子の執務を邪魔しない。ルキノにも取り次ぐなと言ってある。

身分だけでそれが出きるのはサルヴァ王子の父である現国王クレックス王だけのはずだが、その場合はルキノも来客とは言わないだろう。

だが王子の考えとは違いルキノの返答は芳しくなかった。

「それが……要件は聞いておりません」

「聞いていないだと？　では、誰が来たというのか？」

要領の得ないルキノの言葉に、王子は苛立ちを含んだ口調で重ねて問いただした。客に用件も聞かずに取り次ぐなど、有能な副官であるルキノにしては常に無い不手際だった。

だがルキノが来客者の「身分」を王子に伝えると、王子は連れてくる様に言いつけ、しばらくするとルキノは妙齢の女性を案内し戻ってきた。

歳の頃は２２・３といったところだろうか。身長は王子より頭半分近くは低いが、女性としてはむしろ高い方と思われる。少し癖のある赤毛と茶色い瞳で絶世とはいかないまでも十分水準以上の美人だった。

ルキノは女性を案内するとすぐに退出し、王子は女に席を勧める事もなく自分自身も立ち上がった。王子は執務室に置かれた兜へと視線を移す早速本題に入った。

「あの兜の持ち主の婚約者というのは本当か？」

そうルキノが用件も聞かずに取り次いだのは、この「身分」の為だった。王子が現在被っている兜が何か訳有りである事は周知の事実である。もし取り次がずに追い返し、「どうして取り次がなかったのだ！」と王子に叱責されてはたまったものではない。

だが問いかけられた女性は王子からの問いかけに答えず、目を細めて王子を見つめた。

女は恐れ多くも一国の王子、しかも次期国王である第一王子サルヴァ・アルディナを睨みつけたのだ。

王子は目を閉じ小さく息を吐くと、発しそうになった怒気を沈めた。今はこの無礼な女と争う気は無い。

「何か問題でもあるのか？」

「私の名は聞かないのですか？」

王子と女性の間で視線がぶつかり数瞬間の沈黙が訪れた。だがここでも王子は忍耐力を発揮し譲歩した。

「失礼した。名を聞かせて貰おう」

「アリシア・バオリスです」

王子の問いかけに、女はさらに目を細めながら名を名乗った。サルヴァ王子はアリシアの無礼さに我慢をしている心算だったが、アリシアに言わせれば王子の態度こそがあまりにも尊大過ぎた。王子という身分を差し引いてでもである。

だが実は王子も急いていたのだ。兜の事に心が奪われていたのである。だが王子は自分を睨む女の視線に再度忍耐力を発揮した。

「それで、お前はあの兜の持ち主の婚約者なのか？」

「それよりもリヴァル・オルカという名をご存知ですか？」

どうしてこの女は自分の質問に答えないのか？　焦れた王子だったが、女が口にした名には興味を引かれた。

「兜の持ち主の名か？」

「持ち主の名も知らずに持ち歩いているのですか？」

質問に答え続けないアリシアに、遂にサルヴァ王子の忍耐力も限界に近づいた。

「なぜ、私の質問に答えない？」

またもや視線がぶつかったが、今回はアリシアが折れた。ややなげやり気味に。

「私は兜の持ち主の婚約者であり、兜の持ち主の名はリヴァル・オルカです。これでよろしいですか？　王子様」

この女はわざわざ喧嘩を売りに、いや死にに来たのか？　一国の次期国王にこれだけ無礼な態度をとれば死罪を免れない。王子が許しても他の者が「示しが付きませぬ！」と許さない。勿論他に目撃者が居ればであるが。

どちらにとって幸いかは分からぬが、幸いにも今執務室に居るのはふたりきりだった。

通常はいくら人払いをすると言っても、実際は常に別室に警護の者が控え、不測の事態に備えている。だが「兜の持ち主の婚約者」という事で、王子があえてその警護の者達すら下がらせたのだ。

「それで、今日は何の用件で来たのだ？　まさか私が婚約者から兜を盗んだと思って、兜を返せと言いに来た訳でもあるまい？」

「それよりも先に聞きたい事があります。王子様はリヴァルから兜を譲り受けたのですか？　盗んだのですか？」

殿下という敬称を使わず、王子様と言い続けるアリシアにサルヴァ王子は眉をひそめた。

「先に私の質問に答えよ。「はい」か「いいえ」が言えぬ訳でもなかろう」

「王子様がリヴァルから兜を譲り受けたと言うなら「いいえ」です。盗んだと言うなら「はい」です。これでよろしいですか王子様？」

相変わらず無礼な態度をとり続けるアリシアだったが、王子はあえて構わず問いかけに答えた。今はこの女の無礼な物言いを一々気にしている時ではない。

「……どちらでもない」

「どちらでも？」

王子の返答はアリシア予想の範疇を超えていたらしく、一瞬きょとんとした。その表情は意外にもあどけなかったが、すぐにまた目を細め王子を睨みつける。

「譲り受けたのでもなく盗んだのでもないと言うならどうしたというのです。まさか天から降ってきたとでも言うのですか？」

「地に落ちていた。お前の婚約者はすでに死んでいたのだ。戦いの最中（さなか）兜を失った私は、すでに戦死していたお前の婚約者の兜を借りた。そういう事だ」

実際には、もう少し複雑な事情があるのだが王子にそれを語ってやる心算はない。予想外の言葉に立ち尽くすアリシアに王子は改めて問いかけた。

「他に何か用があるのか？」

冷たい言葉である。王子はもう様は済んだのだろう？　という意

味を込めて問いかけたのだ。

勿論王子とて初めは、兜の持ち主の婚約者というなら出来るだけの便宜を計ってやろう。将来の生活も保障してやろうではないか。と考えていた。だがアリシアの無礼な態度にその思いも吹き飛んでいたのである。

アリシアはサルヴァ王子から問いかけられてもしばらく呆然としていたが、ぽつりと一言洩らした。

「兜を……」

「兜？」

「兜を返して下さい」

サルヴァ王子を見つめるアリシアの目に先ほどまでの鋭さは無く、儚げに揺れた。それが目に涙を浮かばせている為だと王子は気付いたが、王子は首を振った。

「いや。あの兜はすでに私の物だ。返す心算はない」

返さないという言葉に、アリシアが激昂するのではと王子は予想したがその予想ははずれ、アリシアはゆっくりと視線を兜へと移すと歩を進ませた。

アリシアが兜を奪って逃げる心算ではと王子も兜へと進むと、アリシアは立ち止まり、またゆっくりと王子へと視線を移した。

「……触るくらいいいじゃないですか」

「あ……ああ」

アリシアに気圧されるものを感じた王子が立ち止まり、アリシアはそれを確認すると歩を進ませ続け兜へと辿り着いた。そして大事そうに兜をその胸に抱いた。

アリシアは、兜を胸に抱いたままその場に泣き崩れ嗚咽を洩らし、サルヴァ王子は、アリシアが泣き止むのを待ち続けたのだった。

第5話：憂鬱な総司令

少女の名は、ミュエル・ハッシュと言った。

「本当に12歳なのか？　童顔で12歳に見えるけど、実は18歳じゃないのかい？」

ディアスはわらにも縋る思いで問いかけたが、自分は正真正銘12歳だと少女は断言した。

腰まである長い黒髪と同じ色の黒く大きな瞳。12歳にしては若干細面だったが、それ故将来の美貌が想像できた。成人すればすらりとした美しい女性になるだろう。それには後6年ほど待たなくてはならないであろうが。

いや、6年待たなくとも少女は十分他を圧する美貌を有していた。ただしあくまでも12歳の少女としての美貌であり、少女嗜好ではないディアスにして見れば、少女はどこまでも少女でしかない。

父は伯爵だが爵位は高くとも経済的にも社交界的にもあまりぱっとしない。

叔父のゲイナーは対象範囲を上流階級から大幅に広げ、少女嗜好の甥の希望にあう（とゲイナーが信じた）条件の美貌の少女を探し当てたのだった。

いや、この段に及んでは、ケネスに家名を継がせるのを防ぐ事だけを考えて、親の地位などには目もくれなかったと言うのが正解だった。

しかもディアスの返答も聞かず「これならば文句が無かろう」とディアスが不在にもかかわらずディアスの邸宅に少女を置いていったのだった。

少女の両親も、武門の名流にしてバルバール王国軍の総司令ディアスに娘を嫁がせる事が出きるならと、ディアスが少女嗜好の変態であるというディアスが聞けば全力で否定するであろう事はゲイナーに巧みに誤魔化され、「良き縁談だ」と娘を送り出したのだった。

お父様から、ディアス殿はこの国で一番の結婚相手なのだと教え込まれたミュエルは、この事態に呆気にとられたディアス家の従者や使用人、そしてケネスを尻目に方々へと「ディアス様の妻になるミュエルと申します」と挨拶をして回ったのだった。

そしてなんと、その挨拶を受けた人々もミュエルの言葉を信じてしまったのだった。

王族や国で一、二を争う大貴族を除けば、条件的には他の追従を許さぬ程の優良物件のディアスが、３５歳にもなって未だに独身なのには何か理由があるのでは？　と常々噂になっていたのだ。

「なるほどなるほど、それならば今までディアス殿が独身だったのも頷ける」

「しかし、あのディアス殿がまさか少女嗜好だったとは」

「人は分からぬものですな」

この様な人々の噂はたちまち王都中を駆け巡ったのだった。さすがのディアスもこの事態には頭を抱えた。

居間で頭を抱えながら椅子に座っていたディアスに、ケネスは困惑気味に問いかけた。

「あの女の子と本当に結婚なさるのですか？」

「まさか……そんな事出きるわけがない」

ケネスの問いかけに頭を上げケネスに視線を移したディアスだったが、ケネスの顔が赤いのに目が留まった。

自分には断じて少女嗜好は無く、いくら美しくても１２歳の少女になど食指は動かないが、１７歳のケネスにとっては十分恋愛の対象ではないのか？　ケネスの赤い顔を見たディアスはその事に気付いたのだ。

ミュエルは他に類を見ない美しい少女だ。ケネスが恋心を抱くのも当然と言える。しかも一つ屋根の上に住んでいるのだ。

「ミュエルを呼んで来てくれないか？」

ケネスにそう言い付けミュエルを連れて来させ椅子に座らせると、ケネスにも座る様に促した。そして２人が椅子に座ると、出来るだけ優しげにミュエルに話しかけた。

「お前との結婚についてだが、さすがにすぐにとは行かない。お前はまだ１２歳なのだからね」

「そうなのですか？」

お父様からは、すぐにでもディアスと結婚するかの様に聞いてい

たミュエルは首を傾げたが、夫となるディアス様がそう言うならそうなのだろうと素直に頷いた。

「それに結婚するまでには、お前にも色々と学ばなくてはならない事が沢山ある。その勉強はこのケネスが見てくれるから安心しなさい」

「え！？」

ディアスの言葉にケネスは驚きの言葉を発したが、ミュエルがケネスに向かって素直に「ケネス様、よろしくお願いします」と頭を下げ微笑むと、ケネスは真っ赤になりながらも頷き返したのだった。

ディアスもその様子に満足げに、うんうん、と頷いたのだった。

さらにミュエルの部屋も便利だろうと、ご丁寧にケネスの部屋の隣りとしたのだった。ここまでお膳立てをすれば、２人が自然と恋仲になる日も遠くないだろう。

そうなって自分とミュエルとの縁談が破談となり改めて妙齢の女性と結婚すれば、周囲に流れた自分が少女嗜好だという噂も自然と無くなる筈である。

ディアスはそう考えたのだった。

こうしてその翌日から、ケネスはミュエルの家庭教師となった。

勿論ケネスに花嫁修業としての教師になど出来ないが「将軍の妻になるのならば学問も出来なくてはいけないんだよ」とミュエルに言い聞かせたのだ。

ミュエルは「はい。分かりました」と素直に頷き、ケネスの元で

勉強に励んだのだった。

そしてケネスの方はというと、最近なにやら身だしなみに気を付けている様である。ミュエルを意識しての事なのは一目瞭然だった。

これで2人の仲が進展したところで2人に「ミュエルの御両親には私から話を付けて置くので私に構う事はない」と持ちかければ万事上手く行くだろう。ディアスは満足げに頷いた。

ミュエルの事についてはこれで一安心と気を休めていたディアスだったが、どうやら神やら創造主やらはディアスを嫌っているらしい。

ディアスが軍部で嫌いな事務処理を行なっていると、ランリエルに派遣していた部下から看過しえぬ情報がもたらされたのである。

「ランリエルが多数の軍艦を建造しているだと？」

「はい。カルデイから巻き上げた賠償金をすべて軍艦建造に充てているのではと思えるほどです」

軍艦を建造してどうするのか？　などと考えるのも馬鹿馬鹿しい。バルバールに侵攻する為に決まっている。

ランリエルにはカルデイ帝国以外にもベルヴァース王国が接しているが、ランリエルとベルヴァースを繋ぐのは陸路しかない。

無論、ランリエルが何れバルバールに食指を伸ばすであろう事は、ディアスどころかバルバール軍部全体の認識だったが、それは十数年先の話と考えられていたのである。

だがこれほど急速に海軍増強を進めていると言う事はその計画も早まろう。

「ランリエル海軍の軍艦の数は分かるか？」

ディアスの問いに部下が答えた数字は、バルバール海軍の軍艦の数の2分の1といったところだった。

「そうか……。ランリエルが建造する軍艦の数に注意して逐次報告してくれ」

「かしこまりました」

ディアスから改めて指令を受けた部下が立ち去ると、ディアスはさらに思案を重ねる。

バルバールはランリエルに対して陸戦戦力は元々太刀打ちできない。だが海軍ならばこちらの方が強い。

カルデイとの戦いで海戦を行なってこなかったランリエルは金のかかる軍艦の建造を必要最小限に抑えていたのである。

不要な軍艦の建造に資金を回した挙句、陸戦戦力が減り、その為にカルデイに遅れをとりでもすれば目も当てられないのだった。

だがそれも過去の話、カルデイはすでにランリエルの軍靴の元に跪いている。

そしてバルバールを攻めるとなれば海軍は必要不可欠だ。バルバール・ランリエル国境の山岳地帯は大軍が展開するには不向きで、兵力差をかんがみても容易に超えられるものではなく、海軍の働きで戦局は大きく変わるだろう。

ランリエルはバルバール海軍の軍艦数を把握しているのか？　把握しているとして軍艦を同数まで揃えた時点で攻め寄せてくるのか？　凌駕するまで攻めてこないのか？

それによってランリエル軍の総司令官というサルヴァ王子とやらの力量も知れると言うものだろう。

軍艦の運用には高度な技術を要する。船を進ませる為にオールを漕ぐという基本的な事からして漕ぎ手全員が一糸乱れぬ動きをしなければ、オール同士がぶつかり破損して船は立ち往生するのである。

コスティラ海軍と長年戦い続けているバルバール海軍に対し、殆ど戦った事のないランリエル海軍が同数の艦艇で挑んだところで勝負になるはずが無い。

敵船の船腹を如何に突くかという衝角戦において、船足と旋回能力の差は決定的なのだった。

それも分からず艦艇数が同程度になった時点で攻め寄せるならば、サルヴァ王子とやらの力量も高が知れていると言うものだ。

だが……。とディアスは考える。

長年誰にも成し得なかったカルデイ帝国を平伏させる事に成功したという者の力量が、その程度であるはずが無い。ディアスはそう睨んだ。

それにしても、カルデイの支配をもっと強固にしてから攻め寄せる方が確実であろうに、この様に性急に事を運ぼうとするとは……。

第6話：兜の花嫁（1）

アリシア・バオリスは16歳の時に下級貴族であり騎士の称号を持つリヴァル・オルカの生家へと引き取られた。

アリシアの両親が流行病にて相次いで無くなり、遠縁を頼ってオルカ家にやって来たのだ。

本来なら孤児となった娘を引き取って世話してやるほどの縁は、バオリス家とオルカ家には無かったのだが、この時オルカ家の長男のリヴァルは18歳で「息子の嫁にちょうど良いだろう」という思惑もあってオルカ家はアリシアを引き取ったのだった。

もっともアリシア自身は、引き取られたからと言って嫁になどなってやる気などさらさら無かったが、1人で暮らす生活力を身に付けるまではと猫をかぶる事にした。

「アリシア・バオリスです。よろしくお願い致します」

オルカ家についたアリシアがにこやかに挨拶をすると、将来の夫となると計画されているリヴァルは顔を真っ赤にし、どもりながら「リヴァルだ」と名乗った。

他愛も無い奴。それがアリシアのリヴァルへの第一印象だった。

猫をかぶったアリシアは、リヴァルの両親から言いつけられた家事をそつ無くこなし、リヴァルの両親から「良い妻になるだろう」とお褒めの言葉を頂いた。

そのお褒めの言葉を内心馬鹿馬鹿しいと思いながらもアリシアは「私などにリヴァル様の妻など勿体無いですわ」と、にこやかに謙遜して見せたのだった。

ここで万一リヴァルの両親が「確かにその通りだ。じゃあ息子にはもっと相応しい相手を探そう」と思ってくれれば万々歳なのだったが、残念ながらそうな成らなかったのだった。

もっとも、では初めから言いつけられた家事をわざと失敗し続ければ、息子の嫁にしようなどと言う気も無くなったかも知れないが、義理堅いアリシアには、まがりなりにも衣食の世話になっているのだからと、さすがに家事に手を抜く気にはなれなかったのだ。

そしてその一方自分の両親が健在の時には敬遠していた裁縫なども積極的に学んだ。いずれオルカ家を出た時に、職を手にする為にだ。

リヴァルの方と言えば、アリシアに一目惚れし彼女に夢中になっていた。

当時リヴァルはすでに軍隊に入隊しており家に帰るのは数ヶ月に一度といった具合だったが、そのたびに熱心にアリシアに話しかけたのだった。

もっともその話す内容と言えば、アリシアを褒め称える言葉でもなく、気の聞いた口説き文句でもない。自分の軍隊生活を一生懸命にアリシアに話すのだ。

猫をかぶっていたアリシアはにこやかにその話を聞いていたが、内心リヴァルを馬鹿にしていた。

怖い上官が馬に乗っている時、突然飛び出した鳥に馬が驚いて暴走し、その上官が田んぼに落ちて泥だらけになった。という話を私にしてどうしようというのだろう？　アリシアには不思議でならなかったが、猫をかぶるアリシアは仕方なく笑って見せた。

アリシアが笑った事に気を良くしたリヴァルは、さらに熱心に「軍隊での笑い話」をアリシアに聞かせ、アリシアをうんざりとさせたのだった。

そしてアリシアが１８歳、リヴァルが２０歳の時、リヴァルがアリシアに求婚したのだ。

自分こそが２０歳になればオルカ家を飛び出そうと考えていたアリシアは、まだ時期が早いのではないかと返答を濁したがリヴァルの決心は変わらない。

「剣術の大会で優勝すればお前に求婚しようと決めていたんだ！」

ああ、そう言えばこう見えて結構強いんだっけ？　とアリシアは思ったが、そうは言われてもこちらにも都合がある。

そしてのらりくらりと返答をかわそうとしたが、やはりリヴァルの意思は変わらない。そしてそのリヴァルの熱心さにアリシアの心も動いた。勿論リヴァルとの結婚を承諾する方へと心が動いたわけではない。

「申し訳ありません、リヴァル様。私はあなたと結婚する気はないのです。私は２０歳に成ればこの家を出る心算です」

自分を想うリヴァルの熱心さに彼を欺き続ける事が心苦しくなり、アリシアは正直に答えたのだ。そしてこの先の苦労を考えて気が沈んだ。２０歳で家を出る心算だったが２年早まる事になるだろう。今家を追い出されて生活できるだろうか？

だが、アリシアの言葉に愕然としながら問いかけるリヴァルに、アリシアは改めて考え込んだ。

「そんなに俺のことが嫌いなのか？」

この言葉にアリシアは、あれ？　と首を傾げたのだ。引き取ってやったのだから嫁になれというのが気に食わないのであって、改めてリヴァルの事が嫌いかと聞かれれば、嫌いな訳ではない事に気付いたのだ。もっとも、軍隊の話ばかりするリヴァルを好いているかと言えばそうでもない。

結婚相手として考えた事がなかった、と言うのが正直なところだった。

「リヴァル様が嫌いな訳ではありません。ですが、引き取って貰ったから嫁になるというのが嫌なのです」

このアリシアの返答にリヴァルは「分かった」と一言言うと、その後は口を噤んだ。

そしてリヴァルの口からリヴァルの両親へ、アリシアが結婚する意思がないという事は伝わらず、アリシアは無事２０歳までオルカ家で生活をする事が出来たのだった。

２０歳になり置手紙を残しオルカ家を出たアリシアは、町に出て

僅かばかりに蓄えたお金で部屋を借り裁縫の仕事を探した。

裁縫の仕事は賃金は安かったが1人で暮らすには何とかやっていけた。そして1年も過ぎアリシアが21歳になった時、どうやって探し当てたのかアリシアの部屋にリヴァルが訪れた。

「俺と結婚して欲しい」

リヴァルを部屋に招きいれ、何の用件で来たのかというアリシアの問いにリヴァルはこう答えたのだ。

「どうして今更そういう事を言うのですか？」

自分の事を諦め切れなかったのなら、あの時に強引に手に入れる事も出来ただろう。

アリシアはオルカ家の世話になっていたのだ。近所の者に「アリシアが恩知らずにも逃げようとしている」と言って回れば、近所の住民すべてから監視され逃げる事も叶わず、強引に結婚を強行する事も難しくなかったはずだ。

「お前は、俺の家に世話になっているからという理由で俺と結婚する、というのが嫌だったんだろ？　だからお前が家を出るのを待っていたんだ」

あ。こいつ馬鹿だ。アリシアは瞬時にそう思った。確かに世話になっているからと言って結婚するのは嫌だとは言ったし、嫌いでは無いとも言った。だが好きと言った訳では断じてない。

それをこの男は何を勘違いしたのか、2年間もアリシアが独立す

るのを待ち続け、さらに1年かけて彼女を探し当てたという。

そしてアリシアは、自分は男の趣味が悪いらしいという事を発見した。彼女はこの夜、自分の為に3年間掛けたという馬鹿な男を迎え入れたのだ。

もっともたまたま自分の男の趣味が悪かったから良かったものの、これがまともな趣味の女だったら、リヴァルは勘違いするなと言われて部屋から追い出され、ただの道化となっただろう。アリシアはそう思ったが、優しい彼女はリヴァルには言わないでおいてあげた。

第6話：兜の花嫁（2）

リヴァルとアリシアは結ばれ、リヴァルは休暇のたびにアリシアの部屋を訪ねる事になった。こんな事だったらアリシアはオルカ家で世話になっていれば良かっただろうに馬鹿なふたりだ、と他の者は笑うだろうが、ふたりにはその様な事どうでも良かった。

リヴァルの生家にアリシアが養われたから結婚するのではなく、リヴァルとアリシアが愛し合ったから結ばれる。それがふたりには重要だったのだ。

だがアリシアにはリヴァルについてどうしても我慢出来ない事があった。

「サルヴァ王子は素晴らしい名将であり、その指示に従って戦えば勝利は間違いない」

この様な事を言い続けるのだ。どうやら劣勢の戦いをその王子の指揮により逆転勝利してから、王子に心酔したらしい。

しかも日のある内に話すのならばいつもの軍隊話だ、と聞き流しても居たが、夜の営みの終った後、寝物語とするにはあまりにも無粋すぎた。

「私の前で、二度とその王子の話をしないでね」

ふたりで裸でベッドに横たわりアリシアがにっこりと微笑みながらリヴァルへそう告げると、顔は笑いながらも目がまったく笑っていない彼女の表情にリヴァルは凍り付き、二度と王子の話はしない

と誓ったのである。

そしてその様な日々が2年ほども続いたころ、避けては通れない問題にふたりは直面した。リヴァルは下級騎士ながらも跡取り息子である。嫁を貰って家を継ぎ、さらに子を産ませて子に家を継がさなくてはならない。リヴァルももう25歳になっていた。そろそろ嫁を貰う時期だろう。

「私を愛しているのなら家を捨てて！」

などと言い出すほどアリシアは非常識ではないのだった。

それにカルデイがここ数十年無かった大規模な攻勢を隣国ベルヴァースにかけ、援軍としてしたサルヴァ王子の作戦宜しくカルデイ軍に大打撃を与えて撃退する事に成功した事もある。

これでしばらくカルデイも大人しくなり、戦いもなくなるだろう。今までの長い戦いの歴史で相手の国を併呑するなど不可能だと分かっているはずだ。カルデイは大攻勢をかけるという馬鹿な事をしたが、ランリエルからカルデイへは攻め込まない。そう思われたのだ。

ふたりは覚悟を決めてそろってオルカ家へと向かい、リヴァルとその父親との決闘などを経て、晴れてふたりは結婚する事となった。

だがふたりの結婚を翌月に控えた時、リヴァルに出兵命令が下ったのだ。

カルデイ軍に大打撃を与えた余勢をかって今度はランリエル軍がカルデイに攻め込むと、かのサルヴァ王子が言い出したというのだ。

「サルヴァ王子って馬鹿なんじゃないの！」

叫ぶアリシアをリヴァルは必死で宥めた。

「サルヴァ王子が攻め込むというならきっと勝算があるんだ。心配する事はない。必ずランリエル軍は勝つよ」

しかし、数十年前にも行なわれたランリエル軍からのカルデイへの攻勢は数年間に及んだという。リヴァルが帰ってくるのはいつの事になるのか。

アリシアの不満は募ったが、出兵拒否など出きる訳も無くこうしてリヴァルはサルヴァ王子と共にカルデイへと出兵したのだった。

そして戦いの結果はリヴァルのいう通りとなった。戦いはランリエル軍の勝利に終わり長かったランリエル王国とカルデイ帝国との戦いも終止符が打たれたのである。

ただし、リヴァル・オルカが帰って来る事は無かったが。

勝利に凱旋するランリエル軍をアリシアは部屋の窓辺に座り、眺めるとも無く眺めていた。だが……。

「リヴァル！」

アリシアは、なんとそこにリヴァルの姿を見つけた。

まさか！　そう思って目を擦り改めて凱旋する隊列を見ると、宝石を散りばめた馬具で飾った白馬に乗り、鎧も見事に装飾がなされた騎士が、兜のみ飾り気の無い実用一辺倒と思われる物を被ってい

る事に気付いたのだ。

そのありふれた物に鉄板をさらに巻きつけ補強された兜は、リヴァル・オルカの物に間違いなかった。どうしてあの騎士はリヴァルの兜を被っているのか？

アリシアは急いで階段を駆け下りたが、軍勢を歓呼の嵐で迎える群衆の為近寄る事が出来ない。だが人々はその騎士にこう声援を贈っていたのだ「サルヴァ王子万歳！」と。

どうしてサルヴァ王子がリヴァルの兜を被っているのか？

確かめねばならない。だが相手は一国の王子、しかも次期国王たる第一王子である。そう簡単には会えないだろうと、行動力のあるアリシアにして数ヶ月間思い悩んだ。

その間にリヴァルの生家であるオルカ家に身を寄せる事になった。アリシアには1人で暮らす事も出来たが、リヴァルを亡くしたその両親はすっかり生気をなくし、ふさぎ込み時には寝入っていると言う。

婚約者の親でもあり、そしてまがりなりにも自分を20歳までは面倒を見てくれた人達である。アリシアはオルカ家でリヴァルの両親の面倒を見る事にしたのだ。

だがやはりリヴァルの兜についての疑問に、アリシアは遂に我慢しきれず王城へと向かい「サルヴァ王子が被っている兜の持ち主の婚約者」と身分を告げると、拍子抜けするほどあっさりと王子の元へと通されたのだった。

アリシアもサルヴァ王子の所為でリヴァルが死んだとまでは思ってはいなかったが、顔を合わせたサルヴァ王子の尊大な態度にアリシアは好感を持ち得なかった。

一国の王子に対して不敬な態度を取れば命はないという事は分かっていたが、リヴァルを失い。さして生きたいとも思っていなかったアリシアには何の枷にもならない。王子の態度に相応しい受け答えをしてみたが、何故か殺されることは無かった。

しかもアリシアは兜がリヴァルの手からサルヴァ王子の元へと渡った経緯を、どうせ兜を失った王子にリヴァルが自分から差し出したりしたのだろう。そう予測していたのだが、なんとサルヴァ王子が言うには、死んでいたリヴァルからサルヴァ王子が勝手に借りただけの事だと言う。

予想外の事実に唖然としたアリシアだったが、とにかくリヴァルの兜を返して貰わなくてはならない。王子に兜を返すように言ったが、だが王子は兜を返さないという。

一国の王子に返さないと断言されては手も足も出ない。別に死んでも良いのだが、兜を抱えて逃げた挙句に、部屋を出た瞬間捕まって切り殺されるのはあまりにも無意味だ。そう思ったアリシアは、せめて兜に触ろうとゆっくりと兜の元へと歩き出したのだ。

そしてお優しいサルヴァ王子様は寛大にも兜に触る事は許してくれたので、アリシアは兜を抱えて存分に泣いた。王子様に涙を見せるのは癪だったが、この場合は仕方が無いだろう。

その後オルカ家に戻ったアリシアは、変わらずリヴァルの両親の面倒を見ていたが困った事があった。金が無いのだ。

ふたりの面倒を見なければならないアリシアは働く事もままならない。しかしリヴァルが亡くなりその両親もふさぎ込んでいる以上、収入など殆ど無い。早晩オルカ家は破産するだろう。

そんなある日、城からの使いという者がやってきた。もしかして、サルヴァ王子に対しての無礼な振る舞いに、やはり打ち首になるとでも言いに来たのだろうか？

それならばいっそ清々する。リヴァルの両親の事はあるが、自分が死んだ後の事まではさすがに面倒見切れない。そう考えていたアリシアだったが、その使者が持ってきた用件にアリシアには笑い出しそうになった。

その使者はアリシアにこう言ったのだ。

「ランリエル王国第一王子たるサルヴァ殿下が、あなた様を後宮に迎え入れたいと申しております」

第7話：強敵

その日サルヴァ王子は海軍の軍港へと視察に訪れていた。

バルバール侵攻に際しては海軍の力が大きく影響する。サルヴァ王子自身は海戦についての知識など殆ど無いが、今のランリエル海軍の質がバルバール海軍の質に太刀打ちできない事は分かる。

質で太刀打ちできないならば、数で補うしかあるまい。

だが軍艦の建造には、金も時間も掛かるものである。船を建造するにはまず船を船渠（ドック）が必要となる。そしてその船渠の数ずつしか船を建造できず、船を一隻建造するのも一朝一夕で出きる物ではない。

「ご指示通りの数を揃えるには、さすがに年内には無理で御座います。来年の春過ぎになるでしょう」

造船所の責任者の返答は王子には満足出来るものではなかったが、無理を言っても仕方が無い。「出きるだけ急げ」とだけ言い置いて視察を終えた。

この間にもカルデイへの支配強化は進んでいる。カルデイ軍の軍施設も何やかやと理由をつけて取り上げた。

サルヴァ王子を苦戦させたカルデイの将軍は、現在その縮小された予算の中で苦労しながらもカルデイ軍の再建に力を尽くしているという。

だが現在カルデイでは、ランリエルへの賠償金を払う為に行なわ

れた軍縮により職をなくした兵士達が町に溢れ、その者達による狼藉や、大きいものになると叛乱まで起きており、僅かばかりの数となったカルデイ正規軍により、元カルデイ軍兵士達は討伐されている。

カルデイ軍兵士と戦う事は出来ないという理由で、サルヴァ王子からの誘いを断ったかの将軍にしてみれば皮肉な現実であろう。

職にあぶれたカルデイ軍の元兵士達を傭兵として雇うという案も出されたが、サルヴァ王子はその案を現時点では却下した。

いくら職にあぶれたとはいえ彼らは、まだランリエルの為に戦うというには感情の整理は付いていないであろう。

もう少し感情が収まるなり、生活がさらに窮するなりして、ランリエルの為に戦う事に抵抗がなくなるまで待つ必要があった。

だが、今回のバルバール侵攻には間に合いそうも無い。カルデイ人傭兵部隊を使う事があるとすれば、この次になるであろう。

そうバルバール王国との戦いの後に控える、次の戦いに……。

数日後バルバール王国に調査に向かわせていた部下から、看過しえぬ情報がサルヴァ王子の元へともたらされた。

「バルバールが我が国との国境に砦と関を建設しつつあります。さらに軍艦の刷新も図っている模様」

部下からの報告にサルヴァ王子は一瞬眩暈を覚えた。急速に体中

の血がざわめいたのだ。バルバールはランリエルが攻め込むであろう事を察知した。察知出きる者がバルバールには居る。その事実に王子の血が反応したのである。そして王子の口元がある形に歪んだ。

「どうなされましたか？」

部下が怪訝な表情でサルヴァ王子に問いかけ、その声に王子は口元を手で隠した。

「いや、なんでもない」

王子はそう言って誤魔化したが、部下はやはり不審げな目線を王子に投げかけた。ランリエルにとって不利と考えられる情報を伝えたのにも拘らず、ランリエル軍総司令官たるものが口元に笑みを浮かべていたのだから、部下が不可解に思うのも無理は無い。

「それで建設しているという砦と関の規模は？」

「小国のバルバールにしてはかなり大掛かりな物です。軍勢が通れそうな道はすべて関を建設し、それを援護する様に要所々々に砦が配置されております」

「例えばだが……現在わが軍が全軍で国境に殺到したとすればどうなる？」

王子の問いに部下は静かに首を振った。

「元々ランリエル・バルバール国境は険しく大軍の展開には不向きです。それをさらに建設中とは言え関や砦で固められては突破は難しいでしょう」

「うむ」

王子は部下の見解に頷いた。戦争とは情報が重要な鍵となる。それは僅かでも軍事に携わるものならば常識である。バルバールに派遣していたこの部下も、選りすぐった逸材でありその判断に間違いは無いだろう。

陸路が難しいとなれば後は海路という事になるのだが……。

「では、軍艦の刷新とは具体的にどの様な事をしているのだ?」

「老朽船を破棄し、新造船を建造して艦隊の能力向上を狙っているとか。艦隊の速度は一番船足の遅い船が基準になってしまいます。足の遅い型の古い船を新たな船と入替えている様です」

「なるほどな……」

こちらは質の差を数で補おうとしているのだが、あちらはその質をさらに上げ様と言うのか。

軍人として質の高い軍勢を率い、質の高い敵兵と雌雄を決したい。その欲求は甘美なものだが、現実はそう甘くはない。ランリエル海軍は質よりも数で補うしかないだろう。

その数が揃うのは来年の春過ぎだと言う。今はまだ冬を迎えたばかり、後半年は掛かると言う事だ。とは言えこれでも急ぎに急いでいるのであり、造船所の責任者には出来るだけ急げとは言ったが、実際にこれ以上の計画の前倒しは困難だ。

「国境の状態とバルバール海軍の艦艇数に気を配れ、旧式と新式の船を入替えると言っても、それにまぎれて数も増やしているのかもしれんのだからな」

「心得ております」

王子は部下の言葉に満足げに頷き、部下が退出した後も執務を行った。そしてそれも終ると私室へと足を向けた。

私室の扉をくぐった王子は後宮を管轄する文官を呼び寄せ、文官がやって来るとすぐに口を開く。

「アリシアが私の求めに応じて素直にやってきたらしいな？」

サルヴァ王子は意外そうに感想を漏らした。アリシアの無礼な態度に生活の面倒を見てやろうという気は失せてしまっていたのだが、リヴァルの兜を胸に抱いて泣き崩れるアリシアに再度王子の気が変わったのだった。

そして生活の面倒を見てやるつもりで後宮に上がる様に申し付けたのだ。

もっとも王子にもアリシアを後宮に入れたとは言え抱く心算はない。取りあえず後宮で暮らせば衣食の不自由はないだろうから、後宮に住まわせる。

そして、あの様子ではリヴァルの事を忘れるのも難しいかもしれないが、もし今後結婚を望んで平凡に暮らしたいと言うなら、それなりの相手を世話してやっても良い。そう考えていたのである。

だが前回面会した時のアリシアのあの気丈な様子では、形だけでも後宮に入るという事をアリシアは断るのではないか？　いやおそらく断るだろう。そうも考えてもいたのだ。

現在後宮にはアリシア以外に２３名の女性が暮らしていた。すべて王子に媚を売ろうと考えた臣下の貴族などが押し付けてきた者達だったが、王子はわざわざ断る必要も感じず受け入れ、そしていくら若く精力的な王子とは言え２３人も女が居れば十分だった。一夜ごとに新しい女を求めるという異常な性癖は王子にはないのだ。

だが、意外そうに問いかけた王子に文官は、王族の下の世話をする者に相応しい卑俗な笑みを浮かべた。

「はい。はじめは関心のなさそうな表情でしたが、後宮に入れば多額の年金が支給されると話した瞬間目の色を変えまして、直ぐに承知いたしました」

「なんだと！」

金で転んだと言うのか！？　王子はアリシアの態度に不快に感じながらも、自分を恐れぬその態度に、ある種興味を覚えても居たのである。それが金であっさりと転ぶ程度の売女だったというのか。

しかし、そう言えば……と王子には気になる点があった。

「後宮に入れるのは形だけという事は伝えたのであろうな？」

この事を伝えているとなれば、また話は違ってくる。だが王子の胸に芽生えた微かな「希望」は裏切られた。

「いえ。それが……」

「伝えていないと言うのか！」

声を荒げた王子に、文官は低頭し言い訳をする。

「申し訳御座いません。こちらの条件を提示しそれでもかの女性が断れば、サルヴァ殿下には、その意思が無いと言って安心させる心算で御座いました」

そして下げていた頭を上げ、ちらりとサルヴァ王子の顔を覗き込む様に見ると言葉を続けた。

「はじめから軽い条件を提示されて断る人間でも、はじめに悪い条件を提示した後に軽い条件を提示されれば、悪い条件よりはマシなのだから。と人はその条件を飲むものです。今回もその心算で交渉したのですが……かの女性は殿下がお手をつける御心算が無い事をこちらが言う前に、年金の話をした途端に後宮に入る事を承諾なされたのです」

くっ！　ではやはりあの女は、金で抱かれる事を承知したと言うのか！　王子の胸に失望の黒いシミが広がる。気丈な女だ。そうも考えていただけに落胆も大きい。

その程度の女と言うなら、その程度に扱ってやろうではないか！

「今夜にでもアリシアの部屋に行くぞ！　その心算で準備せよ！」

サルヴァ王子は怒鳴り付けるように文官に言いつけ、文官は深々

と頭を下げながらにんまりと笑った。

いくら手をつけないと言ってもどうせ気が変わると分かっていた。あの女に王子が手をつける心算などないと言わなくて本当に良かった。文官はそう考えたのだった。

その夜、アリシアにあてがわれた部屋を訪れたサルヴァ王子を、王族を迎えるに相応しい絹のベッドの縁に座るアリシアが出迎えた。だがその目には、後宮の女が宿すべき媚びた色はなく、はじめて会った時以上の不遜な光が宿っていた。

金で身を差し出す売女がどうしてその様な目をするのか！　サルヴァ王子はそう思いアリシアを蔑んでいたのだが、アリシアこそがサルヴァ王子を蔑んでいた。この王子様は、金と権力にものを言わせて女を抱こうと言うのだから。

王子は無言でアリシアを押し倒した。アリシアも抵抗はしない、ここまで来てしまった以上抵抗するのも馬鹿馬鹿しい。

愛情など一片も通わぬ行為にアリシアの身体は悲鳴を上げたが、彼女はその悲鳴を音声にして洩らす事には耐え切った。

事が終わると王子は直ぐに、もう用は済んだとばかりに立ち上がって衣服と整え、そして部屋を出る時に振り向きもせず、この部屋に入ってからはじめて口を開いた。

「売女ならばもう少し楽しませてくれると思ったのだがな？」

王子の言葉にアリシアもこの夜はじめての言葉を発した。

「その売女の上で懸命に腰を振っていたのは、どこの王子様なのでしょうね？」

アリシアの部屋の扉が開かれ、そして叩き付ける様に閉じられた後、アリシアはその扉をしばらく見つめていた。

第8話：黒髪の少女（1）

ミュエル・ハッシュは冴えない伯爵家の家に生まれた。

伯爵と言えば貴族の中でも低い身分では無く、以前はそれなりの権勢を誇っていたのだが、栄枯衰退の御多分に漏れずミュエルの祖父の代に没落した。

ミュエルのお母様のヘルガは新興の商人の出で、よくある話だが、にわかに金を手に入れた成金の娘と、身分は高いが金の無い貴族のお父様のサムエルとの政略結婚だった。

だが母方の成金商人からそれなりの援助を受け生活は持ち直したものの、豪遊するほどの援助までは受けられる訳もなく、全盛期のハッシュ家を知るお父様には物足りない。

そして成金商人の実家に居た時は大勢の使用人に囲まれていたのも関わらず、嫁いだ貴族の家で突然質素な生活を強いられたお母様も物足りなかった。

もっとも、一般庶民に言わせればどこが質素だ。と言われる生活ではあるのだが、実家での生活との落差が激しすぎたのだ。何せ実家では２０人以上居た使用人がこの家では６人しか居ないのである。お母様が物足りないと思うもの仕方がない。

とは言え、ふたりの間にミュエルが生まれるとその様な不満は吹き飛んだ。ミュエルは赤ん坊の頃から美しかった。目が大きくパッチリと開き唇は形よく、顎を縁取る線も滑らかだった。

ふたりは争う様に娘を抱き、育児経験豊富な乳母に首も据わらない赤ん坊をあまり抱き抱えるものではないと注意を受けたのだった。

ミュエルを可愛がり育てる事に夢中になったお父様とお母様は、使用人が少ないなどと言った不満など忘れてしまったのだ。だいたい使用人が多くては、娘の世話を自分達が出来なくなるではないか！

ミュエルはお父様の黒髪黒眼を引き継いでいたが、金髪碧眼のお母様はお人形の様で大好きだった。

「私の髪と目はいつになったらお母様の様な綺麗な色になるのですか？」

自分はお母様の娘なのだから、大きくなればきっとお母様の様な髪の色と目の色になるに違いない。ミュエルはそう思ってお母様に聞いてみた。

だがお母様は笑ってその問いには答えず、

「お前の黒い髪と瞳の方が、とっても綺麗ですよ」

とミュエルの頭を撫でた。

とはいえ、ミュエルはお父様も大好きだった。お父様には良くだっこをねだった。

素直な性格のミュエルはお父様とお母様のいう事をよく聞いて、面倒をかける事も無い。

使用人達にも優しく、夏の盛りに庭の草むしりをしていた老僕のベネルが暑そうだと、日傘をさしてやってきて老僕を強い夏の日差しから守り、老僕に涙を流させた。

家中の者達すべてがミュエルを愛した。

いや、それどころか美しく素直で優しいミュエルはどこに行っても可愛がられた。

「我が家にもあの様な娘が欲しい」

訪問した先の主人、或いは訪問してくる客にそう言われる度に、お父様とお母様は娘を誇らしく思うのだった。

他をはばかりあえて吹聴しなかったが、ミュエルはバルバール王国一の娘である。お父様とお母様は娘をそう思っていた。

バルバール一の娘にはバルバール一の婿が必要だった。だが娘には良き相手を世話してやることは出来ないだろう。

貴族の結婚とは家と家との利害関係の総和である。お互いの家が結婚により結びつく事により、どの様な利益がなされるか？　それが重要なのだった。

ハッシュ家と結婚してどの様な利益がなされると言うのか？　伯爵と言う地位のみである。そして伯爵と言う地位を欲しいだけの相手にバルバール一の娘をやるのは勿体無い。

だが、伯爵と言う地位などに目もくれない相手となれば当然それ以上の地位と権力を持ち、今度は相手の方がハッシュ家などに目もくれないのだ。

このままでは折角のバルバール一の娘には、お父様と同じ様に地

位目当ての成金商人との結婚が待ち受けているだろう。成金の息子を婿に取りハッシュ家を継がせる事になるのだ。

成金商家から嫁いで来たお母様は自分の事は棚に上げ、それではあまりにも娘が不憫だと涙した。

バルバール一の娘なのに！　自分達の地位が高ければ、公爵家の公爵夫人にも相応しく、国王の后にも不足は無いであろう。なのに！　それなのに！　と、美しい娘を見るたびにお父様とお母様は娘に申し訳ないと思うのだった。

そこへ美貌の１２歳の少女の噂を聞きつけたゲイナーが縁談を持ち込んできたのだった。

「私はバルバール軍総司令官フィン・ディアスの叔父のゲイナーと申す者です。今日はその甥と貴方様の御息女との縁談を持ってまいりました」

軍務大臣のエドヴァルドはすでに既婚者である為、総司令官フィン・ディアスと言えば、現在のバルバール軍部では最高峰の優良物件。

まさに娘に相応しい婿ではないか！　とは言え……、

「ディアス殿は私よりも年上ですよね？」

３５歳のディアスに対して、ミュエルのお父様は３４歳なのである。

だがお父様のその懸念をゲイナーは笑い飛ばした。

「何を仰います。上流階級同士には親子ほどの歳の差の結婚などよくある事では有りませんか」

確かに親子ほどの歳の差の結婚もない話ではないが、実際それが行われる時にはそれに見合った利害関係が発生した時である。

なんの利も無いハッシュ家にはまったく当てはまらない話なのだが、お父様の懸念を、気にするほどの事ではないと笑い飛ばしたゲイナーに、お父様とお母様はそれももっともと釣られてしまったのだった。

ケネスに家を継がせる事だけは防がなくては！　との執念に囚われたゲイナーはハッシュ家の事を調べつくし、どの様な甘言を弄すれば美貌の少女の両親を篭絡出来るか考え抜いてきていた。

そしてその甘言をたらいで水を汲むかの様にミュエルのお父様とお母様に浴びせかけた。

ミュエル殿はバルバール一の美貌を誇り、バルバール一の御息女にはバルバール一の婿が相応しい、ディアスはバルバール軍の頂点に立つ男であり、ミュエル殿が産む子供はいずれバルバール軍の頂点に立つ事になるのだ。

ゲイナーの甘言にお父様とお母様の心は大きく揺れ動いたが、なにせ娘は１２歳である。１２歳の娘に子供が産まれればと言われても、子供が子供を産む様であまりぴんと来ない。

だが前もって周到に計画していたゲイナーの交渉は巧みだった。

「もっともフィン・ディアスともなれば他にもいくらでも良い話は

有ります。こちらからの申し出でにも関わらず申し訳ありませんが、他家からも話が来ているのです」

こう言って、あえて勿体ぶったのだ。だがこれは少し話がおかしい。

「他家から良い話が来ているにも関わらず、どうして私達の元へ縁談の話を持ち込んで来たのですか？」

ゲイナーは引っかかったと内心にんまりと笑ったが、それを表情には出さず、むしろ真摯な目線をミュエルのお父様に投げかけた。

「先ほども申しましたが私はフィンの……、いやバルバール軍総司令官ディアスの叔父です。私には娘は居ますが息子はおりません。甥を我が息子とも思っております。叔父として甥に、いえ、我が息子にバルバール一の娘と結婚させてやりたいと思うのは当然ではないですか」

我が子に最良の相手を！　自分達と同じ気持ちではないか！　ゲイナーの言葉にミュエルのお父様とお母様は感動した。しかも我が娘をバルバール一の娘と見込んでこの話を持ち込んだと言う。そしてさらに、他家からの話も有ると言う事に焦りを覚えた。

早く決めてしまわなくては折角のこの良縁が流れてしまう可能性がある。

だがあまりにも急な話だ。いずれは愛しい娘を嫁にやる日が来るのは覚悟していたが、それはまだ数年先の話。そう思っていたにも拘らず突然この様な話がやってくるとは、にわかに返答出来る事ではない。

「すみません。まことに良いお話だとは思いますが、一晩だけ返答をお待ちして頂けないでしょうか？」

「それはもっともなお話。よろしいですとも良くお考え下さい」

ゲイナーは内心の焦りを抑えて頷いた。あまり性急に答えを要求するものではない。答えを出せないにも関わらず無理に回答を急いては纏まるものも纏まらない。ゲイナーは一旦引く事にし、ハッシュ家を後にした。

ゲイナーがハッシュ家を辞した後、ハッシュ家では家中のそこかしこで縁談について話し合われた。ミュエルのお父様とお母様だけではなく、使用人達の間ですら喧々諤々の論議がなされた。

「お嬢様がこの家から居なくなるなど我慢できん！」

老僕のベネルが叫んだが、女中のヒルマは猛反発した。

「あんたは老い先短いから死ぬまでミュエル様に傍に居て欲しいんだろけど、ミュエル様には将来があるんだ！　女ってはね。良い男を捕まえなきゃ行けないんだよ！」

女中の仕事に追われ婚期を逃してしまったヒルマは、自分自身の後悔もあってミュエル様の為には今回の縁談を受けるべきと主張したのである。

家の主人を差し置いての使用人達の論議など意味を成さないはずだったが、自室で静かに思い悩んでいたミュエルのお父様とお母様に、大声で叫ばれたヒルマの主張が耳を打った。

ミュエルの将来の為……。

自分達のミュエルに傍に居て欲しいという我がままで、ミュエルの将来を犠牲にしても良いものだろうか？　ミュエルのお父様とお母様はそう考えたのだった。

実際に自分達を鑑みれば、お互いバルバール一の相手ではなくとも素晴らしい娘に恵まれ幸せに暮らしているのだが、良き相手と結婚させるのが一番と考えられている時代である。深層意識に刷り込まれた価値観にはあらがい難かった。

ふたりはミュエルを呼び寄せ言い聞かせた。

「お前は、バルバール軍総司令官のフィン・ディアス様の元へ嫁ぐ事になったんだよ」

「私はお嫁に行くのですか？」

ミュエルはきょとんとして問い返した。自分はまだ１２歳だ。お嫁に行くなどずっと先の話では無いのか？　そう考えていたのである。

首を傾げる愛しい娘をお母様は涙を流して抱きしめ、お父様は娘とお母様をあわせて抱きしめた。

「ディアス様はこの国で一番の婿なんだよ。その妻となれるお前は幸せなんだ」

「でも、お父様もお母様も泣いています」

幸せという事は喜ばしい事のはずなのに、どうしてお父様とお母様は泣いているのだろう。ミュエルはそう思って問いかけたのだが、するとお父様とお母様はさらに強くミュエルを抱きしめた。

「当たり前だ。お前と離れて暮らさなくてはならないのだからね。でも、お前の幸せの為なら仕方がないんだ」

お父様とお母様と離れて暮らす……。今までミュエルには考えもしなかった事だ。突然にして突きつけられた事態にミュエルの頭は混乱し、そしてそれが飲み込めてくるとミュエルはポロポロと涙を流し、その形の良い頬を伝って流れ落ちた。

「私もお父様とお母様と離れて暮らすのは嫌です。どうしてもお嫁に行かなくてはならないのですか？」

だが、ミュエルはそれ以上の言葉は飲み込んだ。お父様とお母様が自分の問いに答えず嗚咽を漏らしながら泣き崩れたのを見て、ミュエルは察したのだ。自分が不満を漏らせば、お父様とお母様をさらに悲しませるのだと。

「お父様、お母様。分かりました。私はディアス様のところにお嫁に行きます」

こうして素直で優しく他人を思いやる心を持った美しい１２歳の少女は、自分の心を押し殺してディアスの元へと嫁ぐ決意を固めたのだった。

第8話：黒髪の少女（2）

翌日再度現れたゲイナーに、お父様とお母様が縁談を承諾する旨を伝えると、瞬く間に準備は進められ、ミュエルは連れ去られるかの様にディアス邸へと連れて行かれた。

ハッシュ家を出るとき、お父様、お母様だけではなくすべての使用人にも見送られ、ミュエルは用意された馬車で生まれ育った生家を後にした。

ミュエルは自分の夫となると言うディアス様という男性の事はあまり知らなかった。

このバルバール王国の軍隊で2番目に偉く、しかも実際に戦場で戦う軍人さんの中では一番偉いのだと言う。そしてなんとお父様よりも一つ年上だと言うのだ。

素直で物怖じしないミュエルだったが、さすがに怖い人だったらどうしようかと不安を胸にディアス邸にたどり着いたが、なんと当のディアスは仕事に出ており数日不在だと言う。

ゲイナーはミュエルを馬車の中に待たせてディアス邸に入り、しばらくするとミュエルを差し招き、そして玄関の扉をくぐるとゲイナーが挨拶をする様に言った。

「ミュエル・ハッシュと申します。ディアス様の元に嫁ぎに参りました」

ミュエルが挨拶をするとディアス家の人々は事態がよく飲み込め

て居ない様で、ぎこちなく頷くばかりだった。

ゲイナーは呆然として物の役に立たなくなっているディアス家の人々を尻目に次々と話を進める。このディアス邸の現当主は甥であるが、ゲイナーにとっても勝手知ったる生家なのだ。ミュエルを引きつれ邸宅内をどんどんと進みディアスの寝室へと案内した。

「ここがお前の旦那の寝室だが、まぁ今後はお前の寝室でもある」

ゲイナーはミュエルが持参した荷物をすべてここに運ばせ、そしてもう様は済んだとディアス邸を後にしたのだった。

行き成り知らない家にぽつんと取り残され不安に泣きそうになったミュエルだったが、ここで泣いてはお父様とお母様を困らせる事になる。あえて気丈に振舞った。

自分はディアス様の妻になるのだからそれらしく振舞わなくてならない。ディアス邸の近くの住民やディアスが不在中にディアス邸を訪れた人々にも、

「ディアス様の妻になるミュエルと申します」

と挨拶を行った。妻たるもの挨拶くらい出来なくては夫に恥をかかせるのだ。

そしてそうこうする内に、その夫がやっと帰ってくると言う。

遂にこの時が来た！　ミュエルの胸はどきどきと緊張に高鳴った。

本来妻ならば玄関まで出て夫の帰りを出迎えるべきなのだろうが、夫の従弟のケネスという青年がとりあえず夫の寝室で待っている様に言うので素直に待っていた。

しばらくするとディアス邸では今まで見た事がない男性が部屋に飛び込んできた。という事はこの人が自分の夫なのだ。軍で一番偉いというからとても怖そうな人を想像していたが、ちっとも怖そうではない。

ミュエルは嬉しくなって微笑みながら夫に挨拶を行った。

「妻になるミュエルと申します。これからよろしくお願いいたします」

だがこの妻の挨拶に夫であるディアスはしばらく呆然とし、ミュエルが不審に思って首を傾げた頃やっと口を開いた。

「……あ。ああ。よろしく」

その様子がおかしくてミュエルはつい形の良い唇に手をやりクスクスと笑ったが、直ぐに夫を笑うなんてと思い直し、勤めて表情を引き締めた。

ミュエルの夫は挨拶をした後も、しばらく口を開きかけそして噤むという事を繰り返していたが、やっとの事で言葉を発した。

「本当に12歳なのか？　童顔で12歳に見えるけど、実は18歳じゃないのかい？」

おかしな事を言うものだ。どうして自分の事を18歳などと言うのだろう？　ミュエルは首をかしげながらその問いに答えた。

「いえ。私は12歳ですよ？」

「そうか……。いや、良いんだすまない」

夫はため息を付いてミュエルに少し待っている様に言うと、寝室を後にした。

どうしたのだろう？　ミュエルの小さな胸は不安に押しつぶされそうになった。お父様とお母様と離れるのは嫌だったのに、その思いを押し殺してやってきたのに、にも関わらず夫となる人は嬉しそうに見えないのだ。

しばらくするとディアスが帰ってきた。そして部屋に戻ってくるなり口を開いた。

「私は別の部屋で寝るから、お前はここで寝なさい」

「別の部屋……ですか？」

ミュエルがそう言いながら探る様な目でディアスの顔を下から覗き込むんだ。やっぱり、自分は要らないのと思われているのだろうか？　ミュエルの胸にさらに不安が広がる。

ミュエルの言葉に改めてミュエルの顔を見直した夫は、ミュエルの目に不安の色を見て取ったのか、慌てて弁解した。

「……ああ。夫婦になるといってもまだ正式に結婚をした訳では無いのだからね。それまでは別の部屋で寝るんだ」

……よかった。自分が嫌われているからではないのだ。安心して微笑んで頷くミュエルに夫も頷いた。

そして夫との結婚する日をミュエルは待ち続けたが、一向にその日はやってこず、ある日夫の甥のケネスと言う青年に呼び付けられた。夫が呼んでいるのだと言う。

ミュエルはその青年の後に続きながら、自分が夫と正式に結婚すればこの年上の青年は自分にとっても甥になるのだろうか？　と不思議な思いにかられた。

夫の元へ案内され年上の甥と共に椅子に座ると夫が自分を呼び寄せた用件を話し始めた。

夫が言うには、１２歳ではさすがに結婚には早いと言う。確かにその通りだと自分も思うけど、ではどうして自分はお父様とお母様の元を離れなければならなかったのだろう？　ミュエルには不思議でならない。

だがその疑問は、ミュエルが問う前に夫が解き明かした。

自分には結婚する前に学ばなくてはならない事があるので、甥から色々と教えて貰わなくてはならないらしい。きっとその勉強をしなければならないので、この家に来る事になったのだろう。

そしてミュエルの部屋はディアスの寝室から、勉強するのに便利だからと甥の部屋の隣に改めて割り当てられた。

こうしてミュエルと年上の甥との勉強の日々が始まった。

甥は優しく丁寧に勉強を教えてくれ、そして時折夫の事も話して聞かせてくれた。

夫は国一番の軍人にもかかわらずちっとも怖くは無く、甥にも優しくしてくれると言う。だが、夫には問題があるとも聞いた。時々ほらを吹くらしい。

ミュエルは夫の話を聞くのが嬉しく、甥に何度もねだった。ミュエルが甥の服の袖を引っ張りねだると、甥は顔を真っ赤にしながらも色々と話してくれる。

どうして甥はいつも顔を赤くしているのだろう？　ミュエルには不思議でならない。具合でも悪いのだろうか？　もしそうなら大変である。

「ケネス様。御風邪でも弾いているのですか？」

「あ。いや。直ぐ顔が赤くなる体質なんだ」

甥はさらに顔を赤くしながらそう答え、素直なミュエルは、そうなんだ。と素直に納得したのだった。

そして日が暮れ、夫が帰ってくると夫を出迎える。

「ディアス様、お帰りなさいませ」

ミュエルが笑顔で出迎えると、夫も笑顔答える。

「今日もちゃんと勉強したかい？　ケネスとは仲良くやってるんだろうね？」

「はい。ちゃんと勉強いたしました。　ケネス様とも仲良しです」

ミュエルは微笑みながら答える。妻たる者、夫の親類とは上手く付き合わなくてはならないのだ。勿論、甥といやいや付き合っているわけではなく、甥は優しい青年なので、例え夫の甥でなくとも、仲良くなれただろう。

夫はミュエルの頭を撫で、家の奥へと進んだ。ミュエルはその後に続く。そしてその後、夫と甥、そしてミュエルとの三人で夕食を行い、その後は別々の部屋で寝る事になる。

でも、ミュエルは夜、部屋で一人になると泣いてしまう事がある。まだ12歳の少女が行き成り他人の家に一人でやってきて、不安や寂しさを感じずにいられる訳が無いのだ。だが家の人達にそれを言う訳にはいかない。

この家の妻になる自分がそんな事を言っては妻が勤まる訳が無い。そうすればお父様とお母様もお困りになるだろう。

素直で優しい少女は、この夜もその小さい身体ではもてあます大きな寝具に身を沈め一人眠りに付いたのだった。

第9話：両雄の前哨戦（1）

「我がバルバールをランリエルが狙っているのは、間違いないと考えて良いだろう。そしてその為の対策も進められている」

バルバール王国軍部にて行われている軍議で、ディアスの発言に幕僚達の視線が集中する。この日、バルバール軍の国土防衛戦略会議が行われているのだ。

「だがみなも十分に分かっているだろうが、我らの敵は東のランリエルだけではなく、長年の仇敵コスティラが西に控えている。なかなか愉快とはいえない状況だ」

重々承知な事とは言え、改めて事態を確認するディアスの言葉に、幕僚達からうめき声が漏れる。

自国の2倍を超える国力の大国に東西を挟まれていると言うこの状況に、楽観的になり得る者が居ればよほどの大物か大馬鹿者だろう。

そして、バルバール軍総司令官フィン・ディアスはその大物か大馬鹿者らしかった。

「とはいえ、そう悲観的になる事も無い。両方を一度に相手にせねば何とかなるだろう」

大物か大馬鹿らしい総司令官の発言に幕僚達は、それは確かにと頷く一方、とはいえそう上手く行くものだろうか？　と首を傾げた。

頷きながら首を傾げるという奇妙な動きを行なう幕僚を尻目に、ディアスは説明を続ける。

「敵が攻めてくれば国境で待ち構え天険の利を活かして撃退する。これがバルバールの基本姿勢だ」

幕僚達は再度頷き、そして今回はその攻め寄せる相手が東西2つとなり、同時に攻め寄せて来てはどうすれば良いかと頭を悩ませているのである。総司令官は同時に相手せねば良いと言うが、攻め寄せてくる時期をこちらの都合の良い様に制御出来るものなのだろうか？

ディアスは幕僚達の懸念を読み取ったかの様ににやりと笑い「だが……」と前置きをすると、さらに言葉を続けた。

「こちらの都合の良い時に戦いたいなら、何も相手が攻めてくるのを待つ必要はない。こちらから攻めれば良いのだ」

バルバール軍総司令官は長年バルバールの基本姿勢だった、専守防衛からの転換を示したのだった。

理屈は分からないでもない。しかし自国の2倍以上の国力がある相手に攻め寄せるという大胆な発言に幕僚達は言葉も無い。

だがしばらくの沈黙の後、幕僚の1人がやっと口を開いた。

「しかし、2倍の国力の相手に攻め寄せて勝てるものなのでしょうか？」

そしてその当然とも言える疑問にディアスは、質問者だけではな

く幕僚全員に言い聞かせる様に、みなを見渡しながら答える。

「少数で多数に勝つにはまず機先を制する事、そして局地的な戦力の優位を保つ事だ。全戦力では負けていても一局面においての数の優位を確保する」

幕僚達もなるほどと頷いたが現時点ではあくまで机上の空論である。それを実現させるには実務によってどれだけ理想に近づけるかが重要となる。それをわきまえている幕僚の1人が早速名乗りを上げた。

「なるほど。しかし機先を制するならば、極秘裏に準備を進める必要がありますな。敵に気取られずに戦の準備を進めるのはなかなか難しいですが、是非ともそれは私めにお任せ下さい」

だがディアスは、折角名乗りを上げた者の耳を疑わせる返答を、いや幕僚全員が唖然とする発言を行なったのである。ディアスはこう言ったのだ。

「いや、ランリエルに盛大に喧嘩を売ろうかと思う」

数日後、バルバール王国王都チェルタから5千の軍勢が出陣し、バルバール・ランリエル国境を固めた。将はカーニック。派手なところは無いが指令に対して忠実で、守りを固めて守勢に徹するといった任務にはうってつけの男と言われている。

出陣せずに守れと命ぜられれば、敵がいくら挑発しても絶対に打って出ない。攻める側にはやりにくい男である。もっとも同僚から「勝敗が決した後の追撃すら命令が無ければ行わない男」と陰口を

叩かれる事もあるのだが。

そしてその一方、文官のクッコネンを使者としてランリエル王国王都フォルキアへと派遣し、こう口上させたのである。

「ランリエルでは近頃軍艦の建造が盛んだとか。まさか軍艦を率いて陸続きであるベルヴァース王国を攻めるなどとは申しますまいな。我がバルバール王国を攻める心算であろう事は明白。しかし今まで我が国がランリエルに害をなした事はありません。ランリエルは何を持ってその様な非道をなさろうと言うのか？」

この使者の口上にサルヴァ王子は皮肉な笑みを浮かべた。

こちらの準備が整わぬ内に開戦する心算か？　しかしならば使者など派遣せずとも行き成り攻めて来ても良さそうなものだ。つまり奴らも開戦を望んでいる訳ではない。と言う事である。少なくとも現時点では。そして王子は、ではこちらも付き合ってやろうではないか。と考えた。

「御使者の言い分はあまりのも見当違い。平時から陸海の戦力を備えるのは国家として当然の事。然るに我がランリエルは近年までカルデイとの戦いのに海軍の戦力を整える事が出来なった。そのカルデイとの戦いも一応の決着を見た今、改めて相応の海軍力を整備しているに過ぎん」

さて、開戦する心算が無いバルバールはどう出るか？　内心の嘲笑を隠し、不満げな表情で王子は言い放ったのだ。

それに対してクッコネンも毅然と言い返す。

「他国を圧する軍事力はそれだけで周辺諸国を威圧するもの。そもそもランリエルに海で接するはバルバールのみと言っていい状況で、戦力を備えると申して、どこの国に対して海軍を備えているので御座いましょう。よもやバルバールがランリエルに攻め込んでくる。そうお考えでは御座いますまいな。ランリエルの海軍増強はバルバールに対する威圧となる事ご考慮下さい」

他国を超える戦力を持てば威圧とは言ったものだ。その理屈では周辺諸国でもっとも国力の低い国に軍備を合わせねばならぬでは無いか。王子はさらに反論する。

「他国の心象を気にして自国の備えを怠るなどあまりにも馬鹿げた話。海を超えればバルバールのみが我がランリエルに攻め込める国ではあるまい。もし海軍の不備で他の国にランリエルが攻め込まれればバルバールはどう責任を取ってくれると言うのか？　いや、その必要はない。ランリエルの事はランリエルで守る。その為の海軍力の整備なのだからな」

「海運で運べる兵員など高が知れておりましょう。このランリエル王都フォルキアは内陸にあり、僅かの兵力が海岸から上陸されたところで何ほどの事がありましょう。その様な愚行、行う国があるとも考えられませぬ。その様なご心配は杞憂であり、資金の無駄というもので御座いましょう」

「何、備えとは常に最悪の状況を想定するものよ」

「それはこちらとて同じ事。ランリエルの海軍増強はバルバールへの侵攻が目的ではないか？　バルバールにとって最悪の状況を想定いたしますれば、この様に考えるのも無理からぬ事と思し召し下さい」

「先ほど申したとおりだ。他国の心象を気にして自国の備えを怠る心算はない。バルバールが最悪の状況を想定するのはバルバールの勝手。そちらはそちらで最悪の状況に備えればよろしかろう」

「とは申されましても、その最悪の状況に備えるにはランリエルに匹敵する海軍力をバルバールは持つ必要があります。バルバールの国力でそれを備えよとはあまりにも理不尽なお言葉」

「我がランリエルに、他人の財布の中身にまで考慮してやらねばならぬいわれは無い」

冷たく突き放したサルヴァ王子だったが、こちらの返答に対し執拗に食い下がるバルバールの使者に違和感を感じた。これは結論が出ない様にあえて問答を引き伸ばしているのではないのか？

それならそれで、もう少し付き合ってやっても良い。そう考えた王子だったが、この様な交渉を引き延ばすだけの茶番に自身で対応するのはさすがに辟易する。

「御使者の言い分、こちらでも検討させて頂こう」

王子は、そう言って無理やりその日の交渉を切り上げ使者を帰すと、次の日からは部下に対応させたのだった。

そして対応させた部下とクッコネンとの問答もやはり結論は出ず悪戯に日が過ぎて行ったのである。

第９話：両雄の前哨戦（２）

一向に結論が出そうに無い交渉とは違い、バルバール本国では着々と戦の準備が進められている。と言う情報がバルバールに派遣している部下から王子の元へもたらされた。

「戦の準備と言うがどの程度の規模なのだ？」

サルヴァ王子の問いかけに、部下は固い表情で答える。

「バルバールの全軍と言ってよろしいかと」

部下の言葉に王子も眉をひそめた。

バルバールの全軍と言えば陸戦兵力が約５万。いや、国内の拠点への守りを残せばもう少し減るだろう。そして海軍の艦艇は約６０隻ほどのはず。

カルデイを征服し国力が増している今、ランリエルは陸戦兵力１３万。そして艦艇は現在こちらも６０隻ほど。陸戦兵力は圧勝であるが海軍は互角。しかし、海軍においてその質を考慮に入れれば到底勝利はおぼつかない。

だが……。実はバルバールがランリエルを攻めるに当たっては海戦でランリエルがバルバールに負けても致命傷とはならないのである。

なぜならバルバールの使者が言ったとおり、海運で運べる兵力など知れている。もしバルバール海軍がランリエル王国沖の制海権を

制圧し、海から軍勢を上陸させても勝敗の決定打にはなりえないのだった。

ランリエルにはバルバール軍５万に備え、国境に同数の５万を展開させてもなお、８万の軍勢が控えているのである。海運で運べる兵力に備えるなど造作も無い。

だがもしランリエルが海戦に勝利し、バルバール王国沖を制圧してランリエルの軍勢を上陸させる事に成功すればバルバールには大打撃である。

バルバール王都チェルタはランリエル王都フォルキアと違い城塞都市ではない。海上から軍勢が上陸してくるとなれば、王都防衛の為に多数の戦力を王都に駐留させる必要が出てくる。

そして王都と国境を守るので精一杯のバルバールは良い様に国内を荒らしまわされるだろう。

戦うにはあまりのもバルバールは不利。それはバルバールにも分かっていよう。にも関わらずバルバールは戦の準備を進めているという。

「……面白い」

サルヴァ王子はそう呟くと、改めて部下に監視する様に命じた。

バルバール軍がどの様に戦うのかを。

その夜サルヴァ王子は後宮にいる寵姫の１人の部屋を訪問した。

バルバールとの戦いに思いを馳せ高ぶった血が、その高ぶりを発散

する事を欲したのである。

その寵姫は王子の動きに敏感に反応し心地よい音色を奏でた。それに比べてあの金で転んだ売女は、うめき声一つ上げずなんとつまらない事か。

あれからアリシアの部屋は訪問していない。金で転ぶ売女をそれに相応しい扱いをしたが、それ以上執拗に訪問する心算はなかった。

金で転んだとはいえ、アリシア自身王子に抱かれたい訳では無い事は分かる。そして王子自身反応の無いアリシアを抱いても心楽しくない。嫌がらせの為に、わざわざ抱いて楽しくも無い相手を抱きに行くほど、サルヴァ王子は陰湿ではないのである。

だが売女は売女である。その考えに変わりも無い。

王子は血の高ぶりを抑える為何度も寵姫を求め、寵姫もそれに応え続け、いつしかふたりは折り重なりながら眠りに付いたのだった。

翌朝、王子は身を整えると寵姫の部屋を後にした。覇気に相応しいだけ女は抱くがその為に執務を滞らせる事はない。女を抱いて翌日昼まで眠るなどという体たらくでは、軍での名声も傷付こう。その様な事で築き上げた名声が台無しになるなど馬鹿馬鹿しい事である。

後宮から一旦私室へと戻るべく廊下を進む王子の視界に売女の姿が入った。アリシアにも王子の姿は見えているはずにもかかわらず黙って通り過ぎ様とする。

王子は自分の横を過ぎるアリシアを呼び止めた。

「挨拶ぐらい出来ないのか？」

呼び止めた王子にアリシアは、何の感情も読み取れぬ表情の顔を王子に向けると、感情の読み取れぬ声で答えた。

「おはよう御座います。昨晩は、お励みだったようですね、王子様」

相変わらず気に食わん女だ。金で転んだと言うならば、その金を出している者に相応の態度が出来ないのか？　そう思うと王子は皮肉の一つも言いたくなった。

「お前にはかなりの金を渡しているはずだが、それにしてはみすぼらしい格好ではないか」

王子はみすぼらしいと言うが、アリシアの服装は後宮で用意されている上等な物であり、粗末な物では無い。だが他の寵姫と比べると華やかさが無く、確かにみすぼらしい。という印象を与えた。

アリシアと寵姫達の何が違うかというと、服の他に身に付ける宝石などの装飾品をアリシアはまったく身に付けていないのである。

寵姫達は王子の気を引こうと、実家からの援助、さらに後宮に入る事によって支給される年金で、争う様に装飾品を買い求め身を飾っているのだった。

アリシアは再度王子に答えた。だが、今度の返答の表情と声には嘲笑の色が存分に含まれていた。

「残念な事に、ここには身を飾ってまで気を引きたいと思う男性が居ないので御座います、王子様」

そして、やれやれ困ったものだ、とでもいう様に少し両手を広げながら肩をすくめて見せた。

この女！　激高した王子は、アリシアの服ごとその肩を右手で掴み壁に押さえつけた。鍛え上げられた王子の膂力に右手一本で壁に縫い付けられたアリシアの服が肩のところで裂ける。

「身を飾る必要がないならこの服も要らんのではないか？」

アリシアの肩を押さえつけながら怒気を含んだ王子の声がアリシアの頬を叩く。だがアリシアは苦痛に眉をしかめながらもサルヴァ王子の目を見据える。そして苦痛に堪えながら答えた。

「お……のぞみならば……裸になりましょうか？　王子……様」

王子が右手を大きく振ると、肩で裂かれたアリシアの服がさらに破れ左上半身が露になった。そしてアリシアはその場に崩れ落ちる。だがその視線は王子から逸らさない。

王子は自分の右手に残された衣服の破片を呆然と見つめた。そして我に返るとアリシアから背を向けて足早に立ち去った。

その場には、左肩に掌の形にくっきりと痣を残したアリシアが残された。

サルヴァ王子は大股に私室へと急いだ。不意に自分が如何にも矮小な存在に思えたのだ。そしてそれと同時に脳裏に浮かんだ考えを、

懸命に打ち消した。自分よりもあの売女の方が気高いのではないか。
などという事を考えるのはあまりにも馬鹿馬鹿しいはずだった。

第１０話：総司令の攻勢（１）

バルバールでは戦の準備に追われていた。

今まで大国からの侵略に対して守るだけだったバルバールが、逆に自国より2倍の国力の国へと侵攻するのである。

この今までに無い快挙に、心を高揚させる者と悲観的に暗く沈む者は半場した。

ディアスは高揚する楽観主義者達を実働部隊の指揮官として任命し、沈む悲観主義者達に戦争準備と後方支援を担当させた。

楽観主義者は臆する事無く敵国内でも勇んで戦い、悲観主義者はそれだけに細心の注意を払いながら準備に勤しむだろう。

こうして整えられた戦力は陸戦兵力４万５千。ただし王都チェルタの守りに５千の兵を残すので出陣する戦力は４万。軍艦は王都から一番近い軍港に１０隻を残し他はすべて出撃させる。

すべての準備が終わり出陣の日、ディアスは邸宅を後にする時、妻になるといってやってきたミュエルからの挨拶を受けた。

「ディアス様。御武運をお祈りしております」

おそらくケネス辺りから教えて貰ったのであろう武人の妻らしい台詞を、ミュエルは緊張しながら言葉にした。

良い子だ。ディアスは素直にそう思った。そしてその頭をディアスは撫でた。

「私にもしもの事があれば、ケネスを頼りなさい。お前にはちょうど良い」

十分に計画はなされているが今回の戦いは綱渡りの部分も多い。万一の事もある。そう思ってのディアスの言葉だった。

「私にはちょうど良い？」

きょとんとするミュエルにディアスは微笑みながらさらに頭を撫でた。

今まで暮らしていた中でディアスもミュエルが「とても良い子」であるという事は分かった。短期間のうちにディアス邸に住むすべての者達がミュエルを愛していた。色々な意味で。

誰もこの子を嫌う事は無いだろう。もし居るとすればその者の心の方が歪んでいるに違いない。

この子は幸せになるべきだった。自分の様な親子ほど年の違う相手ではなく、つりあった相手と一緒になり幸せになるべきなのだ。

「ああ。もしケネスの事を好きになったのなら、私に構う事はない」

ディアスはそう言い残し出陣すべく背を向け、その場にはミュエルが1人残された。呆然として。

司令部へとついたディアスは、そこで幕僚達と落ち合うと簡単に打合せを行い夜を待った。そして夜になると軍勢が次々と王都を発する。

一直線に国境に向かえば街道を進む旅人達などの目撃者が増える為、国境へは一直線に向かわずに大きく迂回しながら目指す。

一晩で進む予定の場所までに点在する村には、先行させた騎士に御触れを出させた。

「軍勢が通過した事は他言を禁ずる。その禁を犯した者は厳罰に処する覚悟せよ！」

威丈高な物言いだが、隠密行動は今回の作戦の重要なカギである為仕方が無い。こうして軍勢は数日をかけて国境手前まで辿り着いた。

そして軍艦も同じ様に夜密かに出向された。

夜間の軍艦の航行など危険な為通常は行なわれない。各艦は衝突せぬように前後左右に明かりが灯され、そして海岸線を走る騎士の持った松明の火を頼りに航行する。

こうして予定の位置まで密かに進んだのである。

すべての戦力が所定の位置についた次の日、またも夜を待って行動を開始する。

バルバール軍４万は一気に国境を突破し、僅かばかりに配置されていた監視の敵兵は瞬く間に蹴散らされたが、それでも王都へと敵襲を知らせるべく伝令を走らせた。

ディアスはそれには構わず一隊を海岸線へと走らす。

「我が国の海岸線を誘導した様に、松明の火で出きるだけ奥深くまで艦隊を誘導するんだ」

他の軍勢はさらに数部隊に別れそれぞれ進軍する。

城や砦の軍事拠点は一攻めしてみて落せそうならば落し、難しそうならば捨て置いた。敵国を混乱させ被害を与える為の戦いなのであって、占領する為の戦いではないのである。

万一敵が追撃してくれれば、その時は逆激に転じる。敵拠点に篭る兵力よりバルバール軍一隊の方が数は多い為、野戦になれば打ち破るのは難しくない。

攻撃に参加している部隊の兵士は数日分の腰兵糧を携え、弓兵も背に大量の矢を背負っている。拠点を攻めるに当たってもなるべく矢の消費を抑え、時には落した拠点から食料や矢を拝借した。

行軍速度向上の為、物資を輸送する足の遅い輜重隊を率いずの進撃だった。

だが敵にも有能な者が居るらしく、軍上層部からの命令を待たずに独断で周辺の領主の兵力を糾合し、バルバール軍を迎撃すべく出陣した者が居た。

レオニード・アウロフ将軍である。

彼は集めた5千の軍勢でもってディアス率いる本隊を狙ったのである。

バルバール軍は各地を攻める為分散し、ディアス率いるバルバー

ル軍本隊は４千。

兵力を集中すべしという兵法の基本には反するが今回の戦いは敵領地に打撃を与える事が目的である以上仕方があるまい。

兵力を集中していては効率が悪すぎるのである。

夜が明け辺りが白み始めた頃、ディアスは前方に戦塵またたくのを発見した。

「ディアス将軍。敵襲です！」

ディアスと同じく戦塵を発見したらしい幕僚の一人が傍らで叫びにディアスは、

「ああ。分かっている」と落ち着いて返し、敵があげる戦塵を注意深く観察する。

「『戦塵低くして広きは、歩兵なり』……か」

ディスはそう呟くと、前方に弓兵を配置し、左翼に歩兵、右翼に騎兵を並べた。

とはいえ、前方に配置した弓兵は幅が広く敵軍すべてに対峙している

兵科と言うものは一般的に、弓兵は騎兵には弱い。騎兵の突進速度に弓を放つのが追いつかないからである。

歩兵は弓兵に弱い。隊列を組み槍衾（やりぶすま）を作って進軍する事が持ち味の歩兵は進軍速度も遅く弓兵のかっこうの的となるのだ。

敵は急な出撃に何とか歩兵は集める事が出来たが、騎兵を多く集める事は出来なかったのである。

ちなみに騎兵は歩兵に弱かった。騎兵の持ち味はその突進力であるが、槍衾を作る歩兵に突進するなど自殺行為なのだった。

もっとも各兵科とも横からの攻撃には弱いが、その中でも歩兵が一番弱い。整列し槍衾を作る事で持ち味を発揮する歩兵はすぐには攻撃方向を変えられないのである。

両軍の距離は瞬く間に近づき、アウロフ将軍はバルバール軍に突撃を敢行する。

ディアスはそれを弓兵で持って迎撃させた。

ここでは矢の消耗を考えてはいられず、空を覆うばかりの矢を敵軍へ降り注ぎ、敵兵は盾で防ぐもののすべての矢を防ぐ事は不可能だった。

多くの兵士が朱に染まり、歩兵の前進の速度が弱まる。

勿論彼らも歩兵の盾の隙間から矢を打ち返すが、進みながらの射撃では劣勢にならざるを得ない。

「っち！　何をやっておるか！　構わず進め！」

この状況にアウロフ将軍は叫んだ。

一見アウロフ将軍の命令は無策とも見えるが、勝利を目指すなら他に方法は無かったのだ。状況が突撃以外の選択をアウロフから奪っていた。

アウロフ将軍はバルバール軍が軍勢を分散させている事を逆手に取り、逆転の一手として勝負を挑んできている。

いつ分散したバルバール軍が再集結してくるか分からない以上、アウロフ将軍には強引でも短期決戦を挑むしか選択肢がなかったの

だ。

そして口先だけの命令では兵士が動かないのは、愚将ではないアウロフにも分かっている。

「我に続け！」

アウロフ将軍は兵士を鼓舞する為に自ら前線へと向かい、突撃を敢行した。

将軍の勇敢なる行動に兵士達の士気も上がり、

「うぉーー！」と雄叫びを上げ、敵歩兵の突撃の速度があがる。だがそれでも隊列を崩してまでのなり不利構わずの速度は出せない。隊列を崩せばバルバール軍右翼の騎兵は、綻びを生じた歩兵の槍衾をやすやすと破るだろう。

それに対しディアスは前を向いたまま、傍らにいる副官に呟いた。

「左翼前進」

「左翼歩兵前進！」

ディアスからの命令を副官が大声で発し、左翼へと指示を伝えるべく伝令は飛び出すように本陣をたつ。

バルバール軍左翼は敵右翼と衝突し盾同士ぶつけ合う様にして押し合い、その為敵右翼の前進は止まったが、前方のバルバール軍からは相変わらず矢が降り注ぐ。

やむを得ず敵中央、左翼のみで前進を続けるしかない。そうしなければ、バルバール軍弓兵の的となるだけなのだ。だが、その為敵軍に段差が生じたのである。

「右翼騎兵を弓兵の後方から回り込ませ、左から敵中央を横激」
このディアスの命令を副官はまたも大声で復唱し、伝令が飛ぶ。

本来自軍の右翼に守られるべき右（バルバール軍からみて左）からの突撃に、敵中央軍の歩兵は慌てて右に旋回しようとしたがその手にした長槍は味方同士絡みあい、そして思わず右に向けた盾の間隙を縫って正面から降り注ぐ矢の餌食となった。

中央軍は瞬く間に混乱し、その混乱は瞬く間に左翼にも広がった。バルバール軍左翼と戦っていた右翼歩兵はむしろ最後まで持ち堪えたが、それも僅かな時間差でしかない。

「静まれ！　このまま突撃せよ！」
アウロフ将軍は最後の賭けとばかりに叫んだが、将軍の命令を全軍に伝えるべき伝令達も散り散りとなり、その命令を聞いたのは将軍の周辺にいる僅かな者達のみ。

そしてその僅かの者達も将軍の命令を実行したのは皆無だった。兵士達は、勝敗が決した以上自分の命を守る為の我先にと逃げ出したのである。

最後まで踏みとどまったアウロフ将軍は討たれ、軍勢は壊滅した。

そして他のバルバール軍はこの間も各地を巡り、夜の内に存分に敵国内を荒らしまわったのだった。

艦隊も海岸線を進む一隊に誘導されて奥へと進む。途中に点在する漁村は攻撃するのも時間の無駄と捨て置かれ、村民は幸運にも大きな被害を免れた。

そして夜が明ける頃には、国境に近いベサントという名の軍港の手前まで辿り着く事に成功した。
出撃時の利便性を考えて作られたこの国境に近い軍港には、敵の軍艦の半数近くが投錨されている。

敵軍も深夜の内にバルバール軍の侵攻を伝えられ続々と海兵や漕ぎ手が集まってきているが、まだまだ全兵が集まっていると言うにはほど遠い。

そこへバルバール軍が突撃を行なった。

敵襲など想定されていない軍港への攻撃に、海兵や漕ぎ手達は大混乱に陥り我先に軍艦へと乗り込む。
だがバルバール軍はその軍艦に対して陸上から存分に火矢を浴びせかけ、軍艦は次々と燃え尽きて沈んでいく。

火をかけられては堪らないと海兵や漕ぎ手が乗り込んだ軍艦は続々と港を離れるが、適正人員に達せぬまま急いで出向した艦艇は如何にも愚鈍だった。

そこにバルバール艦隊が襲い掛かった。
元々軍港に投錨されていた艦艇数で言えばほぼ互角だったが、敵艦は出港すら出来ずに虚しく湾内で燃え尽きた艦も多い。
そして出港した艦艇も人員不足で船足遅く旋回能力も悪い。

衝角戦を行なう海戦において、船足が遅く旋回能力も悪いとなれば致命的である。しかも逃げるように出港した敵艦隊には、それを統率すべき提督も定まっていなかったのである。

敵艦は次々と沈み、バルバール艦隊に殆ど被害は無かった。

そして敵艦がすべて海の藻屑と消えると、バルバール軍は軍港の船渠（ドック）をも燃やしつくし、バルバール艦隊はさらに奥へと進む。

敵海軍の艦艇は、集まればまだバルバール艦隊に匹敵する艦艇数を誇るであろうが、一番大きなベサント軍港の艦隊を消滅させた今、他の艦艇はそれぞれ少数に分かれて各港に投錨されているのみ。

敵艦艇に集結させる間も与えず進撃すれば打ち破るのは容易いであろう。

こうしてバルバール軍による突然の攻撃に、その日の朝には大打撃を受けた「コスティラ王国」だった。

第１０話：総司令の攻勢（２）

思いも寄らぬバルバール軍の侵攻に、コスティラ王国王都ケウルーは大混乱に陥っていた。

「敵の規模は！？」

「被害状況はどうなっておる！」

「敵は今どこにいるのだ！」

ケウルーに怒号が飛び交うがその問いに答えられる者は誰も居ない。輜重隊を率いないバルバール軍の行軍速度と戦いが夜間行われた事もあって状況が掴めないのである。

そこへ確実と思われる情報が伝令からもたらせられたが、その情報に心躍ったコスティラ軍の諸将は誰一人いなかったであろう。

「ベサントに投錨していた艦艇はすべて撃沈！　港もすべての施設を焼き払われその機能を失いました。バルバール艦隊はさらに西へと進んでいる模様」

この情報に諸将は呆然となったが、その中でいち早く我に返った海軍の将であるライストが叫んだ。海軍所属とはいえ常に全員が軍港に詰めている訳ではなく、彼は王都にある海軍本部勤務なのだった。

「すぐさま各港に投錨している艦艇を一箇所へ集結させよ！」

「かしこまりました。ですが、何処の港へ集結いたしましょう」

ライストは少し考えてからラーへ軍港と答えた。ラーへはコスティラでも一番西にある軍港である。東から来るバルバール艦隊を逃れ集結するにはもっともな選択と言えた。

ライストからの命令を受けた伝令は、急いで同僚達にもその指令を伝え、彼らは各港へと向かうべく王都を飛び出した。

そしてライストは海軍本部へと赴き、集結させた艦隊の提督たらんと任命を受けた。いくら数だけ集めてもそれを指揮する者が居なくては数ほどの戦力は発揮できない。

各港に集結している艦隊にもそれぞれ提督は居るが、それはみな同格の提督である。その上に立って全艦を指揮する者が必要なのだった。辞令を受取ったライストは自身もラーへ軍港へと急いだのだった。

海軍については後はライストに任せるしかない。その場に残された陸戦兵力の将軍達はとにかく兵力を集めるべく奔走し、その一方今回のバルバール軍による侵攻に愚痴をこぼした。

「ランリエルとの国境を固めてランリエルへ抗議の使者を送り、軍勢を王都に集結させて置きながら、まさか我が国へと攻め寄せるとは……」

それは諸将みなの気持ちを代弁した言葉だった。そしてその後に「卑怯な」という単語を付け加えないだけの分別はあった。

今まで散々バルバールへと攻め寄せたコスティラである。それが攻められたからと言って文句は言えまい。さらに言えば、ランリエルに攻め寄せると見せかけてのコスティラへの侵攻も優れた軍略で

あるといえた。引っかかったこちらが悪い。その程度の見識はあるのだった。

愚痴ばかりも言っては入られないと、諸将は対策の為軍儀へと入った。

「いつまでも手を拱いては入られん。敵の兵力が掴めんと言っても、バルバールの全兵力は今までの戦いからおおよその検討は付いている。ランリエル国境を固めた兵とバルバール本国を空にはしまいという事を鑑みれば、バルバールに動かせるのはどうあがいても最大４万程度のはず」

「なるほど。それに比べ我が軍は全兵力を集結させれば１０万を超えます。勿論、今回の奇襲でかなりの損害を受けておりますが、それでも2倍以上の戦力」

「しかし、全軍の集結をまっては入られますまい。この間も被害は広がっておるのですからな」

「そうはいっても、１万、２万の軍勢を派遣しても敵４万によって簡単に撃破され、無駄に損害を増やすだけだ」

「そもそも敵が４万であるという事は確実なのでしょうか？」

「そんな事分かる訳がない。しかし最悪の状況を想定して計画するしかなかろうが」

「確かに……」

結局、バルバール軍は最大に見積もり４万であると想定し、その

同数の４万が集結すれば王都と国境までの中間地点まで進撃させてそこで牽制させ、さらに順次集まってくる兵力を合流させる。そしてバルバール軍の倍の８万まで集まった時点で国境に進撃させる事と決まった。

同数の４万で戦ってもし負けては、巻き返すのが難しくなるであろう。戦うのであれば確実に勝てる戦力で戦う必要がある。

国境を塞いでしまえば、コスティラ国内のバルバール軍は袋のネズミ。そうなればどうとでも料理できるのだ。もっとも敵も馬鹿ではあるまい。そうなる前に撤退するだろうが、それならそれでバルバール軍を追い払うという目的は達成されるのである。

「だが、兵力が集結するまでに相当な被害を受ける事になるであろうな……」

今まで一方的にバルバールを攻めるだけだったコスティラ国内の軍事拠点は、はっきり言って脆弱である。設備もそうだが、そこに篭る兵士達自体が防衛戦など訓練以外では、まったくの未経験なのだった。

コスティラの諸将はその受けるであろう被害を考え、暗く沈んだ表情で俯いた。

ディアス率いるバルバール軍はその間も村々と軍事拠点を荒らしまわっていた。

「敵軍の集結具合に注意を払いながら各所を荒らしまわる。敵が集結し出てくればこちらも集結し、作戦は次の段階に移る」

ディアスの指令通り各隊はコスティラ領内東部を駆け巡った。

村々の家々を焼き払い、田畑も焼いた。むこの民衆をと言われるかも知れないが、コスティラは数え切れないほどバルバールに攻め寄せてきている。今まですべて勝っているから良いものの、もし負けていればバルバールの民衆が同じ目にあっていただろう。そう思えば、手控える気にもならない。

今回ここでコスティラに大打撃を与えておかなければ、近い将来コスティラとランリエル両国を一度に相手しなくてはならなくなり、その時には敗北は必至となる。今敵国民に手控えて、その代わりに自国民が被害を受ける事になるなど、あまりにも馬鹿馬鹿しい話だった。

勿論不要に虐殺などはしないが、必要ならばやむなし。そういう事である。

今回の作戦でコスティラではなくランリエルを攻めるという選択肢もあったが、ディアスはその選択を棄てた。

理由は幾つかある。

まず、カルデイと長年しのぎを削る戦いをしてきたランリエルより、一方的にバルバールを攻めていただけのコスティラの方が防衛体制が甘いのである。

次に、バルバール軍将兵の戦意である。あえて悪い言葉を使えば、バルバール将兵には長年わたり積りに積ったコスティラへの恨みがある。それは暴走させずに制御出来るならば強大な武器となるので

ある。

そして最後に、長年のカルデイとの戦いに終止符を打ったサルヴァ王子が居るランリエルより、長年のバルバールとの戦いに終止符を打てずにいるコスティラとを比べた場合、こちらの作戦が読まれる確率がコスティラの方が低いと判断した為である。むしろこの事がコスティラを攻めた一番の理由と言ってよかった。

他の2つの条件など、作戦が読まれるかもしれないという事に比べれば、何ほどの事も無い。

そして事実ディアスの作戦を読める人材が居ないコスティラは、ディアス率いるバルバール軍に、いい様に国内を蹂躙され損害を出し続けたのである。

第１０話：総司令の攻勢（３）

バルバール艦隊もコスティラ海軍に甚大なる被害を与え続けていた。

ライストはラーヘ軍港への艦隊集結を指示したが、東部よりにある３箇所の軍港はその命令が届くよりも早くバルバール艦隊が押し寄せたのだった。

数に劣る各港のコスティラ艦隊は出港せず湾内に縮こまった。こうなってはバルバール艦隊もうかつには手が出せない。今回はバルバールの陸戦戦力の援護は無いのだ。

うかつに港に入れば、バルバール軍艦こそが陸からの火矢による攻撃で損害を出しかねない。だがそれもバルバール艦隊には想定内の事だった。

バルバール艦隊は数隻の艦に火を点けて湾内に突入させたのだった。湾内で身を縮こまらせていたコスティラ軍艦は逃げる事が出来ずに火は燃え移り海の藻屑と消えた。

この作戦によりバルバール艦隊は８隻の軍艦を燃やしたが、コスティラ海軍は３７隻の艦を失ったのだった。

結局ラーヘ軍港に辿り着いて集結し、ライストの指揮下に入ったコスティラ艦隊はバルバール艦隊の半数でしか無かった。

ライストは半数の艦艇にもかかわらず善戦したが、戦力の差を覆す事は敵わずバルバールのライティラ提督が率いる艦隊に敗北し、

逃げ道も塞がれ囲まれたコスティラ艦隊はその半数が降服したのだった。

コスティラ王国沖の制海権を制圧したバルバール海軍は、コスティラ王国の東方を荒らしまわるディアス率いる陸戦戦力に対し、西方の海岸線から海兵を上陸させ荒らしまわった。

海兵の数は2千程度と多くは無いが、東方に目を向けていたコスティラ軍は、西方が手薄になっていたのだ。2千の海兵でも十分攪乱させる事が出来たのだ。

こうして数日に渡りバルバール軍によっていい様に国内を陵辱されていたコスティラだったが、遂に4万の軍勢を集結させる事に成功した。

コスティラ軍4万は王都ケウルーから国境へと進軍し、コスティラ軍の動向に警戒していたバルバール軍もすぐにそれを察知する。

「敵は4万か……、もう少し多勢で来るかと想定していたんだがな」

ディアスはそう呟き軍勢を集結させ、国境へと向いそしてその国境をも越えてバルバールへと戻ってしまった。そして国境のバルバール側をその軍勢で固めたのだった。

「なんだというのだ！　結局荒らしまわる事だけが目的だったのか！」

最終的には敵も撤退するとは思っていたが、あまりにもあっさりと撤退し過ぎる。

コスティラの諸将は激怒したが、また舞い戻られてはかなわない。コスティラ軍４万も国境まで進み、国境を固めたのだった。

そしてコスティラ軍が国境に到達した翌日、もう夜も明け様とする頃、ディアス率いるバルバール軍３万はコスティラ軍に夜襲を行なったのだった。

だがコスティラ軍とて夜襲には警戒していた。慌てふためく事などない。

「迎え撃て！」と命じ、混乱する事無く落ちついてバルバール軍を迎え撃った。

両軍は月明かりを頼りに矢を射掛け合い、そして盾を並べて矢を防ぎながら槍兵が進軍する。両軍負傷者が出れば後退させ新手を繰り出し、一進一退の戦いを繰り広げる。

「夜襲などにかかると思ったか！」

コスティラ軍は深夜の戦いにもかかわらず整然と戦い、バルバール軍の夜襲は失敗したかに思えた。

だが、突如コスティラ軍の後方が混乱する。

「後ろから敵襲だと！」

バルバールの猛将グレイス率いるバルバール軍１万が、コスティラ軍の後方を襲撃したのだった。

コスティラ軍諸将は驚愕した。敵軍はどうやって後方に回り込んだというのか。このあり得ない状況に、コスティラ軍は混乱の局地に陥った。今まで整然とバルバール軍と戦っていた軍勢もこのまま

では前後から挟撃されると浮き足立つ。

バルバール軍は全軍が国境を超えずに1万の軍勢を山中に隠していたのだ。勿論、あまり国境近くではコスティラ軍の偵察に見つかる為、かなり離れた山中に潜み、厳重に警戒し不幸にも軍勢を目撃したコスティラの民衆はすべて捕まえ、逃げようとした者は仕方なしとすべて討ち取った。

そしてその軍勢は日が沈むとすぐに隠れていた山中から発進し、明け方に行なわれるディアス率いる本隊の攻撃に合わせて、コスティラ軍の後方を襲ったのだった。

このディアスによる兵法で言うところの『人の及ばざるに乗じ、不虞の道に由り、其の戒めざる所を攻むるなり』の作戦通り、コスティラ軍は思いも寄らぬ自国方向からの襲撃に浮き足立つ。

だがコスティラの指揮官は懸命に兵士を叱咤する。

「持ち堪えよ！　ここさえ持ち堪えておれば戦線は維持できるのだ！」

しかし、「ここの戦線を維持できても前後から攻められてはお仕舞いではないか！」と兵士達は我先にと持ち場を離れ、戦線は崩壊した。

「追撃せよ！」

ディアスの激がバルバール軍に響き、敗走を始めたコスティラ軍にバルバール軍が襲い掛かる。戦闘の損害とは戦闘そのものより、敗走時に追撃を受けた時にもっとも増大するものだ。

バルバール軍の騎兵が逃げるコスティラ軍に襲い掛かった。まだ夜が明けきらぬ薄暗い世界に、馬蹄の響きが辺りを圧し、それがなおの事コスティラ軍兵士に恐怖を植えつける。

コスティラ軍は必至で逃げ、それだけに戦いは一方的なものになった。

逃げるだけのコスティラ兵に攻撃するだけのバルバール兵。時折立ち止まって反撃を試みるコスティラ兵士も居たが、他のコスティラ兵士は逃げさるのみ。

結局その勇敢な兵士は敵中に1人取り残され、多勢のバルバールの軍勢に囲まれいとも容易く討ち取られた。

だが、その逃げる先もバルバール軍に押えられている。コスティラ軍は殆どの将兵が逃げる事が出来ず、からくも突破したコスティラ兵にも、バルバール軍は執拗に追撃を行った。その為、多くのコスティラ軍将兵が屍をさらしたのだった。

コスティラ軍はこの戦いで、3万5千の死者を出した。死傷者ではなく、死者がである。戦闘開始当初以外は追撃戦に終始した戦いに、バルバール軍の損害はほとんど無い。

バルバール軍は戦勝に沸いた。ここまでの圧倒的な勝利は長いコスティラとの戦いでも稀どころか、皆無と言ってよかった。

戦闘が終わり別働隊を率いてたグレイスも本隊と合流し、将兵は身分の差も忘れ近くに居る者同士抱き合って、かつて無い大勝の喜びを分かち合う。

「これで、しばらくはコスティラは軍事行動を起こせないだろう」

「まったくですな！」

グレイスはディアスの言葉に力強く頷いた。だが疑問もある。

「しかし、この様にコスティラに大勝出来るならば、なぜ今までこの作戦を行なわなかったのです？」

これだけの戦果。このグレイスの疑問は、誰もが思う疑問である。ディアスは首をすくめて答えた。

「そりゃあ、今まで出来なかったからさ」

「今まで出来なかった？」

「ああ、今回全軍を集結させるなんて派手な真似をしてもコスティラに警戒されなかったのは、ランリエルに喧嘩を売ってランリエルと戦う為と思わせる事が出来たからだ。ランリエルが敵とは言えなかった時には出来ない作戦だ」

もっとも、ランリエルが敵とならなければ、コスティラに対しては専守防衛をしていれば良く、この様な作戦自体が不要だったのである。ランリエルが敵となった為、この様な作戦が必要になったのは皮肉だった。

そして浮かれている諸将を尻目に、ディアスは胸中付け加えた。

この作戦は一度きりしか成功しない。今後はコスティラも警戒する。そしてこの作戦が利かないならば、コスティラが軍備を再度整

えた時、ランリエルと共に東西から攻められればバルバールは滅亡するのだと。

それを回避するには、バルバールがコスティラを滅ぼすか、ランリエルを滅ぼすか、それとも……。

第１１話：国内の敵

「そこまでの大勝だったか」

部下からの報告を軍部の執務室で受けたサルヴァ王子は目を見張り、素直に感嘆の声を洩らした。

部下からの報告とは、サルヴァ王子によって派遣された部下による例の「バルバール軍がどの様に戦うのか」の報告である。

そうサルヴァ王子はディアスの作戦を読んでいたのだ。

だがディアスとて、ランリエルには作戦が読まれるかも知れないと考えてコスティラを攻めたのだから、サルヴァ王子が作戦を読むという事を、読んでいたという事になるだろう。

もっとも、バルバールがコスティラを攻めている時にランリエルがその背後を討つという事も考えられ、これもディアスが懸念した通り綱渡りの要素の多い作戦ではあった。

だが今回サルヴァ王子はあえてそれを行なわなかった。

ランリエル軍が出撃すればバルバールはすぐに察知し、コスティラに出撃したバルバール軍は引き返すだろう。ランリエル・バルバール国境に配置された兵力は５千であるが、軍勢が引き返してくる程度の間なら５千でも持ち堪えられてしまう。

そして、バルバール海軍が行なった艦隊の夜間航行など、ランリエル海軍には出来ない芸当なのである。当たり前の様に昼間に航行

するしかなく、気付かれずにバルバール王国沖に突入するなど夢のまた夢なのだ。

昼間に航行するランリエル艦隊は容易にその出撃を察知され、バルバール王国沖に突入するまでにバルバール艦隊は引き返してくるだろう。

つまりランリエルがバルバールの背後を襲っても、バルバールの邪魔をする。といった程度の意味しかなさないのである。

それよりもバルバール軍に好きな様に戦わせ、その手の内を存分に見させて貰おう。サルヴァ王子はそう考えたのだった。

さらに言えば、コスティラ王国とて王子にとっては存在的な敵国である。その国力が削がれるのは望むところである。

勿論、バルバールが敗北する事もありえ、その場合はバルバール王国侵攻がかなり楽になるのだが……。そうなれば王子にとっては興醒めもはなはだしかっただろう。

だが幸いな事に、バルバールは2倍の国力のコスティラに大勝し、ランリエルにとって強敵である事を示した。望むところだ。

「バルバール軍の総司令官は確かディアスという者だったな?」

王子の問いに部下は正確に答えた。

「はい。フィン・ディアスと申す者でバルバールの武門の名流の当主です。年は35歳になる男です」

誰も軍の総司令を女性とは思わないであろうに、わざわざ男と付け加える辺り、この部下の報告も徹底している。王子は部下からの報告に満足しさらに問いただした。

「ほう……。それでどの様な御仁か？」

「かなり変わった人物と言われております。これはあくまで噂ですが、いくたびも戦場に出ているのもかかわらず、自ら剣を持って戦った事が無いとも言われております」

部下は敵の総司令官の軽い醜聞を王子に聞かせて見せた心算だった。だがそれを聞いた王子は、部下の思惑通りその話を面白がったりはしなかった。

「その噂の真偽は？」

とサルヴァ王子は、かなり深刻そうに問いただしたのである。部下は予想外の王子の反応に、戸惑いながらも答えた。

「いえ……実際には幾度かは戦った事がある様ですが、そういわれても仕方が無いほど、出陣した戦場の数に比べて、その数が少ないのだと……」

総司令官が自ら剣を持って戦うものではない。それは実はサルヴァ王子と同じ考えなのだった。

だがサルヴァ王子は、戦ったことなど無いなどと噂されていない。王子は実際多くの戦場で剣を持って戦ってきた。たとえ王子といえども産まれながらにして総司令官だった訳ではない。一士官、一武将として戦った時期も有り、その当時は存分に剣を振るったのである。

そして武門の名流とはいえ、産まれながらにして総司令官でないという事は同じだろう。総司令官になったというなら、バルバールで比肩される者が無いほどの武勲を立て続けたはずだ。それが剣を持って戦った事が無いと噂されるなど、どういう事なのであろうか？

いや、分かっている。それは類稀なる指揮能力を有しているという事なのだ。これは単に勝機を見出す事に優れていると言うだけに留まらない。

どれほど自分に剣を振るう心算が無くとも、剣を振るわざる得ない時がある。それは敵の攻撃を許し自分の間近にまで敵の接近を許した時である。かのバルバールの総司令官は、劣勢に立たされる事すらもほとんど無いという事なのだ。

……暑い。冬の最中というのに王子は暑苦しさを感じた。かつて無い強敵の予感が王子の体温を急激に押し上げたのである。

そしてバルバール軍総司令官ディアスへの興味は尽きない。

「他に面白い話は無いのか？」

王子の様子はとてもではないが面白がっていた様には見えないが、部下は忠実に王子の注文に答えた。この話はとっておきに面白い話のはずである。

「実は、ディアス総司令には少女嗜好があるらしく、このたび１２歳の少女と婚約したとか」

「１２歳……」

これにはさすがの王子も唖然とし、記憶違いでなかったかと部下に問いかけた。

「確か……ディアス殿は３５歳と言わなかったか？」

部下は王子の反応に満足し、口元の微かに笑みを浮かべながらはっきりと答えた。

「はい。３５歳で御座います」

「そっそうか……」

王子は呟く様に言葉を洩らしたが、一瞬混乱していた頭がはっきりとし、正確に話が飲み込めると、部下がもっとも望んだ反応を見せた。

「３５歳の男が、１２歳の花嫁とはな！」

と大いに笑ったのだった。

第１２話：壊れた心（１）

コスティラとの戦いでバルバールにかつて無い大勝をもたらしたディアスは、にもかかわらずその気持ちは沈んでいた。

最近、ミュエルの元気が無いのである。

数日前、王都に凱旋しいつも通り国王陛下からお褒めの言葉のみを頂いたディアスが邸宅に帰ると、ミュエルとケネスが出迎えたのである。

ミュエルはディアスが無事に帰ってきた事が嬉しく、美貌の少女は花の様な笑顔で出迎えた。そしてケネスも笑顔で出迎えた。

「ディアス様お帰りなさいませ」

「はは。ふたりで並んで仲が良いな」

ディアスは揃って挨拶を行なうふたりに笑いかけた。ケネスとミュエルが仲良くする事はディアスにとっても嬉しい事だった。このふたりには是非幸せになって欲しいものだ。ディアスは心からそう願ってたいた。

そして先に立って邸宅の中へと進んだ。ふたりもその後に続く。ケネスは仲が良いといわれて照れているのか顔を真っ赤にしていた。だが、ミュエルの表情は明るいとは言いがたかったのである。

無事にお帰りになった旦那様の為、料理人は腕を振るいその日の晩餐は豪華な物だった。貧しい戦場での食事に飽き飽きしていたデ

ィアスは、その料理に舌鼓を打った。

しかし、ミュエルの方を見るとあまり食が進んでいる様に見えない。

「どうしたミュエル？　嫌いな物だったか？」

そう言われたミュエルは、慌ててぶんぶんと首を振り、「そんな事は御座いません」と料理に手を付けた。

そしてディアスの言葉を侍女から伝え聞いた料理人が飛んできて、ミュエルに料理が御口に合わなかったので御座いましょうか？　と問いかけると、またぶんぶんと首を振った。

だがその日を境にミュエルの様子がおかしくなったのである。人と居る時は笑顔を絶やさぬのだが、1人でぽつんと居る時が多くなった。そしてその様な時に笑顔を見せる事はなくなった。

1人で居る時に笑顔を見せるなどと言われるかもしれないが、ミュエルは小鳥が居れば小鳥に笑いかけ、花を見れば花に微笑む。その様な少女だった。ディアス家の人々はその様なミュエルの様子を遠くから見るのが大好きだったのだ。

それが笑顔を見せない。ディアス家の者達はみなミュエルを心配した。ディアスも心配したが、あえてケネスに様子を伺わせた。この様な時こそ力になってくれた者に心引かれるものだろう。

「ミュエルの様子を見てきてくれ。お前が力になってやるんだ」

だがディアスの言いつけに、ケネスは戸惑った様に問い返した。

「ですが、僕で良いのでしょうか？　ディアス将軍が行かれた方が良いのでは……」

ディアスがミュエルと結婚する気が無いのは知っている。だが一応ミュエルはディアスの妻になる予定という事になっている。それを差し置いて自分がミュエルと仲が良くなるのは不味いのではないか？　そう思ったのだ。

「いや、お前が行って励ましてやってくれ」

ディアスにこうはっきりと言われてはケネスには断る事は出来ない。そして事実ケネスはミュエルに好意を抱いていた。ディアス家でミュエルに好意を抱いていない者等存在しないのであるが、ケネスの好意ははっきりと恋愛感情だったのである。

もっとも、他に恋心を抱いていた相手が居たわけでもなく、そばに心優しく美しい恋愛対象範囲内の年齢の女の子が居るのである。恋愛感情を抱かない方がよほど趣味が悪いか、感情が欠落しているか、どちらにせよ異常と言うものである。

勿論、それでも世話になっている家の主人の妻と思えば歯止めも利くが、ディアスはミュエルと結婚する気が無いと、ケネスに洩らしているのだ。ケネスがミュエルに恋心を抱いても無理からぬ事だった。

ケネスがミュエルを探し、家の使用人達に聞いて回ると、ミュエルは庭に散歩に出ているらしく、庭に行くと果たしてミュエルが沈んだ表情で歩いていた。

好きな女の子に声をかけるという行為に、ケネスは自分の胸がドキドキと高鳴るのを感じ数瞬躊躇ったが、意を決してミュエルに近づいた。

「ミュエル。大丈夫かい？」

「ケネス様……」

名を呼ばれたミュエルは、はっとして顔を上げてケネスを見たがその表情に普段の明るさは無い。しかし、すぐに笑顔をケネスに見せた。そのあまりにも分かりやすい意識しての笑顔は、17歳のケネスにもミュエルが無理をしているのだと容易に察せさせた。

「最近元気が無い見たいだけど」

「いえ。大丈夫です。ありがとう御座います」

ミュエルは笑顔で答える。ケネスは一瞬その笑顔に見とれそうになったがすぐに我に返って、ミュエルを励ますという使命を思い出した。

「みんなミュエルの事を心配しているんだ」

「お気遣いありがとう御座います。でも本当に大丈夫なのです」

ミュエルは笑顔で答え続けるが、それだけにケネスにはミュエルの心が見えない。ケネスはミュエルを励まし続けるべく、再度口を開いた。

「ディアス司令官もミュエルの事を心配しているんだ。早く元気に

なる様にって」

「ディアス様が？」

「うん」

「それで……ディアス様はどちらに？」

「え？　書斎に居ると思うけど？」

「書斎……？」

「そうだけどどうして？」

「ディアス様は私の元へは来て下さらないのですか？」

さっきまで笑顔だったミュエルの表情が、はっきりと翳っていた。その表情の変化にケネスは悟らざるを得ない。自分ではダメなのだと。だがやはりミュエルへの恋心は諦めがたい。

「ミュエル……、でも僕はミュエルの力になりたくて」

だが取り乱すミュエルには、ケネスの言葉が届かずその目に見ると涙が溜まると、静かに頬を伝った。

「どうしてディアス様ではなく、ケネス様が来るのですか？　旦那様は、妻の心配をして下さらないのですか？」

「……ミュエル違うんだ。ディアス様はミュエルの事を心配して僕を……」

ミュエルに恋心を抱くケネスも、ミュエルとディアスを仲違いさせたい訳ではない。ケネスは必至でミュエルを宥め様としたが、そのケネスの言葉にミュエルの中で何かが弾けた。

「ミュエル様です！　私はこのディアス家の当主の妻です！　ミュエルではありません！」

普段は大人しいミュエルが大声で叫び、その声に数羽の小鳥が飛び立った。

だがこの叫びに驚いたのは、ケネスよりもむしろミュエルの方だった。自分自身の急激な激高がもたらした叫びにミュエル自身信じられず、だがその驚きの表情を自分自身に向ける訳にも行かず、まるで彼からその言葉を浴びせられたかの様に、ケネスに驚きの表情を向けた。

そして、ミュエルはケネスを見つめたまま自分の口に手を当て、数歩後ずさると背を向けた走り出した。

ケネスは逃げる様に走り去った少女を追いかける事に躊躇ってしまい、その小さな背中がさらに小さくなり視界から消え去るのをただ見送ったのだった。

第１２話：壊れた心（２）

ミュエルは走りながら、ケネス様になんて事を言ってしまったのだろうと後悔し、涙が頬を伝った。自分はこの家の当主の妻なのだから自分の方が偉いのだ、など言いたい訳ではなかった。フィン・ディアスの妻として見て欲しい。それだけなのだ。

庭を駆け抜けたミュエルは屋敷に辿り着くと、普段は大人しいミュエルが駆けている事に驚く使用人達から涙に濡れた顔を背け屋敷に入り、そしてさらに駆け続けて自室へと飛び込んだ。

ミュエルの心は乱れに乱れていた。

ミュエルは自分の小さな身体では持て余す大きな寝具に身を投げ出すと、枕に顔を埋めて嗚咽を洩らした。

ディアス将軍に嫁ぐのだと言われ、大好きなお父様とお母様と引き裂かれてこの屋敷にやって来た。本当はお父様とお母様と離れるなんて嫌だったのに……。

ディアス邸の人々は自分に優しくしてくれる。それはミュエルにも分かっている。でもそれで両親と離れて暮らさなくてはならなくなった１２歳の少女の心が癒されるというものではない。

しかし、それでもミュエルは堪えてきた。自分が弱音を吐いてはお父様とお母様を困らせる事になる。そんな事は嫌だった。だからミュエルはがんばった。

寂しさに堪え、自分の夫となるディアス様の言いつけ通り毎日勉

強をし、ディアス邸の人々とも仲良くしている。ミュエルは一生懸命にがんばったのだ。

なのに！　それなのに！　夫となるはずの男性は、いっこうに自分を妻として見てくれない。いや、それどころか夫は従弟と仲良くする様に言うのだ！　ミュエルの心は悲しみに満ちていた。

夫となる人は、自分が勉強をちゃんとしたというと、良くやったと頭を撫でてくれる。でもそれがどうしたと言うのだろう？　ただの居候とどう違うと言うのだろう？　そう思うとミュエルの心はさらにその輝きを失った。

素直で優しく思いやりのある光り輝く少女の心が、次第に冷えその光を失っていく。

自分はディアスの妻でなく、ただの居候……。その事にミュエルは「気付いた」のだった。

ディアスはディアスなりに、ミュエルの事を考えている心算だった。自分の様な父親よりも歳をとった男より、相応の年齢の男と一緒になった方がミュエルの為、ディアスはミュエルの事を思いそう考えていた。

ディアス邸にミュエルがやってきてからまだ僅かな期間でしかない。そしてその様な短期間では、ディアスもミュエルを娘の様に思っているなどと言う訳ではない。

誰にでも笑いかけ素直で優しいこの少女は、誰もがその幸せを願わずには居られない。ミュエルはその様な娘だった。

しかし、ディアスのした事は結果的に、ミュエルの「存在の否定」でしか無かったのである。

ディアスの妻としてやって来たミュエルを、彼は妻として扱っていないのだ。これ以上の侮辱が有るだろうか？　ミュエルは自分の夫になるはずの男に「要らない」と言われているのである。

自分はどうしてこんなに酷い仕打ちを受けているのだろう？　自分は酷い仕打ちを受けても仕方が無い悪い娘なのだろうか？　悪い娘だからディアス様は妻にしてくれないのだろうか？　ここに居る間ずっとこの仕打ちに堪えなければならないのだろうか？　ミュエルの心に黒い染みが広がっていく。

――心が苦しい。こんなに苦しい事にずっと堪えなければいけないの？　そう思うと心はますます冷えた。暗く果てしなく長い洞窟に迷い込んだ様な絶望がミュエルを支配する。どうすれば自分は楽になれるのだろう？

逃げたい……。ミュエルはそう思った。でも、実家に戻ればお父様とお母様がお困りになるだろう。

ならば……楽になれる方法はひとつしかなかった。

ミュエルの心から一切の輝きが失われた。

庭から走り抜けて自室へと飛び込んだミュエルに、ディアス邸のみなが心配していた。

ケネスから、ミュエルとの会話の内容を伝え聞いたディアスもみ

なと同じ様にミュエルの事を心配し、そして心を痛めていた。

もっとミュエルとよく話して、自分にはお前を妻にする心算は無いんだという事を、ちゃんと伝えるべきだったか……。それを言わなかった為にミュエルに期待を抱かせたのかも知れない。ミュエルが落ち着いたらふたりでじっくり話し合おう。ディアスはそう考えていた。

だがそのミュエルは晩餐の時間になっても現れない。みなはさらにミュエルの事を心配したが、今はそっとしておいた方が良いのではないか？　そう考えてこの夜は、ミュエル抜きの寂しい食事となった。

夜も深けた頃、侍女の1人がミュエルを心配し、多少なりとも食べた方が良いのではないか？　そう考えて果物と飲み物を持ってミュエルの部屋に向かった。

侍女はミュエルの部屋の前で扉を叩こうかと考え手を振り上げたが、拳が扉に当たる寸前で思いとどまった。ミュエル様が寝ていらしたら起こしてしまうだろう。

音がならない様にゆっくりとノブを回して扉をあけ、部屋の中に入った。部屋は明かりも付いていなかったが、月明かりでぼんやりとは見て取れる。

ミュエル様は寝ているのだろうか？　そう思ってベッドの上の寝具を見たがその様子は無い。掛け布団は乱れてはいるものの、寝ているにしては盛り上がりが少ない。

ミュエル様はどこにいらっしゃるのだろう？　この部屋の中に居

るのは間違いないのだ。侍女は目を凝らして部屋中を見回すと、ベッドの横にミュエルが倒れているのを発見した。

ミュエルの様子がおかしかったという事は侍女も知っている。もしかして、ベッドの縁で泣いて、そのまま泣き疲れて床に寝てしまったのだろうか？　侍女はそう考え、持ってきた果物と飲み物が乗った盆を一旦床に置いて、ミュエルに近づいた。

ミュエルを起こすのには一瞬躊躇したが、さすがにこのまま床で寝ていては身体を壊してしまうだろう。侍女は小さくミュエルの身体を揺すった。だがミュエルは起きない。仕方が無くもう少し強く揺する。さっきと同じだった。

そうこうしている内に、侍女の目は暗い室内にも慣れてきた。そして侍女はあるものを発見した。

「っひ！」

侍女は短く悲鳴をあげ、その場にへたりこんだ。侍女が発見したのは、ミュエルの左の手首から床に広がる黒い染みだった。

第１３話：寵姫（１）

サルヴァ王子は、その日厄介な問題に頭を悩ませていた。

カルデイ侵攻後、いち早くランリエル側におもねり独立して公国をなしたコルデーロ公爵と、いまだカルデイ帝国に組するカーサス伯爵との間で領土問題が発生したのである。

事の発端は、カルデイに属するハシント侯爵がランリエルに対抗すべく準備を進めている事が露見したのが原因だった。

サルヴァ王子は、カルデイの貴族同士を対立させるという基本方針にのっとりハシント侯爵の討伐をコルデーロ公爵に「依頼」したのである。公国は一応は独立した一国という立場の為、実質はともかく形の上では命令ではなく依頼するという事になるだ。

そしてコルデーロ公爵は依頼に基づき、一族の貴族を総動員してハシント侯爵領へと雪崩れ込んだ。

この時コルデーロ公爵からの動員依頼に承知し軍勢を派遣した者の中には、それまでカルデイ側についていた貴族も多数含まれていた。カルデイからランリエルに乗り換える時期を逸し、カルデイの凋落ぶりを感じながらも仕方なくカルデイに組していた貴族が、公爵からの出陣依頼にこれ幸いと応じたのだ。

それに対しハシント侯爵の方はと言えば、同じく一族に総動員をかけたにもかかわらずほとんどの貴族は侯爵を見捨てたのだった。ネズミは沈む船から逃げるというが、ましてや沈むと分かっている船に乗り込むネズミが居るはずもないのだった。

こうして一族を総動員したコルデーロ公爵の軍勢に、孤立無援のハシント侯爵は一戦で討ち取られ、その領土も瞬く間に蹂躙され占領されたのである。勿論、カルデイ帝国が侯爵を支援すれば話は違ったであろうが、カルデイもその様な事が出来るはずもなく、見捨てざる得なかったのだ。

それどころかカルデイ帝国は、ランリエルからの「ランリエル王国とカルデイ帝国との和平の条約を破ろうとする輩を排除する事に同意して頂きたい」との要請に対して、承知したと返答したのである。

まさにサルヴァ王子の思惑通りに事は運んだ。

カルデイ帝国にしてみればやむを得ない仕儀だったが、カルデイに忠節を尽くしても孤立無援で滅ぼされるだけ。この様な現実を目の当たりにし、それでもなおカルデイに忠節を尽くそうという貴族がどれほど居るだろうか？　カルデイ帝国の解体は急激に進むはずである。

そしてハシント侯爵の甥にカーサス伯爵という者が居た。この伯爵は近年、侯爵から領地の贈与を受けていたのであるが、侯爵から贈与を受けるほど可愛がられたこの伯爵も、侯爵からの出兵依頼を断り中立を守ったのだった。

そしてコルデーロ公爵の軍勢が占領した領地の中に、なんとそのカーサス伯爵の領地が含まれていたのだ。カーサス伯爵の本領は遠く離れているが、侯爵から贈与を受けた伯爵領は侯爵領と隣接していたのである。その為に誤認されたのだがコルデーロ公爵は占領した伯爵領の権利を主張したのだった。

当然、カーサス伯爵は猛抗議を行なった。

「中立を守った私の領地が、どうして占領されなくてはならないのか！」

だがコルデーロ公爵は伯爵の抗議を聞き入れ様とはしない。

「世話になった自分を見捨てる者に領地を譲ってしまったと、ハシント侯爵もあの世で悔やまれていよう。良くぞずうずうしくも領地の権利を主張できるものよ」

公爵は伯爵を嘲笑したが、自分で侯爵の殺しておきながらその侯爵の気持ちを代弁して見せるあたり、どちらがずうずうしいのか分からない。

だが力では伯爵を凌駕する公爵も、確かに中立を守った伯爵を打つのは憚られる。とはいえ伯爵に領地を返す心算もない。総動員した一族の者に分け与える領地は多ければ多いほど良いのだ。

そして勿論伯爵も領地を諦める気は無く、こうして領地問題はサルヴァ王子の判断に任されたのだった。

サルヴァ王子にはこの問題を見事に決裁する必要がある。気付くものはほとんど居なかったが、これは歴史的に画期的な事なのだ。

なにせ「カルデイ国内の領地問題」をランリエルの王子が裁くのである。この事はカルデイの実質的な支配がすでにランリエルに移ったという事に他ならないのだった。

そしてその裁決に王子は頭を悩ませていたのである。決裁にしくじれば、ではやはりカルデイ帝国に決裁を任せよう。という事にもなりかねない。

ハシント侯爵を討伐する分にはカルデイ帝国からも了承を得ており問題は無い。だがその侯爵を見捨てて中立を守った伯爵については、侯爵の世話になっておきながら、という心情的な問題を排除すれば、理屈的には伯爵が正しいのである。

中立を守った伯爵の領地を公爵が占領する根拠は無いのだ。

だがコルデーロ公爵はカルデイ国内最大のランリエルの協力者である。しかも占領した伯爵領は、今回カルデイからランリエルに乗り換えた貴族に分け与える事になっている。むげには出来ない。

サルヴァ王子は自分を公明正大な人間とは思っては居ない。他国を侵略し征服するという「非人道的」な事を行ないながら、聖人を気取るほど王子の面の皮は厚くないのである。

つまり、正当性を無視してでもコルデーロ公爵に有利な裁決を行おうと考えていた。

公爵に有利な決裁をみなに納得させるには、伯爵の落ち度を探さなくてはならない。侯爵を見捨てたのなら、侯爵から贈与を受けた土地に権利など無い。この主張だけでも十分人々の心情には訴えられるが、もう一押ししたいところだった。

勿論武力で伯爵から領地を取り上げるのは論外である。その様な事をすればカルデイ国内の貴族達が一斉に立ち上がるだろう。彼らにも、上手く立ち回っていれば生き残る事が出来るのではないか？

という希望を持たせ続けなければならないのである。

一番良いのは伯爵自身から領地の権利を放棄させる事だ。

部下を派遣し伯爵の人となりを改めて探る必要を王子は感じた。領地の為に叔父を見捨てるなど強欲なだけではないか！　といえるが、裏を返せば冷徹に状況判断が出来る計算高い人物とも言える。

伯爵がただの強欲か、冷徹な現実主義者か。それによって交渉の余地も出てくるだろう。

王子はカーサス伯爵の対応に、部下のサントリクィドを呼寄せた。

軍略だけに留まらず、政略、策謀にも長けた王子の腹心には武官だけではなく、文官も多い。サントリクィドもその王子の腹心の文官の１人だった。

サントリクィドは３０を過ぎた男であるが、その表情は温和で若々しく２０代後半、いや２０代半ばでも十分通じるだろう。だがその温和な表情の裏に冷徹な刃を秘めていた。

彼はよく王子の代理として数々の交渉に当たってきたが、当初は当たり障りの無い対応を続け、相手のペースで話が進んでいると思わせながらいつの間にか自分に有利な様に交渉を誘導する。又は最後の最後で相手の喉下に刃を突きつけるかのような逆転をしてみせる。その様な交渉が彼の得意技だった。

まもなく王子より僅かばかり背が低いサントリクィドがやって来ると、彼は、自身を若く見せている一因である、肩まで伸びた真っ直ぐな黒髪の頭を下げ一礼した。

「カーサス伯爵の元へと向い伯爵の人となりを観察せよ。そして可能であれば領地の交渉も行なえ。長期的に見れば領地の権利を放棄した方が身の為だとな」

サントリクィドは顔を僅かに上げ、王子を見上げながら問いかけた。

「伯爵が領地の放棄について代償を求めればいかが致しましょうか？」

「放棄する領地に見合う額の金銭を提示せよ。代替地を与えるなどと言質を与えればまた面倒な事になりかねんからな。もし他の条件を提示してきたなら一度こちらに連絡をよこせ」

「承知いたしました」

サントリクィドは僅かに上げていた頭を再度下げ王子に一礼をする。そして王子の執務室を辞すると、早速カルデイ帝国内のカーサス伯爵領へと向かったのだった。

第13話：寵姫（2）

サルヴァ王子はその夜、またもや後宮へと足を運んだ。
特に淫乱の気がない王子でも、若く鍛えられた身体は戦が無い時は力を持て余し、つい後宮へと向かう回数は増える。

王子は1人後宮の奥へと通じる廊下を進んだ。後宮の女達にも準備がある為、寵姫の部屋を訪問する前には後宮を管理する文官に命じて訪問を伝えさせるが、女の部屋に行くのに案内など不要である。むしろ煩わしいだけだ。

後宮は奥へ行くほど身分が高く王子の寵愛の篤い寵姫の部屋が置かれている。アリシアの部屋は当然一番手前にあった。

王子はお気に入りの寵姫の元へと向かう途中にアリシアの部屋の前で足を止めた。意図して止めたのではなく、つい止まってしまったのだ。

王子はほとんど無意識に自分の右の掌を見つめた。その手にアリシアの衣服の破片は無いが、王子の脳裏にあの時の事がまざまざと浮かんだ。自分の存在が矮小に感じられたあの時の光景がである。

王子は右の掌を強く握ると、舌打ちをしその場から離れた。まるで女教師に罪を隠す生徒の様に、と言えば王子は屈辱を感じたであろうが、王子の歩みは確かに足早というにも早すぎた。そうまるで何かから逃げるかの様に。

まもなく王子はセレーナという寵姫の部屋の扉をくぐった。

セレーナは王子の後宮に入って2年になる21歳の女性だった。胸まである金髪は緩やかに広がりながらウェーブする様に整えられ、それがいっそう彼女を華やかに見せた。そして青い瞳を嬉しげに輝かせている。

「サルヴァ殿下。良くぞいらっしゃいました」

セレーナは微笑みながら王子を出迎えた。アリシアの様に寝具の縁に座ったまま出迎えるのではなく、立って王子を出迎えるセレーナに王子は満足げに頷く。

「何かお飲み物は如何で御座いましょう?」

王子が葡萄酒を頼むとセレーナは一旦奥に下がった、かと思うとすぐに葡萄酒のビンとグラスが乗った盆を持って戻ってきた。王子の求めにすぐに答える為、予め何種類もの酒を奥に用意していたらしい。アリシアと違いなんと行き届いた女なのだろうか。

セレーナは王子を愛していた。望んで後宮に入った訳ではない。王子に取り入ろうとした公爵である父親に、三女だった彼女が差し出されたのだが、彼女はすぐにサルヴァ王子に恋にした。

サルヴァ王子はその身分を差し引いたとしても、鍛え上げられた肉体と長年のカルデイとの戦いに終止符を打った智謀を生み出した知性。そしてそれに裏付けられた自信に満ちた立ち振る舞いは、若い娘を虜にするには十分だったのである。もっとも男の趣味の悪いアリシアにしてみれば、その自信に満ちたサルヴァ王子の立ち振る舞いは「偉そう」でしか無かったのであるが。

王子は葡萄酒を満たした杯に一口つけて味わうと、残りを一気に

干した。そしてセレーナを抱き寄せる。王子の逞しい胸に抱かれたセレーナは両手を王子の胸に当て、その逞しい胸の厚みに身体が火照るのを感じた。

王子がセレーナの首筋に唇を這わせると滑らかな感触と微かな苦味が舌に残る。だがその苦味の代わりに甘い香りが王子の鼻腔をくすぐる。セレーナは王子を迎えるにあたって自らの身体に香水を振り掛けていたのだ。それに比べてアリシアの肌はろくに手入れもされておらず微かにざらつき、香水もつけない。興醒めも良いところだった。

王子はセレーナをさらに抱き寄せると、セレーナの膝の裏に右手を回して軽々と彼女を抱え上げた。彼女の体重など感じていないかの様な王子のよどみない動きに、セレーナの心はさらに高鳴った。この逞しい男に自分は今から存分に抱かれるのである。

王子はやや乱暴げにセレーナを寝具の上に投げ出したが、その乱暴さすらセレーナには好ましい。恥かしげに王子から顔を背けていたセレーナがちらりと王子に視線をかすめさせると、王子はその一瞬を逃さずセレーナの視線に込められた期待の色に満足した。

恥じらいながらも男を求めるセレーナの姿は、羞恥心などあるのか無いのかも分からないアリシアなどと比べ物にならないほど、王子の情欲を誘う。

王子が乱暴にセレーナの衣服を剥ぎ取ろうとしながら、彼女の身体に手と舌を這わせると、セレーナは敏感に反応しながら身体をくねらせ、王子が衣服を剥ぎ取るのを絶妙に助ける。

一糸纏わぬ姿となったセレーナに王子は覆いかぶさった。その動

きにセレーナも王子の背に手を這わせ汗ばむ肌を撫でた。

アリシアとは違い反応の良いセレーナは王子を精神的にも楽しませる。その肌もアリシアとは比べ物にならず滑らかで、その声はアリシアと比べ物にならないほど美しい。そしてアリシアとは違い……。

不意に王子の背に回されていたセレーナの手が王子の胸に移動し、王子の身体を強く押した。

セレーナの上に覆いかぶさっていた王子は、動きを中断され怪訝げに口を開いた。

「どうしたのだ？」

セレーナも自分の行動に驚いた様に口に手を当てた。彼女自身にとってもほとんど無意識の行動だったのである。

「い……いえ。何でも御座いません」

中断されて少し興醒めした王子だったが、再開するとその事はすぐに忘れてまたセレーナの身体を存分に楽しんだ。

そして王子はセレーナの横で眠りについたが、心地よい疲労に身を任せ深い眠りについた王子は、その傍らで彼女が洩らす嗚咽には気付かないのだった。

翌朝、王子が部屋から立ち去るとセレーナはすぐに侍女を呼寄せた。

「最近、確かアリシア様という方が後宮に入ったみたいね」

「はい。その様に聞いております」

セレーナは王子が自分を抱きながらも、他の女の事を考えていたのを敏感に察した。なぜ感じられたのかと言えばそれは彼女にも分からない。それは彼女の知性がもたらしたものではなく、王子を愛しているがゆえに王子のいつもとの違いを敏感に女の本能が感じ取ったのだ。だがそれだけに彼女は確信した。

セレーナとて時にはサルヴァ王子が他の寵姫の元へと通うのは仕方が無いと考えていた。それでも自分の元へと来た時は自分の事だけを愛してくれている。それを感じられていたから我慢も出来ていた。それが自分を抱きながら他の女の事を考えるとは……。

今までに無かった事が起こったのなら、今まで後宮に居なかった者が原因だろう。これは彼女の知性が告げた。最近後宮に入った女性と言えばアリシアしか居ないのである。

まず初めにセレーナの心を占めたのは怒りでもなく屈辱でもない。自分以外の女を思い浮かべながら抱かれているという悲しみだった。だがひとしきり涙を流した後、湧き上がったのは尊厳を傷つけられたという屈辱であり、怒りだった。

しかしセレーナはサルヴァ王子を愛していた。だから王子を憎む事は出来ない。憎むのなら王子が自分を抱きながら思い浮かべたという女性を憎むべきだろう。理不尽な様だがセレーナの心に勤める裁判官は、彼女の精神のバランスを保つ為にそう判決を下した。

王子を愛しながら王子を憎む。それには彼女の精神が持たないと、それをしてしまってはセレーナの心が壊れると、そう判断されたがゆえアリシアへと憎悪の矛先が向けられたのだった。

「どの様な女性なの？」

「何でも、かなり身分の低い女性と聞いております」

「かなり低いとは……その方のお父上が男爵とかなのかしら？」

男爵は爵位の中で最下位に位置する。公爵を父に持つセレーナにしてみればかなり低い身分と聞けば、真っ先に男爵が思い浮かぶ。

「いえ、それが……爵位すら持たぬ下級貴族の……さらに遠縁の者とか」

セレーナは不審げに眉をひそめた。勿論彼女も爵位をもたぬ貴族の存在を知らぬ訳ではない。しかし、それでは……。

「どの様なつてで、この後宮に入る事が出来たというの？」

王子は多淫では無い。後宮に女性を入れるのも断りきれない場合に限って迎え入れているのはセレーナも分かっていた。それだけに彼女も自分が後宮に入ってからも時おり新たな寵姫が後宮に入るのは仕方が無いと諦めもついていたのである。

しかし、爵位を持たぬ下級貴族の願いをどうして王子は断りきれなかったのだろう？

侍女は言い難そうにセレーナの顔を探る様に恐る恐る口を開く。

「それが……、サルヴァ殿下から望んで後宮に迎えられたとか……」

侍女の言葉に、セレーナは口に手をあて目を見開いて驚きの表情を見せた。信じられなかった。王子から求められた女性が居るというの？

セレーナの手が小刻みに震える。それをもたらした感情は、怒りであり、そして恐怖だった。今までサルヴァ王子に尽くして来た自分を差し置いて、つい最近現れた身分の低い娘が、自分から王子を奪い取ろうとする怒り、そして王子を失ってしまうという恐怖。

「そのアリシアという女性の事を、よく調べてちょうだい……」

教養と節度からアリシアの事を「その女」と呼ぶ事をセレーナはかろうじて抑制し、侍女に命じた。

ただただサルヴァ王子を愛し、王子に抱かれる事だけで幸せを感じ心を満たしていた女性が、その平穏な心の楽園から一歩外へと足を踏み出した瞬間だった。

第１４：誓い

ミュエル・ハッシュは一命を取り留めた。

手首を切れば命を絶てる。そうとだけ思っていた少女の左手首の傷は、傷口も小さくすぐに血が凝固してその流れを止め、貧血を起こしただけで命に別状は無かったのだ。

再度自殺しないようにと看護婦の監視の中寝かされていたミュエルは、手首を切った四日後にディアスの訪問を受けた。

バルバール軍総司令たるディアスもどう声をかけたものかと思いあぐねた。自殺を試みた者に「もう良くなったようだね」「具合はどうだ？」などと声をかけるのもおかしいだろう。ディアスは「入るよ」とだけ言うとミュエルの部屋の扉をくぐった。

そして看護婦を遠ざけてミュエルとふたりきりになる。

ミュエルは寝具から上体を起こしながらも、シーツを強く握り俯いたままディアスの事を見ようとすらしない。

ディアスは重い雰囲気の中口を開いた。彼にとっても気が進まない事であるが、逃げる訳にも行かない。彼がすべき話なのだ。ディアスはミュエルの寝具の横にある椅子に座ると口を開いた。

「どうして自殺なんてしたんだ？」

だがやはりミュエルはディアスの言葉に口を噤み沈黙が訪れる。

ディアスは辛抱強くミュエルに声をかけ続けた。諦めて帰るという事が許される状況ではないのである。

「ケネスからも聞いたよ。ディアス家の妻として見て欲しいと」

だがディアスは３５歳であり、ミュエルは１２歳である。実際無理がある。ディアスはそう思っていたが、今はそれを言う時ではない。今はミュエルからの話を聞く時なのだ。

「しかし、ミュエルが本当に私の妻になりたいか、私にも分からなかったんだ」

ディアスの言葉にミュエルがピクリと反応した。そして強く握っていたシーツをさらに強く握る。そして頭を振り乱し叫んだ。

「知りません……。そんな事私にだって分かりません！　でも、私はディアス様の妻になるのだと言われてこの屋敷に来たのです！　だからがんばったのに！」

１２歳でも恋を知っている少女も居る。だがミュエルは同年代の少女と比べても奥手だった。恋も知らない１２歳の少女が、人の妻になるのだと言われて３５歳の男の家に連れて来られたのだ。ミュエルの戸惑いは計り知れない。

だがそれでも大好きなお父様とお母様の事を思い、その言葉に従った。しかしミュエルの心は限界にまで来ていた。いや、限界を超えた故に自らの命を絶とうとしたのである。

夫となる男の言う事に従い一生懸命がんばるミュエルだったが、その男はいっこうに自分を妻として見ようとはしない。何の成果も

もたらさない努力にミュエルは疲れ果てていたのだ。

「ディアス様はそんなにも私の事がお嫌いなのですか……。だったらお家に帰し……」

だがここまで言ったところでミュエルは大きく首を振った。

「いえ……お家に帰ればお父様とお母様が……」

ディアスの妻となるべく家をでたミュエルが家に戻ってはお父様とお母様を困らせる。それは嫌だった。

ミュエルはその小さな両の手で小さな顔を覆うと嗚咽を洩らした。その手の隙間から止め処なく涙が伝う。

ディアスはその姿に胸が痛んだ。

ディアスはこの様にして泣く12歳の少女を見たことがなかった。12歳の少女といえば、笑うときは大きな声で笑うかクスクスと笑い。泣く時はえーんえーんと泣くものだと、そう思っていたのである。

だがミュエルは悲しみに言葉にならない嗚咽を洩らし、涙を流している。あの花の様に笑う素直で優しい少女がである。

バルバール軍総司令官フィン・ディアスは自らを智謀に優れた男と自惚れていた。勿論他に類を見ないとまでは言わない。だが人より頭一つ優れていなくて、バルバール軍の総司令官は務まらず、コスティラに大勝する事も出来ないだろう。

だが……。自分がいかに愚かであるか認めない訳には行かなかった。叔父ゲイナーに対するただの嫌がらせだけの言葉を発端に、愚かな判断をし続け、恋も知らない１２歳の少女に死を望ませるほど追い詰めてしまったのだ。

だが実際、今更ミュエルをハッシュ家に戻せない理由があった。ディアスの妻としてディアス邸にやって来たミュエルは、ディアスやミュエル本人がいかに否定しようとすでにディアスの「お手つき」と見られるだろう。

そうなれば、たとえ今からミュエルがハッシュ家に戻っても将来の結婚に障害となる。その意味もあってディアスがミュエルの事をその対象と見ていないと知るケネスを、ミュエルの相手に出来ないかと考えたのだ。

だがその愚かな判断がミュエルを、１２歳の純粋な少女の心を、粉々に打ち砕いたのだ。

そして結局ディアスは、ミュエルだけではなくケネスの心すら玩んだ事になるのだ。今からディアスがしようと考えている事を実行すれば。

ディアスは椅子から立ち上がるとすぐにその場に跪いた。そして両手を床に付けて頭を下げ額をも床につける。

「すまなかった……」

顔を手で覆っていたミュエルは一瞬ディアスを一瞥したが、すぐにまた顔を背けて手はシーツを握り締め視線はその手元へと移った。

３５歳の一国の軍総司令が土下座し頭を下げたのである。１２歳の少女の悩みなどいかほどの事もなく許すべきなのだ。他の者が見ればそう思っただろう。

しかし、死を望むほど傷付けられた少女が頭を下げられた程度でそれを許すはずもなく、死を選ばせるほど追い詰めた男もこの程度でそれが許されるとは思ってはいなかった。

ディアスが土下座をしたのはそうせずには居られなかったからに過ぎず、言うなれば自己満足に過ぎない。そしてそれはディアス自身が一番分かっていた。

ディアスがしなければならない事はこれからだった。

ディアスは起き上がるとミュエルの小さな顔をその両の手で優しく包みこちらを向かせた。ミュエルも抵抗はしない。

そして顔をこちらに向かせるとその手を離した。ミュエルの行動を束縛しない。ミュエルにも最後の選択を自分の意思で選んで欲しかった。

ディアスの顔がゆっくりとミュエルの小さな顔へと近づく。ミュエルが拒絶するならばミュエルを拘束する何者もない。顔を背けるだろう。

だがミュエルは微動だにせず、１２歳の少女の唇は３５歳の男の唇を迎え入れたのだった。その情欲をまったく感じさせない触れるだけの、だが確かな接吻はしばらく続いた。

ディアスはミュエルから唇を離すと、美しい少女へと誓った。

「お前は私の妻だ」

結婚の準備が進められる事となった。

とはいえバルバール軍総司令官の結婚式である。招待客も多い。招待客の都合も考えればそうすぐには出来ない。遠くの者に招待状を出すだけでも数日掛かるのである。そしてそうなれば年末も近くなる。

年末年始はみなも忙しく色々と都合があろう。その時期に招待客を呼んで結婚式を挙げるのはあまりにも非常識である。その為、式は年が明けた大陸歴６２９年の２月と決まった。

ディアスには大勢の招待客を呼んでの結婚式など煩わしだけなのだが、バルバール軍総司令官たる者に、その様なわがままは許されないのだった。

ミュエルの傷も癒え落ち着くと、ミュエルは部屋を引き払った。ディアスの部屋に移りディアスと一緒の部屋で寝起きする為だ。ミュエルはディアスの妻なのだから当然の事である。

そしてふたりは一つの寝具で並んで寝た。夫と妻が別の寝具で寝る方が不自然と言うものだ。勿論、いくら不自然でも夜の営みはないのだが。

この様な事態になり、ディアスはケネスと改めて話した。

「お前にも色々とすまないことをした」

頭を下げる軍総司令に、今だ一兵士にすらなっていない軍人志望の青年は首を振った。

「いえ。将軍が悪いわけでは有りません。僕がミュエルに振られた。それだけです。僕がちゃんとミュエルの事を振り向かせていれればそれで良かったのに、それが出来なかったんですから」

ディアスがついケネスの顔を見直すと、ケネスは苦笑を浮かべていた。

今回の事がケネスにも一皮剥けるさせたのか、今までディアスがケネスの事を見損なっていたのか、ディアスにはケネスが自分の記憶にある姿より一回り大きく感じられたのである。

ディアスは口元に微かに笑みを浮かべた。

「次の戦いには、お前も出陣するがいい」

だが、遂に初陣という言葉にケネスが喜び勇むと思っていたディアスに、ケネスは微かに不満げな視線を投げかけた。

「もしかして今回の詫びにって言う訳ではないですよね？」

ケネスも早く初陣を飾りたいとは思ってはいたが、お詫びの印に出陣させて貰うとなると不満も残る。自分の力が認められて出陣したいものだ。

ケネスの様子に、ディアスは口元の笑みを少し強くした。

「いや、私の留守の間、私の妻に気があった男と妻を、一つ屋根の下に残すのが危険だからだ」

面食らった表情のケネスに、ディアスは大きく笑ったのだった。

第１５：伯爵領

サルヴァ王子から指令を受けてカルディイへと入国したサントリクィドは早速カーサス伯爵の館へと向かった。そして訪問を告げるとすぐに屋敷の中へと通された。

現在カルディイ帝国で、サルヴァ王子の使いと名乗る者に目通りを許さない貴族など居ないのである。

「よくおいで下さいました」

伯爵はサントリクィドへソファに座る様に促すと自身もテーブルを挟んで対面するソファへとその身体を沈めた。

サントリクィドはソファに座りながら伯爵を観察する。

顔はサントリクィドよりも老けているがこれは彼が童顔の為である。実際は同じ年頃と言った所だろうか。だがその黒い髪は年の割りに白髪が多く窓から漏れる日の光に照らされ時おり銀色に輝いた。

表情は引き締まり愚鈍な気配は感じられない。どうやら目先の欲だけで侯爵を見捨てた訳ではなさそうだ。そう思ったサントリクィドは気を引き締める。

サントリクィドが伯爵を観察していた様に、伯爵もサントリクィドを観察していたがおもむろに口を開く。

「それでサルヴァ殿下は私にどの様なご用件で御座いましょうか？コルデーロ公爵に不当に占拠されている我が領地の権利を認めて

下さる、と言うならば嬉しい限りなのですが」

「いえ。それが……」

サントリクィドはあえて言葉を濁す。交渉相手の主張を引き出す為の彼の常套手段である。はっきりとこちらの主張は口にせず、相手の言い分のみを引き出すのである。

「出来ないと？　私は中立を守ったのですぞ？　中立の者の領地を占領するなど無法者のする事ではないですか。それが許されるということはカルデイ貴族の領地はすべて切り取り放題という訳ですかな？」

伯爵の言い分は確かに正しい。ハシント侯爵に組しなかった貴族の領地も占領して良いのなら、すべての貴族の領地を占領して良い事になるのである。

「決してそういう訳では……」

「ならば一国も早くコルデーロ公爵に我が領地から軍勢を撤退させる様に通達して下さい。それですむ話ではないですか」

「しかし何分コルデーロ公爵様はあくまで公国の公主であり、ランリエルが命令できる立場では……」

カーサス伯爵は皮肉な笑みを湛えた。そしてその笑みの意味はサントリクィドにもよく分かる。ハシント侯爵の討伐を公爵に命じておきながら何を言っているのか！　と言う所だろう。

だが相手の皮肉に一々反応していては交渉などやっていられない

のである。サントリクィドは構えてその皮肉な笑みに気付かないふりをして再度口を開く。どうやら伯爵の主張は終ったようなので、彼はこちらのカードをちらりと見せる事にしたのだ。

「命令は出来ないまでも、公爵様には自重して頂くようにお願いはしております。ですがそれでも公爵様は軍勢を撤退させぬので御座います」

つまり公爵が軍勢を引き上げる事は無いので領地は諦めろ。と言う事である。

「そうは言われても、簡単に領地を諦められるものではありません。ましてや正当性はこちらにあるのですから」

伯爵のもっともな言い分にサントリクィドはさらにカードをちらりと見せる。

「はい。伯爵の言い分はもっともです。サルヴァ殿下も伯爵が不憫であると心を痛めておいでです」

「そのお心には感謝致しますが、とはいえ公爵の軍勢を引き上げさせて頂ける訳では無いのでしょ？」

「はい。サルヴァ殿下もそればかりは難しいと……」

サントリクィドの言葉に、それではまったく意味が無いではないか。という様に、伯爵は大きくため息を付いた。

落胆した表情の伯爵にサントリクィドは内心にんまりとし、カードをめくって見せる事にした。落胆したところに手を差し伸べてや

るのが効果的というものである。

「ですがサルヴァ殿下も何かしらのお力になりたいと、公爵が占領している伯爵の領地に対して、何らかの保障をお考えとの事でございます」

サントリクィドの言葉に伯爵が片眉を上げ、探る様な視線を彼に投げかけた。

「それはありがたいお話ですが、どの様な保障をお考え頂けておるのですかな？」

サルヴァ王子からは相応の金銭とは聞いているが、伯爵の要求が他に有れば報告する様にも言われている。サントリクィドはここは構えて伯爵の要求を聞いてみる事にした。

「伯爵こそ、どの様な保障ならばご満足頂けますでしょうか？」

この時伯爵の顔に微かに笑みが浮かんだ。その笑みはすぐに消えたが、サントリクィドは見逃さなかった。そして背筋が凍りつく。

その笑みはサントリクィドがよく知っている笑みだった。彼はその笑みを実際に見た事は無かったが、その笑みがどの様な時に作られる笑みかを肌で実感していたのでる。

カーサス伯爵からの要求を携えサントリクィドはランリエルと急いだ。サルヴァ王子からは伯爵が金銭以外を要求すれば連絡を寄越せと言われ、彼自身に戻って来いとまでは言われてはいなかったが、構えてサントリクィドは自身でサルヴァ王子と話す必要を感じたのである。

カーサス伯爵が浮かばせた笑み。それはサントリクィドが交渉相手に対し「引っ掛けてやった」時に浮かべる笑みと同じものだったのである。

サントリクィドはランリエル王都フォルキアに戻ると、早速サルヴァ王子に面会を求め、王子もすぐに目通りを許す。

ふたりはサルヴァ王子の執務室で顔を合わせた。

「おまえ自身が戻ってくるとは、伯爵の要求とはそれほど意外なものだったのか？」

早速本題に入った王子に、サントリクィドは俯き加減に答えた。

「はい。正直私には思いもよらぬ要求で御座いました」

サントリクィドの言葉に王子は興味深げな笑みを浮かべた。自分の腹心であるサントリクィドの予想を超える要求とはどの様なものだろうか。

「それでその要求とは？」

サントリクィドは顔をあげ王子に目を合わせて答える。

「カーサス伯爵は、ランリエルに亡命を希望するとの事で御座います」

「亡命だと！？」

確かに伯爵の要求は予想できないものだった。なぜなら領地が惜しくて伯爵は公爵に抗議していたのである。亡命してはその領地どころか本来の自身の領地すら手放す事になるではないか。

「まさか、公爵と敵対し公爵から命を狙われると脅えてランリエルに逃げ込もうというのではあるまいな？　自身から公爵に敵対しておいてその様な事では、拍子抜けも良いところではないか」

だがサントリクィドは王子の問いに首を振った。

「伯爵は侯爵から譲り受けた領地はともかく、自領まで手放す気は御座いません。自領を保有したままランリエルに亡命したいと申しております」

「それは随分都合の良い話だな。自分の身は安全なランリエルに置き、領地は遠隔統治すると言うのか」

あまりの都合の良い伯爵の言い分に、サルヴァ王子の顔は不快げに歪む。とはいえ心情的にはともかくその程度の要求なら飲んでやっても良いだろう。腰抜けと笑われるのはどうせ伯爵なのである。

だがサントリクィドは再度首を振ったのである。

「いえ。伯爵は自領に留まるとの事です」

「なに？　それはどういう事だ？」

亡命とは政治的・思想的な問題で自国の外へ逃げる時に使われる言葉である。カルデイ国内に留まるなら亡命とは言わない。

さすがにサルヴァ王子にも、サントリクィドが伝える伯爵の要求は理解しかねた。これでは要求と行動がちぐはぐではないか。

サントリクィドは大きく息を吐くと、次にカーサス伯爵の要求を一気に吐き出した。

「伯爵は、自分の領地をランリエル領に加えて頂きたいと申しているのです。そして、カルデイからランリエルに亡命した自分はランリエル領である自領に留まるのだと」

なんだと！　と伯爵の要求に一瞬息を飲んだ王子だったが、すぐにその意図を察した。

こいつは……先手を打ってきたと言う事か。

現在、ランリエル国内にはバルバール侵攻を中止し、カルデイの独立国や貴族から領地を取り上げろと言う声が大きくなっている。

カルデイの統治を懸念するサルヴァ王子は、その声を統治に支障がでるものとして押えようと考えているが、まだそれは実行されていないし、そもそも王子とて将来的にはカルデイの独立国や貴族から領地を取り上げる事を計画しているのである。

だがカーサス伯爵は、その前にランリエル内での自分の立場を強化する事を目論んだのである。

亡命しランリエル貴族の一員ともなれば、先祖代々のランリエル貴族とは差があるものの、カルデイ内の独立国の領主や、ランリエルに味方するカルデイ貴族などといった中途半端な者達よりはよっ

ぽど立場は強い。

ランリエルによるカルデイの統治が強まるその時、カーサス伯爵は支配者の列に並び生き残る心算なのだ。

カルデイにも、なかなか面白い奴が居るではないか。サルヴァ王子の顔に不敵な笑みが浮かんだ。

「いいだろう。カーサス伯爵の要求を飲もう」

王子が笑みを浮かべながら命じると、サントリクィドは「かしこまりました」と一礼早速カルデイに向かうべく、執務室を後にしようと王子に背を向けた。

だがサントリクィドの背に王子が声をかける。

「伯爵に一度、ランリエルにお招きしたいと伝えてくれ。伯爵がランリエル貴族の一員となった祝いの宴を開かせて頂きたいとな。伯爵もランリエル貴族となるならばランリエルの貴族達に顔を売っておくのも悪くはあるまい」

サントリクィドは王子に向き直るとまたも「かしこまりました」と返答し、またも王子から背を向け、今度こそ執務室を出てカルデイへと向かったのだった。

第１６：武門の名流

この日ケネスは、ディアスの従者としてバルバール王都チェルタにあるディアスの執務室の横にある控え室にいた。

次の戦いでケネスに初陣を命じたディアスだったが、ケネスに一兵卒として出陣させる心算はない。これは贔屓というより、現実問題として体質的に弱いケネスには一兵卒として戦う能力が無い為である。

だが今まで何の実績も無い者を行き成り参謀の一員として迎えては、それこそ贔屓と言うものだ。ならばケネスを戦場に連れて行くにはディアスの従者として連れて行くしか無いのだった。

そしてディアスの従者として戦場に出るなら、今から従者として仕える方が良いだろうと言う事になったのである。

ディアス邸を出る時、ディアスとケネスにミュエルがにこやかに「いってらっしゃいませ」と挨拶した。

元気になったミュエルに、良かったという思いと、微かな胸の痛みを感じるケネスだった。

ミュエルの事はすっぱりと諦めたケネスではあるが、それはあくまで理性との折り合いの話であって、感情を説き伏せるのにはまだ時間が掛かりそうだ。

ディアスはケネスの表情からその複雑な心境を微かに感じ取ったが、あえて何も口にはしない。この様な問題は時にその解決を任せ

るべきだろう。

従者とて、いつも仕える者の傍で直立不動で立っているというものではない。そんな事をされては主人の方も気が散るというものだ。普段は執務室の隣りにある控えの間でその名の通り控えており、主人に呼ばれた時に飛んでいくのである。

そして主人に来客が来た時に取り次ぐのもその役目である。取次ぎ用の小部屋の扉が軽く叩かれると、ケネスは飛び上がり急いでその扉へと向かった。

ケネスが扉を開けるとそこにはバルバール軍の将軍の1人であるシルヴェンが立っていた。

こげ茶の波打った毛を肩まで伸ばし、瞳は黒い。体格はディアスよりも縦と横に一回り大きかったが、その身体は逞しさよりたるんだ印象を与えた。年齢はまだ３０歳にもなっていないはずだが、蓄えられた口ひげにより、ディアスよりも老けて見えた。

ケネスはシルヴェンが嫌いだった。シルヴェンがディアスの悪い噂を有る事無い事撒き散らしていると言われているからである。

ディアスはバルバール王国の武門の名流の当主であり現総司令である。だが武門の名流はディアス家のみという訳ではなく、血筋だけで言えばディアス家に匹敵する。あるいは凌駕する名家も存在するのだった。

その中でディアスが現総司令なのは実力で勝ち取ったものであるが、他の武門の名流の血筋の者の中にはそれを認められない者の多数居たのである。

そしてシルヴェンはその筆頭と言ってよい男だった。その血筋から武門の名流の筆頭といわれ、ディアスに嫉妬する事においても筆頭といわれる男なのである。

だが、それでもケネスの判断でディアスに取り次がないわけにも行かない。ケネスはシルヴェンに「しばらくお待ち下さい」と頭を下げディアスの元へと向かった。

「シルヴェン将軍が起こしになっております。お会いになられますか？」

ケネスは内心、断われー。断われー。と呪文の様に唱えていたが、ディアスは一瞬嫌な顔をしながらも通す様にケネスに言いつけた。ディアスにとっても会いたい相手ではないが、軍の総司令として断わる明確な理由も無く、訪ねてきた将軍を追い返すわけにも行かないのである。

ケネスに案内されて執務室に通されたシルヴェンは、執務を行なう為の重厚な机の椅子に座るディアスを見下ろした。

「私にも椅子ぐらい勧めて欲しいものですな」

血筋はともかく軍での立場としては、一将軍でしかないシルヴェンが総司令であるディアスに尊大に要求した。

ディアスが意地悪でシルヴェンに椅子を勧めなかったのかと言えば、意地悪で椅子を勧めなかったのであるが、シルヴェンはそうとは思わず、たんに気の利かない奴と思っただけの様だった。

聖人君主でないディアスは、自分に対し明らかに敵意を持っている人間に対して、親切にしてやる必要を感じなかったのである。

だが、ここで「お前に勧める椅子など無い！」と口論するのも馬鹿馬鹿しい。ケネスに命じて椅子を持ってこさせてシルヴェンに勧めた。

シルヴェンはケネスが持ってきた椅子に座ると「硬い椅子ですな」とその椅子に愚痴を洩らしディアスを睨みつけた。

シルヴェンには、ディアス家如きの当主がなぜ総司令官の重責を担っているのか！　と理解できない事だった。

だいたいディアスなど自らは戦おうともしない、小手先の小細工が得意なだけの男ではないか！　自分ならば攻撃する時は先陣を切って飛び出し敵を突き崩し、軍勢を手足の様に操り敵を分断し殲滅して見せるだろう。シルヴェンは自信満々にそう思っていたが、残念ながらシルヴェン以外の者はそう思わず、シルヴェンの軍部での評価は低い。

勇猛果敢に突撃すれば勝てるのであれば誰も苦労はしないし、兵学という学問自体も存在しない。そして現実は、軍勢を手足の様に操るなど不可能なのだ。

万の軍勢を率いて敵に向かって突撃している時に、打ち合わせに無い方向転換を右に左にと2回も行なえば、隊列は散々に崩れてしまうのである。そして一旦崩れた隊列はそう簡単には戻らない。

それが出来るとすれば「俺について来い！」の命令で済む、小勢の集団ぐらいなものなのである。

もしシルヴェンに指揮を任せれば、バルバール軍は敵軍の前で勝手に奇妙にのた打ち回った挙句に隊列は崩壊し、敵のかっこうの餌食になるのは目に見えていた。

ディアスは、自分を睨みつけるだけで本題に入ろうとしないシルヴェンに、椅子の愚痴を言いに来たわけでもあるまいに、と思いながら口を開いた。

「それで今日はどの様な用件で来たんだ?」

シルヴェンがバルバール一の武門の名流であろうがディアスにとっては部下の1人でしかない。敬語を使う必要を感じない。

だがシルヴェンはそうは思わず、ディアス家の当主如きが、シルヴェン家の当主に無礼な。と不快げに顔を歪めた。

上官にすら敬意を表せないなど軍人以前に人間としてダメなのだが、そのシルヴェンが曲がりなりにも将軍を名乗っていられるのは、名流の血にものを言わせ山賊・野盗退治などのよっぽどでなければ負けないであろう相手に武勲を重ねた結果である。

コスティラ・ランリエルといった大国に挟まれたバルバールに血筋だけで出世できる余裕は無いはずであるが、それをやってのける辺り、シルヴェンの血筋がそれほどのものという事を表す。

だが実はその様に手配しているのはシルヴェン自身ではなく、その父だった。父は息子の能力を正確に見抜き息子が山賊・野盗程度にしか勝てないと分かっていたのだ。だがそれすらもシルヴェンには気に食わない。自分の父すら自分の能力を認めようとしないので

ある。

ずっと口を開かないシルヴェンに、ディアスは一瞬このまま放置すればどうなるだろうという誘惑にかられたが、すぐに考え直した。シルヴェンに付き合って執務を滞らすのは明らかに時間の無駄である。うんざりしながらも、やむを得ず再度口を開く。

「わざわざ訪ねてきたのだ。何の用も無いわけではないだろ？」

シルヴェンもさすがにここで口を開かねば、話が先に進まないと思ったのか口を開く。だがその口は下品な嘲笑に歪んでいた。

「なに。お祝いを述べに来たのですよ。私には理解出来ませんが、総司令殿が幼女を嫁にし閨を共にしていると聞きましてね。これでディアス家はすぐにでも跡取りが出来て万々歳でございましょう」

実際ディアスはミュエルと一緒の寝具で寝ているが、この場合の閨を共にとはそういう意味ではなく、ディアスがミュエルを性的に抱いているという意味を指す。

ディアスは、自分がミュエルを妻とするその事で、ミュエルを抱いていると思われるのは仕方が無いと考えていた。当然と言える。だが１２歳の少女をあえて「幼女」と言い表すその品性が気に食わない。

だがここでこの男と言い争う気は無い。言い争う価値もない男なのである。

「それはありがとう。では、用件がそれだけなら引き上げて貰えるかな？　仕事が溜まっているんだ」

ディアスが素っ気無く答えると、シルヴェンはディアスの反応の悪さに不機嫌な表情になった。まったく分かりやすい男である。だがシルヴェンは席を立とうとはせず、再度口を開いた。

「いえ実はそれとは別に用件がありましてね。なにやら次にはランリエルとの戦いがひかえているという話ではないですか。是非とも私もその戦いに出陣させて頂こうかと思いましてね」

人の口に戸は立てられないとは言うが、シルヴェンの様な者にまで次はランリエルと戦う事になるだろうという話が伝わったらしい。しかし、総司令に嫌味を言った後に抜け抜けと要求するとはずうずうしいにもほどがある。しかも、出陣させて欲しいではなく出陣させて「頂こう」なのである。

まったくバルバール一の名流の血筋がどれほどのものなのかとディアスは思う。だいたい現在の一般的な評価は、ミュエルのお父様がディアスをバルバール一の婿と評した様に、バルバールの軍事の名門と言えばディアス家なのだった。

武門の名流というものは実績がものを言う。シルヴェンがいうシルヴェン家こそがバルバール一の名門というのは過去の実績でしかないのである。それに対してディアスは現在実績を積み続け、しかもつい最近コスティラに対してかつて無い大勝利をもたらした。

名実共にディアス家がバルバール一の名門となる日も近いのである。ディアス自身は名門の血筋を鼻にかけ偉そうにする気は無いが、シルヴェンの様な輩に会うとつい対抗してしまう。その点ディアスも、子供っぽいところがあった。

ディアスはもうシルヴェンの相手はもううんざりだと、
「検討させて貰おう」
と言質を与えずにシルヴェンを追い返した。

「まったく嫌な奴ですね！」

シルヴェンが去った後、ケネスは不機嫌に声を荒げ、それに対してディアスは肩をすくめて答える。

「だが、ああいう奴も軍隊には大勢いる。時にはああいう奴が自分の上官になる事も有り得るんだ。軍人になるならその覚悟も必要だぞ」

ケネスはシルヴェンが自分の上官になった光景を思い浮かべて、心底嫌な表情をした。そのケネスを見てディアスが笑いかけた。

「どうした？　軍隊が嫌になったか？」

「いいえ！　そんな事ありません！」

慌てて首を振りながら答えるケネスに、ディアスはさらに大きく笑った。

だが数日後、ディアスの元へ、シルヴェンをディアスの幕僚の１人に加える様にと軍務大臣のエドヴァルドからの通達がもたらされた。幕僚の任命権はディアスにあるが、軍務大臣からの要請であればむげにも出来ない。

私が幕僚に加える心算が無いのを察して、父親にでも泣きついて大臣に手を回したか……。シルヴェンは普段自分の力を認めない、自身も好きではない父にやむを得ず泣きついたのだ。それだけにシルヴェンも今回の出陣には意気込んでいるのだと、ディアスに察せさせた。

シルヴェンの父は現軍務大臣の昔の上官だったのである。シルヴェンの父はすでに引退しているが軍隊という上下関係の厳しい世界では、引退した後もその精神的上下関係の束縛からは容易に抜け出せないのだった。

しかし、シルヴェンもこの知恵を軍事に回せていれば、多少なりともまともな武将になれるものを……。幕僚達を招集する定期的な軍儀で毎回シルヴェンと顔を合わせねばならないのかと、さすがのディアスも大きくため息をついた。

第１７：深奥の宴（１）

「今宵お招きしたカーサス伯爵をランリエル貴族として迎える事が出来、まことに喜ばしい限りである。カーサス伯爵はランリエルとカルデイの新しい関係の礎となろう」

サルヴァ王子は宣言し、杯を掲げた。他の者達もそれに倣う。みなの視線を受けた伯爵は礼儀正しく一礼した。

カーサス伯爵をカルデイから招いたサルヴァ王子が、歓迎の宴を催したのである。

現在ランリエルで国王を除けば最大の権力者であり、将来的には最大の権力者になる事が確実な王子の招きを断る貴族は皆無である。宴には多くのランリエル貴族が出席した。

だがサルヴァ王子の招きに応じながらも王子に反感を持つ者も居る。カルデイ支配の方針について、王子と意見が対立している者達である。

彼らにしてみればカルデイの領地などすべて取り上げて、ランリエル貴族に分配すべきなのだ。それでなくては何の為に数百年もカルデイと戦ってきたというのだ！

だがサルヴァ王子にとってはあまりにも馬鹿馬鹿しい言い分だった。

貴様達が数百年の寿命を持ちその数百年を戦ってきたわけでは無かろう。そして占領したならば全土を取り上げるなどという考えだ

からこそ、数百年もの間勝負が付かなかったのだ。欲をかけば全土どころか僅かも手に入らなくなるという事がどうして分からないのか！

だがこの様に声高に不満を叫ぶ貴族達についてサルヴァ王子は、ある意味潔いと関心もしていた。現在ランリエルで一番敵に回してはいけない王子に対し、真っ向から反対しているのはある意味いい度胸である。勿論あくまである意味であって、所詮度胸の使いどころを間違っているとしか言い様がない。

始末が置けないのは表面的には王子に従っているふりをしながら、内心不満を募らせている者達である。

不満を募らせるだけなら良いが、その様な者達の常として中には策謀によって王子の失脚を謀る者達も現れよう。その者達を炙り出す必要があった。

その為、今回の宴に先立ちサルヴァ王子はカーサス伯爵と面会していた。

王子の執務室で王子と顔を合わせたカーサス伯爵は丁寧に挨拶をし頭を下げた。

「私の要求を認めて下さり。ありがとう御座いました。また今宵は私の為に宴まで開いて頂けるとは、感謝のしようも御座いません」

カーサス伯爵の型通りの挨拶に、サルヴァ王子も

「私もカーサス伯爵をお招き出来嬉しく思う」

と無難に応じ、早速本題に入る。

「カーサス伯爵には是非ともやって頂きたい事がある」

前置きの無い正面からの王子の言葉に、伯爵は気を引き締め襟を正す。

「私にやって欲しい事で御座いますか？」

「ああ、ランリエルにも私の敵は居る。貴公にはその者達を炙り出して欲しい」

王子の言葉に、伯爵は少し俯き考える様なしぐさの後口を開く。

「炙り出す……と仰るからには、サルヴァ殿下への不満を声高に叫んでいる方々とは別の者……という事ですかな？」

サルヴァ王子の顔に笑みが浮かんだ。察しの良い男は嫌いではない。しかし炙り出すの一言でここまで洞察するとは、ランリエルの内情について伯爵は以前より情報を収集していたと言う事だろう。抜け目の無い男である。

「その通りだ。その手の者達にはすでに監視の者を付けている。もっともその様な者達がこそこそと裏で何かしているとも思えんがな」

「なるほど。すると私は誘蛾灯（ゆうがとう）と言った所でしょうか？」

王子の顔にまた笑みが浮かぶ。

「ああ。伯爵には真にカルデイとの友好を考えて近づく者も多いだろうが、その中に伯爵の落ち度を探そうとする輩も多数潜んでいるだろう。貴公を失脚させれば築きかけたランリエルとカルデイとの関

係も元の木阿弥だからな」

王子の言葉に、伯爵は軽く一礼した。

「かしこまりました。私に群がる者達の中から毒蛾を見つけ出し、殿下に御報告させて頂きましょう」

「ああ。よろしく頼む」

察しよく話の早いカーサス伯爵に、王子は満足げに頷く。だが、話はここで終らず伯爵は再度口を開いた。

「しかし、私を失脚させ様とする者達をあぶり出し、逆にその者達を失脚させるとしてどの様な容疑でそれを行なう御心算でしょうか？」

今まで神妙な顔で対応していた伯爵の表情が、探る様な目に変わる。

まさか、私と相打ちさせる気ではないでしょうな？　と言ったところだろう。

伯爵にしてみれば、その者達に自分を害させ殺害容疑で捕らえようなどというならば堪ったものではない。

王子はまた笑みを浮かべる。用心深い男を相手するにはこちらにも相応に緊張感を持って対処しなくてはならない。そしてこの様な緊張感は王子にとって心地良いものだった。

「私は手を尽くしてくれた者を遇する事を知っている男だぞ？　人材を使い棄てるなど、長期的に見れば自分の手足を切り捨てる様な

ものなのだからな」

「つまり私を長期にわたりこき使うお心算と？」

王子は苦笑した。

「はっきりという奴だ。だが、確かにその通りだな」

王子は伯爵にはっきりという奴、と言うが、王子の返答も随分はっきりとしたものである。つい伯爵の顔にも苦笑が浮かんだ。

「かしこまりました。では、長いお付き合いが出来る様、働かせて頂きましょう」

「うむ。それにこれは貴公にとっても悪い話ではなかろう。貴公を失脚させ様と企む者に対抗する名分を、貴公は得る事になるのだからな」

「確かに」

カーサス伯爵は、笑みを浮かべて頷いた。

形は臣従であるが実態は利害の一致した者同士の契約である。カーサス伯爵は深々と頭を下げ、こうして伯爵は王子の敵を炙り出すべく暗躍する事となったのである。

王子が催す宴には、後宮の寵姫達も顔を出す。

寵姫達は色とりどりの衣装を纏い、髪を美しく結い上げ宝石で身

を固め、珍しい鳥の羽で作られた少し大きめの扇を手に優雅に微笑している。

華やかに着飾った２３の蝶に男達はため息を洩らし、王子に羨望の眼差しを向ける。

自分の娘を差し出す貴族達も娘が王子の心を捕らえられなくては意味が無い。我が娘ならば！　と王子に差し出される者達はいずれも容姿自慢の美女ばかり。

その選りすぐりの美女達を王子は独り占めしているのである。男達が王子を羨ましがるのも無理は無い。

そして本来２４番目の蝶となるはずのアリシアは、１人その群れから離れて壁際に佇んでいた。

他の寵姫達はこの日の為、数日前から肌の手入れに励み、衣装を用意し、装飾品を購入して万全の体制で臨んでいるが、アリシアはいつもの衣装に毛が生えた程度の赤いドレスに申し訳程度に首を飾るネックレスのみである。

それとて、後宮を管轄する役人から、アリシアの装いがあまりにも地味という事で支給された物なのだ。

アリシアは小さくため息を付いた。このつまらない宴はいつまで続くのだろう。

宴に参加する貴族達は、時おりアリシアに奇異な目線を投げかける。みな華やかに着飾りにこやかに過ごしている中で、地味な服装の女が１人不機嫌そうに佇んでいるのである。華やかさとは別の意

味で目立っていたのだ。

そして、地味な女であるからこそ落しやすいだろう。適当に遊ぶには持って来いだ。そう考えたらしい冴えない貴族がアリシアに声をかけてきた。

「この様なところで佇んでおらず、私の相手をして頂けると嬉しいのですがな」

普段ならばその様な男など無視するアリシアも、一応は後宮の寵姫という事になっている。それなりの対応をする様に言いつけられていた。馬鹿馬鹿しい話だが後宮に入る事で年金を貰っている身では、最低限のいう事は聞かざるを得ない。

聞かずに済むならば、そもそもサルヴァ王子に抱かれてなどいないのである。もっともサルヴァ王子にいわせれば、それなら私に対しての口の聞き方にも気をつけろと言う所だろうが。

アリシアが一応相手をしてくれている事にその貴族はいい気になり、アリシアをダンスに誘った。

さすがにそれは溜まったものではない。しかしこの貴族はしつこそうだ。アリシアはやむを得ず、断りきれなかったときに言えと、後宮を管理する役人に言われていた台詞を繰り出した。

「わたくしは、サルヴァ殿下の寵姫で御座います。お相手するならば殿下のお許しを頂かなくてはなりません」

言葉の上だけとは言えサルヴァ王子様に助けを求める様で気に食わないが、この場合は仕方がない。そう考えたアリシアだったが、

残念ながらこの台詞は思った様には効果を発揮しなかった。

「貴女がサルヴァ殿下の寵姫ですって？」

貴族はそう言うと視線を移動させ２３人の着飾った蝶達を一瞥し、またアリシアに視線を戻した。その目には疑わしげな色と、僅かに嘲笑の色を湛えていた。

あの美しく着飾った貴婦人達と地味な貴女の何処が仲間だと言うのだ。とその目が語っている。

アリシアには予想外の屈辱だった。屈辱を感じながら発した言葉だったにもかかわらず、その言葉すら信用されなかったのだ。屈辱の上塗りである。

この屈辱を晴らす方法は簡単だ。にこやかに微笑み、

「それでは、サルヴァ殿下にお伺いしてまいりますね」

そう言ってサルヴァ王子様に近寄って行けば、この者は慌てふためくだろう。アリシアにはそれが分かっていたが、これはまさに王子様に助けを求める様で実行する気ならない。

だが意外なところから助け舟がやって来た。もっともこの船は表面的には味方の軍旗をはためかせてはいたが、船内には敵兵を充満させていた。

冴えない貴族からの視線を感じたセレーナがその方向に顔を向けアリシアの存在に気付いたのである。

第17：深奥の宴（2）

白いドレスに身を包み美しく髪を結ったセレーナは、アリシアに近づくと悠然と微笑み美しい唇から鈴の鳴る様な音色を発した。

装飾品もアリシアとは比べ物にならず胸元のネックレスは大きなルビーが赤く輝き、セレーナの白い肌をいっそう際立たせた。

「これはサルヴァ殿下の御寵愛あついアリシア様。この様な部屋の隅で如何なさったのです？　アリシア様がこの様なところに居ては、殿下が寂しがっておいででしょう」

サルヴァ王子がもっとも足繁くその元へと通っていると噂されるセレーナの言葉に、冴えない貴族は呆然と口を開け、そして次にアリシアを見つめた。

この地味な女は本当にサルヴァ王子の寵姫の1人だというのか？

しかもサルヴァ王子の御寵愛あついというセレーナの言葉も本当だとすれば、この女から王子への「宴でとても無礼な男が居たのですよ。懲らしめてやって下さいまし」という一言で、自分など瞬く間に貴族社会の日陰者に成り果てる。

サルヴァ王子がこの貴族の心を読めば「俺が、女の言葉に篭絡され他を罰する様な男と思うてか！」と激怒しただろうが、所詮人は自分の品性にそった考えしか出来ない。

貴族はその品性に相応しい、無用の恐怖に脅えたのだった。

貴族はセレーナとアリシアとに、あたふたと交互に顔を向けて傍

目にも滑稽に動揺していたが、セレーナは初めからアリシア以外、眼中になく、アリシアの意識もすでにセレーナへと向いていた。貴族にしてみればある意味幸いと言える。

貴族は二人が自分の方に関心がないのを幸いに、こそこそと逃げるように立ち去った。

だがアリシアとセレーナは、もはや貴族の事などお構いなしに対決を続けている。

セレーナとて態度に表しているほど内面は穏やかでは無い。本来セレーナは心優しい女性であり、他の女性に嫌味をいう様な事はないのだが、サルヴァ王子をアリシアに取られはしまいかと、焦燥にかられているのだった。

そしてセレーナも、貴族社会の、それも男を取り合っての女同士の戦いのあえて余裕を持った態度をとってみせる。という駆け引きを淑女の「たしなみ」として身に付けていたのだ。

だがその様な宮廷女性の駆け引きなど、アリシアにはその存在すら知らない事である。

寵姫の間にも格差がある。

それはサルヴァ王子からの寵愛の度合い、家柄などで決まるが、セレーナは現在そのもっとも上位に立つ女性である。アリシアは後宮を管理する役人から自分より上位の寵姫を立てる様にと言いつけられていた。

アリシアにしてみればその様な順位付けなどはあきれ返るばかりだった。

かかわらなければ立てる必要もないだろう、と他の寵姫と会わない様にしていたのだが、遂に顔を合わせてしまった。しかも一番の上位者とである。

しかもそのサルヴァ王子様の御寵愛一等賞の寵姫は、最下位の自分に対して「御寵愛あつい」などと「嫌味」を言っているのである。アリシアはセレーナに対して好意の持ちようがなかった。

アリシアも嫌味の一つも言い返したくなったが、なかなかよい言葉が思い浮かばない。

セレーナはアリシアから見ても女性として完璧だった。

その髪は黄金に輝き白い肌に映え、鼻筋から唇にかけての形も良い。青い瞳も美しかった。

自分とセレーナと比べれば男ならば誰もがセレーナを選ぶだろう。そうサルヴァ王子様も。

不意にアリシアの顔に苦笑が浮かんだ。よくよく考えれば、サルヴァ王子様との事で嫌味を言われてどうして自分が腹を立てねばならないのか。

アリシアは、セレーナの「御寵愛あつい」という嫌味に対して、心のそこからの本心を笑顔で吐露した。

「私などよりも、セレーナ様こそがサルヴァ殿下に相応しいのですから、その様な事を仰るものではありませんわ」

アリシアにしてみれば、セレーナに対抗する意思などまったくなく、自分に嫌味など言わずどうぞ王子様とお幸せに。という心算の言葉だった。

だがセレーナの、というよりアリシアを除いた寵姫達全員の、サルヴァ王子からの寵愛を独占したく無いわけが無いという価値観からしてみれば、アリシアの言葉は宣戦布告でしかなかった。

「貴女にこそ王子に相応しい」とは、何という痛烈な言葉だろう。この言葉に比べればセレーナの「御寵愛あつい」「殿下が寂しがる」という攻撃は、春のそよ風の様なものだった。

このアリシアという女性にとって、寵姫達みなが身を焼くほど焦がれるサルヴァ王子の寵愛はそれほど軽いものだというの？　それとも簡単に取り返せると考えているの？

それとも……サルヴァ王子を「貸してくれる」と言っているの？

セレーナの脳裏に、王子にアリシアの事を思い浮かべられながら抱かれた屈辱が甦った。自分はアリシアの代わりとして王子に抱かれたのだろうか？

セレーナは、宮廷女性の駆け引きを、たしなみとして身に着けてはいるが、実際セレーナがサルヴァ王子の寵愛を受けているのは、その駆け引きの手腕によってではなく、あくまで王子に対する献身的な奉仕の賜物だった。セレーナは生来の心根により王子の寵愛を受けているのである。

だが、戦いの火蓋は切って落されたのだ。セレーナはサルヴァ王子を愛していた。心優しい敗者となり王子を失うなど論外である。

セレーナはアリシアの痛烈な攻撃に対し、反撃を試みた。

「ですが、たまにはサルヴァ殿下とて気晴らしをしたい事も御座いましょうし、私もそれには賛成ですわ」

貴女など王子にとっては気晴らしに過ぎない。そして自分の方こそがサルヴァ王子を貴女に貸してあげているのだ。

扇で口元を隠しながらクスクスと笑いながら発したセレーナの言葉は、その余裕あるしぐさに比べ内容は直線的だった。セレーナにも見かけほどの精神的な余裕は無いのである。

そして言われたアリシアもさすがにこの言葉には気分を害す。自分がこの美しい女性の足元にも及ばないのは認めるが、それでも「気晴らし」とは言い過ぎだった。

だがやはりよい言葉が思い浮かばない。サルヴァ王子相手ならばいくらでも言葉が出るアリシアだったが、宮廷女性との戦いは勝手が違う。やむなく目を細めてセレーナを睨んだ。

これはセレーナにも予想外の反応だった。

心の内を表情に出さずに余裕を持って笑顔で嫌味を応酬するのが宮廷女性の「ルール」である。そして、余裕を失って笑顔を崩した方が負けなのだ。

笑顔を崩してしまった女性は踵を返しその場から退場し、残った女達はその姿を上品にあざけ笑う。それが宮廷というものなのである。

それなのにアリシアは、笑顔を崩したにもかかわらず立ち去る事

もなくセレーナを睨み続ける。だがセレーナも負けるわけにも行かない。

ここで睨み返せば自分こそが敗者である。セレーナはさらに悠然と微笑み返す。

宴の会場の一角に異様な雰囲気が生まれ、睨む女性と微笑む女性の対決を周囲の者達は遠巻きにした。

同じ会場に居るサルヴァ王子がその異変に気付かないわけも無く、顔を向けるとアリシアとセレーナの対決の場面が目に入った。

前回アリシアと衝突した一件以来サルヴァ王子は、アリシアとは顔を合わせない様にしていたが、さすがに棄てては置けない。

何をやっているのかと小さくため息を付くと王子はふたりに近寄った。

「お前達どうしたと言うのだ？」

ふたりの中間地点に歩み寄り声をかけた王子に、セレーナが驚いた様に顔を向けそして次の瞬間自然と王子に微笑んだ。

その驚きによって一瞬、作られた表情を脱ぎ捨てたセレーナの素顔に、アリシアは目を見張った。アリシアには今までの作った笑顔のセレーナよりも自然と微笑む彼女の方がよほど美しく感じられたのだ。

だが、サルヴァ王子に対して「何でもありませんわ」と答えたセレーナはまた仮面を被ったかの様に悠然と微笑んでいた。

セレーナのあまりの変わりぶりに呆気に取られたアリシアは、キ

ョトンとした表情でサルヴァ王子とセレーナを見つめていたが、王子の視線がアリシアに向いた。

「お前は？」

不意を突かれたアリシアはついいつも通りに口を開く。

「何でもありませんわ。王子様」

だが、この様な席でサルヴァ王子を殿下と呼ばず「王子様」呼ばわりはさすがに不味い。サルヴァ王子はつかつかとアリシアに近寄ると耳打ちした。

「馬鹿か。　殿下と呼べ。他の者も居るのだぞ」

馬鹿呼ばわりされむっとしかけたアリシアだが、確かに今回は自分に非がある。

「失礼致しました。サルヴァ殿下」

と、アリシアは、王子にそう言って丁寧に頭を下げた。

リヴァルの事もあり、サルヴァ王子には条件反射的に突っかかる傾向があるアリシアだが、決して非常識と言うわけではなく、場はわきまえている。

そしてサルヴァ王子もこのアリシアの態度には案著した。ここでアリシアに食って掛かられては面倒と言う事もあるが、前回のアリシアとの衝突について王子は内心引け目を感じていた。

とはいえ王子にも高い身分として生まれ、かしずかれて育てられた者の常として素直に謝れぬ癖がある。

次にアリシアと顔を合わせた時にどういう態度をするべきかと気

まずく思っていたのだが、どうやらどさくさにまぎれてうやむやになりそうだ、と安心したのだ。

その為、「まあ、良い」と言った王子の顔にも微かに笑みが浮かんでいた。

アリシアは、王子様が自分に笑顔を見せるなど珍しいものだと、その顔を覗き込んだが、王子はついと顔を背けた。そして次には不機嫌そうな表情をアリシアに向ける。

人の顔を覗きこむな。と言ったところだろう。

そしてアリシアはアリシアで、さっきまで笑顔を向けていた相手から次の瞬間には不機嫌そうに睨まれ、憮然とした表情を返す。

だがそれも一瞬の事で直ぐに笑顔を返した。こんな場所で王子様と睨み合うわけにも行かないのだ。

この光景にセレーナは孤独を感じた。サルヴァ王子とアリシアとの関係は、自分と王子との関係とはあまりにも違いすぎた。セレーナはこの場に取り残された様な感覚を覚えたのだ。

セレーナは献身的にサルヴァ王子に使え、そして王子にお褒めの言葉を頂き、可愛がってもらう事に喜びを感じていた。それが自分の幸せなのだとセレーナは考えていた。いや、セレーナだけでは無く、後宮の寵姫達すべての考えと言っていい。

だがそれは、あくまでも主人とそれに仕える者の関係だった。主人が仕える者から顔を背けたり、仕える者が主人に憮然とした表情を見せるなどどういう事なのだろう。

いや、セレーナは気付いた。そもそも主人と仕える者ではないの

だ。有り得ない事にこのふたりは「対等」なのである。

サルヴァ王子はアリシアの事を自分と対等などと思ってはいない。アリシアも自分が一国の王子と対等など夢にも思わない。にも拘らず、セレーナの気付きは当たっていた。

他の者がサルヴァ王子と対峙した時に持つ、権力者に対する恐れや取入ろうとする下心。そしてその才能についての称賛も、死んでも構わないと考えるアリシアにとっては意味のないものだった。

アリシアにとって一国の王子もただの人でしか無かったのである。

王子に対して一応の礼儀を守ろうと言うのは、それが無意識下での常識であるからに過ぎない。

そして王子にしても、自分の地位や才能に怯まず向かってくるアリシアに対しては、それらを除いた素の自分で対応せざるを得なかった。

他の者がどう思おうと、多少無礼な振る舞いをされたからと言って処罰しようというほど王子の心は狭くないのだ。

その為ふたりは、意識せずに自然と対等の関係を築いていたのだった。

そう言う意味では、セレーナとて一歩踏み出し王子との壁を突き破って見せれば、王子と対等に近い関係になれるかも知れなかった。

だが、宮廷のしきたりが血となり流れる由緒ある貴族のセレーナには、それはなしえない事だったのだ。

その主人は、自分に仕える者の中で一番のお気に入りの寵姫に右手を差し出した。

「セレーナ。私と踊ってくれ」

宴の雰囲気を仕切り直す為、一区切り付けようというのだ。

王子から差し出された手に、セレーナは笑顔で手を添えて応じる。

自分の考え過ぎなのだろうか。やはり王子はアリシアより自分の方をこそ気に入っているのだ。そうでなければアリシアを差し置いて自分をダンスに誘ったりはしまい。

王子にエスコートされにこやかに進むセレーナは、後ろを振り返った。その場に残されたアリシアがどの様な表情をしているか確かめたくなったのである。

自分ではなくセレーナが誘われた事にアリシアが悔しがっていれば、セレーナの溜飲は大いに下がっただろう。だが当のアリシアは興味なさげにその場から立ち去るところだった。

第１８：総司令の日常（１）

「検討させて貰おう」
「いつもそればかりではないですか！」

バルバール王国軍部で定期的に行われる軍議の席にて、シルヴェンの提案に対してのディアスの返答にシルヴェンが噛み付いた。

もっともシルヴェンが腹を立てるのも当然と言えた。シルヴェンからの提案に対しディアスは尽く「検討させて貰おう」と言うばかりでその実まったく無視しているからである。

では非はディアスに有るのかと言えば、やはり非はシルヴェンにあった。シルヴェンの提案がすべて愚にもつかないものばかりだからである。

シルヴェンは、時には自分を副司令官に任じてディアスの代わりに全軍を指揮させろと要求し、ある時は予算を無視して軍を増強させるべきと提案した。

そして現在シルヴェンは、どうせランリエルが攻め寄せて来る事が分かっているならば、敵の準備が整わぬうちにこちらから攻めるべきと主張しているのだ。

シルヴェンの意見も一理ある。
ランリエルとの戦いは海戦での勝敗が大きな鍵となるだろう。そしてランリエル海軍は日々増強されている。
その意味ではランリエルとの開戦は早ければ早いほど良いとも言えた。

しかしディアスには、それが出来ない理由は十理ほどあった。

まずランリエルを攻めるにあたって、コスティラに対して行なった様な奇襲は利かない事があげられる。

もしコスティラと戦うかの様に見せかけておいてその実ランリエルを攻めるなどという事をしたところで成功するわけは無い。バルバールは一度その手でコスティラを攻めているのだ。あのサルヴァ王子ならば間違いなく見破るだろう。

これはなにもランリエルに限った事ではなく、コスティラに対しても同じ事である。今後はコスティラも引っかかりはしないだろう。あれはあくまで一度きりの策である。

そしてバルバール艦隊は敵国内での夜間航行が出来ない。あれは海岸線を誘導する陸戦部隊が居てこそ可能なのだ。陸戦部隊が奇襲で国境を突破できないのであれば不可能である。

当然敵軍港に対しての陸戦戦力での攻撃も出来ない事になる。

そうなるとバルバール艦隊は白昼堂々ランリエル王国沖に進出する事になるが、ランリエル艦隊はバルバール艦隊を迎撃してくるだろうか？

してくればしめたものだが、敵も現時点では勝てぬと分かっているから攻めて来ないのである。艦隊は軍港奥深く潜むだろう。

出撃してこなければバルバール艦隊は手も足も出ない。

バルバール艦隊はコスティラの軍港を攻める時に火の点いた艦を港内に突入させたが、ランリエルはその事についても対策をねって

おり、主だった軍港の入口にはすべて水門を建築したという。これでは艦を突入させる事が出来ないのである。

では、ランリエル艦隊が出てこないを幸いに海兵をランリエル領内に上陸させてはどうだろうか？

僅かばかりの海兵を上陸させたところで戦いの決定打にはならず、それどころか海兵を上陸させた後にランリエル艦隊が出撃してきて万一海戦に負ければ、海兵は敵国内に取り残される。その様な危険はおかせない。

いや、それどころかバルバール艦隊を指揮するライティラ提督からは、

「ランリエル艦隊が出撃して来るならば手の打ち様ありますが、軍港内に潜まれては手も足も出ません。開戦の時期は敵が攻めてるに任せて欲しい」とも要請されているのだ。

バルバール軍総司令官のディアスも、海戦に置いてはライティラに任せるしかない。

バルバール海軍とランリエル海軍との質を鑑みディアスとライティラとで検討した結果、五角に戦える戦力比は1対2と言う結論になった。

それほどバルバール海軍の艦艇の船足と旋回能力は卓越していた。

陸戦に置いて兵士の質だけで2倍もの数を補うなど至難の技であるが、その陸戦にしても兵士の動きが敵よりも1割ほど早いと仮定すればそれも可能だろう。

戦いに置いて動きが早いと言う事はそれだけ決定的な差を生み出すのである。

つまりランリエルに対してはバルバールからは攻め寄せず、ランリエルが攻め寄せて来るのを待つ。これがディアスの基本方針である。

だがシルヴェンの様な男は自分の案に一理でもあると他の事に耳を貸さず自分の案に固執する。

それゆえディアスはシルヴェンとまともに議論する気にもなれず、シルヴェンの提案を、検討するとだけ言って聞き流していたのだった。だがそれに対して遂にシルヴェンが噛み付いたのだ。

ディアスはやれやれと内心ため息を付きうんざりしながらシルヴェンへの説得を開始した。

「シルヴェン将軍の提案にも一理あるが、ランリエルに対し効果的な攻撃が出来る公算は低い。それよりも迎え撃つ方が手も打ちやすいと海軍提督のライティラからの進言もあるんだ」

だがシルヴェンはディアスの言葉を鼻で笑い、言葉の端々に嘲笑の音を潜ませて自案を披露した。

「戦う前からその様な弱気でどうすると言うのです？　戦ってみなくては敵の本当の力量など分かり様も有りますまい。総司令が懸念されるほど敵の力量が高くないかも知れないではないですか」

シルヴェンの発言にディアスは目眩がしそうになった。

兵法にも「兵は国の大事にして、死生の地、存亡の道なり」という言葉がある。

攻められた時はともかく、古来戦いとは、やむを得ない時に万全

の準備を整え必勝の態勢を持って開戦するものである。戦ってみないと分からないから戦うとは常軌を逸している。

前回コスティラに攻め込んだのも、そうしなければランリエルと戦う時に東西から攻められる可能性があり、やむを得ずだったのであり、長年の戦いからコスティラ軍の能力をかなり正確に掴んでいた事もある。

この男は、戦ってみた挙句その戦いに負ければ国が滅ぶ、と言う事すら分かっていないらしい。

この程度の事が分からぬ相手を説得させるのは逆に難しい。だが説得しないわけにも行かず、ディアスは辟易しながらも口を開いた。

「敵の力量。特にランリエル海軍については、部下を派遣し調査させている。急速に増強しているランリエル海軍は海軍兵も当然急増だ。その質が高くない事は分かっている」

戦わずして相手の力量を含めた情報を得るために、古来から名将と呼ばれる者達は情報の収集に苦心しているのである。そしてディアスもその点抜かりはない。

武門の名流の嫡子だけあって知識はあるが、それを活用する知性が足りないシルヴェンは、得意げにその知識を披露した。

「何を言っているのです、それは推測に過ぎないではないですか。百聞は一見にしかず、百見は一考にしかず、百考は一行にしかずのことわざ通り、敵の力量を知るには実際に戦ってみるのが一番です」

ディアスはシルヴェンに対し、よくそんなことわざを知っていた

な、と言うことだけに関心した。だがそのことわざから導き出した答えは見当違いも甚だしい。

「確かに敵の力量は一度戦ってみれば一番良くわかるだろう。だが戦いとはやり直せるものではない。その一度の戦いで敵の力量が分かっても負けてしまっては意味が無いだろう」

「ですが、負けるとは限らないでしょう」

だがシルヴェンはなおそう言って食い下がった。

こいつは自分の言った言葉すらもう忘れたのか？　とディアスは呆れ返る。

負けるとは限らないから戦う、と言うなら、シルヴェン自身の敵の力量を見るために戦ってみると言う提案の意味が無くなるのである。

「それでは結局、勝つか負けるかを運に任せて戦う事でしか無い」

ディアスの冷たい視線がシルヴェンを射抜き、さすがにシルヴェンもたじろいた。

だがシルヴェンは引き下がらない。

「勝敗は兵家の常と言うではないですか。武人が敗北を恐れてどうするというのです！」

遂に精神論で来たか！

ディアスはむしろ笑い出してしまいそうになるのを堪えるのに必死となった。

そしてこの何ももたらさない不毛な議論はなおも続いたのだった。

第１８：総司令の日常（２）

ディアスは軍議の後、軍務大臣のエドヴァルドに対し上申書を書き上げた。
勿論内容はシルヴェンの無能さを訴えた解任要求であるが、ディアス自身効果を期待している訳ではなかった。

そもそもシルヴェンの無能さは軍部でも有名なのだ。
軍務大臣もそれを分かった上でディアスにシルヴェンを幕僚に加えるように言ってきている以上、いくら無能さを訴えたところで意味は無いだろう。

それでも上申書を書くのは半分は腹立ちを紛らわす為と、残り半分は万一の場合の保険の為だった。
「だからシルヴェンを解任する様上申書を提出していたではないですか！」
もしシルヴェンの無能さが原因で問題が発生した場合、そう主張する為である。

ディアスも我ながら狡い手とは思うが、それ以上にシルヴェンに引きずられて被害を受けるのはごめん被るという気持ちの方が強かったのである。

「ではケネス。これを軍務大臣に届けて来てくれ」
そう言って、上申書を従者であるケネスに託し軍務大臣へと提出した後、揃って邸宅へと向かった。

「今日も大変でしたね……」
邸宅へと帰る道すがらディアスの乗馬の轡を引きながらケネスが

口を開いた。勿論今日の軍議でのシルヴェンに付いてである。

「ああ。まったくだよ……」

と応じるディアスの声も力ない。

「やっぱりシルヴェン将軍を解任する事は難しいのですか？」

「元々の任命権は私にあるが、一旦任命した後の解任はそう簡単には出来ないからな」

ケネスが轡を引きながらもディアスへと顔を向け、驚いた様に言った。

「そうなのですか？」

任命権があるという事は、解任も自由と思っていたのだ。

「ああ、あまり自由に任命、解任が出来るとなると、やろうと思えば意図的に特定の人物を閑職に追いやる事が出来てしまうからね」

「閑職？」

「そうだ。みなそれぞれ役目が決まっている。それをその役目から引き抜き幕僚に加えて、他の者がその役目を引き継いでから幕僚を解任したらどうなる？」

「仕事がなくなりますね……」

「そう言うことだ……」

その為にディアスは軍務大臣に対して、シルヴェンを解任する上申書を提出してるのである。

2人はしばらくしてディアス邸へとたどり着いた。

「ディアス様。ケネス様。お帰りなさいませ」

ミュエルが玄関で2人を笑顔で出迎えたが、突然ディアスがミュエルを抱き上げた。

「ディッ、ディアス様！」

普段とは違うディアスの行為にミュエルは赤面したが、ディアスは構わずそのまま玄関を潜った。

ケネスもあっけに取られつつその後に続く。

「あの……どうしたのですか？」

戸惑いディアスに問いかけるミュエルにディアスは

「いいから。いいから」と聞く耳を持たずそのままずんずんと進み続けた。

結局ディアスはミュエルを抱き抱えたまま自室まで進み、そこでベッドの上にミュエルをちょこんと置いた。

「ディアス様。本当にどうなさったのです？」

不思議そうに問いかけるミュエルの問いには答えず、ディアスは彼女の頭を少し強く撫で、その横に座った。

シルヴェンの事で不満が鬱積していたディアスは、笑顔で出迎えるミュエルに心弛(こころゆる)びつい抱き寄せてしまったのだが、なにぶんミュエルの身長はディアスの胸の辺りまでしかない。

抱きしめるには高さが合わず、いっその事と抱き上げたのである。

「ミュエル、私は本当にお前には感謝しているよ」

「本当ですか？」

「ああ。本当だ」

ディアスがそう言ってミュエルのほほに口付けると、ミュエルは恥ずかしげに身を竦ませたが、決して嫌と言う訳ではない。

ディアスがこの様に触れてくれる事は、自分がディアスの妻である事を意識させ彼女を安心させるのだった。

ディアスに妻として見られない事で傷を負ったミュエルの心には、やはり微かな傷を残していた。

時折ディアスに対し、妻としての扱いを求めて止まなくなるのである。

ディアスは改めてミュエルを抱き寄せると、ミュエルの頬に自らの頬を擦り付ける。

ディアスは髭が濃い方ではないが、それでも仕事が終わり邸宅へと帰る頃になるとそれなりに伸びている。

その髭の感触にミュエルの頬はちくちくと微かな痛みを感じたが、それだけにディアスが自分の夫である事。自分の男である事を意識させた。

もっともディアスにはまだミュエルを性的な意味で抱く心算はなく、ミュエルにしてもそれ以上を望んでいる訳ではない。

だがこの様な行為により、ディアスとミュエルの間に夫婦なのだという意識が強まっていく。

ミュエルは優しく素直な少女である。
ディアスはミュエルにはそのまま優しく素直で、美しい女性に「育って欲しい」と願っていた。
それは自らの心を韜晦（とうかい）せずに言えば、娘に対する愛情だった。

だがディアスはミュエルの事を「幸せになって欲しい」とは思っていない。ディアスはミュエルを「幸せにする」そう考えていた。
そしてそれは妻に対しての愛と言えた。

ディアスはミュエルの事を、娘に対する様に愛情を注ぎ、妻として愛していた。
ただし女として欲するのはまだ少し先になるだろうが……。

ディアスは目を細めてミュエルに微笑みかけると改めてその頭を撫でた。

「では、そろそろ夕食にしよう。ケネスもお腹を空かせているだろうからね。今日はどんな料理なんだい？」

総司令の奥方ともなれば毎日使用人に料理させる事も可能ではあるが、いざという時の為、ミュエルも料理を習いだしたのである。
もっともまだ下ごしらえを手伝っている段階なのであるが。

「鶏肉のオレンジソース煮とチーズスープです」
ミュエルは目を輝かせて答えた。
「それは旨そうだ」とディアスはミュエルを抱き寄せたまま立ち上がり、その場にミュエルを下ろした。

そしてミュエルと共に食卓へと向かうと、ケネスはすでに待ち構えていた。

ディアスはミュエルも作るのを手伝ったという料理に舌鼓を打ち、「美味しいよ」とミュエルに言うと、ミュエルは嬉しそうに喜んだ。

そして晩餐も済むと、ディアスは書斎へと向かう。そこで本を読むなり思案にふけるなりするのがディアスの日課だった。

ミュエルはと言えば、これから半刻ほどケネスに見てもらいながらの勉強である。ケネスがディアスの従者として勤めているので、夜に勉強する事になったのである。

そしてそれが終わるとミュエルは自室に戻り、ディアスもそれに合わせて自室へと向かう。

その後ふたりは一つのベッドで眠るのである。

だがミュエルは眠りの浅い体質で、夜中に時折目を覚ます事がある。その様な時横で寝るディアスを見ると、バルバール軍総司令官の夫はいつもだらしなく口を大きく開けているのだ。

ミュエルはクスリと笑うと、微かに乱れた寝具を夫にかけ直してやりまた眠りに付いた。

第１９話：後宮の邂逅（１）

「どうして私が後宮に入らなくてはならないのですか！」

普段は父のいう事を素直に聞く娘の怒声にランリエル王国の大貴族であるフェデリコ・カカスティニオ公爵は眉をしかめた。

自分に対して不満を殆ど言わないセレーナがこれほど抵抗するとは予想していなかったのである。

書斎に娘を呼び寄せ、やってきた娘を立ち上がって出迎えた公爵はセレーナに後宮に入る事が決まったと伝えたのだ。

「いいから私のいう事を聞きなさい」

取り乱すセレーナに落ち着いた口調でそう述べると、公爵は鋭い目で娘を射抜いた。

娘はたちまち怯えて身を萎縮させる。

公爵は内心他愛無いと思いながらも、今度は出来るだけ優しげに語り掛けた。

「何、これはお前にとっても悪い話ではないのだよ。後宮に入り子をなせばお前の子が国王になる事もあり得るのだからね」

あまりにも分かりやすい飴と鞭に娘はたちまち緊張をほぐしたが、やはり不満げに

「ですが……」と口ごもった。

「どうしたのだ？」

「国王陛下には既に3人もの王子がいらっしゃいます。今更陛下のお子を産んだところで……」

公爵は娘の言葉に「ふっ」と軽く噴出した。

娘の言っている事の可笑しさにではない。自分の迂闊さを笑ったのだ。

公爵は笑みを湛えたままセレーナに弁解した。

「すまない。肝心な事を言い忘れていた。後宮と言っても国王陛下の後宮に入ると言う訳ではないのだ」

「陛下の後宮ではない？」

父の言葉にセレーナは首を傾げた。その様な仕草ですら美しい娘に公爵は満足げに頷く。

娘の美貌は親の欲目を差し引いても十分に他に抜きん出ている。

「ああ、そうだ。お前はサルヴァ殿下の後宮に入るのだ」

「殿下の後宮？」

セレーナはまたも首を傾げ、そして次に笑い出した。

「嫌ですわ、お父様。その様な冗談を仰るなんて」

とクスクスと笑う声も美しく響く。

この美しい娘ならば必ずやサルヴァ王子の寵愛を独占し次期国王、いや次々国王を産む事になるだろう。

ならば宮廷内の自身の権勢は弥(いや)が上にも高まる。

「いや、冗談ではない。サルヴァ殿下の後宮がなされる事になったのだ」

冗談としか思えない事を冗談ではないと言い切る父に、セレーナは目を丸くした。

「ですがその様な話、聞いた事がありません」

セレーナが驚く様に、本来後宮とは王子が持つものではない。国王が持つ物であって、歴史あるランリエル王国にも過去にその様な事は一度とてなかったのである。

「お前が不思議がるのももっともだ。だがお前も知っているとは思うが現国王であらせられるクレックス陛下は後宮を構えておらん」

国王が後宮を持つには基本的に2つの理由がある。

ひとつは単純に性的欲求を満たす為、そして次に跡取りを残す為である。

現国王と王妃の仲は良好であり国王が他の女性を求める事は無く、そしてセレーナが言う様に国王には3人の王子、そしてさらに2人の王女がいる。

クレックス王は12歳の時、当時19歳のマリセラ王妃と結婚した。そして現在に至るまで浮いた話ひとつない。

一国の王として君臨なされる方が、生涯一人の女性しか知らぬとは。と嘲笑する声も聞かれる。勿論表立ってではなく、影に隠れて密やかにである。

そう言われる国王に対して、国王を独占し3人もの王子を産み我

が子に王位を継がせられる事が確定したと言って良いマリセラ王妃は、歴代で最も成功した王妃の一人と言われている。

「だが次期国王と目されるサルヴァ殿下は戦を好まれる。万一子をなさぬ前に戦で命を失っては一大事と国王、王妃、両陛下がご心配なされ特別にサルヴァ殿下の後宮が整えられる事になったのだ」

公爵はそう娘に説明したが、正確には少し違う。

次期国王と目されるサルヴァ王子に娘を差し出す事により、王子に取り入る事を思いついた公爵を含めた数人の貴族が、両陛下の不安を煽ったのである。

早く孫の顔が見たい。孫の顔を見せる前に息子が死ぬなど持ってのほか、と考える感情には王族も一市民も変わるところが無いのだった。

本来ならば王子の妃にと言いたい所だがそれは中々敷居が高い。次期国王の婚姻ともなれば外交の大きな材料ともなり、軽々と決められるものではないのである。

しかし後宮に入れる寵姫の一人であれば潜り込ませるのは易い。

子さえ生まれればこっちのもの。

勿論、正式な妃の子ではない為庶子ではあるが、戦好きの王子の事である。正式な妃との間に子をなす前に亡くなる可能性も高い。

もし王子が妃を向かえその間に子をなしたとしても、王子が亡くなりさらに国王も崩御された時、その世子が幼少であり庶子が成人していたならば、庶子でも十分王位継承に名乗りをあげる事が出来るだろう。

それに寵姫から妃となる事もあり得るではないか。そうなれば勝利は間違いない。

それにはまずゲームに参加する事が必要だ。娘を手札としてゲームに参加しなくてはならない。

しかも自分の手札は中々のものだ。と公爵は考えていた。娘の容姿は申し分なく、声も美しい。気立ても良く、年齢もサルヴァ王子にちょうどつり合う。勝算の高いゲームに参加しないなどあまりにも愚かな事である。

現在宮廷で最も権勢を誇っているのは、かつて王国の財政難のおり援助を行い現国王に孫娘を娶らせたフォルト公爵である。当時のフォルト公はとうの昔に亡くなっているが、フォルト公爵家はいまだ権勢を誇っているのだ。

だがこのゲームに勝てば、そのフォルト公爵家を抑える事も可能だろう。

しかし肝心の娘は表情を曇らせ難色を示した。

「ですがそれでも後宮などには入りたくありません」

いざともなれば頭ごなしに怒鳴りつけてでも後宮に放り込む心算であるが、平和裏に事が進むに越した事はない。娘の後宮での立ち振る舞いにも影響してくるだろう。

公爵は優しげな口調で娘に言い聞かせた。

「お前がサルヴァ殿下の子をなせば、我が公爵家にとってどれほど為になるか、お前も分かってくれるね？」

家の利益の為にその身を捧げろと隠す事無くセレーナに伝えた公爵であるが、娘の方もその事について別段腹を立てる事もない。

家の為に身を捧げるという、そんな「当たり前の事」は貴族社会に育ったセレーナも言われるまでもなく理解している。

はじめに後宮に入るのを嫌がったのは3人の王子を持つ国王の寵姫になったところで一生日陰者になるのが目に見えていたからである。それでは家の為にすらなりはしない。

そしてサルヴァ王子の後宮に入るのを嫌がったのは、純粋に王子の事を好きではなかったからだった。

サルヴァ王子に会った事はない。だが王子が戦を好むという事は聞いていた。

いくら家の為とはいえ、一緒に居て苦痛であろう相手に仕えるのは避けたいところだった。

「恐れ多い事とは思いますが、私はサルヴァ殿下のお心に添えないと思うのです」

セレーナは控えめに拒否したが、公爵は辛抱強く娘に語りかける。

「サルヴァ殿下はそれは見事な若者であり、容姿も優れている。戦にも強いのはお前も知っていよう。恐れ多い事ながら、たとえ王族でなかったとしても年頃の娘ならば誰もが焦がれる様な立派で勇ましい男子なのだよ」

セレーナがどうして王子の事を拒絶するかを理解しない公爵は、娘の嫌悪感に油を注ぐ。

ますます王子の後宮に入る事を渋る娘と父との話は平行線をたどったが、結局家長である公爵のいう事には逆らえない。
公爵も穏便に娘を送り出す事を諦め、最後には怒鳴り付けて娘を送り出したのだった。

こうして１９歳のセレーナ・カスティニオ嬢はため息を付きながら馬車に揺られ、サルヴァ・アルディナ王子の後宮へと向かったのだった。

第１９話：後宮の邂逅（２）

後に２０名を超える人数となる後宮も当初はセレーナを含めても１０名にも満たなかった。
だがセレーナにしてみれば一人の男性が相手にするには１０名でも多いのだが。

もっとも歴代の王の中には四桁を超える美女をかき集めた者もおり、抱いた女の数を誇る事が男の甲斐性と考える者達の間では、「１０名足らずとは王子も控えめな事よ。意外と器の小さなお方かもしれん」と嘲笑の種となっていた。

サルヴァ王子は後宮に寵姫を入れるにあたり、出来るだけ断る方針を取っていた。これは王子が女嫌いや、ましてや男色の趣味がある、という訳ではない。

ランリエル王国の長い歴史の中で、唯一王子の頃から後宮を持った者として名を残す事になった事態にうんざりしていたのもあるが、それならば精々役にたって貰おうと考えた為だった。

王子が断ったにもかかわらず強引に娘を押し付けてくる者は二通りと考えられる。
一つは王子の味方になろうと王子に取り入ろうとする者。
もう一つは王子に敵意を持ち、王子の事を探ろうとする者である。

取り入ろうとする者は王子に媚を売り、探ろうとする者は媚を売った上さらに色々と聞き出そうとするだろう。
しばらくは精々注意深く様子を探ろう。王子はそう考えていたのだった。

今年サルヴァ王子は２５歳となるが現国王のクレックス王が王位に就いたのは、サルヴァ王子が１２歳の時である。
それでもクレックス王はまだ現在のサルヴァ王子と同じ２５歳だったが、後宮はその当時から現在までの１３年間閉ざされたままである。

後宮の扉を開け１３年間に積もりに積もった埃を払い、隅々まで塵一つなく磨き上げられ、装飾一式も新調した。

１３年前に後宮を管理していた役人や女官の中で現在も現役で働いている者は皆無である。
後宮の管理方法を調べる為古い書類を引っ張り出し、時には当時の担当官を探し当て高額の報酬を約束して老体を召還した。

だが、こうして万全の体制を持って寵姫達を迎える日がやって来たのだが。やはり行き届かず早速問題が発生したのだった。

翌年カルデイとの戦いでランリエル軍の総司令となるサルヴァ王子も当時はまだその職にはなく、軍部では二番手、三番手、と言ったところだったが、その王子の執務室に後宮を管理する役人が転がり込んだ。

「サルヴァ殿下！　申し訳ございません。恐れ入りますがお越し頂けますでしょうか……」
役人は急ぎつつも控えめにそう延べ、王子の出陣を要請したのである。

「何が起こったのだ?」と聞く王子に役人は状況を説明する。

後宮にあるそれぞれの寵姫の部屋の場所は、寵姫の家柄、それに後宮の主からの寵姫への寵愛の度合いによって決まり、それが後宮内の序列ともなる。

後宮の一番奥にある部屋が、そのもっとも序列が高い寵姫の部屋となる。

これは万一後宮の主が事の最中に敵襲にあった場合、建物の一番奥にいる方が安全だろう。ならば一番足げく通う寵姫の部屋を一番奥にすべき。という意味があったが、他を出し抜こうとする寵姫達に取っては心理的な意味合いが重要だった。

何せ一番奥にある自分の部屋に主が来るという事は、その途中にあるすべての部屋を素通りしてくる事になる。

最奥の部屋の寵姫にとって、これほど優越感に浸れる事はない。

だが何分寵姫達は今日はじめて集められたのである。

後宮の主、つまりサルヴァ王子からの寵姫の度合いなど分かる訳もなく、取り合えず家柄のみで序列が付けられる事になっていたのだ。

その為一番奥の部屋は、集まった寵姫達の中で唯一の公爵令嬢であるセレーナが入る事になっていた。

だがその配置にダルベルト侯爵令嬢のヴァレリア・ダルベルトが異論を呈したのだ。

「確かにセレーナ様は公爵令嬢。侯爵家など塵芥（ちりあくた）の様に思われるのも仕方がありません。ですが私はフォルト公爵の孫娘。マリセラ王妃とも従姉妹となります。お分かりですわよね？」

ヴァレリアはそう言いながら笑みを浮かべた目をセレーナに投げ

かけた。

自分は公爵家より家格が下位の侯爵の出ではあるが、現在最も権勢を誇っているフォルト公爵家の血族に連なり、王妃の従姉妹でもある。自分こそは後宮の最上位となるに相応しい。そうヴァレリアは主張しているのである。

当時まだ宮廷内の駆け引きなど身に着けていなかったセレーナは、ヴァレリアの発言を素直に受け取り、塵芥と思っているなんてとんでもない。それほど仰るなら部屋を代わりましょう。

と言いかけたが、その声は両家の侍女や使用人や管理する役人との怒鳴りあい、貶め合い、そして仲介の声にかき消されてしまったのだった。

こうして事態は収拾がつかない状況まで発展してしまったのである。

「で？　私にどうしろと言うのだ？」

執務室の机に右肘を付き、右手で額を押さえて俯きながら役人の説明を聞いていたサルヴァ王子はわずらわしげにそう問いただした。

「はい。後宮の序列は家柄と後宮の主、つまりサルヴァ殿下の寵愛によって決まります。家格での序列で解決しないとなると、殿下のご決裁に頼るしかございません」

王子は大きくため息を付き、「止む得まい」と内心呟くと椅子から立ち上がって案内する様に役人に言いつけた。

後宮にたどり着きさらに廊下を進むと数人の侍女らしき者達の罵り合い、それを仲裁しようとする役人、さらにそれをおろおろと見つめる女性、そして冷ややかに眺める女性が目に入った。

「お前達。何を騒いでおるか！」

戦場の勇者でもあるサルヴァ王子の怒声に、今まで大声を張り上げ罵り合っていた両家の侍女が凍りつく。

だがその中でひときわ素早く動いた者がいた。

他でもない今まで冷ややかな目で事態を眺めていたヴァレリアが膝を折って王子に会釈する。

「まぁこれはサルヴァ殿下。いつも遠くからお姿を見る事しか出来なかった殿下にお会いする事が出来光栄で御座います。セルジョ・ダルベルト侯爵の娘ヴァレリアです。殿下の後宮に招かれ嬉しく思います」

サルヴァ王子は、招いた心算はない。お前達の親が押し付けたんだろう。と思ったが、王子が口を開くよりも早く、事態を遠巻きにしていた他の寵姫達もヴァレリアに遅れてはなるものかと慌てて王子の周りに群がった。

「アリオスト家のコンチェッタで御座います」

「オリアナと申します。父はバローニオ伯爵です」

「以前よりサルヴァ殿下をお慕いしておりました。ロレンツァと申します」

万事抜かりのないサルヴァ王子である。

寵姫の名前は当然把握していたが、好き勝手に口を開き名乗る寵

姫達に、王子は顔と名前を一致させる事すらままならない。
結局名前と顔を一致させる事が出来た寵姫は2人だけだった。

王子に群がる寵姫達をあっけに取られた様に見守っていた一人に寵姫が王子の目に留まり、王子と目が合った時に慌てて
「カスティニオ公爵家のセレーナで御座います」と名乗り、その寵姫の名前と顔は覚える事が出来た。

覚える事が出来たもう一人の寵姫は、一番最初に名乗ったヴァレリアである。

結局寵姫達の部屋の配置は、王子が決断を下し寵姫達もそれに従った。

「部屋はすでにそれぞれの家から家具なども運び込まれていよう。にわかに部屋替えなど出来るはずも無いではないか。今の部屋が気に入らないというのならば、空いている下位の部屋に行って貰うしかないのだぞ」

至極もっともな話である。当然役人達もそう言ってヴァレリアを宥め様としていたのだが、無理を言ってもそれが通用する環境で育ってきたヴァレリアである。
どんなに大変でも使用人と役人が汗水たらし行えばよい。そう考えていたのだ。

だが王子にまで言われてはさすがに異論を挟む事は出来ない。渋々ながら了承した。
もっとも渋々なのは内心であり表面的には億尾にも出さない。それどころか
「皆さん。我がままばかり言うものではありませんわ。サルヴァ殿

下のお申し付けどおりに致しましょう。セレーナ様もそれでよろしいですわね？」

とまるでこの騒ぎの原因がセレーナと言わんばかりである。

しかもヴァレリアのあまりの自然な口ぶりに、セレーナも自分の所為だったのかと錯覚し、つい「はい。申し訳ありません」と頭を下げてしまったほどである。

ヴァレリアはそのセレーナの態度に、クスクスと上品に笑った。他愛の無い女。そう考えたのである。

もっともサルヴァ王子はヴァレリアの態度こそ辟易した。

王子は役人から、そもそもヴァレリアが部屋割りに難癖をつけたのが原因と報告を受けている。

役人から王子へ報告がある事すら予測せず、この場を取り繕う事しか頭に無いヴァレリアこそが考えが足りないと言うものだった。

「とにかく、あまり騒動を起すな」

王子はそういい置くと、その場から背を向けた。

僅かの時間で精神的にくたくたとなり、執務室へは戻らず自室へと足を向けた王子は１５０年ほど前のランリエル王国国王ゴドフレードの事を考えていた。

例の後宮に四桁の美女を集めたという王である。

王子は今までこの王の事を、王位に就いたにも拘らず遊興に耽った、と軽蔑していた。

だが、後宮を開いた初日に一桁の人数に疲れ果てた王子は、僅かばかりではあるが生まれて始めて、ゴドフレード王への尊敬の念を

抱いたのだった。

第１９話：後宮の邂逅（３）

寵姫達が後宮に入ってから数日が経っていた。
いまだサルヴァ王子が寵姫の部屋に通ったという話は無い。

初日の騒ぎにうんざりした王子は、これ以上面倒に巻き込まれるのは御免と後宮が落ち着くまで待っていたのだ。

そしてそろそろ良いだろうと王子は判断したが、寵姫の部屋に向かうには事前に役人へ連絡が欲しいという。

「女の部屋に行くのに、どうして一々断りが必要なのだ？」

女を抱きに行くと他者に宣言せねばならぬなど、真っ平なのだが役人は規則なのだと言い、さらにその規則がある理由を述べた。
「殿下をお迎えするとなると、寵姫にも色々と準備が必要で御座います。それに……女性には月のものがあります。殿下が寵姫の部屋に向かった挙句その様な事にな……」
「もう良い！」

王子は役人の言葉を遮るとため息を付く。あまりにも煩わしい。

「それでどの方の部屋へとお出になるので御座いましょうか？」
王子の心中も知らず役人はそう問いかけた。寵姫の部屋に行くのならば聞く必要がある。

寵姫の部屋に行くのにどうして断りがいるのか疑問に思ったのでまず聞いたのであって、明確に誰の部屋に行こうとまで考えていた訳ではない。

王子は役人の問いかけに考え込んだ。

そして結局、手っ取り早く名前と顔が一致しているセレーナを指名した。

ヴァレリアの顔と名前も一致しているが、彼女を指名する気にはなれなかったのである。

勿論いずれは指名せねば成らず結局ヴァレリアは一番最後に指名される事になるのだが、その事についてヴァレリアは

「殿下は私を一番大事にして下さっているのですわ」

と吹聴し愉悦に浸る事になるのはまた別の話である。

今宵サルヴァ王子がいらっしゃる。

セレーナの胸は緊張に張り裂けそうだった。

セレーナにとってサルヴァ王子の第一印象は最悪と言って良かった。

何せ初めて聞いた王子の口から放たれた第一声は

「お前達、何を騒いでおるか！」という怒声なのである。

戦を好み恐ろしい人と王子を見ているセレーナにとって、それはその考えを補強する事にしかならなかったのだ。

夜となり部屋の扉が軽く叩かれた。

来た！

セレーナの緊張は極限にまで高まり、つい

「サルヴァ殿下で御座いますか？」と問いかけた。

だが王子がくる事は前持って分かっており、他の者は遠慮してや

って来る事はない。

本来ならばすぐさま扉を開け「ようこそお越し下さいました」とにこやかに返し、出迎えるべきなのだ。

もし火急の用事で王子ではない者が来ていたとしても、その時はその者が間違いを訂正するのである。

もっともその様な決まりなど王子は知らない事だった。セレーナの問いかけに不思議とも思わず扉の前で立ったまま「ああ、そうだ」と返事した。

だがセレーナの方こそが自分の失敗に気付いた。

王子を扉の前で待たせるなどなんという不手際だろうと、慌てて扉を開け不安げな顔を覗かせた。

また王子に怒鳴られるのではないかと思ったのである。

あからさまにビクビクするセレーナに王子の顔が思わずほころぶ。

寵姫達の部屋への訪問を開始するにあたって、自分に取り入ろうとする者は誰か、自分の事を探ろうとする者は誰か、とを見極める為、王子なりに身構えている部分もあったのである。

しかしこの娘は……。とてもではないがそのどちらとも思えない。まるで何かの間違いでやって来たのではないかと思われるほどである。

もっとも実際のところ彼女は「乱暴者の王子」の事を好きでは無かったのであるが、まさかその様に思っている者が後宮に来ているとは、さすがの王子にも想像の範疇を超えていた。

王子の目にはこの娘が初めての事に怖がっているのだと映ったのである。

セレーナは終始どう乱暴に扱われるかと緊張し、王子の一挙手一投足に過剰に反応し王子を苦笑させる。

「美しい髪だ」

と王子がセレーナの髪に触れると彼女は反射的に目を瞑り身を縮ませ、抱き寄せれば王子の身体に押し付けられたやわらかい胸から激しい鼓動の音が伝わってくる。

加虐趣味などないサルヴァ王子であるが、セレーナの反応は王子の「いたずら心」を暴走させるには十分だった。

セレーナが身を縮ませるのを承知の上で立って抱きしめたまま背に、腰に、足にと手を這わせ彼女の反応を存分に楽しむ。

さらに首筋に口付けると、セレーナは微かにうめき声を上げる。

セレーナのその声を目ざとく聞き逃さなかった王子は、彼女の身体に手を這わせる一方執拗に首筋に口付け、時には舌を這わせた。

彼女のうめき声は次第に大きくなり、はっきりと聞き取れるほどになると、王子は彼女の首筋から顔を上げた。

そしてことさらセレーナの目を正面から見つめると、恥ずかしさのあまり彼女は泣きそうな目を向け、つい王子はその胸にセレーナを抱きしめた。

あまりにも初々しいセレーナの反応に、王子の心に愛おしさが込み上げ、

「俺はこれほど惚れっぽかったか？」と内心苦笑させた。

もっともあくまでこの場限りの気持ちであり、本気でセレーナを愛したといえる代物ではない。

道端で子猫を見つけひとしきり可愛がった後名残惜しげにその場を立ち去っても、翌日になればその子猫の存在などすっかりと忘れている。

その程度の気持ちに過ぎない。少なくとも現時点では。

もしこれが自分を油断させる為の演技というなら、到底自分の手の負える相手ではない。そしてそれはおそらく無いだろう。

そう思った王子はセレーナの滑らかな髪に指を滑らせた。いたぶり過ぎたのを反省し、彼女を安心させる様に。

セレーナも王子に頭を撫でられながら、大人しくその胸に身を委ね、そして気持ちが落ち着いていくのを感じた。

もしかしたらそれほど怖い人ではないのかも知れない。あまりにも他愛無いともいえるし、純真ともいえるが、王子の胸に抱かれセレーナは素直にそう思った。

そしてしばらくすると王子は優しくセレーナをベッドの上に横たえる。

「怖がる事は無い」

そうセレーナの耳元で囁き、彼女に覆いかぶさった。

第１９話：後宮の邂逅（４）

朝目が覚めて起き上がろうとしたセレーナは、下腹部に激痛が走るのを感じた。

そうだ自分は昨日「女」になったのだ。そう思い昨夜の出来事を反芻した彼女の顔がたちまち赤くなる。

王子が考えていたよりも怖くなさそうな人だった事には安心したが、この「痛い事」をこれからもしなくてはならないのかと思うと気が重くなる。

だがそれ以上にセレーナを憂鬱にさせたのは彼女に仕える侍女達だった。

「昨夜はサルヴァ殿下が起しになられたとか。おめでとう御座います」

「他の寵姫様達に先駆け、お嬢様のところに起しになられたという事は、やはり殿下はお嬢様の事をお気に入りなのですね」

「殿下はお優しかったですか？」

と彼女達は口々に言うが、セレーナにしてみれば、自分が女になった事を他の人間が「よく知っている」という状況は逃げ出したくなるほど恥ずかしい事だったのである。

しかも女の世界ではこの手の情報が広まるのは早い。

セレーナがサルヴァ王子から一番最初の「お情け」を頂いた事は、後宮中に広まっているだろう。

ヴァレリアあたりなら得々として後宮中を闊歩し、「偶然」顔を合わせた他の寵姫達に王子がどの様に自分を愛してくださったのか

を赤裸々に語るであろうが、セレーナなどからすれば常軌を逸しているとしか思えない。

他の寵姫と顔を合わせるのも恥ずかしいと部屋に篭ったセレーナが、部屋から出たのは結局王子が寵姫達全員の部屋を訪問した後だったのである。

自分が王子に抱かれたという事をみんなに知られているのは恥ずかしかったが、いつまでも部屋に篭っている訳にも行かない。

王子がすべての寵姫の部屋に足を運んだのなら、恥ずかしいのはみんな同じ事。そう考えたのだ。

朝、セレーナが庭に出てみると、数人の寵姫達が集まり談笑をしていた。

後宮に来た初日の様にいまだにいがみ合っているのでは？　と心配していたセレーナだったが、どうやら自分が部屋に篭っている間にみな仲良くなっていたのだ。と安心し彼女達の傍へと歩み寄る。

「皆様、おはよう御座います」

セレーナが挨拶をすると寵姫達も

「これはセレーナ様。おはよう御座います」と挨拶を返してきた。

ずっと部屋に篭り出遅れた自分はもしかして仲間はずれにされるのでは？　と微かに不安に思っていたセレーナは安心して思わず微笑んだ。

だがセレーナの微笑みはすぐに凍りつく。

彼女達の談笑の話題は、サルヴァ王子に「どうお褒め頂いたか」だったのである。

「私はこの髪をお褒め頂いたのですよ」
「私は声が美しいと」

ここまではまだ聞いていられたが、
「肌が滑らかであると言って頂きました」
「良い声で鳴くのだと、殿下は大変喜ばれ」
とまで来ると、聞いていられずセレーナは赤面するしかない。

この女性達には羞恥心というものが無いのだろうか？　とセレーナは思ったが、彼女達にしてみれば少しでも自分が優位に立とうと必死だったのだ。

後宮での順位は、王子からの覚えの良さが全てであると言って良い。いくら順位付けが家柄と寵愛の度合いからと言っても、所詮寵愛が優先されるのである。

王子にどうお褒め頂いたかは重要な事なのだった。

「それでセレーナ様は？」
遂に矛先を向けられたセレーナは戸惑った。

実際サルヴァ王子からは、髪の毛からつま先まで、さらに声からしぐさまで、他の寵姫達への言葉を全て合わせた数を超える言葉をセレーナ一人で掛けられていたのだが、緊張していたセレーナはほとんど覚えてはいなかったのである。
かろうじて髪をお褒め頂いた事は記憶にあるが、それもこの場で言う気にはならない。

「いえ。お褒めの言葉は特に……」と申し訳なさげに答えた。

すると寵姫達は「まぁ！」と驚きの声を上げる。
セレーナの美しさは寵姫達の中でも群を抜いている。彼女達はセレーナを一番の強敵と見ていたのだ。
だがそのセレーナはお褒めの言葉を頂いていないという。

この美しい女性に自分は勝てるかもしれない。と彼女達の心に微かな希望の光が灯された。
確かに美しさでは敵わないかも知れない。しかし人には「好み」というものがある

どれほどセレーナが美しくてもサルヴァ王子の好みではないのだ。そして王子にお褒め頂いた自分は王子の好みなのだ。
彼女達はそう考えたのである。

そして王子の好みではない可哀想なセレーナをみんなで慰めた。

「セレーナ様の髪はこんなにもお美しくていらっしゃるのに……」
「この青く澄んだ瞳など吸い込まれそうですわ」
「この形の良い唇など、私と代えて欲しいくらいでありますのに」

慰めてくれる彼女達をなんて良い人達なんでしょう。と素直に思ったセレーナだったが、注意深く彼女達の言葉を聞いている者が居れば、ある事に気付いたに違いない。

セレーナの髪を褒めた者は王子から髪を褒められた者であり、瞳を褒める者は瞳を、唇を褒める者は唇をそれぞれ王子からお褒め頂いているのだ。

どんなに貴方のどこそこが美しくとも、自分のどこそこの方が王子の「好み」なのだ。暗にそう言っているのである。

こうしてセレーナは幸いにも他の寵姫達に敵視されずにすんだのだった。

王子の訪問が二周目に入り、二周目もやはりセレーナが最初だった事からやはり王子は美しいセレーナを選ぶのかと寵姫達に緊張が走ったが、どうやら単に一周目と同じ順番で回っているだけらしいと分かるとそれもすぐに収まった。

しかし王子の訪問が三周目、四周目となってもその訪問の順番は変わらず、これでは王子がもっとも寵愛しているのは誰なのか？が判断できない。

寵愛の度合いの判断は、王子が誰に対してもっとも足げく通っているかであるのに、王子はみなを平等に通っているのである。

もっともヴァレリアは

「サルヴァ殿下がみなに平等に接しているのはお優しい為。本当は自分こそがもっとも王子に愛されている」という態度をとり続けているのだが。

そしてその頃になると寵姫達にもいくつかのグループが形成されていた。

まずは自称「もっともサルヴァ王子の寵愛あつい」ヴァレリアを中心とするグループである。

ヴァレリアと彼女の言う事を信じ、ヴァレリアが王子の寵愛があついならばもしかして将来は王妃になるかも知れないと、そのおこぼれに預かろうという者達の集団である。

そして次に「反ヴァレリア同盟」ともいえるグループ。

このグループはヴァレリアのいう事は信じてはいるものの、ヴァ

レリアに負けてなるものか！　と諦めきれずに居る者達である。

そして最後のグループといえば、その二つのグループに属さない者達である。

ヴァレリアのいう事を信じてはいるもののおこぼれに預かるに気はなれず、かと言って表立って対立する事も無いだろうと考える者。

そもそもヴァレリアのいう事を信じていない者。

そしてセレーナの様に他の女性と争ってまで王子の寵愛を受け様とは考えていない者などである。

後にセレーナは王子からの寵愛を失いたくないと焦燥にかられる事になるのだが、それはあくまでも将来の事だった。

王子の訪問が十周目近くになる頃、寵姫の数はさらに増えてきた。

美貌で名高いセレーナ・カスティニオ公爵令嬢の出馬に、勝ち目が無いと尻込みしていた他の貴族達だったが、一向にセレーナは王子の寵愛を独占しないらしい。

それどころか漏れ伝えられた事を聞くと、セレーナはサルヴァ王子からお褒め頂く事も少なく、もしかすると美貌のセレーナはサルヴァ王子の好みではないのではないか。と言うのだ。

この頃になると王子の訪問時にもセレーナの緊張も幾分ほぐれ王子の言葉をすっかり忘れてしまう事も無いのだが、セレーナがその王子からのお言葉を他の寵姫達に漏らす事はやはり無かったのである。

その為、貴族達は今からでも遅くは無いと、第一陣であるセレーナやヴァレリア達とほぼ同数の第二陣を後宮に送り込んだのだった。

しかし皮肉にもこの第二陣がサルヴァ王子の訪問を、セレーナに偏らせるきっかけになったのである。

王子は一番奥のセレーナの部屋から順番に回っていたのだが、それが第二陣の到着で把握できなくなったのだ。

第二陣と言ってもセレーナ達の様に纏まって来た訳ではない。数日おきに一名ずつやって来るのである。そうなれば王子も順番に訪問していたのを中断し、新たに遣ってきた寵姫の部屋を訪問する事になる。

そしてその様な者が４人、５人となるともはや順番とは言っていられなくなり、そもそも王子とて毎日後宮に足を向けえている訳ではない。

王子は大体みんなを満遍なく回っているだろうという感覚に頼っていたのである。

こと軍略に関しては幾らでも細心の注意深さを発揮するサルヴァ王子も、女の部屋を回る順番についてその能力を発揮する気にはなれなかったのだ。

ところがある日後宮を管理する役人がやってきて王子に寵姫達の序列について判断を仰いだ。

「今までその様な話は出て来なかったではないか。突然どうしたというのだ？」

不思議がる王子に役人は、今まで王子は寵姫達を均等に訪問して

いた。その為はじめに決めた序列を変える必要は無かったが、その均衡が崩れた。と説明した。

自分が寵姫達を訪問している回数を管理されていたのかと王子は不愉快に思ったが、それをこの役人に言っても仕方があるまい。それがこの者の仕事であると、かろうじて我慢した。

「それでどう偏っていると言うのだ？」

王子自身はみなを均等に訪問しているはずと考えていた。誰かに偏って足を運んでいる心算は無いのだった。

「カスティニオ公爵家のセレーナ様を他の寵姫達の2倍から3倍の回数はご訪問なさっております。他にはダルベルト侯爵家のヴァレリア様の訪問数が激減しております」

「セレーナが3倍だと！？　いくらなんでもその様な事はあるまい」

王子は驚いたが、役人は間違いないという。しかしサルヴァ王子には合点が行かない。

セレーナは美しく気立ても優しい。王子も気に入っているのは確かに認める。

しかしセレーナに溺れている訳ではないし、他の寵姫達の部屋も同じ様に足を向け、セレーナばかりを贔屓としている心算はない。

役人にはとりあえず序列はそのままにと言い置き、そして馬鹿馬鹿しいと思いながらも、わざわざ紙に書いて寵姫達への訪問を管理する事にしたのである。

こうしてあえてセレーナを一番最後にするように訪問する順番を

決め、改めて寵姫達を訪問していった王子だったが、現在人数も増え15名となっている寵姫達の三分の一も回ったところで、王子は苦痛を感じ始めたのだった。

だがなぜ苦痛に感じてしまうのか王子にも分からない。

寵姫達はみな王子を楽しませようと至れり尽くせりに奉仕した。

王子が喜ぶと思ってと言って部屋に花を飾り、お口に合いますでしょうかと珍しい飲み物や料理を王子に勧める。

そして王子が抱き寄せるとしな垂れかかって身を任せる。

何の不満も無いはずであり、苦痛を感じる事など無いはずだった。にも拘らず実際王子は心楽しくなかったのである。

それでも王子はそれから2人、3人と寵姫の部屋を訪問したがやはり苦痛を感じる事に変わりはない。

結局王子は順番を変更し、セレーナの元へと身を進ませたのである。

四桁の寵姫を集めたというゴドフレード王に言わせれば、なんと不甲斐ない事よ。と笑ったであろうが、サルヴァ王子にしてみればどうして自分の為であるはずの後宮の事で自分が我慢せねばならぬのか。と言うところである。

苦痛に耐えてまで寵姫への訪問の順番を守る必要を認めなかったのだった。

第19話：後宮の邂逅（5）

その夜、王子が部屋を訪問するとセレーナは
「ようこそ、おいで下さいました」とにこやかに迎え入れた。
この頃になるとセレーナにも王子を笑顔で出迎える余裕も出てきていた。

部屋に通された王子の鼻腔を微かな甘い芳香が擽る。
香りがすると思われる方に目を向けると白い小さな花が飾られていた。

「あれはどうしたのだ？」

「後宮の庭に咲いていたのです。管理する方にお伺いすると摘んでも良いという事でしたので摘んでまいりました」

王子が椅子に座るとセレーナは酒を満たした杯を王子の前に差し出した。
王子が杯に一口付けると口中に甘味が広がる。

「甘い酒だな。どうしたのだ？」

「家から送られてきたのですが、殿下のお口には合いませんでしたでしょうか……？」

セレーナは不安げに聞いた。確かに王子は甘い酒は好みではないが、飲めないと言う訳ではない。

「まぁ構わん」と、さらに杯に口を付けると、セレーナは安心した

様に微笑んだ。

そして口を湿らせて人心地ついた王子がセレーナを抱き寄せると、彼女はいまだに身を固くした。

この点だけは他の寵姫達と違い従順とは言えぬセレーナだった。

にもかかわらず、他の寵姫達では味わえぬ居心地の良さを王子は感じていたのである。

事が終わると、傍らに寝具に身を隠して寝そべるセレーナの横で、王子は上半身を起して座り彼女を見つめた。

セレーナは事が終わった直後に見つめられるという事に恥ずかしさを覚えて目を逸らしたが、王子から視線を逸らせる事が不敬とでも思ったのか、おずおずと王子に視線を戻した。

だがその顔は恥ずかしさのあまりか朱に染まる。

その様子に王子の顔に笑みが浮かぶ。そして王子に笑われたと思ったセレーナは、さらにその肌を赤らめさせるのだった。

不意に王子はセレーナの両脇に手をやり軽々と引き寄せ、その胸に抱きしめた。その為寝具からセレーナの身体は抜け出し、セレーナの裸体があらわになる。

「殿下？」

事の最中ならまだしも、事が終わった後に裸を晒す恥ずかしさにセレーナは身も縮む思いだったが、彼女を抱き寄せたまま王子は微動だにしない。

次第にセレーナも落ち着きを取り戻し、鍛え上げられた王子の逞しい胸からトクトクと心臓の音が聞こえるのに気付いた。

その規則正しい鼓動にセレーナは不思議と安らぎを覚えたのだった。

セレーナを抱き寄せていた王子は、微かにセレーナが重くなったのを感じた。改めて彼女を見ると、なんとセレーナは微かな寝息を立てている。

王子を差し置いて寝てしまうなど寵姫としてあるまじき行為である。

だが王子は怒るどころか笑みを浮かべ、彼女を起さない様にそっとセレーナの髪に指を絡ませた。

すでに王子は、なぜ他の寵姫達には苦痛を感じ、セレーナには居心地の良さを感じるのかを理解していた。

他の寵姫達が王子からの寵愛を得ようとして王子を持て成しているのに対して、セレーナは王子に喜んで貰おうとして持て成しているのである。

それゆえ他の寵姫達と比べ押し付けがましくなく、それが王子に居心地の良さを感じさせているのだった。

セレーナには他の寵姫の様な打算が無い。

王子が来るので精一杯持て成す。それだけをセレーナは考えている。

さらに言えば、セレーナ以外の寵姫達はみな一様に王子に対して全員が同じ様な印象を与えていた。その為、数人の寵姫を訪問しただけで全員を回ったのだと王子に錯覚させていたのである。

そして数人の寵姫に足を向けた後セレーナの部屋の扉を叩いていたのである。

王子の顔に苦笑が浮かぶ。これでは確かに後宮を管理する役人の言うとおり、セレーナと夜を過ごす回数が他の寵姫の3倍になるのも当然だったのだ。

だが……。それでは自分はセレーナを愛しているのだろうか？父であるクレックス王は母である王妃以外の女を知らないという。そしてそれは王妃を愛しているからという事だった。

それに比べ自分はセレーナ以外の寵姫を言ってしまえば「平気」で抱いている。

セレーナはあくまでもお気に入りの寵姫と言うだけでしかないのか？

それとも自分には何か人として欠陥があるのだろうか。と王子はいささか大げさに考えたが、結局結論には至らなかったのだった。

セレーナが目を覚ますと自分がいまだサルヴァ王子の胸の中にいる事に気付いた。

王子を差し置いて寝てしまうなんてとんでも無い事をしてしまったと思ったが、王子は寝息を立てていた。

夜はまだ開けきらず窓の外は暗闇が支配している。

王子を起してはいけないと、セレーナはそのまま抱かれていたが、やはり王子の逞しい胸はセレーナに安らぎを与えてくれる。

自分は戦を好む男性は好きではなかったはずなのに、好きな男性の好みが変わったのだろうか？　セレーナはそう思ったが、ある事

に気付いて赤面をした。

それはサルヴァ王子の事を好きだという事なのだろうか？　と。
そう考えると改めてセレーナは緊張し胸の鼓動は早くなった。

はじめは確かにサルヴァ王子の事は怖かった。
しかしすぐに考えていた様な怖い方ではないと知って嬉しくなり、
ならばと自分なりに王子に忠実に仕えようと思ったのだ。

そして王子の自信に満ちた立ち振る舞いに惹かれ、力強い肉体に
頼もしさを感じ、時折見せる優しさに喜びを感じていた。

もっともセレーナの感じる王子の優しさとは一般的に言われるも
のとは少し違っているかも知れない。

王子の優しさとは、何かをしてくれる。という優しさではなく、
セレーナが何かを失敗なり問題なりを起した時に、笑って許してく
れる、または言葉を掛けて下さる。と言ったものだった。

いうなれば、支配する側がされる側に示す優しさと言って良かっ
たが、仕える為に後宮にやって来たセレーナにはそれで十分だった
のである。

王子の胸で抱かれ続けるセレーナは王子に対する愛おしさが込み
上げ、悪戯心が疼いた。いや、魔が差したと言った方が適切かもし
れない。

彼女は少し頭を浮かせると、王子の胸にそっと唇を近づけ、たっ
たそれだけの事でセレーナの胸は早鐘の様に鳴り響いた。
そして微かに王子の肌に触れるだけの口付けを行うと、満足げに

小さくクスリと笑いまた王子の胸に顔を埋めたのである。

しかし次の瞬間セレーナは凍りついた。

「起きていたのか？」

突然声を掛けられたセレーナが顔を上げると果たして王子が見下ろしている。

戦場で敵襲に備え寝る事も多いサルヴァ王子である。自分の身体の上で身じろぎされて起きない訳は無いのだった。

「申し訳御座いません！」

セレーナは慌てて王子の胸から離れようとしたが、王子の腕がっしりとセレーナを抱きしめてそれを許さない。

セレーナは消え入りたい様な羞恥心に包まれていた。

まるで相手に読ませない心算で書いた恋文を、当の相手に読まれてしまったかの様な居た堪れなさである。

王子の事をお慕いしている事がばれてしまった。寵姫として後宮に居ながら、今更何を言っているのかというものだが、セレーナは全裸をまじまじと見られるに勝る恥ずかしさを感じたのだった。

勿論、サルヴァ王子にもセレーナの気持ちは伝わっていた。

そしてセレーナと他の寵姫達との違いに、また一つ気付いたのだった。

他の寵姫達は事あるごとに王子に対して

「殿下を愛しておりますわ」

「私は殿下のもので御座います」
と媚びた様に言うが、セレーナが王子に対する感情を言葉にした事など今まで無かったのである。

いや、今回の事も言葉にしたとは言えない。しかし千の言葉を並べ立てるよりも雄弁にセレーナの心を感じる事が出来た。

サルヴァ王子はセレーナをさらに抱き寄せるとその唇に自らの唇を重ねた。
唇から王子の心が流れ込んでくるのをセレーナは感じた。

王子はきっと数日後には他の寵姫の部屋に足を向ける。それはセレーナにも分かっている。
しかしこの瞬間は王子は紛れも無く自分を愛してくれている。いや愛し合っている。セレーナは強く信じた。

第１９話：後宮の邂逅（６）

セレーナが後宮に入ってから２年の歳月が流れた。

後宮の寵姫の数はさらに増え２３名となったが、もはや誰もがサルヴァ王子の最も寵愛あついのはセレーナ。そう見ていた。

そうなると自然セレーナの周りには取り巻きの様な者が集まってくる。

セレーナに自分の周りに取り巻きをはべらす趣味は無いが、どの様な思惑の者であれ自分に親しげに近寄ってくる者を遠ざけるなど、セレーナには出来ない事だったのである。

そしてセレーナはその者達から宮廷女の戦い方と言う、王子からすれば余計な事を吹き込まれ、僅かながらも毒された感もある。

だがそれでも彼女は王子に愛され幸せな日々を送っていたのだが、ある日その幸せは陰りを見せた。

陰りは２４人目の寵姫がもたらした。

かつて後宮は、権勢を誇っていたヴァレリア嬢のグループと反ヴァレリアグループ。さらにその他グループと居える物が存在し、セレーナはその他グループに属していた。

そして新しい寵姫が来ると自然その他グループが面倒を見て、その後グループに留まるか他のグループへと移るといった流れだった。

その経緯でセレーナは新しく来た２４人目の寵姫の世話をする心算だったが、その寵姫は他の寵姫達の集まりにも参加せず、庭を散

策する事も無い。

セレーナはどうなされたのだろうと心配になったが、自分が後宮に来た時の事を思い出し、気恥ずかしさに部屋に篭っているのだろうと判断した。

ならば今はそっとして置きべきだった。

だがしばらくしてサルヴァ王子の様子が変わったのに気付いたのである。

自分を抱く王子が上の空とまではいかないが、他の者に心奪われていると感じたのである。

他の寵姫を抱いていても自分の傍らに居るときは自分の事だけを愛してくれる。それがセレーナの救いだった。

しかし確かに王子は自分以外の者を思い浮かべていた。

そして今までに無い事が起こったならば今まで居なかった者、つまり２４番目の寵姫であるアリシアが原因なのは間違いないだろう。

もっともこれは若干の誤解があった。

確かに王子はセレーナのみの事を考えずアリシアの事も思い浮かべてはいたが、アリシアに心奪われていた訳ではなく、ましてやアリシアをセレーナ以上に愛しているなどという事は決してない。

もっとも、セレーナを抱きながら他の女の事を思い浮かべているだけで、十分失礼な事ではあっただろうが。

ともかくセレーナはアリシアに対して対抗する決意を固めた。

そして侍女達に命じ、アリシアの事を調べさせたのだった。

「アリシア様は、確かにサルヴァ殿下が特別に命じて後宮にお召しになったのは間違いないのですが、なぜ殿下がアリシア様をお召しになられたのかまでは調べる事が出来ませんでした」

「そう……仕方ないわね」

一番重要な事ではあるが、後宮を管理する役人の口は堅い。王子の意向について詳しく調べられないのは仕方がないだろう。

セレーナはその事については諦め、アリシアの人となりと立ち振る舞いについての報告を受けた。

「アリシア様は、かなり地味な服装をしているようです」

「地味？」

「はい。容姿はそれなりといえるのですが、着ている物が地味なのです。後宮で支給されている服を着ているだけで、自分で衣装を新調したり装飾品で身を飾ったりはしてはいないみたいです」

「そうなの……」

ではどうして王子はそのアリシアという女性を好むのだろう。

もしかして王子の「好み」が変わったのだろうか。

その考えにセレーナは身震いした。

今まで王子が自分の事を一番寵愛してくれているのは自分が王子の好みなのだと考えていたのだ。

しかしその肝心の王子の好みが変わったとなると手も足も出ない。

王子は地味な女性が好みになったのかしら？
それとも、もしかしたら以前から地味な女性が好みだったのが、後宮に今まで地味な女性が居なかっただけなのかしら？

「私も地味な服装をした方が良いのかしら？」
だがこのセレーナの考えは侍女達の猛反対を受けた。

「いえ。セレーナ様は今までどおりでよろしいのです！」
「その様な人の真似をする事などありません！」

「ども、サルヴァ殿下はその方の様な服装を好まれているのかも知れないわ」
だがまたもや侍女達は抵抗した。

「いえ。殿下は物珍しさに一時的に興味を持たれているだけです」
「そうです。それにセレーナ様には持って生まれた華やかさがあります。服装を地味にしても似合いません」

「そうかしら……」
納得は出来なかったが、侍女達の協力が得られなければ地味な服装をする事は出来ない。セレーナはやむを得ず諦めた。

その後庭に出たセレーナはアリシアを見かける機会を得た。
侍女の一人がたまたま部屋から出て廊下を歩いていたアリシアを庭から目ざとく見つけセレーナに耳打ちしたのである。

あの人が……。とセレーナはアリシアをまじまじと見た。

確かに服装は地味だったが、自分を含めた寵姫達と違いその目は意志の強さを感じさせた。

サルヴァ王子はあの様な女性を好まれるのかしら……。とセレーナを不安にさせる。
王子を失いたくないという気持ちが、セレーナを必要以上に動揺させるのである。

そしてまたしばらくした後、カーサス伯爵を招いた宴がサルヴァ王子主催で開かれる事となり、寵姫達も参加する事になった。

宴の準備はセレーナ以上に侍女達が張り切った。
自慢のお嬢様を美しく飾り立てるのは彼女達にとっても楽しい事なのである。

そして宴当日、着飾ったセレーナはその華やかさにみなの賞賛を集めた。
うぬぼれの強くないセレーナであるが今まで何度も宴には出席し、そのたびに賞賛を受けている。素直にその言葉を受け入れた。

そんな中視線を感じそちらに目を向けると、一人の男性が自分を一瞥したらしいと気付いたが、その男の横にははたしてアリシアが居るのが見えた。
もっとも親しげとは言いがたい雰囲気である。

アリシアの服装は普段の服に毛が生えた程度の物だったが、それがいっそうセレーナの心に火をつける。

セレーナが着飾るのは、王子に着飾った姿を見て欲しいという気持ちが強い。その為、熱心に準備を進めてきたのである。
にもかかわらずアリシアはこの様な時ですら着飾らない。アリシアには着飾らなくとも王子を虜にする自信があるのだろうか？

八つ当たりに近い感情ではあるが、自分が一生懸命になっている事を他人が適当にしているのを知ると、人は自分が侮辱されたと感じるものである。
ましてや適当にしている者に負けるかも知れないともなればなお更だった。

セレーナは意を決してアリシアに近づき、アリシアと対決したのだった。

だが結局その対決はサルヴァ王子の仲裁により決着が付かず引き分けに終わった。

しかしその時見せたアリシアと王子とのやり取りは、セレーナに孤独を感じさせたのである。

セレーナには2人の関係が侵しがたいものに感じられたのだ。
自分はアリシアに勝てないのだろうか？　そうも思ったセレーナだったが、2人が愛し合っているというのとは少し違う気もする。

それに最後にはサルヴァ王子は自分をダンスに誘ったのだ。最終的にはセレーナの勝ちだったはずである
にもかかわらずアリシアは悔しそうな顔一つ見せなかったのだ。

宴の後部屋に戻ったセレーナは侍女達に訴えた。

「あの人はどうしてあそこまで平然としていられるのかしら？」

サルヴァ王子の心を射止めるのが使命である寵姫の一人ならば、最後にセレーナがダンスに誘われた事は、悔しくてたまらない事の

はずである。
顔色一つ変えないアリシアはどういう心算なのか？
最後の最後には王子が自分を選ぶという強い自信があるのだろうか？

種明かしをしてみれば、単にアリシアは王子からの寵愛など求めていない。というだけなのだが、セレーナにしてみれば想像の範囲外である。

寵姫が王子の寵愛を求めないなど、蝶が花を求めないのと同じ事である。

セレーナや侍女達にはアリシアの態度は理解不能だったのだ。

こうしてセレーナと侍女達によるアリシア対策会議は、深夜まで続く事になったのである。

第２０話：ケネスの戦い（１）

ケネスはその日、友人達との集まりに参加していた。

ケネスの父はディアスの叔父であるが、早々に軍人としての未来に見切りをつけ商家へと婿入りし、その息子のケネスも当然商家の子という事になる。

その為ケネスの友人には同じ商家の子が多かったのだが、ディアスの従者として軍部に出入りする様になると自然同じく従者の者達と親しくなった。

彼らはケネスとは違い父も軍人である者が大半である。

信頼できる同僚の将軍に息子を従者にと頼み、そこで修行させると言うのが基本的な流れだった。

そういいう意味ではディアス家の厄介になりながらディアスの従者になったケネスは

「保護者の従者になるなんて甘えている」と陰口を叩かれる事も少なからずあった。

だがそのあたりはケネスも心得ており、図に乗っていると思われる言動に気を付け、爪弾きにされる事も無く周囲に受け入られていた。

もっともその中にはケネスと仲良くする事により、ディアス家との繋がりを目論む者も居たのだが……。

今日の集まりの目的は兵法の勉強会である。

バルバール軍にはディアスは勿論の事、兵法に明るい者が多い。

連年の様に攻め寄せるコスティラに対し半分ほどの国力しかないバルバールである。

確かに天険の地形に守られてはいるがそればかりに頼っては居られない。

物量で勝てないならば、作戦で勝つしかない。

その為兵法の習得は他国に比べても遥かに奨励されているのだった。

集まった彼らはある者は兵法書を読み耽り、ある者は互いに兵法書の一文から問題を出し合った。

ケネスも友人のマルティとその様に勉強をしていた。

ケネスの初陣は遅れているが、本来初陣の時期や正式な騎士になる年齢は大体決まっている。

従者仲間である彼らの年齢も近い者ばかりだった。

マルティもケネスと年は近く1つ年下である。

だが、体力面において兵士には向かない為初陣が遅れているケネスと違い、すでに初陣を済ませていた。

短い赤い髪に茶色がかった瞳を持ち、背はケネスよりも僅かに低いが体格は一回り大きい。

もし二人が戦えばマルティの腕の一振りでケネスは弾き飛ばされ

るだろう。

二人は小さい円卓を挟んで椅子に座り、マルティの問いにケネスが答える。

「向かってくる敵軍の戦塵が低くて広いのは？」
「それは歩兵がやって来るんだ」

「じゃあ、高くて狭いのは？」
「それは騎兵だ」

「敵陣で槍を杖代わりにしている者が多い場合は？」
「敵軍の食料が尽きているんだよ」

「水汲みに来た敵兵が水を汲むより先に自分で水を飲むのは？」
「敵は水不足なんだ」

「敵が使者を送って勇ましげに戦いを挑み、軍勢に出撃準備をさせていたら？」
「それは実は退却しようとしているんだ」

「それでは、和平の使者を送って下手にでて来たら？」
「油断させておいて戦いに挑もうとしているんだよ」

これらの兵法の文言は、本来敵の動向に対しての警句であるが、ディアスがコスティラとの戦いで立てた作戦はこれらの応用と言うべきものだった。

バルバールは国境に軍勢を派遣しさらに使者を派遣するという、ランリエルに対し敵対ともいえる行動を起した一方、結局使者は戦

いを挑むわけでもなく悪戯に交渉を長引かせるだけ。
だがその実、バルバール王都に軍勢を集結させた。

その為、コスティラはバルバールの思惑を、軍備増強をやめさせる為の牽制としてか、さもなくば本当に戦う為のどちらかを目的に軍勢を集結させたのだと判断し、交渉を長引かせているのも軍勢を集結させる為の時間稼ぎだと考えたのだった。

だが、交渉を長引かせたのは軍勢を集結させる為の時間稼ぎであるという事は正解だったが、その攻撃目標はランリエルではなくコスティラだったのである。

こうしてコスティラは、真の攻撃目標が自分達であるとは夢にも思わず油断したのだった。

もっともディアスが常々言う様に今後はコスティラも警戒し、二度とは引っかからないであろうが……。

「さすがだな」
すべての問いに淀みなく答えるケネスはマルティは賞賛の言葉を送った。

「ありがとう。でもやっぱり早く実践に出てみたいな」

「確かに実戦では兵法書に書かれている通りの状況はあまり起こらないから、実戦を経験しないと分からない事も多いな」

「マルティは戦いに出た事があるんだろ?」
自分より年下にもかかわらずすでに初陣を済ましているマルティ

に、内心羨ましく思いつつケネスは問いかけた。

「ああ。前回のコスティラへの侵攻した時に父の同僚のラハナスト将軍の従者としてお供させて貰ったんだ」

「やっぱり書かれている事とは違った？」

「そりゃあ、違うさ」

マルティはそう言って肩をすくませたが、初陣を済ませた者の余裕が感じられたのはケネスの妬みだろうか。

「そうか……。ディアス将軍も兵法は法則を掴んでそこから応用する事が重要って仰っていたけど」

「さすがディアス将軍だね」

現在ディアスは、軍人を目指す少年達の憧れの的というべき存在であり、マルティの声にも尊敬の念が篭っている。

「うん」

「そう言えば、みんな噂しているけど次はコスティラじゃなくてランリエルと戦う事になるらしいじゃないか。ディアス将軍はそれについて何か仰っていなかったか？」

ランリエルと戦う事になるだろうという事は、軍事機密というのも馬鹿馬鹿しいほどに周知の事実としてみなに受け止められていた。

勿論、予想開戦時期や迎撃体勢などは機密という事になっているのだが、それに関しても来年には戦いが行われるだろうと噂し、そして戦いになるならば国境付近であろうと予測した。

「ディアス将軍は、ランリエル軍総総司令官の戦歴を調べているみたい。過去の戦いからどんな癖があるか調べるんだって」

「ランリエルの総司令官ってランリエルの第一王子って人だよな？どんな癖があるって？」

「いや……。それは教えては貰えなかったけど……」

「そっか……」

二人の声には共に残念そうな響きがあるが、それはやむを得ない。

各国情報を得る為、あらゆる事を行っている。

場合によっては軍事機密を得ようと、それを知っていそうな者を誘拐する事すらある。

身内にすら不用意に情報を漏らさないのは、その身内を守る為でもあるのだ。

知らないとなれば敵も手出しをしないものである。

だがケネスにすら漏らしてはいないが、実際ディアスによるサルヴァ王子の戦いについて分析は進んでおり、その傾向を掴んでいた。

ディアスの分析したところ、サルヴァ王子は常に攻勢に出て戦いの主導権を握ろうとする傾向があった。

ランリエル軍がカルデイ帝国を征服する事になった戦いでもその傾向が見られた。

戦いはまず、カルデイ軍が隣国ベルヴァース王国に攻め込んだがそれを援軍として出陣したランリエル軍が撃退。
そしてその余勢をかって逆にランリエル・ベルヴァース連合軍がカルデイ帝国に攻め込み、遂にはカルデイを征服する。と言った経緯で行われた。

だがサルヴァ王子は、まず戦いの第一段階であるベルヴァースに攻め込んだカルデイ軍の撃退にしてからが、積極的に攻勢に出たのである。

この時王子が取った作戦は、重要拠点を攻めている敵主力と戦わず敵の本拠地を突き敵を撤退させる。という兵法の基本とも言うべき作戦だった。

もっともそんな基本的な作戦をカルデイ軍も警戒しない訳もなく、本拠地であるカルデイ帝都ダエンへと続く国境は厳重に守られていた。

その為サルヴァ王子は段階を踏んだ。
サルヴァ王子率いるランリエル軍主力は、まず国境とカルデイ軍主力との中間にある軍事拠点を攻めたのである。

カルデイ軍主力は退路を断たれてはと軍事拠点に援軍を派遣し、そこで連合軍とカルデイ軍とによる激しい攻防が行われた。

その後ランリエル軍は軍事拠点を奪取する事を諦めたのか、王子は抑えの兵を残し今度はカルデイ軍主力へと軍勢を向けたのである。

だが軍事拠点のカルデイ軍は援軍もありカルデイ軍全軍の3分の1にまで達し、ランリエル軍も相応の兵力を抑えに残さざる得なか

ったのだった。

しかしそれこそがサルヴァ王子の狙いだった。

僅かなお供だけを引き連れた王子は、密かに抑えの軍勢に舞い戻ったのだ。

王子は、多勢が居る様に見せかけておけと残す僅かに兵に言い置いて、深夜暗闇に紛れ、抑えに置いていたランリエル軍のほとんどを出陣させたのだった。

ここをほとんど空にしても多勢に見える様に擬態さえしておけば、軍事拠点のカルデイ軍は守りを固め出撃しては来ないと看破していたのである。

そして国境を固めていたカルデイ軍は、突然現れたサルヴァ王子率いるランリエル軍により壊滅したのだった。

サルヴァ王子による軍事拠点への攻撃は、国境を守っていたカルデイ軍の目を他に向けさせ油断させると同時に、国境を攻め落とせるだけの戦力を持った別働隊を、敵にそうとは気付かせずに国境近くで編成する事が目的だったのである。

国境を破られたカルデイ軍は、王都ダエンを攻め落とされてはと退却を開始したが、主力と軍事拠点の軍勢を合流させる事は出来なかった。

カルデイ軍主力と対峙していた連合軍主力はカルデイ軍の先手を打って行動し、カルデイ軍主力と軍事拠点との中間地点を抑さえ、カルデイ軍主力と軍事拠点の軍勢を分断してしまったのである。

合流を断念したカルデイ軍主力は中間地点を押さえたランリエル軍を迂回してカルデイへと退却しようとしたが、その動向はランリエル軍により厳重に監視され、捕捉されていた。

この時カルデイ軍主力は、戦いの初期の軍事拠点での攻防で援軍を派遣した事もあり兵力は削減されている。

サルヴァ王子率いる軍勢は国境を突破した後再度舞い戻っており、さらに中間地点を抑さえていたランリエル軍も出撃した。

結局カルデイ軍主力は2倍近い敵と戦う事を強いられ、壊滅したのである。

余談ではあるが、この時退却を開始したカルデイ軍主力から一人の武将が離脱し、軍事拠点を抑さえていたカルデイ軍に合流し、カルデイ軍主力が壊滅している間に退却に成功していた。

その武将こそがカルデイ帝都ダエンでの攻防戦でサルヴァ王子を敗死寸前にまで追い詰める事になるのだった。

こうしてサルヴァ王子はカルデイ軍からランリエルを守りきるどころか、その軍勢の過半を撃滅する事に成功したのである。

そして今度は逆にカルデイ帝国内へと攻め寄せ、カルデイ帝都ダエンでの攻防戦では一時苦戦しながらも遂には勝利したのだった。

この戦いについてのディアスの感想は「見事だ」の一言だったが、同時に自分との相性の良さを感じていた。勿論、自分に取ってである。

前回のコスティラとの戦いでは攻勢に出たが、本来兵法にあると

ころの「先ず勝つべかざるを為して、以て敵の勝つべきを待つ」つまり、守りを固め敵の隙を待つのがディアスの戦い方である。

これはコスティラとの戦いが以前までは常に防衛線であり、また負ける事は絶対に許されないバルバールの事情だった。

多数の経験があるものが得意となるのは当然と言える。

戦いとは攻めた側に隙が出来るものである。

カルデイとの最終決戦時にサルヴァ王子が苦戦したのも、その攻撃時の隙を突かれたからと言われている。

ディアスもその攻撃時の隙を突く心算だった。

その後ケネスはみなと机上演習とその後の検討会を行った。

だが今日の戦いは上等とは言えなかった。

山々に複数の陣を敷き守備を固めた守り手に、攻め手は一丸となり攻め寄せ守り手の陣を攻め破ったのだが、戦闘決着後の検討絵が良くなかったのである。

「どうして一丸となって攻め寄せたのか?」という質問に対して攻め手は答えたが、その答えは

「敵が分散しているので、こっちは軍勢を集結させて攻めれば勝てると思った」という物だったのだ。

いや、これだけ聞けばもっともかと思われるが、ケネス達が見るところ守り手も巧みとは言えず、攻められている箇所以外の軍勢を

まったく動かさず、完全に遊兵と化していた。

もしその軍勢を動かして攻め手の背後を突いていれば、守り手が勝っていただろう。

攻め手がそれを認識しており、その事に付いての対策も考えた上での攻勢だったなら良かったが、そうで無いならばたまたま勝っただけに過ぎない。

実際の戦いでは文字通り勝った者が勝者であり、勝てばそれで良いとも言えるが、学問の一環としても机上演習では、まぐれでの勝利はまったく意味が無いのである。

ケネスがマルティをちらりと見ると、マルティは肩をすくめて見せ、ケネスも肩をすくめて返した。

第２０話：ケネスの戦い（２）

その後一息ついた彼らは、場所を提供してくれたサウリの勧めでおやつにありついた。

育ち盛りの彼らである。みなは争う様に手を出し、出されたおやつは瞬く間に無くなる。

そして腹を満たした後は、お茶を飲みくつろいでいた。

軍人を目指す、いや、将来の名将たらんとする彼らの話題は、自然当代の名将達のものが中心となる。

そして当代のバルバールの名将といえばディアスである。

「ケネスはディアス将軍から直接兵法をご指南頂く事もあるんだろ？」

早速友人の一人がケネスに問いかけた。

「うん。極たまにだけどね」

ケネスは何気なく答えたが、すぐにあちこちで羨望の声が上がる。

「それは凄い」

「僕も一度で良いからディアス将軍から教えて貰いたいな」

そこへ場所の提供者であるサウリが提案してきた。

「まったくケネスが羨ましいよ。一度で良いからディアス将軍にお越し頂けないかな？」

サウリの意見にみなも一斉に同調する。

「それは良い。ディアス将軍に頼んでみてよ」
「お願いだからさ」

ケネスもみなから羨望の眼差しを受け、そう言われると悪い気はしないが、ディアス将軍に迷惑をかける訳にもいかない。
「いや……ディアス将軍も忙しいし」と断った。

だがみなは諦め切れないのか執拗に食い下がり、ケネスもそれに対して断り続ける。
そういったやり取りが繰り返されていると突然怒鳴り声が響いた。

「あんまり、いい気になってんじゃないぞ！」

みなの視線が怒声の主に集中すると、それは先ほど机上演習で「まぐれ勝ち」した者だった。

「大体ディアス将軍なんて、自分で戦う事もしない臆病者じゃないか！」

怒声の主はさらにそう叫んだが、それに対しケネスも怒鳴り返す。

「それは違う！　ディアス将軍は臆病なんかじゃないぞ！」

するとケネスに続いて、ディアスを尊敬する者達が加勢してきた。

「自分は戦わずに勝つから凄いんじゃないか」
「そうだ。総司令官が自ら剣を持って戦う事こそ恥だ！」

だが怒声の主はさらに叫ぶ。
「叔父上が言っていたぞ。ディアス将軍の真似をして戦おうとしな

い者が増えてきて困るって」

するとそれに同調する声が上がる。

「そうだ。みんなが戦わない様になっては、戦いに負けてしまうだろ！」

「ディアス将軍の真似をすべきじゃない」

まさかディアスを批判する者が何人も居るとは、とケネスが意外に思っていると、マルティが耳打ちしてきた。

「あいつは、タルヴォって言ってシルヴェン将軍の甥なんだ。同調している奴らはその取り巻きさ」

シルヴェンがディアスの事を常日頃中傷しているのは良く知られていた。

それは自分の能力を棚に上げてのディアスへの嫉みだったが、ディアスさえ居なければバール軍曹司令官は自分だとシルヴェンは考えていた。

勿論、ディアスが居なかったとしても無能で有名なシルヴェンが総司令官になる事などありえないのだが、シルヴェン自身はそう信じているのである。

そして甥にもその事を吹き込んでいたのだった。

タルヴォはシルヴェンの姉の息子である。

体格が良く、身長ばかり高くて身体の線は細いケネスと違い、身長はケネスと匹敵し、横幅は叔父のシルヴェンに匹敵した。つまり

けっこうな巨漢である。

髪と目の色は叔父と同じくこげ茶と黒である。

ケネスも初めは気付かなかったが、言われてみれば確かにシルヴェンを若くしたらこうなるのではないか？　と見えなくも無い。

そして、現当主は不甲斐ないが、軍部でのシルヴェン家の影響はまだまだ大きい。

そのおこぼれに預かろうという者も少なからず居たのである。

もっともその様な者達は、自分の才能に自信の無い者や、シルヴェンのい様に名門の血筋を誇る者達ばかりだった。

大国に囲まれたバルバールでは、血統だけを頼りにつける職など高が知れているのだから。

新ディアス派と反ディアス派との口論は続き、当初は双方それなりの根拠を持った言葉の応酬だったが、次第に感情的な中傷へと変わっていった。

そして遂に決定的な一言がタルヴォから放たれた。少なくともケネスにとっては。

「ディアス将軍なんて、１２歳の女の子を嫁にする倒錯家じゃないか！」

「なんだと！」

タルヴォの言葉に激怒したケネスは、タルヴォに飛び掛った。

しかし残念な事に体格の差はいかんともしがたく、飛び掛った勢いでタルヴォをぐらつかせはしたが、あっさりと踏みとどまれてしまう。

タルヴォはケネスの両肩を掴むと無造作に「ふん！」と地面に向かって振りぬき、ケネスを床に投げ飛ばした。

「ぐっ！」

床に叩き付けられたケネスは、その衝撃に声を上げた。

全身を打ち付けた痛みに体中が軋む。

「ディアス将軍の甥がこの程度じゃディアス将軍も高が知れているな」

タルヴォの嘲笑にケネスは唇を噛んだ。

自分が不甲斐ない所為でディアスが馬鹿にされるとは、とケネスの目に悔し涙が滲む。

そこへマルティの声が上がる。

「じゃあ、シルヴェン将軍の甥はどの程度って言うんだ？」

「今のを見ていなかったのか！　俺がどの程度かは、そこで倒れている奴と比べて見るんだな」

だがマルティはシルヴェンの言い分を鼻で笑った。

「ふっ。俺達は将来一軍を率いる将軍になる事を目指しているんだろ？　だったら力で勝ってもしょうがない。ケネスに勝ってると言うなら、知略で挑むんだな」

「知略でだと」

「そうだ。ケネスと机上演習でもしてみるか？」

「ちっ！」
マルティの言葉にタルヴォは小さく舌打ちをした。

ディアスの薫陶よろしくさらに勉強熱心なケネスは、元々軍人の子であるみなと比べ当初は出遅れていたが、今では仲間内でも一、二を争うほど机上演習は強い。

机上演習で戦えばタルヴォはケネスの敵ではないのだった。

舌打ちをした後黙り込んだタルヴォを無視して、マルティはケネスと助け起すべくケネスに近寄る。

だがそこにタルヴォの取り巻きの一人がタルヴォに耳打ちをし、何を吹き込まれたのかタルヴォはにやりと笑う。

「ああ、良いぜケネスと戦おうじゃないか」

「なに？」
上半身を起したケネスの肩に手をやり、助け起そうとしていたマルティがタルヴォの声に振り向き驚きの声を上げた。
力比べ以外にタルヴォがケネスに勝てるとは思えないにもかかわらず、戦いを挑むタルヴォにマルティは驚いたのだ。

「ただし机上演習じゃなく、俺とケネスを大将に実際に軍勢を率いて戦うんだ！」

ケネスとマルティは顔を見合わせた。

「シルヴェンの甥とかいうのと戦う事になったんだって？」
ディアス家の晩餐の場で料理に舌鼓を打ちつつディアスが問いかけた。

今日の料理もミュエルが手伝った。
メインはチキンのチョコレート煮である。
以前にはチキンのオレンジ煮を作った。

どうしてこの娘は鶏肉を甘いもので煮るんだろう。とディアスも思わないでもなかったが、実施食べてみると意外と旨いので特に問題ない。

「……ええ。そうなんです」
ディアスの言葉にケネスは力なさげに答えた。

「まぁでも、どうしてその様な事になったんですか？」
ミュエルが驚いた様な声を上げたが、ケネスは返答に窮した。

ディアスがミュエルを妻にした事を馬鹿にされたからとは、とてもではないが言えるものではない。

「いや……。まぁ売り言葉に買い言葉で……」と言葉を濁す。

ディアスは見透かした様ににやりと笑う。
「それで勝算は？」

だがそれに対するケネスの答えはやはり力ない。
「それが……どうやったら勝てるのか分からなくて」

「そうなんですか？　だって机上演習とか言うのではケネス様の方がお強いんですよね？」

ミュエルの問いかけにもケネスはやはり力ない。

「それはそうなんだけど、軍勢って言ってもお互い１０人ずつなんだ。これじゃ作戦も何も無いよ……」

「それで武器は？」

「全員槍です」

ケネスの返答に、にやにやと笑いながらディアスが口を開く。

「それじゃあ軍勢を率いての戦いと言っても、作戦の差し挟む余地はなく強い者が勝つって事かい？」

「ええ。そうなんです」

「まぁ……」

ケネスの事を家族として好意を持っているミュエルであるが、そのミュエルから見てもケネスが強いとは思えず、かける言葉が無かった。

「そのタルヴォって言うのが向こうでは一番強いんだな。こっちは同じくらい強い奴はいるのか？」

「マルティが強いです。同じくらいかは分かりませんが……。体格ではタルヴォに負けていますが、マルティは動きも早いですし、勝てないまでも一方的に負ける事は無いと思います」

「なるほど」とディアスは頷く。

「ディアス様、ケネス様に何か助言して差し上げてはどうでしょうか……」
ミュエルの遠慮がちな提案に、一瞬ケネスの顔に希望が浮かぶ。
だが……。
「いや、それは出来ないな。実際の戦いでも誰かに教えて貰いながら戦う心算かい？」
とディアスはにべもない。
一瞬期待したケネスは、顔を赤らめ俯いた。
「そうですか……」
ミュエルもつまらない提案をしてしまったと意気消沈した。
二人の様子に、冷たすぎたかな？　とディアスは苦笑する。
食事もすっかり終わると、この後はミュエルの勉強をケネスが見てあげる時間である。
「それでは、邪魔者は席を外そう。私が戻ってくるまでに片付けておくんだよ」
ディアスはそう言って書斎へと向かうべく席を立つ。
「あ。はい。行ってらっしゃいませ」
「はい。分かりました」
二人に見送られ、食堂に出る扉をくぐりながらちらりと二人に振り向く。
まぁ、この程度の助言なら良いだろう。ケネスが気付かないなら、

それはもう仕方が無い。
もっとも、これを助言と受け止めるには余程感が良くなくては難しいだろうが……。

第２０話：ケネスの戦い（３）

決戦の日を数日前に控え、ケネスは従者の仕事の合間に槍術の稽古に励んでいた。

見てくれているのは当然ディアスではない。

初めはケネスも遠慮がちにディアスに対し槍の稽古をつけて貰えないかと申し入れたのだが、ディアスはケネスの肩を叩き首を振った。

その目は「むちゃを言うな」と訴えていた。

ディアスは歴代のバルバール軍総司令官で第一の名将ではないかと称される反面、歴代のバルバール軍総司令官で一番個人戦闘が弱いのではないかとも言われているのだった。

ケネスはタルヴォに勝つべく稽古をしているのだが、下手をすればそもそもディアスがタルヴォに勝てないかも知れないのである。

それでは誰がケネスの槍の稽古を付けてくれているかと言えば、エスコ・ヒルヴィストという仕官で、以前新兵の訓練についての見事さでディアスに褒められた人物である。

結局ディアスは、その者を一軍の仕官として抜擢したのだった。

意外と若くまだ２０代半ばという。

背も高く、標準的な身長を超えるケネスよりもさらに僅かばかり高かった。

赤みがかった茶髪に、濃い茶色の瞳を持ち顔も中々整っている。

際立って体格が良いという訳ではないが、それでも十分水準以上には鍛え上げられている。むしろ無駄な贅肉がないと言った方が適切だろう。

実はヒルヴィストは結構な名門の出である。

とはいえ、ディアスやシルヴェンの様に武門の名流という訳ではなく、貴族の名門の出なのだった。

ヒルヴィストは軍人を目指しディアスに認められた事からも分かる様に才能もあったが、ヒルヴィストの両親はいつ命を落とすかも知れない軍人になる事に反対した。

しかしヒルヴィストは両親の反対を押し切り無理やり軍人となったのである。

だが両親にとっては、やはり跡取りが亡くなってしまってはと気が気でない。

結局両親は、多額の金品を使い裏から手を回したのである。

息子を戦死する危険の無い、新兵の訓練所の教官になるよう働きかけたのだ。

その為、訓練所の教官から一軍の仕官へと抜擢したディアスはヒルヴィストに感謝される一方、ヒルヴィストの両親からは恨まれたのであるが、そこまではディアスも知らない事だった。

作戦においてはケネスに助言する事を断ったディアスだが、槍の稽古については手を貸してくれヒルヴィストを紹介してくれたのである。

「助言を受けながら戦うのは論外だが、戦いの前に訓練するのは当

然だ」
ディアスはそう言ってケネスの特訓に手を貸してくれたのである。

「千単位。せめて百単位の歩兵ならば全員長槍を持って密集隊形を組んで突撃するのが通常だが、１０人では短槍を持つのが良いだろう。長槍は懐に入られたら終わりだ。名人は長槍でも巧みに使い懐に入られても戦えるが、ケネスにはまだ無理だろうからな」

「はい」
ヒルヴィストの言葉にケネスは素直に頷く。

実際にわかに特訓したところでケネスがタルヴォに勝てる様になるとは思えないが、出来る事はすべてやって置くべきだろう。

しかしやはりケネスには武芸に対しての才能以前に、体力が追いつかない。
すぐに根を上げた。

ヒルヴィストを相手に槍を打ち込んでいたのだが、それが１００本といかぬ内に槍を取り落としたのである。

「すみません！」
ケネスはそう言って槍を拾おうとしたが、手が滑ってまた取り落とした。

その様子にヒルヴィストはため息を付いた。
「どうやら基礎体力から鍛えた方が良さそうだな」

「はい……」

結局ケネスは槍の稽古と言いながら、その稽古の時間の大半は基礎体力作りにと、長距離を走る事に費やされたのだった。

そして決戦の日。

「良く逃げなかったな！」
型どおりとも言える台詞を吐いたのは当然タルヴォである。
戦いは王都の郊外にある林に囲まれた広場で行われる事となった。
両軍１０名ずつ。それぞれが槍を持っているが、ケネス隊はヒルヴィストの助言どおり短槍を持っているのに比べ、タルヴォ隊は通常兵士が持つ様な長槍を構えている。
勿論、双方槍と言っても穂先は取り外し、命の危険は無い。
両軍以外にも見物として多数の少年達が戦いを見守っている。

「ケネスがんばれ！」
「タルヴォに負けるな！」
と彼らから声援が上がるのが、その内容はケネス隊に対してのものばかりである。
タルヴォ隊の面々には面白くないがこれは仕方がない。

そもそもなぜ１０名ずつで戦う事になったかというと、やはり彼らの中でディアスの人気は高く、ディアスを批判しているタルヴォ派はタルヴォと取り巻き合わせて１０名しか居なかったのである。

その為、ケネス隊もタルヴォ隊にあわせて１０名に絞ったのだ。
そうなるとタルヴォ派全員が戦いに出ている為、見物人からタルヴォ隊への声援が無いのは当たり前なのだった。

ケネスは自分に声援を送ってくる者達に手を振って答えた。
そしてタルヴォを見てにやりと笑う。まるで味方が沢山居る事を自慢するかの様に。

「いい気になるなよ。ケネス！」
タルヴォは怒鳴ったが、ケネスは平然としたものだった。

「別にいい気になってなんて居ないさ。応援してくれている人に手を振って何が悪いんだい？」
そう言って肩をすくめさらににやりと笑う。

タルヴォがケネスを激しく睨んだ。

「それではじめるけど準備は良いか？」
そう言ったのは審判を勤めるサウリである。

サウリの言葉にケネスとタルヴォは軽く右手を上げる。了解の合図だ。

「では。初め！」

サウリの掛け声と共にタルヴォが飛び出した。
「ケネス！　覚悟しろ！」

開始前のケネスの態度に腹を立てていたタルヴォは、真っ直ぐケネスに向かってくる。

両軍の大将は当然ケネスとタルヴォが務めている。ケネスがタルヴォに討ち取られてしまってはケネス隊の敗北である。

「ケネス危ない！」

見物人から叫び声が上がる。

だがタルヴォが近づくと、なんとケネスは背を向け逃げ出したのだった。

「はっ！　情けないぞケネス。それとも戦わないディアス将軍の物まねか！」

タルヴォはケネスを追いかけながら、ケネスの背に嘲笑を浴びせえた。

ケネスはタルヴォの言葉に腹を立てながらも、歯を食いしばって耐え逃げ続け、林の中に入り込んだ。

短槍を手に林の中を駆け抜けるケネスをタルヴォは追うが、手にした長槍が邪魔で仕方が無い。

時には木の枝に長槍を絡め取られ槍を取り落としてしまう。

今戦えば勝てるかも！　という誘惑に耐え、ケネスはさらに逃げ続けた。

「いつまで逃げ続ける気だ！　臆病者め！」

木が邪魔で思う様にケネスを追いかけられないタルヴォは苛立った様に叫んだが、やはりケネスは逃げ続ける。

「実際の戦いでも敵が逃げる事はあるだぞ！　敵に、待ってくれ！とでも言う心算か！」

ケネスは珍しく声を荒げタルヴォを挑発しつつさらに逃げる。

「貴様！」

その挑発に乗ったタルヴォはさらにケネスを追いかけ続けるが、はやり長槍が邪魔になりケネスと距離が広がるばかり。

ケネスとタルヴォが走り疲れてくたくたになったころ、やっとケネスは元の場所。つまり広場へと戻った。

そこには7人の少年達がケネスを待ちかねていた。

マルティがへとへととなったケネスに声をかける。

「遅かったな。こっちはとっくに、邪魔者が居ないうちに片付けておいたぜ」

へとへとになりながらもケネスは、マルティに笑顔を向ける。

「いや、万一こっちがまだだといけないと思って、長めに走ってたんだ」

ケネスの言葉にマルティは苦笑した。

「まぁ、じゃあ後は任せておけ」

ケネスに遅れてやっとタルヴォも広場に戻って来たが、その光景に我が目を疑った。

「他の奴らはどうした！？」

広場に立つ7人の少年達はすべてケネス隊の者達だったのである。

両軍の大将はケネスとタルヴォだが、戦力としてみた場合タルヴォ隊の主力はタルヴォ自身だが、ケネス隊の主力といえるのはケネスではなくマルティであり、むしろケネスは最弱である。

ケネス隊は最弱の戦力で、タルヴォ隊主力を引き付けたのだった。

しかも、ケネスは大将である自分が不在になる事を見越し、マルティを副将として自分がいない間の指揮を任せた。

だがタルヴォが不在となる事など想定していないタルヴォ隊は、タルヴォの代わりに指揮する者も決まっていなかったのである。

結局、ケネスとタルヴォを除いた9名ずつの戦いは、タルヴォという主力と指揮官を欠いたタルヴォ隊の一方的な敗北に終わったのだった。

ケネス隊の損害は2名だけである。

マルティを初めとするケネス隊の面々は、ケネスを守る様に広がってタルヴォに短槍を構える。

この期に及んで、万一ケネスがやられてしまっては馬鹿馬鹿し過ぎるというものである。

「貴様らどけ！　ケネスと一騎打ちをさせろ！」

タルヴォは叫んだが、勝利を目前とした軍勢の大将が、ただ一人となった敵将との一騎打ちに応じる訳がない。

「悪いな」

マルティが短く言うと、ケネス隊7名はタルヴォを取り囲んだ。

「ちくしょっっう！！」

タルヴォが叫び、まるでそれが合図かの様にケネス隊7名は一斉にタルヴォに対し槍を繰り出した。

タルヴォの巨体は7本の槍に突き立てられ吹っ飛んだのだった。

「おめでとう御座います」

晩餐の場で勝利の報告をするケネスに、ミュエルが笑顔で言う。

ミュエルの言葉を嬉しく思いながらも、微かに胸がチクリと痛んだ。

やはりまだまだミュエルへの想いを完全に思い出へと昇華させているとは言い難く、この笑顔が恋人として自分に向けられる事が無いと思うと微かに胸がうずく。

だが表面上はおくびにも出さない。

「ありがとう」とケネスも笑顔を作り礼を言った。

「よくやった」と言うディアスにも、ケネスは身体ごとディアスに向き直り

「ありがとう御座います。ディアス将軍のおかげで勝つことが出来ました」と礼を言う。

「ディアス様のおかげで？」

不思議そうに言うミュエルに、ケネスは視線をディアスからミュエルへと移した。

「ディアス将軍のご助言のおかげで勝つことが出来たんだよ」

「まぁ！」

ケネスの言葉に嬉しげに声を上げると、ミュエルは顔をほころばせてディアスを見つめた。

なんだかんだ言っても、やっぱり自分の夫はケネスを見捨てたりはしなかったのだ。そう思うと、自分がその妻だという事にも嬉しくなる。

だがそれに対しディアスはそ知らぬ顔である。

「さて、何の事かな？」

そう言うとディアスは、ミュエルの作ったチキンのミルクシチューを口に運んだ。

第２１話：償えぬ過ち

カーサス伯爵を歓迎する宴でセレーナと衝突したサルヴァ王子の後宮の寵姫であるアリシア・バオリスは、その後セレーナの取り巻き達からの嫌がらせに辟易していた。

取り巻きとはどの様な者達かといえば、王子からの寵愛をセレーナと争うのは諦めその代わりセレーナに取り入り、そのおこぼれに預かろうという者達である。

セレーナはかもすれば王妃にもなろうかと言われ、もし王子が他国の王女を娶る為とセレーナを王妃にしなくとも、王子は王妃よりセレーナを寵するのではないかとも噂されていた。

もはや後宮でセレーナと王子からの寵愛を競おうなどという大それた者など存在せず、ある者はならばせめておこぼれに預かるべくセレーナに近づき、ある者は万一の逆転に望みをかけセレーナより先の懐妊に望みを託した。

その為過去には他の男に通じて妊娠し、それを王子の子と偽った寵姫すら存在したのである。

もっともこのたくらみはその寵姫と男の間で成功報酬について折り合いが付かず事が露見した。

「次期国王の子を産むとなればたんまり金が入るんだろ？」

そう言って金をせびる男に、始めはその寵姫も大人しく金を払っていたのだが、遂には払いきれなくなったのである。

確かにその寵姫の実家は裕福な伯爵家ではあったが、まさか妊娠

している子供の本当の父親に払うので金を送って欲しい。と言えるわけも無い。

寵姫は手持ちの金がなくなると支払いに窮したのである。

男と寵姫の、払え、払えない、というやり取りは何度も繰り返されそして始めは慎重に連絡を取り合っていた2人だったが、長期のやり取りに遂に緊張の糸が切れつい通常の手紙として相手に返事を送ったのだった。

だが実は後宮でやり取りされている手紙はすべて後宮を管理する役人によって検閲されていたのである。

尊厳の侵害もはなはだしいが、万一重要な国家機密を漏らす事も考えられるし、また今回の様に王子以外の男と通じているという事を見張る為もあった。

役人は寵姫が出す手紙と寵姫宛てに届いた手紙の封印を、職人技ともいえる手際で痕跡を残さず開け、手紙を謁見し内容に問題がなければまた封印をおこなって、何食わぬ顔で手紙を元に戻すのである。

そして寵姫が孕んだ子供がサルヴァ王子の子では無い事を掴んだのだった。

他の男の子を王子の子と偽るなど、本来死罪となってもおかしくない大罪である。

しかし王子は事態をあまりにも馬鹿馬鹿しく感じ、また他の男の子を自分の子と偽られたなど自身の物笑いの種になると、事を秘匿する様に命じたのだった。

結局王子の子は死産だったと公表され、寵姫は「その後」死産したショックから他の男と通じたとして後宮を追放された。
男は王子の寵姫に手をつけたとしてその罪を問われたのだった。

ある時アリシアが、今日は冬にしては日差しが暖かく散策するにはちょうど良いと珍しく庭に出てみると、遠くからクスクスという笑い声が聞こえる。
声のする先へと目を向けると着飾った数人の女性が自分を見ていた。

「あれが地味で有名な……」
「私、下賤の娘が迷い込んで来たのかと思いましたわ」
「殿下も物好きな事でございますわね」

アリシアは、わざと自分に聞こえる様に喋っている女性達に一瞥をくれたが、相手をせずに無視をする事に決めた。
セレーナとの事もあり、自分とは相容れない人種なのだと判断していたのである。

せっかくの良い気分が台無しとなったアリシアは後宮の建物にある自室へと向かったが、嘲笑を与えてくる寵姫達はなおも彼女を追った。
アリシアと同じ様に後宮へと足を向けながらもなおもアリシアを馬鹿にする様な事を言い続けているのだ。

気分を害して後宮へと進むアリシアだったが、ここで足を速めるのも逃げる様で癪に障る。あえて急がず歩を進めていたが、そこになんと親玉が現れた。

後宮へと向かうアリシアに対し、今まさにセレーナが後宮から出来てきたのである。

思わず舌打ちをしそうになったアリシアだが、それはさすがに下品すぎると我慢する。

挟み撃ちされた形になったアリシアだったが、我関せずとセレーナの横を通り過ぎ様としたのである。

しかし意外にもアリシアとセレーナの距離が縮みお互い間近まで近寄ると、セレーナは立ち止まった。しかも笑顔でとは言えないが丁寧に

「こんにちは、アリシア様」と挨拶までしたのだった。

アリシアにとっては予想外と言っても生ぬるい。とてもとっさには反応できず、セレーナの顔にちらりと視線を向けただけで、つい無言でセレーナの横を通り過ぎてしまったのである。

だがこの事はアリシアを嘲笑した寵姫達よりも遥かに彼女を傷つけた。

自分を嘲笑した寵姫達には、彼女達に対して「なんて嫌な女なんだろう」そう思うだけだった。

しかし……セレーナの行動はアリシアに、自分こそ嫌な女なのではないか。そう思わせるに十分だったのである。

アリシアはセレーナの横を通り過ぎた後、苛立った様な表情で後宮へと入ったのだった。

一方セレーナの方と言えば、たとえ関係はどうあれ、挨拶くらいはすべき。そう考えたのだが、どうやら差し出がましかったらしい。と表情を曇らせていた。

そして改めて前を向くと寵姫仲間というべき女性達が居たので、彼女達へと近づき改めて笑顔で挨拶を行う。

「こんにちは、皆様」

すると寵姫達もセレーナに対し、口々に挨拶をする。

「セレーナ様。こんにちは」

「相変わらずお美しい事ですわね。羨ましいですわ」

「今日はいい天気で御座いますわね。セレーナ様も散策で御座いますか？」

「はい。そうです。皆様はもうお帰りですか？」

彼女達の足は、アリシアを追いかける為後宮へ向かっていたのでセレーナはそう思ったのだが、実際はアリシアを追いかけていただけであって、彼女達も後宮へ帰る心算はない。

「いえ。セレーナ様が散歩なさるならご一緒しますわ」と、セレーナの取り巻きとしての存在意義を発揮する。

「それではご一緒しましょう」

こうしてセレーナを加えた一団は改めて庭へと向かったが、アリシアがセレーナの挨拶を無視した事を目ざとく見逃さなかった一人の寵姫が口を開く。

「セレーナ様が折角挨拶をして下さっているのに、まったくあの娘はなんて無礼なのでしょう」
するとつかさず他の寵姫達も便乗した。
「まったくですわ。下賤の身分の癖にサルヴァ殿下の寵を盾に身の程も弁えずセレーナ様に無礼を働くなんて」
「いえ。殿下の寵などと言ったものではありませんわ。ただのもの珍しさに関心をお持ちになっているだけに決まっておりますのに」
彼女達の思考では、セレーナの敵であるアリシアを彼女の前で扱き下ろす事は、セレーナに対しての点数稼ぎになる。そう考えているのである。
もっとも彼女達にも誤解がある。
実際サルヴァ王子がアリシアの部屋へと足を向けたのは一度きりであり、目をかけているとはとても言えない状態だった。
セレーナがアリシアに対し危機感を持った事により自分の侍女へアリシアの事を調べる事を依頼し、そして侍女達の情報網からそれぞれの侍女の主人である寵姫に王子がアリシアを寵愛している。という情報が伝わったのだった。
女達の情報伝達の速さは男には計り知れないものがあるのである。
だが、彼女達の追従に、セレーナは眉をひそめた。
セレーナとてアリシアは自分の敵と認識している。
しかし戦うというならば本人と直接対決すべきであるし、サルヴァ王子からの寵愛を奪い合うというならば、アリシア以上に王子に

尽くすなり、王子の好みに合う様に努力するなりすべき。
それがセレーナの考えるアリシアとの戦いだったのである。

だいたい本人の居ないところで彼女への悪口を言っても何も変わる訳がない。むしろ自分の良心が痛むだけ。そうセレーナは考えているのだった。

だが寵姫達に彼女の考えは理解できず、セレーナが表情を曇らせたのも自分達の都合の良いように解釈をした。

「あら。セレーナ様とあの女を比べるもの失礼でしたわね」
「これは失礼致しましたわ」
「セレーナ様にはあのような女の話を耳にするのもご不快ですのにね」

実際はアリシアの話と言うよりも、本人の居ないところでの悪口がセレーナの心に沿わないのであるが、寵姫達にとってアリシアの話はすなわちアリシアへの悪口である為、同じ事である。

「ええ。まぁ……」とセレーナにしては礼儀正しいとはいえない曖昧な返事をする事しか出来なかった。

そして話題を女性らしいお菓子やお茶の話と変え、庭にたどり着いた彼女達は庭に備えられた椅子に座り、侍女に運ばせた話題通りのお菓子とお茶を楽しんだのだった。

挨拶をしてきたセレーナに対し、自身の心の狭さに自己嫌悪に沈んで自室に戻ったアリシアを、お付の侍女のライヤが待ち受けていた。

アリシアも一応は後宮の寵姫の一人である為、専任の侍女が付けられている。

もっとも他の寵姫達は自分の実家から侍女を呼び寄せており、王宮から侍女を派遣されている寵姫はアリシア一人だけだった。

しかもこのアリシア付きの侍女は従順とは言い難く、隙を見ればサボってばかりだったのである。

だがライヤにも言い分はあった。

「どうして自分より身分の低い者に仕えなければならないのかしら」と。

王宮で働く侍女ともなればそれなりの身分の者しかなれない。

それなりと言っても、爵位のある貴族の子女とまでは行かないが、下級貴族や裕福な家などの「身元のはっきりとしている家」の出の者に限られている。

確かにアリシアの様な下級貴族のさらに遠縁の両親も居ない娘と比べれば、身分が上と言えた。

だがアリシアにとってはずっとお付の侍女が自分の傍に居ることの方が煩わしく、必要のない時以外はどこかに行ってくれていた方が気が楽だった。

基本的に自分の身の回りの事は自分で出来るアリシアに取って、侍女が必要な事など殆どないのであるが。

その滅多に必要で無い侍女がアリシアを部屋で待っていたのは、

やはり滅多にない侍女にしか出来ない役目を果たす為だった。

とはいえ難しい仕事ではない。

王宮に届いたアリシア宛の手紙を届けに来ただけである。

「お手紙が届いておりました」

どうやら自分より身分の低いアリシアを様を付けて呼ぶのも嫌らしく用件のみを口にするライヤから、アリシアは手紙を受け取った。

そしてあえてにこやかに口を開いた。

「それはありがとう御座います。ライヤさん」

我ながら人が悪いと思いながらも、先ほどセレーナからの挨拶を無視した事により自分の狭量さを思い知らされたアリシアは、ライヤに対して同じ攻撃をしてみたのである。

ライヤはまさか丁寧にお礼を言われるとは思っても居なかったのか、アリシアから目を逸らし「いえ……」とだけ言うと微かに頭を下げて部屋を後にした。

ライヤの背を苦笑しながら見送ったアリシアが手紙の送り主を見ると、恋人だったリヴァル・オルカの母親からだった。

アリシアは、後宮に入った事で貰える年金の殆どをオルカ家へ送っていたのである。

手紙はその事についてのお礼の手紙だった。

リヴァルの母親は筆に優れた人と言う訳でもなく、手紙の内容も送金について淡々と礼を言うのみのありふれた内容である。

にもかかわらずアリシアはその手紙に書かれた些細な事に、涙を溢れさせた。
手紙の最後に「アリシア・オルカへ」と書かれていただけの事に。

アリシアが手紙を受け取る数日前、ランリエル王国第一王子であるサルヴァ・アルディナは、執務室で後宮を管理する役人からお伺いを受けていた。

「私に確認したい事だと？」

役人は王子の問いかけに低頭し答える。

「はい。その通りで御座います」

「どの様な事だ？」

「はい。実は寵姫の一人であるアリシア・バオリス様の事で御座います」

「アリシアが何かしでかしたとでも言うのか？」

アリシアに対しあまり良い感情を持っていない王子は、偏見を持ちつつ役人に問いかけた。

役人は頭を下げたまま遠慮がちに口を開く。

「いえ……。しでかしたと言いましょうか。殿下がご認識していらっしゃるのかと思いまして……」

「ほう。私がどの様な事を認識しているというのだ？」

「はい。アリシア様は独身という事でしたが、実は結婚しているのではと。殿下がそれを承知していらっしゃるならよろしいのですが……」

後宮には未婚の女性だけではなく、未亡人や時には人妻まで入る事もある。アリシアが未亡人でも人妻でも問題はない。王子がそれを認識しているならば。

後宮の主であるサルヴァ王子が、アリシアを未婚と思っていたにも拘らずそうでないなら大問題である。

だがアリシアの婚約者だったリヴァル・オルカはカルデイとの戦いで命を落とし、そしてオルカの兜は今も執務室に飾られている。

「いや、間違いなくアリシアは独身のはずだ」

だが役人は納得しかねる様に困惑した表情を見せた。

「しかし、この様な手紙がアリシア様のところに送られてきたのです」

「アリシアへ手紙が？」

「はい。これがその手紙です」

役人はそう言って王子にアリシア宛の手紙を差し出し、王子も受け取る。

人の手紙を読む後ろめたさを感じぬ訳ではないが、後宮とは、いや王宮とはそういうもの。個人の尊厳などよりも王族の知る権利の

方が優先されるのだった。

手紙を一読した王子の顔色が蒼白に変わる。

常に泰然とし動じない王子の動揺に役人は口を開く。

「どうで御座いましょう。宛名の性がバオリスではなく、オルカとなっているのです。これは結婚しているか未亡人であるという事ではないかと……」

「……あ、ああ」

そうは応じたものの、顔色を変えた理由は手紙の宛名についてではなかった、手紙の内容そのものについて王子は衝撃を受けたのだった。

「いかが致しましょう？　アリシア様は独身ではないかも知れないのですが宜しいでしょうか？」

「ああ、構わん」

だが王子の動揺は収まらない。声も僅かに震えていた。

「かしこまりました」

と役人は一礼したが、頭を上げた後困惑気味に王子へ視線を向けた。

「手紙をお返し頂けますでしょうか……。問題が無いのならばアリシア様へ届けなければなりません」

「そうだな。すまん」

王子はそう言って震える手で手紙を役人へと差し出した。

サルヴァ王子ともあろう者が、手紙を返さなくてはならないとい

う事を失念していたのである。

「それでは失礼致します」

役人は再度一礼し王子の執務室を後にする。

そして王子の態度について次の様な感想を持ったのだった。

やれやれ、サルヴァ王子のあの様子ではきっと本当はアリシアが独身で無いとは知らなかったに違いない。

それをあそこまで取り乱しながらも許すとは、そこまで王子はアリシアに溺れているのか。

執務室に残されたサルヴァ王子はアリシアに対して行った自分のさまざまな仕打ちを思い出していた。

王子はアリシアが後宮に来たのは金に目が眩んだ為と思っていたのだ。

だがそれは両親を、それもリヴァル・オルカの両親を養う為だったのである。

にもかかわらず王子はアリシアの身体を汚し、さらに売女と罵倒し、廊下ではその衣服を引き裂いたのである。

王子の胸中に飛来したのは深い慚愧の念だった。

決して犯してはならない愚かな過ちに、戦場の雄であるサルヴァ・アルディナは全身を苛まれたのだった。

拳を握り締め唇を噛み締める王子の背後に、リヴァル・オルカの兜が鈍く光っていた。

第２２話：叛乱（１）

その日、サルヴァ王子は執務室でランリエルとカルデイとの関係に楔を打ち込もうとする者達の調査を命じていたカーサス伯爵からの報告を受けていた。

伯爵はサルヴァ王子が主催した宴の後、あえて定まった住居を持たず自分にする寄ってくるランリエル貴族からの招きに応じ、その者達の屋敷を転々としたのである。

伯爵を屋敷に招く以上、本心から歓迎しているか、さもなくば伯爵を失脚させる為手元に置いて探ろうとするかのどちらかだろう。

自分を失脚させようとする者を探るのに大胆な、害される事を考えないのか？　とも思われるが

「表立ってサルヴァ王子に敵対せず影から足を引っ張ろうとしている者がその様な手段には出るまい」と伯爵は高をくくっていた。この点伯爵も胆力に優れている。

もっとも貴族達の屋敷を渡り歩くのに、次はどの貴族の屋敷に招かれているかを周囲の者達に明らかにする事を伯爵は怠らない。

「もし屋敷に誘き寄せて私を害する気でも私が屋敷に入る事はみなも知っている。人知れず葬る事など不可能ですよ」という牽制である。

慎重さを兼ね備えない大胆な行動など、匹夫の勇というものだ。

屋敷に客を招くならば屋敷の主人が客を持て成すのは当然である。

カーサス伯爵は屋敷の主人と会食し、時には共に乗馬を楽しみながら、その人となりと自分に接近する思惑などを探った。

だが腹に一物持つ者が容易に馬脚を現す筈が無い。
伯爵はむしろ滞在中よりも屋敷を辞した後、その屋敷を配下の者に探らせたのである。

伯爵に取り入ると言う事は、必然その後ろ盾であるサルヴァ王子に取り入る事である。その様は者達は成果を独り占めしたいものだ。

だが王子に対抗しようとする者は仲間を必要とする。現在ランリエルで単独で王子に立ち向かえる者など存在しない。
伯爵が屋敷を出た後、仲間が集まり伯爵からどの様な事が探れたか検討するはずである。

伯爵は自分が屋敷を出た後、にわかに人の出入りが多くなった貴族をリストにし、さらに客達も調べ上げた。
そして同じ人物が客として訪れる屋敷の主を改めて調査したのである。

こうして炙り出された王子へ敵対する者達の中には、かなりの大物も多く含まれていたのだ。

「ガスパーレ・ガリバルディ公爵に、ロターリォ・バリオーニ公爵、それにライモンド・アラビーソ侯爵か。2公爵、1侯爵とは中々壮観ではないか」
楽観できる状況とは思えぬが、伯爵には王子の声はどこか楽しげにすら聞こえた。

「はい。もっともバリオーニ公爵は爵位は最高位でも最近では落ちぶれ、彼らの盟主といえるのは実力と爵位を兼ね備えたガリバルディ公爵と思われます」

「そうであろうな。そしてその下に無数の貴族達と言う訳か」

「はい。その通りです」

伯爵は、サルヴァ王子に首肯する。

もっともこの事については王子の予想の範囲内だった。次期国王であるサルヴァ王子に敵対するならば、自身も相応の力を集結させねば不可能だろう。

それよりも王子に意外と思わせる者が含まれていた。

「ララディがか……」

「……はい」

またもや頷く伯爵だったが、その声は幾分遠慮がちだった。

ジェレリ・ララディ将軍は、サルヴァ王子がランリエル軍の総司令になる前の一軍の司令でしかなかった時から王子に仕え、常に先鋒を任されてきた猛将である。

確かに思慮深いといえる者ではないが、王子は彼の打撃力を評価し信頼もしていたのだ。

それが、まさかララディまで自分に敵対するとは……。

その為、カーサス伯爵が実は自分の陣営を混乱させる為の反間（二重スパイ）ではないのか。と一瞬疑ったほどだが、それにしてはランリエルに亡命までした伯爵の行動の合点が行かない。

いくら不快でも、現実は直視せねばならず、ララディが自分に敵するという事を認めない訳にはいくまい。

問題は炙り出した者達をどう処遇するかであるが、これについてはすでに王子は決断していた。

バルバールとの戦いの最中、後方から打たれては致命傷ともなりかねない。バルバールとの戦いの前に片付けてしまわなくてはならないであろう。

つまりサルヴァ王子は、今の内に彼らを挙兵させて一網打尽にしようと考えていた。

その事でバルバール侵攻が予定より遅れても仕方があるまい。すべてが自身の思い通りに行くと考えるほど王子は夢想家ではない。侵攻が不可能となるよりはマシというものである。

そうなれば次に問題となるのは、どの様にして彼らを暴発させるかである。

それには、彼らに十分勝算があると思わせねばなるまい。

勿論、彼らとて王位を簒奪する気はさらさらないだろう。何せサルヴァ王子はその呼び名が示す通り王子であって国王では無いのだ。王子を捕らえ「精神の御病気になられた」とでも言って幽閉し、カルデイ対策の実権を握る事を考えていると思われる。

さもなくばいっその事、王子を亡き者にするかである。殺した後でどうとでも理由は付けられるのである。

精々王子を捕らえる事が容易と思わせなくてはならない。

だがこのランリエル王都フォルキアでそれは不可能である。

王子は情勢を鑑みて軽々しくは王城の外に出ないようにしているし、王城の内部に臣下が私兵を連れてくる事は出来ない。

狙うならば王都の外で行わなくてはならない。

「貴公は中々役に立つ者を多く召抱えている様だな」
勿論、伯爵が今回貴族達を調査させた者達のことである。
「その者達にはすまないが、もう一働きして貰おうか」
伯爵は王子との以前の会話を思い出し、確かにこき使われる。と考えながら深々と一礼した。

数日後、サルヴァ王子は5千の軍勢を引きつれカルデイ帝都ダエンに座するベネガス王を訪問すると発表された。
カルデイを威圧する為ではなく、あくまで親善を目的とした訪問である。その為万の軍勢は必要としないが、カルデイには王子を敵視する貴族も多い。
その為、5千の軍勢を動員する事になったのである。

随員はカーサス伯爵を含めた6名の文官と。そして王子の配下の武将としてジェレリ・ララディ将軍とならぶギラルデ・ムウリ将軍以下8名の武官である。
勇名を馳せるララディ将軍は随員とはならなかった。

「今回はカルデイと戦う為に行くのではない。貴公がくれば戦いになりかねんからな」
サルヴァ王子は冗談めかしてララディ将軍にそう言い渡し、残留を命じたのだった。

王子が王都を出立してから間もなく、この様な事が囁かれる様になった。
「サルヴァ殿下は、カルデイに僅か数千の軍勢で向かわれたが大丈

夫だろうか？　もし王子に反感を持つカルデイ貴族達に国境を封鎖されてはカルデイ国内に立ち往生しよう。その様な事があれば、王子は敵の多いカルデイ国内で孤立する。お命も危ないのではあるまいか」

だがサルヴァ王子の一行はその危険性にまるで気付いていないかの様にカルデイ帝都へと進み、１８日をかけてカルデイ帝都ダエンへとたどり着いた。

「ベネガス王にはご機嫌麗しく」

サルヴァ王子はカルデイ王室の謁見の間で、カルデイ国王に対して跪いて恭しく一礼し、さらに長々と口上をたれた。

相手は国王、サルヴァ王子はあくまで王子。当然の礼節である。

もっとも前回２人が顔を合わせた時は、実質カルデイの降服宣言である和平の誓約書に署名しあった時であり、その時はサルヴァ王子は勝者であり、ベネガス王は敗者だった事を思えば、礼節の馬鹿馬鹿しさを思わずにはいられない。

いや、この状況をもっとも奇異に感じているのは当のカルデイ国王ベネガスだっただろう。

彼は王子の訪問の目的を、自身の廃位なのではないかと戦々恐々としていたのである。自分の死命を制する者に跪かれる居心地の悪さにカルデイ国王は身じろぎした。

「サルヴァ殿下は大切な御客人、いつまでも跪いておらず寛(くつろ)がれよ」

あまりの居たたまれなさにベネガス王は王子に促したが王子は応じず、

「いえ。ベネガス王は我が父とも思う方。そうは参りますまい」とさらに口上を続けたのである。

ベネガス王の心理を察せられない王子ではないが、ここで尊大に振舞えばカルデイ貴族に無用の反感を覚えさせる事になるだろう。それは避けるべきだった。

結局王子はベネガス王からの再三の言葉により、場の空気が王子への反感から情けない国王よ。と矛先が変わるのを十分に確認してから跪くのを止めたのである。

その後ベネガス王は連日贅を尽くした大宴を行い、王子の機嫌を取ろうとした。

当然カルデイ臣下達は財政難のおりに贅沢な、と渋い顔となったが、王子は抜け目無くその批判が自分へと向く前に手を打った。

「宴ばかりでは身体が訛ってしまいますので、明日は狩りにでもまいりましょう」とベネガス王に進言したのである。

臣下達は、王子は別に宴を欲してはいなかったのだと思い、無用の大宴で浪費したとベネガス王へと白い目を向けたのだった。

そしてこの様な日々が続く中、王子が不在のランリエルでも動きがあった。

ガリバルディ公爵を中心とした反サルヴァ王子の貴族達が挙兵したのである。

はじめは彼らも挙兵までは考えてはいなかった。

例のカルデイの貴族達が国境を閉鎖すれば王子の命が危険である。という流言の通りに事が起こるのを密かに期待していただけだった

のだ。

もし流言の通りになればすべての問題は解決するのである。王子が亡くなればその責任を糾弾し改めてカルデイに侵攻し、カルデイ貴族達から領地を取り上げてしまえば良いのだ。

しかし一向にカルデイ貴族達は立ち上がらず、国境を封鎖しない。

もっともカルデイ貴族達が行動に移さないのはサルヴァ王子の予想通りだった。

反王子の貴族達は流言に惑わされたが、ランリエル国境付近の貴族が国境を封鎖するのは現実的には困難なのである。

現在カルデイには数多くの独立国が乱立しているが、その国々が成り立つのはランリエルの後ろ盾があってこそに他ならない。

自然独立国はランリエル国境側に多く集中していた。

勿論、国境が独立国で埋め尽くされている訳ではないが、貴族達が国境を封鎖しようとするのを妨げる程度の勢力は十分にある。

その為、国境は封鎖されずにいるのだが、反王子の貴族達にとってはなまじ期待しただけに落胆も大きい。

だがそれでもまだ彼らとて挙兵に踏切るまでには至らない。

そこへまた新たな話が伝わってきた。

「サルヴァ王子はカルデイで貴族達と宴に狩にと親交を深めている。カーサス伯爵の様に領地ともどもランリエルに属することを欲する者達も今後増えるのではないか？」

勿論この流言もカーサス伯爵配下の者達の仕業であるが、反王子

の貴族達には面白い話ではない。

本来ランリエルにとっては好ましい話だが、彼らの主張はカルデイ貴族達から領地を取り上げろ。というものだ。

それがカルデイからランリエルに鞍替えされては領地を取り上げる事が出来なくなる。

いくら新参とはいえ名目上ランリエル貴族の領地を攻め取るのは、彼らも無理があると認めざるを得ないのである。

しかしまた流言である。

「いや。確かにランリエルに組しようとするカルデイ貴族もいるが、多くのカルデイ貴族はやはり王子に反感を持っている。むしろランリエルに組する貴族の出現を彼らは苦々しく思い、さらに不満を募らせている」

反王子の貴族達はこの話に安心したが、すぐに別の話も伝わってくる。

「カルデイ貴族達が不満を募らせたところで何ほどの事も無い。実際ランリエルに組しようとするカルデイ貴族は日々増えているのだ」

王子は貴族達を落胆させる話と安心させる話を交互に流させたのである。

流言に一喜一憂する彼らは、次第に今この時こそが千載一遇の機会であると錯覚した。

そして遂に、

「王子に反感をもつカルデイ貴族達が挙兵に踏切れぬのは、万一王子に逃げおおせられた場合の事を恐れているのだ。何せ失敗すれば

後が無いのだからな」
という流言に彼らは挙兵を決意したのだった。

挙兵するといっても国境を封鎖するだけで良いのである。王子の首はカルデイ貴族が取ってくれる。
国境閉鎖に関しては「ランリエルに不満を持つカルデイ貴族が攻め寄せてくるという情報が入った為」と宣伝した。だがサルヴァ王子が帰国しようとしても通す心算はない。
何かと理由をつけて追い返す考えだった。

ガリバルディ公爵を筆頭とする彼らは私兵を中心に兵士を集め、さらにララディ将軍など武官は指揮下の軍勢をも動員した。
軍隊において上官の命令は絶対である。出陣と言われれば従わざるを得ない。
もっともその上官は総司令官に弓引こうというのだが……。

反王子の貴族達が集めた軍勢は2万5千。
稀代の名将と呼ばれるサルヴァ王子とて5千対2万5千では敵すべくもない。

いや、険阻な地形の国境で守りを固める2万5千に5千で攻め勝てると本気で考えるなら、そもそも名将というに値しない。あまりにも非現実的である。

ランリエル国内には他に10万の軍勢が控えているが、それらの兵は動きようが無い。
ガリバルディ公爵は国内屈指の実力者である。
もし公爵に敵対し、彼の唱える国境封鎖の理由が事実であれば後々どの様な処罰が下されるか。

勿論、総司令官であるサルヴァ王子からの命令があれば動くのだが、当の王子はカルデイ国内に留められているのである。

だがこの状況に国王であるクレックス王が動かない訳は無い。ガリバルディ公爵を呼び寄せ問いただしたのである。

サルヴァ王子と13歳しか違わぬ金髪碧眼の国王は、我が子の危機に普段の温厚さをかなぐり捨てて公爵に怒鳴りつけた。

「王子がカルデイへと向かっていると言うのに国境を封鎖するとはいかな所存か！」

「それは誤解で御座います。カルデイに不穏な動きがある為、国境を固めむしろ王子が御帰国なさるのをお助けする所存」

「誠であろうな！」

「勿論で御座います」

「しかし他の者は公爵が王子を害そうとしていると申しておるのだぞ！」

「それは私を陥れ様としている者の讒言で御座います」

とガリバルディ公爵は国王からの追及をのらりくらりとかわしその日は何とか追求から逃げおおせる事に成功した。

そしてこれ以上追求されてはボロが出かねないと、自身も国境へと向かい軍勢と合流したのである。

勿論、バリオーニ公爵やアラビーソ侯爵を筆頭に主だった者達も追求を逃れる為、こぞって出陣した。

クレックス王は国境へと使者を派遣し公爵達を再度召喚しようとしたが、彼らはそれに対しなにやと理由をつけて応じず国境を固め続けたのである。

こうしてサルヴァ王子とその軍勢はカルデイ国内で孤立したのだった。

第２２話：叛乱（２）

「思ったより少ないものだったな」

これが挙兵した反王子貴族連合の陣容を聞いたサルヴァ王子の第一声である。

「貴公ならば５千で２万５千に勝てるか？」

思ったより少ないと言いながら、にもかかわらず勝つのは難しいだろうと含みを持たせたサルヴァ王子の問いに、カーサス伯爵は苦笑した。

「到底無理ですな。それに、そもそも私は軍人ではありません」

「確かに」と応じる王子にも苦笑が浮かぶ。

王子が率いる５千に対し貴族連合は２万５千。

到底勝ち目は無いが、しかし伯爵はこの点は心配してはいなかった。貴族達の挙兵は王子が仕掛けたと言って良い。

それが挙兵されたので手も足も出ない。ではあまりにも馬鹿げた話だった。

目下の問題はカルデイ貴族達への対応だった。

「彼らの反応は？」

「やはり動揺が見られます。影ではこの機会に殿下を害しようという者も多く居るようです」

王子の後ろ盾無くば、カルデイ貴族達に真っ先に攻め寄せられるであろうカーサス伯爵だが、落ち着いた表情を崩さない。

軍事費を削られ兵力が激減しているカルデイ帝国だが、王子に反感を持つ貴族隊の私兵が集結すれば十分王子の５千を凌駕する。

しかしカルデイ貴族達はカルデイ帝都ダエンにサルヴァ王子が来訪するという事で大半が王都に来ていたが、僅かばかりの護衛だけで私兵の大半は領地に留めてある。

これ幸いと王子を襲うにしても領地から兵を呼び寄せねばなるまい。

王子はその前に手を打つ必要があった。

「しかし私を討とうとは、カルデイ貴族達も自分の立場を正確に理解していない様だな」

「先の戦いでの敗者であるという立場ですかな？」

伯爵の声には意外そうな響きが含まれていた。

立場と言うならば今現在の王子の立場の方が弱いはず。それをそんな「過去」の勝敗を盾に立場を主張しても仕方が有るまい。

僅かながら、王子を見損なっていたか？　と王子を後ろ盾にしようとした自らの判断に伯爵も疑いを持った程である。

だがその伯爵に対し、王子は伯爵の心中を覗いた様に「ふっ」と微かに笑った。

今まで表情を崩さなかった伯爵に僅かながら動揺が走る。王子に失望されたかの様な気がしたのである。

伯爵の動揺に、サルヴァ王子は皮肉な笑みを浮かべた。
「彼らに自分達の立場を教えてやろうではないか。そして彼らにとって私がどういう存在なのかもな」

そして王子はカーサス伯爵に命じ、カルデイ貴族達を集めさせたのだった。

カルデイ貴族達は謁見の間に集められた。
王座にはカルデイ帝国国王ベネガスが座し、その横にサルヴァ王子が控えている。

集まったカルデイ貴族達はざわざわと落ち着きが無い。
自国の貴族からも見放されて何を偉そうに、と王子を蔑む者も居れば、もしや自分達が敵対し兵を集める前にここで一網打尽にする心算かと戦々恐々とする者も居た。

王子はざわめく彼らに一遍の誓紙を掲げる。
「これはカルデイ帝国とランリエル王国との和平の誓紙である！両国は信義によりこの和平の条約を守らなくてはならない！」

しかしカルデイ貴族達は冷ややかな目で王子を見つめる。
所詮ランリエルに利する条約ではないか。カルデイにしてみれば破れるものなら破りたい条約である。
もしその条約を盾に自分の身の安全を保障しろと主張するならば阿呆としか言いようが無い。

だが王子は冷ややかな視線が集中する中、平然と言葉を続けた。

「この条約を破り両国の友好を乱そうとしたカルデイ貴族達を私は討ってきた。そして今ランリエル国内にも両国の友好を乱す者が現れた。彼らはこう主張しているのだ！　カルデイ貴族の領地などすべて取り上げ、ランリエル貴族で分配すれば良いのだと！」

王子の言葉にカルデイ貴族達はざわついた。

今までランリエルに跪く屈辱に耐えてきたのは、ひとえに先祖代々の領地を守らんが為。それを取り上げ様と言うのか！

だが王子の次の言葉にカルデイ貴族達はさらに戸惑う事となった。

「和平の条約によりカルデイ貴族の権利を守る為、私は彼らを討つ！」

カルデイ帝国を討伐したサルヴァ王子は彼らにとって不倶戴天の敵である。

だが領地を守る為には王子に勝って貰わなくてはならないとは、何という皮肉な状況であろう。

そこへ王子に更なる言葉が発せられ、カルデイ貴族達はどよめいた。

「そこで貴公らに依頼したいことがある。和平の条約を守る義務があるのはランリエルのみではなくカルデイも同じ事。貴公らに出陣を要請する！」

かつてランリエル王国とカルデイ帝国との戦いは両国共々完全併呑を目指し、そして失敗してきた。

その事を考えれば今王子が討たれ、ランリエルによるカルデイ完全併呑を目指したとしてもやはり失敗するのではないか？　ならば王子を討たせる方がカルデイに為でもある。

そうとも考えられるが、現在は過去とは違う要素が含まれている。

それはカルデイ内に乱立した独立国の存在である。

王子が討たれランリエルとカルデイとの総力戦なった時、独立国はどう動くのか？

恥を忍んでカルデイへと帰属するのか、ランリエルへと擦り寄るのか、それとも独立を守りむしろ領土拡大に乗り出すか。

しかも独立国は一国だけではない。それぞれがそれぞれの思惑に従い動くだろう。サルヴァ王子ですら容易には結末を見通す事が出来ない。

サルヴァ王子が討たれた後の激流を泳ぎきり、生き残る事が出来るだろうか？

泳ぎ切れれば良いが激流に飲まれればお仕舞いである。泳ぎきる自身がないならばサルヴァ王子を助けるべきではないか？

しかし王子の味方をするには

「どうしてカルデイを討伐した王子の為に命を掛けて戦わなくてはならないのか」という心情的な抵抗がある。

それゆえカルデイ貴族達は自らの立場を決めかね、王子の言葉に即答出来なかったのである。

そこへ、彼らの心中を見通しているかの様に王子は次の言葉を続

けた。

「何も叛乱を起したランリエル貴族を貴公らに討伐して欲しいという訳ではない。貴公らにはカルデイ側国境から奴らを牽制して貰えれば十分だ」

戦う必要が無いならば……。

と、条件を下げて来た王子に彼らの気持ちは揺れ動いたが、まだ自らの去就を定めかねた。

そこへ突如、カルデイ貴族の列から声が上がった。

「それだけで良いのならば、出陣いたしましょう」

みなの視線が声の主に集中する。

「それはありがたい。失礼だが貴公の名をお聞かせ願えるか」

王子の問いにその貴族は一礼して名乗る。

「マルシアル・セディーヨ子爵で御座います」

「では、セディーヨ子爵。よろしく頼む」

「かしこまりました。なに、和平の条約を厳守するのに協力しなかったと、後になって討伐されてはたまりませんからな」

「あっははは！　それは考えすぎと言うものだ。私はそれほど悪辣ではないぞ」

セディーヨ子爵とサルヴァ王子の応酬は十分冗談めかされていた

が、カルデイ貴族達をギクリとさせるには十分だった。

王子に協力せねば後々自分が討伐される事もあり得るのだろうか？　いや、それは王子も否定している。だがしかし……。と、彼らは心中穏やかではいられない。

そこへ更なる声が上がる。

「セルヒオ・イグレシア伯爵と申す。私も出陣させて頂こう！」

今度はみなの視線がイグレシア伯爵へと集中する。そしてそれを機に、乗り遅れてはならじと、あちこちで声が上がり始めたのだった。

王子に、カルデイ貴族達の力を借りて反乱軍を倒す心算はない。反乱軍は自分の力で倒す。

戦力的な事だけを考えれば、実は反乱軍を討伐するのにカルデイ貴族達の協力は必要ない。

彼らを味方につけたのはむしろ敵に回らせない為、と言って良い。

サルヴァ王子には、それよりも実績を作った事の方が意義が大きかった。

かつてカーサス伯爵の領土問題について、カルデイ国内の領土問題をランリエルの王子が決裁したという事に続き、ランリエルの王子の求めにカルデイ貴族達が出陣した。という実績をである。

満足げに謁見の間を後にし廊下を進むサルヴァ王子は一人の男が廊下のすみに佇んでいるのに気付いた。

王子はその男を良く知っていた。エティエ・ギリス。カルデイ軍総司令。

カルデイとの最終決戦時にサルヴァ王子を敗死寸前にまで追い詰めた人物である。

王子より僅かながら背は低いが引き締まった身体は見劣りしない。短い黒髪と黒い瞳の３０代半ばの男である。

自分を追い詰めたギリスであるが、その事についてギリスを恨んではいない。むしろ配下の将軍として招こうとしたほどである。

実のところギリスは作戦立案能力においてサルヴァ王子に劣るだろう。前線指揮においても王子や老将グレヴィに一歩譲る。

では何を持ってギリスがサルヴァ王子を敗北寸前まで追い詰めたかと言えば、それは類稀なる洞察力によってサルヴァ王子必勝の秘策を看破し、王子を追い詰めたのだった。

王子がギリスの佇むところまで来ると、ギリスは一礼して挨拶した。

「殿下。お久しぶりです」

「ああ。将軍も御健勝なによりだ」

「はい。御蔭様で」

ギリスはそう言って軽く一礼した。

「それはそうとカーサス伯爵とはセディーヨ子爵は領地も近く親しくしておいでの様ですな」

ギリスの目が探る様に王子の目を捉える。

「なに。それは偶然というものだろう」
そう応じたものの、言い終わる頃にはサルヴァ王子の顔に微かに不快げな色が浮かんでいる。
王子の言葉にギリスが苦笑を浮かべたからである。

「いずれまた酒でも酌み交わそう」
王子はそう言ってギリスから背を向け、この場を後にした。
その言葉は本心ではあったが、今それを行う気分ではなかった。
ギリスに一本取られた後では。

セディーヨ子爵はカルデイでは目立った存在ではない。
それぞれの友好関係、血縁関係に目ざとい貴族達がとっさにカーサス伯爵とセディーヨ子爵との関係に気付かないくらいに。
ましてや武人であるギリスが、セディーヨ子爵の領地の場所など把握している訳が無いのだった。

そうセディーヨ子爵はカーサス伯爵を通じて以前より王子と接触していたのだ。いやそれどころかイグレシア伯爵もである。

彼らはカルデイ貴族達を謁見の間に召集する前に呼び出され王子と打ち合わせを行っていたのだ。
勿論、セディーヨ子爵と王子との冗談めかした掛け合いも含めてだった。

ギリスはサルヴァ王子の後姿を見送りながら、王子が押し付けた面倒について頭を巡らしていた。

今回王子の求めにしたがって多くのカルデイ貴族が出陣する。

カルデイは軍事費を大幅に削られ、さらに多くの有力貴族が独立国として離反しているが、それでも反乱軍の2万5千は超えるだろう。

だが、なまじ反乱軍より多い為、勝算ありと、サルヴァ王子に取り入る心算で抜け駆けして手柄を立て様とする者達も現れかねない。

その者が戦死しようが自業自得であるが、他の者まで巻き添えになる可能性もある。ギリスも同行し精々彼らを監督しなくてはならない。

ギリスがサルヴァ王子に対して、一矢報いたくなるのも当然だった。そして多少は溜飲が下がったギリスは自らの執務室へと向かった。

今回の出兵に対して実行計画を立てる為である。

第２３話：反乱の余波

ランリエル王国で内乱が発生したという情報はバルバールにも伝わっていた。

バルバール軍ではその対策ついて検討する為幕僚達を招集しディアスは軍議を開いた。

「みなも既に知っているだろうが、ランリエルで内乱が発生した。我々はどうすべきかを検討したい。意見のある者はいるか？」

ディアスが幕僚達を見渡すと早速活発に発言がなされた。

「いずれランリエルと戦いになるのは目に見えています。ならばこれを好機にこちらから攻め込むべきでしょう」

「ランリエルを攻めるといっても大義名分がありません」

「奴らが我が国を攻める為の準備を進めているのは歴然。それを攻めるに大義名分など不要でしょう」

「攻めるのは良いとしても二派に分かれた奴らの両方と戦っても仕方があるまい。どちらかと手を組むことを考えるべきだ」

「ではどちらと組むべきか？」

「それは当然劣勢な側に付く事により、戦いを長引かせランリエルを疲弊させるべきだ」

「いや戦を長引かせると言っても永遠に続けられるわけも有るまい。優勢な側に付き、友好関係を築くべきだ」

「その様な甘い考えが通用するか！」

「戦いを長引かせるなどと言う方が非現実的だ！　永遠に戦い続ける訳もないのだからな。戦いの決着が付いた時、不要に恨みを買うだけではないか！」

議論は次第に白熱して行くが容易に結論は出ない。

ディアスは問題を整理し、そして自分の意見を述べるべく口を開いた。

「みなの意見は介入すべしという事には異論なさそうだな。私としても介入すべきとは思う。そして手を組むならば反乱軍側だろう」

「では、総司令官は反乱軍側が勝利する目算が高いと仰るのですか？」

「いや、反乱軍が勝つ確立はかなり低いだろうね」

幕僚の1人の問いかけに平然と答えたディアスの言葉に、諸将にどよめきが広がる。何せ状況は圧倒的にサルヴァ王子が不利と思われているからだ。そもそも反乱軍は勝算高しと考えたゆえに行動を起したのだから当然だった。

「ですがどうやって、サルヴァ王子はこの状況をひっくり返す事が出来ると言うのです？　サルヴァ王子が率いる軍勢は僅か5千。反乱軍は2万5千。しかも王子はカルデイ国内に閉じ込められています。そしてカルデイ貴族にとってサルヴァ王子は亡国の仇敵。まさ

に絶体絶命と言って良い状況です」

「確かに状況はサルヴァ王子に有利とは言いがたい。カルデイ貴族達がサルヴァ王子に敵対すれば王子の勝利は難しいだろう。だがカルデイ貴族達にとってサルヴァ王子を倒す事が自身のためだろうか？　反乱軍はカルデイの領地をランリエル貴族で分配すべきと唱えている。彼らにとってサルヴァ王子を倒す事は決してためにならない。それどころか……」

だがそこに突然急報がもたらされた。扉をノックする事のなしに飛び込んだ伝令の騎士はカルデイ貴族の軍勢が、サルヴァ王子に向けてではなくランリエルとの国境に向けて進軍を開始したのだと伝えてきたのだった。

その報告に諸将は驚きそしてどよめいた。そしてディアスは説明ぐらい最後までさせてくれと肩をすくめた。

「まあ……と言う訳だ。こうなっては反乱軍の勝算は低い。だがとはいえ今更手も引けないだろう」

そこに今まで沈黙していたグレイス将軍が口を開いた。

「総司令官の御明察恐れ入ります。確かにこうなっては反乱軍の勝算は低いでしょう。ですが総司令はそれを理解した上で反乱軍と手を組もうと仰る。どういう事でしょうか。ご説明をして頂けますでしょうか」

みなの疑問を代弁するグレイスの言葉に、ディアスはみなを見渡しその考えを披露する。

「必要なのは勝つ事じゃない。勝って何を手に入れられるかだ。サルヴァ王子と手を組み勝ったところで何を手に入れる事が出来る？　あの王子が我々に感謝してバルバール攻めを止めるようなタマか？　だが反乱軍側が勝てばランリエルとカルディとの間で戦いが生じバルバール攻めどころではない。勝っても何の利益も無い確実な戦いと、勝てば得られる物が大きい勝算が低い戦い。介入するというならば後者しかあるまい」

ディアスの説明に多くの者は納得したが、それでも納得しない者。いや、新たな懸念を感じた者がディアスに問いかけた。

「確かにみなの意見は介入すべしでした。ですが、勝算が低いのならばいっその事介入自体を止める事も改めて考えるべきなのではないでしょうか？　勝算の低い戦いを行い、兵を損ねるべきではないと愚考いたします」

別に愚行とも思っていないだろうに。と思わず考えたディアスだったが、表面上はおくびにも出さず答える。

「もちろん、戦った挙句負けてしまい損害を受けただけ、となるのは馬鹿馬鹿しい。それゆえに参戦するタイミングが重要だ。勝算が低いなりにそれでも最も勝算が高い時を狙って参戦すべきだ」

ディアスの言葉は最もだが、それゆえに決して無能ではない諸将からすれば言われるまでもない事でもある。ディアスにとっても前置きの言葉に過ぎない。

「サルヴァ王子軍勢が反乱軍と戦闘を開始したその時を狙って介入する。反乱軍は元々サルヴァ王子を国内に戻さぬ為の布陣だ。守りを固めている。たとえ兵力でサルヴァ王子、カルデイ貴族連合軍が

勝っていようとも数日で勝敗が決する事はない。そしてその時狙うのは……カルデイだ」

「カルデイですと！？」

思いがけないディアスの示唆する攻撃目標に、諸将は驚きの声をあげる。

「ああ、カルデイ本国が攻められれば彼らも王子への支援ばかりはしていられないだろう。隣人の火事の火消しにかまけて自宅の消化を怠るわけには行かないのだからな」

「その理屈は分かります。ですが……」

バルバールに対しなんら敵対行動を取った訳でもないカルデイを攻めると言う言葉に、諸将は二の足を踏んでいるのである。ディアスは再度みなを見渡し答える。

「確かにみなが躊躇するのも分かるが、なあに、現在ランリエル軍の何割かは、カルデイからランリエルに対して支払われる賠償金によって養われている。そのランリエル軍がバルバールを攻めようとしているのはほぼ確実。カルデイがバルバールに敵対していないとはいえまいよ」

ディアスの言葉は詭弁に過ぎないが、諸将は無理やり自身を納得させた。あえてディアスの欺瞞に乗ったのだ。もっともディアス自身は自分の言葉に騙されたりはしていない。

ディアスの考えは基本的に、バルバール軍の存在理由はバルバール王国及びその国民を守る事。という事だ。その為には他国を攻め

るのに躊躇はしない。所詮軍人など人殺しなのである。人殺しが良い人やましてや人格者と呼ばれたいなど、あまりにもずうずうしいと言うものだった。

バルバールが生き残る為にはカルデイを攻めるのが必要なのである。カルデイを攻めれば当然その民にも被害は出る。しかしそれを躊躇した挙句バルバールがランリエルに攻められバルバールの民に被害が出ては、何の為のバルバール軍なのか？

カルデイを攻めない事によって、自分の命を失うだけで済むのならば好きにすればよい。だがバルバールの民の命が失われてしまうとあっては、自己満足どころの話ではない。

もっともディアス自身はそうは思っていても、他の人間がそう思われたいと考えるのを否定する心算は無い。苦しい言い分でも精々逃げ道を作ってやるべきだった。そしてその逃げ道を通り抜けた者の1人が、ディアスにその先の質問を投げかけた。

「ですが、ランリエルを越えてカルデイを攻めるとするならば海軍による兵員輸送に頼るしかありません。それでは精々1万が限度。カルデイは現在大幅に国力が低下しているとはいえ、元はランリエルに匹敵する大国。今ですら我が方に匹敵する動員力は維持しておりましょう。それを海からの1万だけでは……勝算はお有りでしょうか？」

「なあに『必ず勝てる』」

おそらく数倍の敵軍を相手にせねばならないであろうこの状況で、必勝を言い切るディアスにみなが目を見張った。ディアスはその視線を満足げに受け止めると、ずっと背後に控えていた従者であるケ

ネスに振り返った。

「カルデイ沿岸部の地図と、机上演習用の駒を用意してくれ」

諸将との軍議の後、残務も片付けたディアスとケネスは自邸へと向かう。その途上馬上のディアスにその轡を取るケネスが問いかけた。

「ランリエルとの戦いは来年の春になると思ってたんですけど、この分では早まるようですね」

「ああ、向こうの準備が整い次第攻めてくるという予想だったのが、向こうの内乱に乗じて逆に我々が攻め込む事になりそうだからね」

戦いは近づくというのにいつも通り特に気負った態を感じさせぬディアスに、ケネスは見上げ遠慮がちに口を開いた。

「ですがそれでは……」

言いよどむケネスの言葉にディアスは顔をケネスに向けた。

「それでは、なんだ?」

「ミュエルとの結婚式は如何なさる御心算ですか?」

すでにほとんどディアスの妻として扱われているミュエルだったが、実際結婚式は来年の2月を予定している。そして式を行い神の前で誓いを立ててこそ正式な夫婦となるのである。だからそれが中

止とは行かないまでも、延期となればミュエルが悲しむのではないか。ケネスはそれを懸念しているのだ。

「止むを得んだろう。まさか結婚式をしたいから戦いを先に延ばしたいとは言えないからね。お前それくらいの事も分からないのか？」

「まっまさか！」

ディアスの言葉にケネスは慌てて否定する。当然ケネスもディアスのいう事は理解した上で、ミュエルの心情を心配しているだけなのだ。本気で戦いを延期したいと考えていると思われては、軍人としての見識を疑われる事になってしまう。

「なに冗談だ。ミュエルには私の方から言っておくよ」

ディアスはそう言うと視線を前方に向け、ケネスも前へと向き直りその後は言葉を発せず黙々と歩を進めたのだった。

自邸についたディアスとケネスはミュエルの出迎えを受け、邸内に入る。そして晩餐が済み、ミュエルがケネスに勉強を見てもらった後は、ディアスとミュエルは寝室で二人きりとなった。

２人が寝具の上で並んで座ると、ディアスはミュエルに正面から視線を合わせ口を開いた。

「ミュエル、もしかしたらランリエルとの戦いが早まるかも知れない。そうすればお前との結婚式どころではなくなるだろう」

「結婚式が……延期？」

「ああ、そうだ」

ディアスの言葉に戸惑い問いかけ返したミュエルに、ディアスはそう短く答えた。

「あの……それだけなのですか？」

「それだけとは？」

「いえ……別に何でもありません……」

明らかに言いたい事があるという態度にもかかわらず口を噤むミュエルに、ディアスは微笑んだ。すまんの一言なり、もっと詳しい説明なりを欲しているのは明らかだった。

「まさか式を行っていないから、私達はまだ夫婦ではないというんじゃないだろうね？」

「え？　でっですが……」

ミュエルの戸惑いは当然だった。神に誓うからこそ夫婦なのだ。その誓いが無いのならば、どこまでいってもあくまで他人。精々恋人同士なのだ。しかしディアスはミュエルの言葉に構わず少女に顔を近づける。

ディアスはミュエルの体のどこにも手を触れていない。まったく拘束の無い状態からのディアスのキスをミュエルは戸惑いながらも受け止めた。そうディアスとの始めての、あのディアスがミュエルを「お前は私の妻だ」と誓った時の様に。

ディアスは重ねていた唇を僅かに離すと、喋れば微かに唇同士が触れるほどの間近で口を開く。

「私の誓いより、会った事も無い神へと誓いの方が信じられると言うんじゃないだろうね。式など挙げなくても、お前は私の妻なんだよ」

「ディアス様！」

ディアスの言葉に改めて自身から唇を重ねたミュエルを抱きしめながら、ディアスは真剣に悩んでいた。

自分には少女嗜好は無かったはずなのだが……。と。

第２４話：寵姫達の逃避行（１）

「アリシア様。申し訳ございません」
セレーナは馬車の荷台から御者台に座り馬車を進ませるアリシアに声をかけた。

「気にしなくて良いわ」
と答えたものアリシアも内心、早まったか。と思わないでもない。

奇妙な取り合わせだがこれには事情がある。それには話を数日前にさかのぼる必要があった。

サルヴァ王子がカルデイ帝国へ出立した後、ランリエル王国王都フォルキアでは王子に関してのさまざまな流言が飛び交った。

それはサルヴァ王子が自分に反感を持つ貴族達に一喜一憂させ炙り出す為に流させたものだったが、流言に一喜一憂したのは貴族達ばかりではなかったのだった。

サルヴァ王子の寵姫であるセレーナも貴族達以上に流言に惑わされ焦燥にかられたのだった。

この点、王子も迂闊といえるかもしれないが、寵姫の心情を慮って策略を変更したり実行を止めるなど出来ない以上仕方が無いと言える。

セレーナだけには策を打ち上げておく。と言う事も、もし事が露見すれば寵姫に大事を語って策を謝ったと、歴史に残る大失態とな

り物笑いの種である。

王子にしてみればやむを得なかったのだが、セレーナは王子の身を案じ心を痛めた。

そしてアリシアも、王子が死んでしまうと後宮が閉鎖され、年金が貰えなくなると王子の身を案じていた。

しかもそうこうしている内に、なんとガリバルディ公爵を中心とする貴族達が挙兵しカルデイとの国境を封鎖してしまうという事態が発生したのだった。

「サルヴァ殿下はご無事かしら？」

セレーナの胸は焦燥にかられ張り裂ける様な苦しみを感じ思わず呟いた。

その呟きを聞き逃さなかった侍女が

「きっと大丈夫で御座います」と慰めてくれたが、セレーナの不安は少しも晴れない。

慰めてくれた侍女の気持ちは嬉しいが、あまりにも根拠が無さ過ぎた。

サルヴァ王子とて今まですべての戦いに勝利してきた訳ではなく、幾度かの敗戦を経験している。

だがセレーナが後宮に来た年には戦いが行われず、後宮に来て２年目にして勃発したカルデイとの戦いにはサルヴァ王子は勝利している。

セレーナが知る限りでは王子はいつも勝っている事になるが、だ

からと言って安心出来るものではなく、ましてや流言では、カルディイに取り残されるという事は絶体絶命を意味すると言うではないか。

「もうサルヴァ殿下とお会いする事は出来ないのかしら……」

そう思うとセレーナの目に留めなく涙が溢れ、自室のベッドに突っぷして泣き続けたセレーナは自分の無力さを呪った。

自分には何もする事が出来ないのだろうか。この後宮の一室で目を泣き腫らしながら待つしか無いのだろうか。

でも、この様な気持ちのまま王子を待ち続けるなど耐えられない。いや、待ち続けるも何も王子は帰って来ないのかも知れないのだ。

王子が帰って来ないならば……。

ある日の朝、セレーナは後宮の庭へと散策に出た。

勝手知ったる後宮内の事であり警護も厳重で危険などありはしない。

侍女達もセレーナが特にと言いつけない限り付いてくる事は無く、この日も彼女は一人で部屋を後にした。

ただ、庭を散策するにしてはセレーナが多数の装飾品を身につけていた事に、侍女は微かに奇異を感じたが、それ以上深く考える事は無かった。

セレーナは庭を通り過ぎ後宮の外へと通じる門に向かう。彼女は待ち続けるより自分からサルヴァ王子に会いに行くと決断したのだった。

「殿下お待ち下さい。すぐに参ります」と思わず歩む足も速くなる。

だが侍女達には内緒にした。カルデイに向かうなどあまりにも危険で侍女達はセレーナを引き留めるであろう事は、彼女にも分かっていたのだ。

後宮の外へ出て身につけた装飾品を差し出して馬車を雇いカルデイへと向かうのだ。現金は侍女達が管理している為持ち出せなかったのだ。

だがセレーナが完璧と考える作戦はすぐに破綻した。

後宮の外へと続く門をくぐろうとしたところで、

「駄目です」と後宮の門を警護する兵士に止められたのだ。

「でも、後宮の外に用事があるのです」

セレーナは食い下がったが、兵士はにべも無い。

「寵姫の方々が後宮の外に出るには事前の申請が必要です。申請無き方に門をお通しする訳にはまいりません」

「そんな……」

兵士に冷たく拒絶され、セレーナは言葉に窮した。

セレーナも侍女達をお供に今まで何度も後宮の外に出た事はある。

だが外に出る時の侍女との

「今日は何をなしますか？」

「今日は後宮の外に出てみようと思うの」

という何気ない会話の後、侍女達が急いで申請を出していた事な

どセレーナは知らなかったのだ。
しかも寵姫が侍女も連れずに一人で後宮を出るなど、とても見過ごしては貰えない。

王子の元へと会いに行く作戦の第一段階どころか、はるか手前で作戦が頓挫したセレーナは、門に背を向けトボトボと庭へと戻って行く。

歩きながらも、あまりの情けなさにポロポロと涙が頬を伝う。だがそこへ心優しきセレーナの為、神が救いの女神を派遣した。もっともこの女神はあまりお淑やかとは言えなかったが。

セレーナとは違い正真正銘申請も行い、後宮の外へ出る許可を得ているアリシアが彼女の前からやって来たのだ。
後ろにはめんどくさげにアリシア付きの侍女であるライヤも控えている。

本来ならば通り過ぎるだけの関係でしかない2人だが、セレーナの日頃の行いが彼女へ、女神から救いの手を差し伸べさせたのだった。

涙を流し視界も霞む彼女はアリシアに気付かなかったが、アリシアは彼女に気付いた。

そして前回セレーナと顔を合わせた時、彼女が挨拶をしたにもかかわらず、自分は無視をしてしまった事をアリシアは思い出した。

今度は自分も挨拶をしなくては。と幾分緊張しながらアリシアは足を進ませセレーナとの距離を近づけて行く。
「おはよう御座います。セレーナ様」

こわばった笑顔に微かに上ずった声でアリシアはセレーナに挨拶をしたが、その声に反応しアリシアに顔を向けたセレーナは涙に目を泣き腫らしている。

そして目の前にアリシアが居る事に初めて気付いた彼女は緊張の糸が切れたのか、本来自分の敵であるはずのアリシアの胸に顔を埋めて抱き付いたのだ。

抱きつきつつもさらに涙を流し続けるセレーナにアリシアが問いかけた。セレーナが自分に抱きついて来るなど本来ならあり得ない。何か事情があるに違いなかった。

「どうしたのです？」

するとセレーナはアリシアの胸に顔を埋めながらも答える。

「殿下が……」

「殿下？」

「はい。殿下にお会いしなくては……」

殿下にお会いする？　いやサルヴァ王子様はカルデイに行っている。どうやって会うというのだろう。アリシアにはセレーナの言う意味が分からない。

「でも殿下はカルデイに居るのではないのですか？」

その声にセレーナは顔を上げてアリシアを見つめた。

「私はカルデイまで行きたいのです」

「はぁ……」

あまりの事にアリシアは呆れた様に言った。

とりあえずセレーナを自室へと連れて行ったアリシアはライヤには席を外させ、どうする積もりなのかとセレーナに問いただした。

ベッドの縁に座り問いかけるアリシアに、その横に座るセレーナが口を開く。

セレーナは、身に付けた装飾品を差し出して馬車を雇いカルデイへと向かう作戦を説明した。

話を聞いたアリシアは「うーん」と唸った。どこから指摘すれば良いのだろう。と。

装飾品の真贋の鑑定など専門家でなければ出来るはずも無く、馬車の乗り手に差し出し、これで馬車に乗せて欲しいと言ったところで偽物と疑われるだけだろう。

しかも今カルデイへの国境は軍勢により封鎖されているのだ。カルデイまで行って欲しいと頼んだところで、行ってくれる訳も無い。

万一行ってくれると言う者が居たとしても、それこそ胡散臭すぎる。おそらく馬車はカルデイには向かうまい。女一人で旅をしようとするセレーナがどの様な目に合うかは容易に予測できた。

セレーナの計画はあまりにも無謀だったのだ。

あまりにも世間知らず過ぎ、これで本気でカルデイまで行けると考えているなんて……。と思わずアリシアはクスリと笑った。
その笑いは徐々に大きくなり遂には大きく笑う。
そして笑いながらも忠告を始めた。

「あはははははっ。いくらなんでも無謀過ぎます。諦めた方がよろしいのでは……」

だがこのアリシアのありがたいご忠告は遮られた。

突如セレーナがアリシアに襲い掛かりベッドへと押し倒したのだ。
両手でアリシアの両肩を押さえつけるセレーナのその顔は、悔しさのあまり涙を流し頬を濡らしていた。
「……それほど可笑しいですか？」

セレーナの頬を伝う涙はポタポタと滴り落ち、アリシアの頬をも濡らす。

「……ごめんなさい」

そして2人はそのまま見詰め合う。セレーナの涙はなおアリシアの頬を濡らし続けた。

セレーナの気持ちを笑った事に反省したアリシアだったが、やはりセレーナの作戦が現実的ではない事に変わりは無い。

「ですが、セレーナ様のお考えになった方法ではカルデイには行けないのです」

涙を流し続けるセレーナの顔がさらに悲しげに歪む。流す涙を増やすセレーナはアリシアの胸に顔を埋めた。

そしてその胸で嗚咽を漏らした。

アリシアはそっと彼女の頭を抱きかかえた。

「殿下を愛していらっしゃるのですね……」

後宮の女など権力者に媚を売りそのおこぼれに預かろうという者達の集まり。

アリシアはそう考えていたのだ。

「……アリシア様は違うと仰るのですか？」

セレーナがアリシアの胸に顔を埋めたまま問いかけると、アリシアは抱えていた彼女の頭を少し強く抱いた。

「ええ……違います」

セレーナは勢い良く上半身を起してその為セレーナの頭を抱えていたアリシアの腕は弾き飛ばされた。

驚いた顔で見つめるセレーナに、アリシアは苦笑を向けた。

「驚きました？」

「あ。い……いえ」

嘘である。十分驚いていた。

寵姫といえどすべての女性が後宮の主を慕っているとは限らない。

そもそもセレーナとて当初はサルヴァ王子の事を好きでは無かったのだ。

だが、セレーナはアリシアの事を王子を取り合っている敵。しかも強敵と見ていた。

そのアリシアがサルヴァ王子を慕っていない可能性など考えた事も無かったのだった。

「ですが……アリシア様は殿下が特別に招かれた方とお伺いしております」

ならば特別な関係ではないのか？　とセレーナは考えていたのだ。

アリシアはサルヴァ王子が被っている兜の事について話すべきか迷ったが、ここに至っては誤魔化す気にはなれなかった。彼女に嘘は付きたくはない。

この娘と王子を取り合って争うなどあまりにも馬鹿馬鹿しい。それに王子から口止めされている訳でもないのだ。

アリシアが上体を起こすと、セレーナも慌てて身を引き2人は改めてベッドの縁に並んで座った。

「殿下が最近お使いになっている兜の事はご存知ですか？」

彼女の言葉にセレーナは戸惑った様に口を開いた。

今その兜がどう関係あるというのか。

「それは勿論知っております。殿下から直接お聞きした訳ではないですが……聞いた話では殿下のご親友の形見の物とお聞きしております。」

サルヴァ王子のご親友。ただの噂とはいえ、そう言われていると

知ればリヴァルは喜ぶだろうか。
いや、もしかすると恐れ多いと言うかも知れない。そう思うと思わずアリシアに顔に笑みがこぼれた。

「殿下のご親友かは分かりませんけど、私はその兜の主の婚約者だったのです」

「アリシア様が？」

驚きの声を上げるセレーナにアリシアはまたも苦笑を浮かべ答えた。

「ええ。そうです」

素直に感情をあらわにするセレーナをアリシアも可愛い女性だと思った。

「殿下がどの様なお考えで私を後宮に招いたか、正直私にも分かりません。ですが殿下が私の部屋に起しになったのは一度きり。セレーナ様が心配する様な事は無いのです」

サルヴァ王子は兜の主の婚約者であるアリシアの生活の面倒をみる積もりで後宮に招いたのだが、その気持ちは彼女に伝わっていない。それはアリシアが恩知らずという訳ではない。

アリシアの言うたった一度の訪問の時、王子自身が己の気持ちを台無しにしていたからである。

そしてその一度きりという言葉にセレーナも困惑の表情を浮かばせた。それではやはり一度はそういう関係になったという事ではないのか。

アリシアはセレーナを安心させる様に抱きしめた。
「大丈夫です。殿下はセレーナ様を愛していらっしゃいますよ」

それはセレーナをなだめる為の方便だったが、口に出した瞬間それが当たっているのではないか。アリシアはそう直感した。

アリシアはセレーナが後宮が整えられた当初からの寵姫であると知っている。そうなると3年近く後宮に居る事になる。

3年間も欲望の対象としてだけ抱かれていた女性が、この様に素直なままで居られる訳が無い。そう考えたのだ。

きっと王子はセレーナを大事にしていたのだろう。本人に自覚があるかはともかく。

アリシアは後々後悔する事になるこの言葉をセレーナを抱きしめながら発した。

「ご安心下さい。私が貴女をサルヴァ殿下のところまで連れて行って差し上げます」

第２４話：寵姫達の逃避行（２）

アリシアは僅か後ろを歩くセレーナに前を向いたまま話しかけた。
「セレーナ様。落ち着いて下さい。俯いて黙ってて頂ければよろしいですから」

「はい。分かりました」

セレーナはアリシアの地味な服を借り、髪はいつもの様に肩に流さずきっちりと固めていた。
顔を隠すならば流した方が隠しやすいがセレーナの設定はアリシアの侍女である。
髪を流す侍女など存在しない。侍女ならば髪はきっちりと結っておくべきだった。

セレーナが大量に身に付けていた装飾品は皮袋に入れてセレーナが持っている。彼女に持たせるのは危なっかしいとは思ったが、今は主人と侍女である。金品は侍女が持っているもの。
この設定はせめて王城を出るまでは崩さない方が無難だろう。

庭を越え後宮の門へとたどり着いた彼女達は緊張を必死で抑えて門番へと近寄る。

「アリシア・バオリスです。外出の許可を頂いているはずですが」

門番は懐から紙片を取り出し「確かに」と頷いた。

アリシアは内心ほっとし
「それでは」とセレーナを伴い門を通り過ぎ様としたが門番は彼女

達を呼び止めた。

「侍女はいかが致したのです？」

まさか寵姫付きの侍女の顔を覚えているというの？　とアリシアは冷や汗をかいたが、努力して平然と答えた。

「ここに居るでは有りませんか」

そう言いながら一瞬セレーナへと目を向け、そして門番に視線を戻す。

「しかし侍女の制服を着ていないではありませんか」

確かに門番も侍女の顔など覚えては居なかったが、侍女が制服を着ていない事が問題らしい。内心しまった！　と思いながらも、アリシアは平然と答え続けた。

「それがなにか？」

「宮廷に使える侍女が傍らに控えているからこそ恐れを抱いて誰も手出しをせず安全なのです。それを知らしめる為には制服を着ている必要があります。その者が侍女ならば制服を着させて下さい」

アリシアは内心舌打ちをした。まさかその様な決まりがあるとは。しかしここで引き返す訳には行かない。

「今日くらいはよろしいではありませんか」

「駄目です」

アリシアと門番のにらみ合いは数瞬続いたが、にらみ合いを続け

ても問題は解決しない。

後ろに控えるセレーナの耳元で囁いた。

「小さい宝石を出してちょうだい」

幾分偉そうな言い方だが、万一門番の耳に届くかも知れないと考え、侍女に対する口調で話しかけたのだ。

セレーナは装飾品が詰まった皮袋に手を入れ、ガチャガチャとかき回し小さい宝石を付けた耳飾を一つ取り出して、アリシアに手渡した。

アリシアはその耳飾をそっと門番に握らせた。

「侍女の制服を着ていては入り難い場所も有るのです。お分かり頂けます？」

だがそれでも門番は断ったが、心が揺れ動いたのか

「いやしかし……」と拒否する言葉は力なかった。

もう一押しとアリシアはまたもやセレーナに声を掛けた。

「耳飾を片方だけ差し上げても仕方なかったわね。もう片方も出してちょうだい」

こうして2人は後宮の門を突破したのだった。

王城の門を通るのは簡単だった。

後宮は寵姫達に万一不祥事があってはと人の出入りに厳しかった。

だが、王城は防衛の為入る者には気を使うが、出る者にはさほど注意を払わなかったのである。

つまり2人は何の障害も無く、テクテクと普通に歩いて門を通り過ぎたのだった。

城下町に出た2人はまず装飾品をお金に替えなくてはならないと、宝石商へと向かった。

「ようこそいらっしゃいました」

にこやかに出迎える店員に、アリシアは早速要件を切り出した。

「実は引き取って頂きたい物があるのですが、よろしいでしょうか？」

「勿論で御座います。それでどの様なお品でございましょう」

2人は個室に通されアリシアは勧められた椅子に座る。侍女であるセレーナはアリシアの後ろに立つ。

アリシアが後ろに控えるセレーナに頷くと、セレーナはテーブルの上で皮袋を逆さにし宝石達をテーブルの上に山積みにした。

だがこの行為に店員は驚きの声を上げる。

「貴方達は何をやっているんですか！」

突然の店員の大声に2人は目を丸くしたが、そこから店員のお説教が長々と続いた。店員にとって2人のしている事は、相手が客である事を忘れてしまうほどの暴挙だったのだ。

原石ならともかく、磨かれた宝石を一つの皮袋に入れて持ち歩くなど、宝石を扱う者からすれば正気の沙汰とも思えない行為である。

ダイヤモンドは硬度が高く傷付かないと言われるが、ダイヤモン

ド同士をこすり合わせればやはり傷は付くのだ。

ましてやダイヤモンドとそれより硬度の低い他の宝石を一緒の皮袋に入れるとは……。

だがこの様な知識を貧乏なアリシアが知る訳も無く、セレーナが知っておくべき知識である。

アリシアは何とか店員をなだめ、傷付いた宝石とはいえ、いくらになるかと問いかけた。

店員は苦い表情ながらも鑑定を開始したが、またもや店員は驚きの声を上げた。

「これはカスティニオ公爵家に伝わると言う名品、アウロラの瞳ではないですか？」

「よく似ていると言われるのです。それではこれはやめて置きますわね」

アリシアは慌てて店員からアウロラの瞳を取り上げた。

そしてちらりとセレーナを睨む。

こっそりと抜け出してカルデイまで行こうと言うのに、なんと目立つ上に足が付きそうな物を持ってくるのかと。

アウロラの瞳は貧乏で宝石などとは縁の無いアリシアすら名前だけは聞いた事があるくらい有名な宝石だった。

聞いた話によると光の加減で七色に光り輝くと言うが、今はその輝きを楽しむ余裕は無い。

しかしすべての宝石を鑑定した後の店員の言葉は2人を落胆させ

た。

「すみません。私どもではこれらの宝石達は買い取れません」

まさか買い取っても貰えないとは、宝石とは傷付くとそれほど価値が無くなる物なのか。と2人は焦ったがそうではなかった。

「傷が付いている事を差し引いたとしても、この様な見事な宝石をすべて買い取る資金は当店には無いのです」

店員はそう言うと無念そうにため息を付く。

ランリエルでも屈指の実力者であるカスティニオ公爵が、次期国王を攻略する為にと娘に持たせた名品の数々は、一宝石商の手に負える物では無かったのである。

「……買い取れるだけで良いです」

アリシアは力なく答えた。

「上手く行きましたわね」

店を出るとセレーナは嬉しげに言ったが、アリシアは早々に彼女をカルデイまで連れて行くと言った言葉を後悔し始めていた。

結局売った宝石は持ってきた物の１０分の１にも満たず、この女性は世界の果てまで旅する積もりだったのかとアリシアは思った。

しかも売らなかった宝石はまた皮袋に入れられるのかと心配した店員が、一つ一つ布で包んでくれ、セレーナは次に宝石を売る時に怒られなくてすむと喜んだが、今回売った分のお金でだけで間違いなくお釣が来るだろう。

いや、この様な大金と名品の数々を持ち歩いていると知られればむしろ危険だった。

「セレーナ様、沢山お金を持っている事はあまり口にしない様にして下さいね」

「どうしてなのです？　お金があると言った方がお願いし易いのではないでしょうか」

セレーナは不思議そうに首を傾げた。

彼女もお金に物を言わせて無理を通すと言っている訳ではない。御代の心配は無いですよと言った方が相手も安心するのでは？　と考えているのだ。

「勿論、ある程度のお金を持っている事を示すのは当然ですけど、あまりにも大金を持っているとそれを奪おうと考える者も居て危険なのです」

「まぁその様な方がいらっしゃるなんて……」

とセレーナは驚いているが、アリシアにとっては当たり前の事過ぎて、今後も一々この様な事を指摘しなければならないのかと先が思いやられた。

だが乗りかかった船である。日が暮れてもセレーナとアリシアが後宮に戻らないと騒ぎになるだろう。出来ればその前に王都を出たかった。

「セレーナ様、急ぎましょう。次は馬車を用意しなくては。それと食べる物も必要です」

「はい！」
サルヴァ王子に会いに行く計画が着々と進む事にセレーナは元気良く答えた。

第２４話：：寵姫達の逃避行（３）

２人は馬車を手に入れるべく町中を彷徨ったが、これが中々難航した。
子供の頃田舎暮らしをしていたアリシアは、二頭立ての馬車までなら操れる自信はあったが、中々目的に合う馬車が見つからないのである。

王都内の舗装された道を走る個人客相手の辻馬車では、車輪が細くカルデイまでの舗装されていない道のりに耐えられそうにない。
王都外の村々を巡る人々が乗り合う駅馬車は頑丈だが、あまりに巨大でアリシアには御する自信が無かったのだ。

しかもよくよく考えると、辻馬車や駅馬車をいきなり売って欲しいと言ったところで、すぐその場で売ってくれるものなのか？　という疑問もある。

アリシアがどうしたものかと考え込んでいると、セレーナが突然彼女の袖を引っ張った。
「あれなどよろしいのではないですか？」

セレーナが指差す先に目をやると、そこに一台の馬車があるのをアリシアは見つけた。

その馬車は一頭立てだが車輪は太く丈夫そうだし、荷台にはちゃんと屋根（ほろ）のある。長距離の旅にも耐えられそうだった。

ただ使い込まれた感があり、あまり清潔とは言えないが、お嬢様育ちであるはずのセレーナがそこに目を瞑ったのは、それほど王子

に会いたい気持ちが強いのだろう、とアリシアには好感が持てた。

とはいえ問題もある。

荷台には干し肉や野菜などの食料が満載されており、どうやら遠い村から王都まで行商に来ている者の馬車らしい。

今まさに自分が乗ってきて、帰りも乗って帰ると思われる馬車を売ってくれと言っても無理に決まっている。アリシアはそう考えたのだ。

それに馬車を売ってしまっては、あの大量の荷物をどうするというのだろう。

「あの馬車を売って貰うのは難しいと思います」

「どうしてなのです？」

「あの人は遠くから馬車に乗ってきたと思うのですが、帰りにも馬車は必要でしょう。私達に売ってくれるとは思えません」

「そうなのですか……。あの馬車なら食べ物も沢山乗っていますし丁度良いと思ったのですけど……」

「荷物ごと買うお積もりだったのですか？」

「はい。食べ物も必要と仰っていたので」

確かにそうは言ったが、アリシアが言う食料とは2人でカルディに行くまで、精々往復するに必要な量であって、荷台いっぱいの食料ではない。アリシアには思いも寄らない発想だった。

しかし……。とアリシアははたと手を打った。そしてセレーナに向けて不敵に笑った。
「確かに食料は必要ですわね」

「貴方、ちょっとよろしいかしら？」

さあ、今から露天を開き荷台に満載した商品を売るとしていた男は、その声に顔を向けた。
すると露天が立ち並ぶ街角には場違いなほど着飾った女性が立っている。
後ろには金髪をきっちりと結った地味な服装の、だが稀に見るほどの美貌の女性が控えていた。

勿論、セレーナが所有する名品の数々を身に纏ってにわかにご令嬢に扮したアリシアと、侍女を装うセレーナである。

「今日屋敷で舞踏会があるのです。その料理に使うので荷台に乗っている物をすべて売りなさい」

かなり無茶な要求である事はアリシアにも分かっている。だがおかしいと思われてもそれは問題ではない。

男にしてみれば商品をすべて買ってくれるというならば、少しくらいおかしくてもどうでも良い。相手はお金持ちそうだ。と
「ええ。勿論よろしいですよ」と笑顔で答えた。

アリシアは、ここからが勝負。自分は喜劇に出演する喜劇役者なのだと己に言い聞かせた。

アリシア自身、あまりにもおかしいと思いながらも意を決して口を開く。

「それでは、馬車ごと頂きますので、御代はおいくらになります？」

「はぁ？」

あまりの事に、何を言ってるんだ、という口調で聞き返す男に、アリシアは心中赤面しつつ平然と繰り返す。

「ですから、馬車ごと商品を頂きます。御代はおいくらかしら？」

理由がむちゃくちゃでも馬車を買い取って合法的に手に入れてしまえばこっちのものである。

女2人で馬車を強引に奪う事は出来ないし、出来たとしても通報され後を追われるだろう。

素直に馬車を売ってくれと言っても、なぜなのかと聞かれて理由を説明する訳もいかないのである。

男もどうやら本気らしいと思ったが、この馬車は帰りも乗って帰るのだ。売ってしまう訳にはいかない。と、戸惑いながらも答える。

「それはいくらなんでも無理ですよ」

「どうしてです？」

「この馬車はまだ使うんです。売っちまったら帰りの足が無くなってしまいますよ」

「ならば、新しい馬車を買えばよろしいでは無いですか」

「そんな事言われても新しい馬車を買う金なんてありやしませんし、道端で売っている物でもありやせん。依頼して作って貰うにも日数がかかります」

アリシアも男の言い分に内心頷く。アリシア自身、馬車を手に入れるのに日数がかかるのが嫌だから、この男に売って貰おうとしているのだ。

「では、この馬車を新しい馬車を買える金額で買い取り、馬車が出来るまでの滞在費もお支払い致しましょう。それでよろしいですわね？」

「え？　よろしいんで？　でも、どうしてそんなにまでしてこの馬車が欲しいんですか？」

男の言葉にアリシアは「おほほほほ」と笑う。

「だって、荷物を積み替えるのは面倒ではないですか」

積み替えるのが面倒というだけで、大金を払って馬車ごと買うなどとてもまともな思考とは思えないが、アリシアは当たり前でしょ？　という風に平然と言ってのけた。

だが男は困惑した。

そうは言っても女性2人以外に馬車を操る乗り手は見当たらない。後から連れてくるのだろうか。

しかし、この馬車はまだまだ使えるが多少くたびれて来てもいる。

新しい馬車が手に入るというのは悪い話ではないのだが……。

「でも、商品を買って頂けるなら荷物を積み替えなくても、私がそのお屋敷まで馬車で運びやすよ」

ちぃ！　と、アリシアは内心舌打ちをした。どうしてそんな良心的な事を言うのだろう。素直に売ってくれれば良いのに！

「おほほほほ。お分かりにならないの？」

アリシアは、そう言って男を笑ったが、実は何も考えていない。なんと言えば良いのだろうと、適当な言葉で時間稼ぎ必死で頭を巡らしていた。

男の方もアリシアの言葉に考え込んでいる。

アリシアは早く理由を言わないと、と焦り、それがいっそう頭を真っ白にし言葉が見つからない。

すると意外にも男の方が先に口を開いた。

「もしかすると、私が屋敷に行くと何か不味いんで？」

どうやらアリシアの言う舞踏会を秘密めいたものらしいと、男は勝手に解釈したらしい。アリシアも男の言葉に飛びついた。

「そうなのです。やっとお分かりになりました？」

「ええ、まぁ……」

やれやれとアリシアは、ほっとため息をつきセレーナに代金を支払うように言った。

セレーナは男に言われた金額を素直に払う。男は多めに代金を言

ったかも知れないが、それはどうでも良いことだった。

これで晴れてこの馬車は2人の物なのである。

もしかすると、変な奴が居たと噂になるかも知れないが、今はそれを気にしている場合ではない。まさか代金を受け取っておきながら通報する事もあるまい。

今は、追っ手がかからなければそれで良いのである。

馬車の荷台に侍女が乗り込み、令嬢が御者代に乗り馬車に鞭を入れて走り去る様を、男は呆然と見送った。

「恥ずかしかった……」

アリシアは、先ほどのやり取りを自分の記憶から消去する決意をすると、一刻も早くその場から立ち去りたいと、さらに馬車に鞭を入れた。

その後一旦馬車を止めてセレーナを番に残し、水や街道を記した地図など必要な物を手に入れる。

さらに装飾品さえ外せば元々は地味だったアリシアの服より、さらに地味な、というより田舎者っぽい服を手に入れた。

田舎娘が家の用事で馬車を走らせている。そう偽装するのだ。

買った店で服を着替えたアリシアは改めて馬車を走らせた。

そして王都の外へと通じる門をくぐり、遂に2人は王都からの脱出に成功したのだった。

第２４話：寵姫達の逃避行（４）

セレーナを荷台に乗せ馬車を走らすセレーナは、王都が見えなくなるほど離れると一旦馬車を止め、２人で荷台から余分な物を捨てた。

なるべく日持ちしそうな物を残し、野菜など生物（なまもの）は腐らす前に食べられそうな分だけ残す。

もったいない話だが、荷を満載していては２人が荷台に乗る場所が無いし、馬車を引く馬にも負担になる。

こうして場所を空けた荷台に改めて２人は乗り込み、地図を広げた。

「カルデイに向かうなら北東に向かうのが一番近いんだけど、初めは南東に進みたいと思います」

アリシアは地図を指でなぞり、王都から一旦南東に進んだ後、海岸線に近い場所を進む順路を示した。

「どうしてなのです？　遠回りになるのではないでしょうか」

一刻も早くサルヴァ王子に会いたいセレーナにしてみれば遠回りなどなぜするのか分からない。

「まっすぐに進むと殿下に立ちふさがろうとする者達と同じ道を進む事になるの。それは危険でしょう」

「そうですか……」

セレーナは意気消沈して言ったが、地図を見て改めて口を開き「それでは東に真っ直ぐ進んではどうです？」と地図を指でなぞった。

南東に進むよりは東に進んだ方がまだ遠回りではない。という積もりのセレーナの提案だったが、アリシアは首を振った。

「そこを通るには山道が多いから危険と思うわ」

「馬車が通り難いのでございますか？」

「いえ。この様な山道は山賊などの野盗がよく出没するの。それどころか人気の無い山道では、女2人しか居ないと知れば、ただの旅人でも襲ってきかねません」

「まぁ！　その様な事があるのですか？」

驚くセレーナに

「ええ」と答えたアリシアに苦笑が浮かぶ。

本当にこの娘はほって置くととんでもない事になりそうだった。

いつ戦いの巻き添えを食う分からず、野盗の襲撃にも備えなければならない田舎暮らしでは当たり前の配慮も、丈夫な城壁に守られた王都や領地の城で生活する公爵令嬢にはまったく縁がなかったのである。

「最後の最後で国境を越える時は山道を進む事になるけど、それまでは出来るだけ山道は避けたいと思います。確かに遠回りだけど、たどり着けないよりはいいでしょ？」

だがセレーナも頭ではアリシアの言う事も理解できるが、やはり遠回りになるのは残念なのだろう。
「はい。そうですね」と答えたものの幾分残念そうだった。

「大丈夫です。きっと会えるわ」
アリシアはセレーナに微笑んだ。

それから改めて馬車を進ませた。アリシアの提案どおり南東に向けてである。

夜になると馬車を道から逸らせて進ませ、林の中へと入り込んだ。
馬を馬車から外し、綱を木に括り付ける。そして荷台から干草を運んで馬の前に置いてやった。
アリシアとセレーナは干し肉やパンと言った火を使わない物を食べた。

冬の最中である。
火を焚き暖かい物を食べたかったが、その火に誘われ旅人が「ちょっと火に当たらせて欲しい」と言ってきては面倒だ。

女の2人旅である。目立たない様にするべきだった。

当然寝る時も火を焚かず、食事の後は狭い荷台で2人は毛布に包まりくっつく様にして横になった。

そもそもセレーナに火の番など出来ず、馬車を御する必要があるアリシアはセレーナ以上に休む必要がある為、火の番をする者が居

ないのだ。

「後宮では騒ぎになっているでしょうか……」

荷台の屋根の隙間から僅かに差し込む月明かりに照らされながら、セレーナが心配げに言った。

「ええ。そうでしょうね」

今更な上に当然としか言えない言葉にアリシアも苦笑する。

しばらく沈黙が続いたが意を決した様にまたセレーナが口を開いた。

「どうしてアリシア様は、私をサルヴァ殿下の元へと連れて行ってくれるのですか？」

これこそ今更な質問だが、王子に会いたい一心で気持ちがいっぱいになっていたセレーナには、なぜアリシアが手を貸してくれるのか、今まで考える余裕が無かったのだった。

アリシアは僅かな月明かりに照らされるセレーナへと目を向けた。

「私の婚約者は戦いに出てそのまま帰って来ませんでした。出て行く時はまさか帰って来ないなんて思いもよらなかったのに……」

「アリシア様……」

リヴァルが帰って来ないなど考えもしなかったアリシアだったが、もし今のセレーナの様に、愛する人と二度と会えないかもしれない。それを知る事が出来ていたなら、自分もきっとリヴァルに会いに行っていただろう。

今のセレーナの様に……。

アリシアは無意識にセレーナと過去の自分とを重ね合わせていた。
彼女は過去の自分に手を貸しているのだった。

「大丈夫です。貴女は殿下に会えます」
アリシアはそう言うとセレーナへと微笑み、彼女を抱きしめた。
セレーナもアリシアの胸に顔を埋める。

可愛い女性(ひと)だ。そう思ったアリシアは、不意にクスっと笑った。

「どうしたのですか？」

不審に思ったセレーナが抱きしめられながらも微かに顔を上げて問いかけた。

するとアリシアは、セレーナを少し強く抱きしめる。
「いえ。とても宴の時のセレーナ様と同じ人とは思えなくて」

アリシアの言う宴の時とは、勿論カーサス伯爵を招いた宴の時の話である。
あの時セレーナはアリシアに対し散々嫌味を言ったのだった。だが今のセレーナはその時の片鱗も見せない。

「あ、あれは……」
微かな月明かりしかない為アリシアには見えなかったが、セレーナの顔がたちどころに赤くなる。

「あれは？」

「その……。ああいう立ち振る舞いをするところなので……」

「立ち振る舞い？」

「はい。貴族たる者、公の場では優雅に振るまわなければならないと……」

「はぁ……」

アリシアは呆れた様な声を出した。

どうやら貴族様達は、ああいう公の社交の場では、意識して紳士然、貴婦人然といった立ち振る舞いをしているらしい。

お行儀が良いといえばそうなのだろうが、言ってしまえば宮廷を舞台に貴族達全員で大掛かりなお芝居をしているとしかアリシアには思えない。

あまりに馬鹿馬鹿しいにもほどがあった。

宴の時、王子の出現にセレーナの顔つきが一瞬変わった様に見えたのは、突然の事に驚いて一瞬演技を忘れたという事だったのだ。

「私は今の貴女の方が好きよ」

「私もアリシア様の事は好きです」

2人は共にクスクスと笑うと、抱き合ったまま眠りに付いたのだった。

朝になるとせめて朝くらいはと火を起して暖かい物を食べる。

万一旅人が寄って来ても人の心理として朝方は襲ったりはしないものである。そもそも朝なら火を焚いても目立たないだろう。

昼食は時間がもったいないと馬車に乗りながら食べた。

「私こんな事した事ありませんでした」

状況も忘れ無邪気に笑うセレーナにアリシアも思わず笑みがこぼれる。

公爵令嬢が馬車に揺られながらモグモグと干し肉を齧り、パンを食いちぎっていると知れば、お父様であるカスティニオ公爵は卒倒するだろうか。

こうして数日かけ南東へと進んだ彼女達は海岸線近くにたどり着き、今度はそこから東へと向かう。

だがアリシアが馬車を進ませていると、遥か前方が光り輝くのが見えた。

道が光っている!?　一瞬その様に見えたが目を凝らすと、なんと矛先を縦に並べアリシア達が進む道を逆にたどって来る軍勢の姿だった。

道が光っていると見えたのは、街道を埋め尽くす軍勢の規則正しく並べられた槍の穂先に、日の光が反射した為だったのだ。

まさかこんな所に兵隊がいるなんて！　とアリシアの胸はドキドキと鳴り響いた。

どうしよう……。
馬車を返して逃げた方が良いだろうか？
ランリエル軍旗をはためかせているが、カルデイ国境方面から来るならサルヴァ王子に敵対する者達の軍勢に違いない。
サルヴァ王子の寵姫だと知られればどの様な目に合うか……。
しかし軍勢には騎兵も居るだろう。馬車で逃げても逃げ切れるとは思えない。

下手に逃げてはそれこそ怪しまれて追いかけられると、アリシアは道を外れて馬車を進ませそこに止め、軍勢が通り過ぎるのを待つ事にした。

軍勢と鉢合わせた時の民の基本的な振る舞いだが、万一不審だと調べられては万事休すである。

セレーナの美貌は目に付き過ぎるし、有名でもある。
兵士の中でも仕官以上で王宮に出入りした事がある者なら見知っていてもおかしくは無いのだ。
そうでなくともこんなところで美貌の女性を見つけた兵士達がどの様な行動に出るか……。

アリシアは一旦荷台に入ると
「ここに隠れて！」とセレーナに干草の山を指差した。

「ここに？　どうしたのです？」
セレーナは訳が分からず首を傾げた」

「前から軍勢がやって来ます。見つかったら大変だわ。私が良いと言うまで出て来ないで！」

そして急いで干草の山に潜り込んだセレーナの姿が完全に見えなくなる様に、干草を被せてやる。

「何があっても私が良いと言うまで決して出て来てはいけませんよ」

アリシアの言葉に、干草の中から「はい」とセレーナの声が聞こえた。

改めて御者台に座ったアリシアは俯いて軍勢が通り過ぎるのを待った。

手綱を持つ手が震える。

セレーナを守る。もし兵士達が女を求めたら自分の体を差し出す。

アリシアはそう決意していた。

だんだんと軍勢が近づき、アリシアの鼓動も激しくなる。

そして遂に僅か５０サイトほどまで近づくと、軍勢の先頭に立って進む白馬に跨る騎士の姿もはっきりと見えた。

だがその騎士は……。

「リヴァル！？」

まさかそんなはずは無い。アリシアの婚約者であるリヴァル・オルカはすでに亡くなっている。

ならばこれは……。

「サルヴァ王子？」

どうしてカルデイに立ち往生しているはずの王子の軍勢がこんな所に？

だが、つま先から首の下までは見事な細工がなされた光り輝く銀

の鎧に、兜のみ頑丈だけが取り得の不恰好な物。
リヴァルの兜を被るサルヴァ王子に間違いなかった。

「殿下！　サルヴァ殿下！」

その声にリヴァルの兜に頭を委ねる騎士が右手を上げると、その僅か後方に居た騎士が叫ぶ。

「行軍停止だ！　止まれ！」

軍勢の更新が止まると、その騎士が近寄ってきた。それに応じてアリシアも馬車から降りる。

「今殿下のお名前を呼んだな。どういう積もりか」

戦勝時のパレードではあるまいし、馬車に乗る田舎娘が殿下に対して名前を叫ぶなどとんでもない不敬であるし、不審とも言える。

王子自身が来ず、他の者が問いただしに来たのも当然である。

どうやら本当にサルヴァ王子らしいと安心したアリシアは、騎士に会釈をして答えた。

「サルヴァ殿下の後宮に仕えるアリシア・バオリスです。殿下に宝物をお持ちいたしました」

「殿下の寵姫だと？」

「はい」

騎士はしばらく馬を御しながら考え込んでいる様だった。

余裕が出てきたアリシアは、騎士はきっとあまりの事に、アリシアの言う事の真偽をはかりかねているのだろうと、お気の毒にと微かに笑った。

そして結局結論は出なかったのだろう。

「そこで待っておれ！」

騎士はそう言って馬首を返し、指示を仰ぎにサルヴァ王子の元へと戻っていった。

「アリシアだと？」

騎士の報告にサルヴァ王子も驚きの声を上げた。

罠か？　と一瞬王子の頭によぎる。

だが罠を張るとしてはアリシアを口実に使うのは考え難い。と、王子は思い直した。

罠の為に名を騙るなら、アリシアなどの名を騙らず、セレーナの名を騙るべきだ。ならば本当にアリシアが来たというのか？

一部でアリシアは王子の寵愛あついと噂されているが、当の王子はその噂を知らなかったのだ。それゆえ罠にかけるのに、寵愛薄いアリシアの名を出す訳が無いと考えたのだ。

「はい。しかも殿下に宝物をお持ちしたと」

「宝物とはどの様な物なのだ？」

だが王子の問いに騎士は口ごもる。

「いえ、それは……」

こんな所に寵姫と名乗る者が居るという事に驚いた騎士は、そこまで気が回らなかったのである。

「聞いてまいります！」

騎士はそう言うと急いで馬首を返して再びアリシアの元へと向かった。

だがアリシアの元に戻り宝物とは何かと問いただした騎士に、アリシアはにべもない。

「この宝物は殿下に直接お渡しする必要があるのです。殿下にお越し頂く様にお伝え下さい」

王子を呼びつけるとはと、憤った騎士だったが相手は王子の寵姫である。それほど王子と親しいのかもしれないと思い直し、また王子の元へと戻る。

「殿下にお越し頂きたいと申しております」

騎士の報告に王子は、子供の使いかとため息を付いた。

だがこんなやり取りを繰り返しても仕方があるまい。

アリシアが後宮に来た理由を曲解し、アリシアを傷付けてしまったと後悔し悔やんでいた王子だったが、どうしてこの様な場所に居るのかと問いただす必要もある。

サルヴァ王子はたずなを引き、馬首をアリシアへと向けると、身を預ける白馬の腹を軽く蹴った。

馬車へと近づき、馬車の横に立つ者の絵画はっきり見えると、確かにアリシアだった。そしてアリシアの傍まで来ると馬から降り、

被っていたリヴァルの兜も脱ぐ。

「この様なところまで来るとはどういう積もりか！」

思いがけない王子の怒声にたじろくアリシアだったが、確かに寵姫がこの様なところにまで来るとは非常識この上ないだろう。

だがおそらく王子も愛しているであろうセレーナを折角連れてきてあげたのに、と気分を害し、いっその事このままセレーナを連れて帰ってやろうかとも思ったアリシアだったが、それをしてはセレーナが泣いてしまうと思いとどまった。

「そんなに大声を出さないで下さい。折角王子の宝物をお持ちしたのに」

「私の宝物だと？　何の事だ？」

アリシアの言葉に王子は訝しげな視線を送る。

どうも話せば話すほど面倒になりそうだと判断したアリシアは「少しここでお待ち下さい」と王子をその場に残し馬車の荷台へと姿を消した。

次期国王陛下を呼び付け、さらに待たせるなど寵姫としてあり得ない暴挙なのだが、アリシアは平然とやってのけた。

「出てきて良いですよ」

アリシアの声に干草の山から姿を現したセレーナは、当然全身干草だらけである。

干草の山に隠れろと言ったのはアリシアだしあの場合は仕方が無かったのだが、少し悪いことをしたかなとアリシアは思った。

「もう大丈夫なのですか？」
干草の山に入っていた所為で、どうやら外の会話が聞こえて居なかったらしい。

全身に付いた干草を取ってやりながらアリシアは答えた。
「ええ。もう大丈夫よ。ちょっと馬車から降りましょう」

アリシアに少し悪戯心が疼いたのだ。

出来るだけ取ってやったが、服に付いた干草がそう簡単に取れる訳も無く、セレーナはまだ干草だらけだったが、いつまでも王子を待たせる訳にも行かない。

王子は御者台側、つまり馬車の前の方に居るのを、あえて馬車の後ろからセレーナと共に荷台を降りた。

荷台の影から馬車の前の方を覗くと、いらついた様に立っている王子の姿が見える。
アリシアはにやにやと笑うと、セレーナの後ろに回り込む。
そして「殿下。宝物です！」という声と共に、セレーナを後ろからドンッ！　と押した。

声に振り向いたサルヴァ王子と、押されて飛び出したセレーナの目が合った。

「セレーナか？」
サルヴァ王子の前に、干草だらけの服に身を包んだセレーナの姿があった。

「殿下？」
セレーナの前に、銀の鎧に身を包んだサルヴァ王子の姿があった。
そして王子の元へと駆け寄りその胸に飛び込んだ。
その身体は硬い鎧に覆われていたが、それでもセレーナには嬉しかった。

だが王子の方はいまだこの状況に戸惑った様に問いかける。
「どうやってここに？」

その声にセレーナは顔を上げ王子を見つめた。その目には涙が溢れている。
「アリシア様が連れてきて下さいました」

「アリシアが？」
王子の目が驚きに見開く。

「はい」

王子が視線を巡らしアリシアの姿を探すと、馬車の後ろの方で佇んでいた。そして王子と目が合うと微笑む。

さすがの王子もこの状況に気持ちが追いついていない事と、手紙の事、などといった複雑な心境にいつもの闊達さが無い。

本来なら、それでもこの様なところまで来るという非常識さに怒鳴るところであるが、目を泣き濡らして己の胸に顔を埋めるセレーナを思うと怒鳴る事も躊躇われた。

「そうか。礼を言う」
と、王子は結局無難な言葉を発するに留まった。

実際アリシアが行った苦労に比べ、あまりにも物足りない言葉だが、アリシアも王子からの礼を期待していた訳ではない。まったく困った王子様だ。とやれやれと肩を竦ませただけですました。

あくまでセレーナの為にしたという思いが強く、セレーナが喜んでいるならそれで良い、という気持ちだったのだ。

そして意外にもアリシア自身は、王子からの仕打ちに対して、まったく傷付いていないといえば嘘になるが、王子が思うほどには頓着していなかったのである。

アリシアの貞操観念が低いという訳ではない。

リヴァルが亡くなってからというもの、死んでも良いと考えているアリシアは自分の身について無頓着になっているのだった。

今回の事でもアリシアは、自分の身を差し出してでもセレーナを守ると決意したが、リヴァルが亡くなる前だったなら、どうすれば2人とも助かるかを必死で考えていただろう。

アリシアが改めてセレーナに目をやると、彼女は嬉しそうに涙を流しながら王子の胸に顔を埋めていた。

第２５話：バルバールの現実主義者

サルヴァ王子がカルデイ国境を突破しランリエルに戻ったという情勢はバルバールにも伝わっていた。とはいえ他国、しかも方角は正反対のカルデイ国境の事である。正確な情報など集められようも無く、かろうじて知りえた情報は僅かなものだった。

「詳細は不明だが、とにかくサルヴァ王子とその軍勢はランリエル王都フォルキアに戻り、そして改めて数万を動員。カルデイ国境に展開している反乱軍を背後から包囲した。って事かい？」

バルバール王都チェルでの、幕僚そして主だった諸将が出席する軍議の席で、ディアスはランリエルの情勢を報告した士官に、そう問いかけた。

「はい。その通りです」

と短く応えたその仕官に、内心詳細が不明ではまったく報告の意味が無いだろうと愚痴をこぼしたが、言ってもせんなき事と口をつぐんだ。そもそもこの仕官も貧乏くじを引いただけで、彼１人が情報収集からすべての実務をこなしている訳ではないのだ。

そしてこの状況に、１人の将軍が意見を述べた。

「ディアス将軍。いかが致しましょう。計画ではサルヴァ王子と反乱軍が戦うその時、我らは海上よりカルデイに攻め込む予定でした。ですがこれでは……」

途中で閉じられた言葉の意味を正確に読み取ったバルバール軍総司令官ディアスは、目を瞑りため息をついた。そしてその語られな

かった問いに答える。

「ああ、カルデイを攻めても意味は無い。我々がカルデイ軍を引き付けても、サルヴァ王子と反乱軍の戦いになんら影響を与えない。国境を固めるカルデイ軍が我らの迎撃に引き上げても、サルヴァ王子はなんら困りはしないさ」

軍議の席からもそこかしこからため息が聞こえる。仮想、いや、ほぼ現実の敵国に対して打撃を与えられると思っていたにも拘らず、その相手にするりとかわされたのだ。やはり落胆は大きい。

そしてそれを諦めきれない者が、夢を捨てきれず食い下がる。

「ですが、いっその事、陸路からランリエルに攻め込むというのはどうでしょうか？　反乱軍とサルヴァ王子の軍勢との戦闘が開始されたその時、我が軍がランリエル国境を越え攻め込めば、反乱軍と我が軍とでサルヴァ王子を挟撃出来る筈です」

それに対し、バルバール軍随一の現実主義者が答える。

「コスティラに大打撃を与えたとはいえ、我が軍がランリエルと戦闘状態となればコスティラが傷付いた体に鞭打って攻め寄せてくる事も考えられる。その為、コスティラへの備えも必要。ゆえに対ランリエルに動員できる兵力は４万ほど。反乱軍は２万５千。サルヴァ王子が王都に帰還した以上、その動員は１０万を超える。王子は我が軍に十分な戦力を差し向けた上で、反乱軍を倍以上の戦力で包囲し続ける事が出来る。我が軍が抑えられている間に、叛乱は鎮圧されてしまうよ」

「ですが、ディアス総司令ならば、我が軍に差し向けられた軍勢を

撃破する事が可能なのでは。そして我が軍がランリエル王都フォルキアを突けば、サルヴァ王子は進退窮まります」

ずいぶん自分を高く買ってくれるものだ。とディアスは苦笑した。

「そうだな。私は自分の能力を謙遜する積もりは無い。我が軍がランリエルに攻め寄せた場合、迎撃に来る戦力はほぼ同等だろう。同数ならば勝ってみせる。そう言いたいところだが、そう簡単に行かない」

「いえ、ディアス総司令なら必ずや……」

「サルヴァ王子は、反乱軍に対しては倍以上の戦力を投入するだろう。ならば他の者に任せられる。そしてバルバール軍に対しては、サルヴァ王子自身が出てくる。私もサルヴァ王子と戦って必勝を誓えるほど自惚れてはいないよ」

「しかし総司令は常勝。サルヴァ王子が相手でも必ずや」

だがその言葉にディアスは首を振った。

「常勝と言っても前回のコスティラへの侵攻を除けば、基本迎撃戦のみ。戦いとは守る側が有利。しかも国境は天然の要害で守られている。その様な有利な状況での常勝に自惚れるほど私は愚かではないよ。こちらからランリエルに攻めるとなれば、その有利な状況は逆転される。サルヴァ王子に不利な条件で勝つ。ちょっと難しいな」

ディアスはそう言うと肩をすくめてにやりと笑った。深刻な状況にもかかわらずいささか不謹慎な態度であったが、あえて冗談めかす事により、しつこい追従者の口を封じたのだ。もっとも内心では

口に出せばまさに不謹慎では済まされない事を考えていたのだが。

「とにかく現状、ランリエルの内乱について、我らバルバール軍が介入する目は無くなった。短期間足を引っ張るだけなら色々手は有るが、そんな事をしてもしょうがない。それよりもいずれあるランリエル軍によるバルバール侵攻に対する迎撃の準備を整えるべきだろう」

ディアスはそう総括し、軍議は幕を閉じた。

その後、従者であるケネスと共に執務室に引き上げたバルバール軍総司令官フィン・ディアスは、執務室の重厚な机の椅子に座り、改めてランリエル王国に思いを巡らせる。

今回の内乱でランリエルはどの程度の被害を受けるのか。今回の反乱軍の兵力は2万5千。それは当然叛乱に加担した貴族の私兵だが、各国の軍勢は王国所属の騎士団を中心とした直属兵と、貴族達の私兵の混成軍。

反乱軍が消耗すれば、それはそのままランリエルの動員兵力が差し引かれる事となる。そしてそれを回復するに必要な時間は、消耗した軍勢の数に基本そのまま比例する。当然サルヴァ王子の軍勢もだが、ディアスは王子は圧勝すると読んでいた。損害のほとんどは反乱軍のものとなるだろう。

問題はどの程度の損害を受けるかだ。反乱軍2万5千全軍が一兵残さず消滅するなどありえない。通常全軍の3割を失えばその軍勢は壊滅と言われている。王子が圧勝する事を考えればそれ以上の損害を与える事も予想されるが、希望的観測はすべきではない。ここはその3割と見ておくべきだろう。

つまり7千から8千。ランリエル全軍で考えれば5%ほどとなる。ランリエルの国力から、ディアスはその回復に2ヶ月を要すると見ていた。バルバール軍では、元々ランリエルとの戦いは来年の春を想定していた。それが最低でも2ヶ月は先になる。

バルバール軍はその得た時間で、迎撃態勢をさらに強化する事が出来る。内乱に介入できなかった事は残念ではあるが、そもそもその内乱はディアスが裏で手引きしたものなどではなく、バルバールにしてみればまったくの僥倖。これだけでも天からの贈り物と、ありがたいと感謝すべきだった。

そしてディアスは思考を切り替えた。軍議の席で考えた、あの不謹慎な事についてだ。

「ケネス。どうやらミュエルとの結婚式は行えそうだよ」

超常の力を有せず、ディアスの思考を読めぬケネスは、叔父であり上官でもある男の突然の言葉に戸惑った。いや、確かにランリエルに攻め込まぬなら、ミュエルとの結婚式を行う予定だった来年2月に出陣はしない。だがランリエルに打撃を与えるチャンスを失いバルバール軍としては不運としかいえない状況で、それを幸いとする様な発言をその総司令官であるディアスがするとは思わなかったのだ。

「良いのですか？　確かに結婚式を行うのは可能ですが、他の人が総司令の事を悪く言うのでは無いですか？」

ケネスの言葉はディアスを思っての事だが、ディアスにとっては苦笑するしかない。

「私がその様な評判を気にするほど、神経が細い男と思っているのかい？　言いたい奴には言わせておくさ。ミュエルは私の大事な妻だからね。自分の外聞の為にその妻を悲しませる様な事は出来ないよ」

ディアスの言葉にケネスは赤面した。そしてやはりミュエルには自分より、この度量の広い総司令が相応しかったのだと改めて思った。自分に同じ様に考える事が出来る日があるだろうか？　人に言われて気付くのではなく、自分で自然とそう考えられる様にだ。

赤面するケネスに、ディアスは改めて苦笑した。また買いかぶられたか。そう思ったのだ。

「そう難しく考える事は無いよ。中止しなければならないから中止し、中止しなくて良くなったか中止しない。ただ、それだけなんだからな」

「それはそうかも知れないですけど……」

「まあいい。どちらにしろいずれランリエルとは戦いになる。その時はケネス。お前の初陣にもなる。覚悟を決めて置けよ」

そう。今まで体質的に兵士として戦うには向いていないという事で、とっくに初陣を飾っても良い年齢になっているにもかかわらず戦いに出た事がないケネスだったが、次の戦いではディアスの従者として戦場に出るのだ。

「はい！　必ず総司令のお役に立って見せます！」

意気込んで答えるケネスだったが、ディアスは今日何度目か数えるのも馬鹿馬鹿しくなりながらもまたも苦笑する。

「次の戦いでは、お前は戦場の空気を掴み取ればいい。それと私や他の将軍達の指揮から何かを掴み取れれば御の字だ。他に何も期待しないよ」

だがケネスは顔に不満の色を浮かべた。確かに自分はまだ未熟だが、それでも活躍を期待しないなどあんまりな言葉である。ケネスの表情からそれを読み取ったディアスは、ため息をついて少年に口を開く。

「私が前線に出ない総司令という事はお前も知っているだろう？まさか従者が総司令をおいて前線に出る積りじゃないだろうね？」

あっ！　っと、初陣に気負った為か、迂闊にもそんな簡単に気付かなかったケネスは赤面したが、それでも控えめながら反論をしてみせた。

「ですが、万一敵が本陣にまで攻めてくる事だってありえます。その時は必ず」

そしてディアスはその言葉にも首を振ったのだった。

「敵が本陣にまで攻めて来た時の従者の活躍ってなんなんだろうね。私は自分の腕がどの程度が知っている。とても敵と戦おうとは思わない。総司令が戦死すれば戦いは負けだ。だから敵が来たら私は逃げる。その時お前はどうする？」

そうだディアス総司令は戦わない事で有名な男だった。改めてそ

う認識してみると、自分が戦場でどうすべきなのか？　ケネスは自問しその回答を口にした。

「それは当然最後まで総司令に付き従います。僕は総司令の従者ですから」

その答えに何を思ったのかディアスは椅子から立ち上がり、傍に控えて立つケネスと向き合った。そして自分より背の高い少年の頭に手をやる。

「違う。その時の優秀な従者の活躍とは、身を挺して敵を防いで私が逃げる時間を稼ぐ事だ。だが私は、お前にそんな活躍はして欲しいとは思わない」

従者は逃げる為の捨石になるべき。その言葉にケネスは絶句した。

「戦場では命の価値は平等じゃない。戦場にある時、私の命はバルバール全軍の誰よりも尊い。戦場で一兵卒を偉い将軍閣下が身を挺して庇い命を落す。なんて美しい話だろうね。だが指揮する者が死ねば戦いは味方の負けさ。そして数千、数万の将兵が命を落とす。一兵卒の命の為に数千、数万が死ぬんだ。一兵卒の為に数万の命を預かっている者が落とすなんて馬鹿馬鹿しい話さ。私は誰の命を犠牲にしても死んではならないんだよ」

ケネスはディアスの事を、将兵を大事にする将軍と考えていた。しかし今語ったその言葉はそれとは反対だ。いや、普段のディアスの言動からも将兵を切り捨てる様なところは見当たらない。

そしてディアスは、そのケネスの疑問を察しているかの様に、その回答を続ける言葉に乗せた。

「兵法にもある通り、率いる兵士を我が子の様に大事にすれば、兵士は指揮官の為に命をかけて戦ってくれる。だから兵を率いる者は将兵を大事にしなくてはならない。だがその裏で命の価値の違いを計算しなければ行けないんだ。攻勢に出るとき自らが先頭に立つ。退却する時自分は最後まで戦場に留まる。その様にする将軍も多々居る。もちろんそれは間違っちゃ居ない。それによって将兵の信頼を得られ士気は上がる。戦いには士気が重要だからね。だが私はしない。私がそんな事をすればたちどころに戦死してしまうよ」

そう言うと、ディアスはケネスの頭の上に乗せていた手を放し、自分の頭を軽くなでつけた。そして自嘲の笑みを浮かべる。

「幸い私の剣の腕がまるっきりなのは有名だからね。お陰でいつも逃げ回っていても大抵の人は文句を言わないので助かっている。もちろん何にでも例外はあるが」

その例外とはもちろん、シルヴェン将軍を筆頭とする、家柄を頼りにディアスの台頭を快く思わない一派である。

「ディアス総司令は、どうして僕にその様な話をなさったのですか？」

ケネスは今までディアスからさまざまな戦略、戦術の話を聞いていた。しかしこの様な話をされたのは今日が初めてだったのだ。しかもその内容とは、将兵の命を計算によって切り捨てよ、と言う、その当事者である将兵に聞かれればディアスの人望が失墜しかねない事なのだ。

「さて、どうしてかな。それはお前が考えてくれ」

そう言ってディアスははぐらかしたが、実際は明確な理由があった。ケネスの体質では好むと好まざるに寄らず、戦場での武勇など期待できない。そのケネスが軍人を目指すなら、ケネスの目標どおりディアスと同じ型の軍人を目指す事になる。

それには今語った事を理解する必要がある。そして今語った事を聞いて、軍人と言うものが嫌になったと言うなら、初陣を向かえる前に軍から去るべきだ。その判断をケネスに委ねたのだった。

「それでは、家に帰るとしよう。ミュエルに結婚式が行えそうだと伝えなくてはいけないからね」

そう言ってケネスから背を向け執務室から廊下へ通じる扉へと向かうディアスを、少年従者は慌てて追いかける。

そしてその背を見ながら思った。

もしかして、歴代総司令随一の弱さを誇るこの男は、そう見せかけているだけで実は剣の達人だったりするのだろうか？　と。いやすぐにそれは思い直した。ディアスの体は貧弱とは言わないが、到底鍛えられているとは言いがたい。実は剣の達人などとはありえないだろう。あまりにも夢見がちな妄想だった。

だがさらに考えた。剣が上達しないように、わざと剣の稽古をしていないのではないかと。もっとも、それを当のディアスに問いかければ、いくらなんでも買いかぶり過ぎだと大笑いしただろう。真偽の程は別として。

第２６話：反乱軍の末路

セレーナ、アリシア、２人の寵姫と合流したサルヴァ王子の軍勢は、カルデイ国境を封鎖する反乱軍を避け王都に帰還した。

王都では、カルデイに取り残されたと思われていたサルヴァ王子の突然の生還に沸いた。これは王子があえて、先触れの使者を王都に向かわせず、さらに目立たぬ様に海岸線にそって進軍し、しかも通過する村々にも緘口令を布いた為だった。

なぜその様な事をしたのかと言えば、それには当然理由がある。反乱軍は王子が無事と知ればすぐさま軍勢を解散させ、何かと理由を付け敵意は無かったと申し開く事は目に見えていた。それでは折角不満分子を炙り出した意味が無い。

それをさせぬ為には、国境にいる彼らに申し開く間を与えぬ事が必要だった。サルヴァ王子は素早く軍勢を展開し彼らを有無を言わせず包囲してしまったのだ。

サルヴァ王子はバルバールに対し十分な備えを残し、５万の軍勢を持って反乱軍を包囲した。

「反乱軍は守りを固めています。そして今回の事は誤解であると使者を送ってきております。いかが致しましょう」

本陣で副官ルキノからの報告にサルヴァ王子は頷いた。

「まあそんなところだろうな。私が率いる倍の軍勢を相手にして勝てるとは、彼らも考えてはおるまい。すべて予定通りだ」

「では、こちらも予定通り事を運びますか？」

あまりにも予定通りな状況に微笑んで答える副官に、王子は不敵な笑みで応じる。カルデイ、ベルヴァースの名将と戦い、しのぎを削ってきた王子である。今まで戦いに際して私兵を派遣するも、指揮する者についてはすべて代理人を立てていた名門当主など相手にならない。

もっとも王子にしても、遊兵を作る余裕の無い戦場で、無能な名門当主などが指揮官として来られても迷惑なので、代理人を派遣してくるのは望むところだったのだが。

王子は忠実な副官に、かねてからの計画通りに命じた。

「ああ。カーサス伯爵と上手く連携をとり事に当たってくれ。その対応により今後の展開が大きく変わってくる。もっともすでに最善の結果への道筋は付けられている。後はそれを踏み外さぬ事だけだ」

カーサス伯爵は、情報操作にその才能を発揮していた。カルデイに居て正確にランリエルの内情を読み取り、サルヴァ王子に組する判断をした男である。その手腕は傑出している。

「承知いたしました。サルヴァ殿下」

ルキノは一礼し本陣を後にした。すべて計画通りであり後は彼らに任せればよい。そう考えた王子は、その後の事について思いを馳せる。来年春に予定しているバルバールとの戦いについてだ。

戦力だけで考えれば、バルバールはランリエルの半分以下。勝っ

て当たり前の勝負である。だが現実はそう甘くは無い。バルバールとランリエルを断する国境の天険が、その戦力差を生かす事を許さない。

バルバール軍を率いる総司令ディアスは、音に聞こえた戦巧者。ランリエルと同じくバルバールを大きく上回る戦力を有するコスティラに対し、勝利を積み重ねている男だ。同数では負けぬまでも勝てない。サルヴァ王子はそう想定していた。

いや、厳密には勝てぬと想定して戦略を立てる。そう考えていたのだった。ならばどうすべきか。一つはディアスを凌駕する戦力をぶつける。ならば勝てる。だが国境の天険が邪魔をしてそれは難しい。ならば残る手は……。

ある日、ガリバルディ公爵を盟主とする反乱軍に、サルヴァ王子の名前で降服の使者が訪れた。その条件にガリバルディ公爵は青ざめ、絶叫した。

「私の首を差し出せだと!?」

サルヴァ王子の出した条件は、通常あり得ない条件だった。首を差し出すくらいなら最後まで抵抗するに決まっているからだ。もちろん部下思い、将兵思いの主君ならば自分の首を差し出す代わりに他の者の命を助けて欲しい。そう考える事も無いではない。だが、自分の利益の為に反乱を起した者が、その様な殊勝な考えをする訳が無い。

事実、ガリバルディ公爵は王子の申し出を一笑した。

「馬鹿馬鹿しい。確かに状況は不利とはいえ、この様な条件を飲むくらいならば、全軍打って出て一矢報いてくれるわ！」

むしろ戦意を高揚させた公爵は、今すぐにでも打って出らんばかりに吐き捨てたのだ。自分は王国でも屈指の名門の当主である。なぜ配下の命を救う為、自らが犠牲にならねばならないのか。

だがそれを反乱軍の副盟主といえるバリオーニ公爵とアラビーソ侯爵が制した。

「ガリバルディ公爵。落ち着きなされ。これは王子の我が軍を激し無謀な攻撃をさせんが為の策略で御座いましょう」

「さよう。バリオーニ公爵の言うとおりです。確かに王子の軍勢は我が軍の2倍。しかし守りを固めていれば、早々負ける事もありますまい。その時こそ譲歩を引き出し、有利な条件で和睦すべきです」

「我らが粘りランリエルの情勢が不安定となれば、王子に組したカルデイ諸侯の動向もどうなるか分かりませぬ。カルデイに不穏な動きがあれば、王子も我らといつまでも対峙している訳には参りますまい。その時こそ譲歩を引き出し、有利な条件で和睦すべきです」

元々カルデイをランリエルに完全併呑せんと目論んでの挙兵にもかかわらず、そのカルデイ頼みの策などあまりにも不甲斐ない。しかし他者が自分に奉仕するを当然として生きてきた彼らである。他者を利用する事に何の呵責も感じない彼らには、カルデイを頼りにするのもまた当然の発想だった。

ガリバルディ公爵も両名の言を良しとした。突撃命令も死ぬくらいならと考えただけである。生き残る算段が残っているならば、そ

れにかけるのは当然だった。

「良かろう。ならば、もうしばらく様子を見てみるとしよう」

公爵はそう言って気を落ち着かせた。

だが実は、両名の提言は公爵を思っての事ではない。単にガリバルディ公爵の自殺行為といえる暴挙に対しての、もっともらしい逃げ口上にしか過ぎなかった。両名、我ながら即興で良く上手い話を作れたものだと、内心得意となっていたのである。

だがその数日後、カルディの動向を見守っていた彼らに、王子から新たな降服の条件がもたらされた。反乱軍に参加した諸侯が集まる中、使者が口上を述べる。

「折角多くの命を救わんが為、ガリバルディ公爵御1人の命で事を収めようというサルヴァ殿下のお心を分からず抵抗し続けるとはあまりにも不心得。殿下におきましては、反乱軍の副盟主たるアラビーソ侯爵も同罪とし、ガリバルディ公爵とあわせて御二方の命で事を収拾させよ。とのお言葉で御座います」

使者の言葉に、諸侯はざわめきそして1人の男に視線が集中した。ほかならぬバリオーニ公爵にである。副盟主と呼ばれるのはこのバリオーニ公爵とそして死を命じられたアラビーソ侯爵の2人だ。なぜバリオーニ公爵は死を命じられないのか。諸侯に胸中に穏やかならぬもの波うち、渦巻いた。

そしてバリオーニ公爵自身も内心穏やかではいられない。どうして自分には死を命じられないのか。自身の潔白を知っている公爵には、諸侯から自分へ疑惑を向けられている事など夢にも思わぬ事だった。公爵が考えたのは、自分がアラビーソ侯爵より下に見られて

いる。それゆえに、死を命じられなかったのではないか。その疑念だった。

落ちぶれたとはいえ公爵との自尊心は存在した。どうして侯爵ごときの風下に着かなくてはならないのか。だがもちろん死にたい訳ではない。自分にも死を賜りたい。そうとは言えずバリオーニ公爵は口をつぐんだ。

そして使者が引き上げると、改めて諸侯はそれぞれ親しい者達と集まり、使者の口上について話し合った。

「やはり、ガリバルディ公爵もアラビーソ侯爵も殿下からの申し出は断る様ですな」

「それはそうでしょう。お二方とも、自らの命で他の者の命を救おうなどと考える方では御座いません」

「確かに……」

「それにしても、もしやバリオーニ公爵はサルヴァ殿下と通じておるのやも……」

「確かに考えられぬ事ではありませぬ。ですが、そうであったとすれば、あからさま過ぎでは無いですかな？　バリオーニ公爵はアラビーソ侯爵より下に見られている。それだけの事でしょう」

「しかし仮にも公爵ですぞ。公爵とは王族と血縁で連なる家柄。単に侯爵より爵位が1つ上という事とは訳が違います。それを公爵を下に見るなど……。王国の体制にもかかわる問題」

「では、だから公爵がサルヴァ殿下と通じている。そう仰るか？」

「そうは申しません。盟主たるガリバルディ公爵のお命はやむを得ぬとはいえ、やはり公爵は別格。副盟主でしかないバリオーニ公爵のお命は減免なさるという事なのでは」

「なるほど、ありそうな事ですな……」

諸侯が思い思いに意見を述べるなか、数日後さらに使者が到着する。使者はさらなる命の提供を求めた。だがその者の名に諸侯は驚愕した。

「ボンディーノ伯爵ですと！？　伯爵など、ただの物資運搬の責任者ではないか？」

いくらなんでも次に死を命じられるならバリオーニ公爵。誰もがそう見ていた。諸侯の疑惑はさらに深まった。そしてここまで来ると、さすがに公爵自身も己に向けられる諸侯の白い目に気付かぬ訳には行かなかった。

どうしてこの様な状況になってしまったのか。公爵は焦りその為行動を起した。とはいえ特に上手い方法がある訳ではない。反乱に組している血族に連なる貴族達を招き、自身の潔白を訴えたのだ。

彼らも一族の長のいう事である。公爵の必死の弁明に、もちろん信じますとも、と答えた。しかし心中の疑惑は晴れきれない。それどころか一族外の者にしてみれば、公爵が一族を集めなにやら密談を行っている。そう見えたのだった。

反乱軍は猜疑心の渦に巻き込まれた。もちろんこの状況はサルヴ

ァ王子の指示によるものだった。反乱に組した諸侯を疑心暗鬼に陥れる為あえてバリオーニ公爵に死を命じないのだ。もちろん諸侯の中にはそれを見破り、離間の策でしかない。そう断ずる者も存在した。

だがみながみな、その様な賢明な者達ではない。我が子を賢人と信じる母すら、3人の人間から我が子が罪を犯したと讒言されれば、母はそれを信じ子たる賢人を疑うという。そしてバリオーニ公爵は賢人ですらなく、疑う人間は3人では利かない。王子の策を感じ取った者すら、周囲の者から公爵への疑惑を耳に入れられ続ければ、その言に染まる有様だった。

この様な状況の中、バリオーニ公爵の一族の甥に当たるクレパルディ子爵が伯父である公爵に面会を求めた。公爵の率いる軍勢の陣の天幕で人払いをし2人は対面した。

「私は伯父上の潔白を信じております。しかし伯父上の高潔も他者から信じられなくては意味はありません。彼らが伯父上を疑うならば、いっそその期待に応えてやれば良いではないですか」

公爵は裏切りを進める甥の言葉に険しい視線で答えた。

「しかしそれではみなに、やはりそうだったのか。そう思われるだけではないか。その様な屈辱耐えられるものか」

だが子爵は目を瞑り首を振って、伯父の見解を否定した。

「伯父上……。もはや我々は屈辱を感じずにはすまない状況に追い込まれているのです。確かに王子に組すれば、それ見た事かと言われましょう。しかしこのまま手をこまねいていればどうなると思う

のですか？　我々は無実の罪で諸侯から罰せられます。それこそ屈辱ではないですか。それとも己のみ潔白と胸中に秘めながら、無実の罪で罰せられのが名誉とでも仰るのですか」

　甥の容赦ない追求に公爵は唸った。確かにどう転んでも屈辱にまみれるのは避けがたい状況である。そして同じ屈辱を受けるならば、生き延びた方がマシ。そう考えるのが普通だろう。しかし公爵は古い人間だった。

「屈辱にまみれ生き延びるぐらいならば、真実を胸に死した方が名誉ある公爵家当主としては当然であろう」

　公爵の古風なヒロイズムに酔った言葉に、子爵は内心ため息をついた。彼も公爵個人の問題で済むならば好きにさせるのだが、その下には多くの一族郎党がぶら下がっているのである。伯父の自己陶酔に一族を道連れにさせる訳にもいかない。当然その一族には子爵も含まれているのだ。

「伯父上、ですが名誉を守りさらに生き延びる道があるとすれば、いかがですか？」

「なに？　私の潔白を証明する手立てが有ると言うのか？」

「いえ。それは無理です。もはや伯父上が生き延びるには、王子に組するを事実とするしかありません」

　話が同道巡りするかの様な甥の言葉に伯父は激する。

「馬鹿者が！　だからそれでは裏切り者の汚名を着ると言っておるのではないか！」

だが甥は激した伯父に平然と答えた。

「いえ、伯父上はガリバルディ公爵やアラビーソ侯爵を裏切るのではありません。伯父上はサルヴァ殿下の命を受け、初めから彼らを監視する為に彼らに組したふりをしていただけなので御座います。これこそ王室に対し忠義の行動ではありませんか」

公爵は甥の言葉に驚愕の目を向けた。

「お前……。まさか初めから殿下と通じて……」

「伯父上、何事にも保険は必要です」

クレパルディ子爵はにやりと笑った。

数日後、ガリバルディ公爵、アラビーソ侯爵両名にバリオーニ公爵から使者が届いた。

「近頃不愉快な醜聞が飛び交っておりますが、私が裏切り者などとは、とんでもない話。私が名誉あるランリエル王侯の公爵として恥じぬ事を証明しよう。その為に是非お二方を招きしたい」

両名はそこまで言うならと招きに応じた。だが、バリオーニ公爵の天幕に入ったところで公爵の私兵に取り囲まれたのだった。

「バリオーニ公爵！　はやり我らを裏切っておったのではないか！　それを名誉を証明しようなど！　このランリエル貴族の面汚しめ！」

ガリバルディ公爵は薄汚い裏切り者を血走った目で睨んだ。だがバリオーニ公爵は内心の動揺を隠し切り、構えて平然と切り返す。

「ランリエル貴族として、サルヴァ殿下に弓引くなど持っての他。我は殿下の命を受け御主等を監視しておったのだ。御主等こそ王室に歯向かう裏切り者ではないか！」

「おのれ……。あれほど王子への誹謗を述べながら、よくも抜けぬけと……。わが身惜しさに我らを売る積もりであろうが！」

「おのが良心に恥じぬのか！」

両名は怨嗟を込め公爵をなじったが、それが両名の命数を縮める事となった。彼らの声に耐え切れなくなった公爵が脇に控える私兵に命じる。

「これ以上の問答は不要！　２人の首を落とし、サルヴァ殿下に献上差し上げるのだ！」

こうして反乱軍は戦闘をする事無く、盟主と副盟主が打たれ、残った副盟主はそもそもサルヴァ王子の手の者だった。と言うあっけない結末で幕を閉じた。当然王子は、残余の諸侯はすべて不問とした。ガリバルディ公爵、アラビーソ侯爵の血縁に連なる者達すら、一族の当主に反乱に組せよと命ぜられれば断る事が出来なかったのだろう。とむしろ労いの使者を送るほどだった。もっともボンディーノ伯爵だけは、生贄の羊として処罰されたが……。

王子は国内の身分制度改革などを目指している訳ではない。自身に敵対する者達を抑える事さえ出来ればそれで満足だったのである。

そして自分に内心不満を抱く者の存在すら許さぬほど潔癖症でもなかった。

今回の反乱を戦闘をせずに終結させたのには複数の理由があった。まず第一はバルバール軍総司令官ディアスが認識していた通り、反乱軍の軍勢を討つなど自国の戦力の低下でしかなく、王子にとっては馬鹿馬鹿しい事でしかなかった。もちろん戦闘が不可避な場合もあるが、避けられるならば避けるべき事なのだ。

第二には、戦う事すら出来ず盟主、副盟主と言った首謀者のみが首を取られただけで終ったという事実が、更なる反乱を未然に防ぐ事に繋がる。

王子は、最終的に寝返ったとは言えバリオーニ公爵をそのまま許す積もりは無かった。もちろん表立っては、我が為に尽力してくれたと、みなの前でその労を労い、かねてより王子の命で反乱軍内を暗躍させていたかの様には装った。しかし、その裏でカーサス伯爵を使い、実はやはりバリオーニ公爵は形勢不利と見て反乱軍を寝返ったのだ、という風聞を流したのだ。

その為、反乱を起したところで形勢不利となれば首謀者が生贄にされ、裏切った者や他の者は不問とされる。その様な認識を諸侯は持った。この様な状況で、誰が反乱の首謀者と成りえるだろうか？

そして首謀者無き反乱などあり得ないのだった。

こうしてランリエル王国の内乱は、ディアスの予想通りサルヴァ王子の圧勝に終わり、ディアスの予想に反しランリエル軍にまったく損害を生じさせなかったのだった。

反乱終結後、カーサス伯爵の邸宅の一室にクレパルディ子爵は招かれていた。

子爵にソファーに座るように進めた後、伯爵は手ずから客人のグラスにワインを注いだ。

「それでバリオーニ公爵のご様子は如何です？」

「かなり精神的に参っているようです。やはり反乱軍を裏切ったのだ。という風聞を気にしているご様子で……」

その風聞を流した当の本人は自らのグラスにワインを注ぎながら、さも気の毒そうに同情の言葉を吐いた。

「それは……。心労のあまり倒れられたりせねば良いのですが。しかも、公爵には跡取りとなる子息もいらっしゃらず、頼りになる者も居ないとか……」

「はい。ですが公爵には一人娘のクラリーチェ嬢がいらっしゃります。せめて私が公爵のお力になろうと、そのクラリーチェ嬢との婚約の許しを伯父上に申しでる積もりです」

「なるほど……。それは公爵も立派な跡取りが出来安心なさるでしょう」

微笑みながら気遣う様な伯爵の言葉に、子爵は神妙に謙遜する。

「いえ、私など微力なものです……」

その言葉の応酬の裏で、両名は同じ事を考えていた。いつ、この

茶番を切り上げ爆笑しようかと。

第27話：総司令の結婚

ランリエル王国で起った反乱の結末に、バルバール軍司令部の重厚な机に添えられた椅子に座るその部屋の主は深いため息を付いた。

先ず始めに反乱に介入しようと計画し、カルデイ帝国侵攻の準備を進めていると、するりとかわされ、せめてある程度の損害をと見込んだにも拘らず、その思惑すらも外れた。

ランリエル王国第一王子サルヴァ・アルディナ。予想以上の曲者らしい。ディアスはサルヴァ王子の戦歴を調べ上げていた。それによってディアスが推測したサルヴァ王子像は「戦闘を好み、後手に回らず先手を取って攻勢に出る者」というものだった。

だが今回の反乱において、かの王子は先手を取って攻勢に出る以前に、戦闘自体を回避したのだ。王子は反乱を収めさらに再発させない事を意図していた。その為内部分裂させようと画策しその通りの結果を得た。ディアスも賢明な判断だとは思う。だが反乱を収め再発させない為には、他の手段もあった。それは反乱軍を完膚なきまでに叩き潰す事だ。

それによって、到底サルヴァ王子には勝ち得ぬ。そう思い知らせれば次なる反乱を企む者も居なくなるだろう。王子はこの手段を取るのではないか。かねてより調査していたサルヴァ王子の性格、戦歴からディアスは読んでいたのだ。だがその読みは外れた。

「私も耄碌したのかな？　それとも単に相手が一枚上手なのか？」

その独り言に近い総司令の呟きに、忠実な従者が律儀に返答を試

みようと思案した。だがディアスが耄碌したからとも、サルヴァ王子の方が上手だからとも言いかねるケネスは、結局返答に窮する。そしてその挙句口に出たのは、問いかけに対しての返答とは言えなかった。

「サルヴァ王子と言う人はそれ程凄い人なのですか？」

その問いかけにディアスは、顎に手をやり調べ上げた王子の経歴を思い起こしながら答えた。

「そうだな……。指揮官としても優れているんだが、それよりも戦略家、策謀家としての手腕にその才を発揮しているね。いや、指揮官としての才も他に抜きん出ているが、やはり実戦指揮には経験の積み重ねが必要だ。サルヴァ王子はまだ２７歳。その経験が不足しているのは否めないね」

「じゃあ、指揮能力にはあまり優れていないという事ですか？」

「いや、そうじゃない。うーん。そうだな……。戦略家、策謀家としての能力が超一流とすれば、指揮能力は超一流未満というところかな。指揮能力も多くの者よりは優れている」

最もディアスにしても今だ３５歳であり、老練とは言いがたい年齢である。だがサルヴァ王子が主に敵として戦っていたカルデイ帝国は、近年まで膠着状態が続き大きな戦は無かった。それ故毎年の様にコスティラ王国に攻め込まれているバルバール王国の総司令官ディアスとは、経験においては格段の差があったのだ。

「では、戦えばディアス将軍が勝つのですか？」

尊敬する総司令に全幅の信頼を寄せる従者に、ディアスは思わず吹き出しそうになった。王子の指揮能力が超一流未満なら、超一流のディアスが勝つに違いない。ケネスはそう言っているのだ。

「いや、そうと言っている訳じゃない。王子は戦闘開始前に勝つ算段を立てそれを実行に移すタイプだ。確かにその算段が崩れた時、王子は体勢を立て直すのに若干手間取る傾向がある。だが、それも王子が今後経験を積めばやがて克服するだろう。それにそもそもサルヴァ王子が立てた算段を崩すのが至難の業だからね。それを無視して指揮能力だけを比べて勝ち負けを予想しても意味は無いよ。もっとも王子はカルデイ帝都での戦いで苦戦した。その時はまさに、カルデイの敵将は王子のその算段を崩したらしい」

「ディアス将軍が凄いと認めるサルヴァ王子の策を見破るなんて、カルデイの将軍も凄い人なんですね。でも、カルデイ帝国はランリエル王国に征服されたんですから、結局はサルヴァ王子が勝ったんですよね？　王子はその状態から軍勢を立て直せたんですか？」

「いや、王子がその時に軍勢を立て直せたのは、ランリエル、カルデイ両国と国境を接するベルヴァース王国の老将の手腕のお陰らしい」

「え？　そうなんですか？　じゃあ、そのベルヴァースの老将はサルヴァ王子より上ですか？　凄い人って沢山居るんですね」

ディアスの口から出る知将、名将の数々に、それを目指す少年は驚きの声をあげた。まったく世の中には無能な人間も多いが、それらの頂点に立つ者達はやはりみな有能なのだ。隣国と戦い続けている国の軍事の頂点に無能者が立てる訳が無い。

ケネスの率直な言葉に苦笑で応じるディアスに、少年はさらに素朴な質問を浴びせた。

「ですが、コスティラには名将や知将は居ないのですか？　ずっとうちが勝ち続けていますけど」

「いや、幸いな事にサルヴァ王子ほどの者はいないが、コスティラにだって優れた者が居ない訳じゃない。コスティラに攻勢をかけた時に私が戦ったアウロフ将軍はなかなか有能だったね。バルバールが勝ち続けているのは、結局国境、海峡の天険の利のお陰だよ」

だが、ケネスは敵国の将軍を讃えるディアスの言葉に首をかしげた。ケネスの聞いた話では、そのアウロフ将軍はディアスに手も無く敗れたはずだからだ。

「ディアス将軍のお言葉ですが、僕にはアウロフ将軍がそれ程有能とは思えません。それは……僕がアウロフ将軍に勝てるかと言えば、絶対にそんな事は無いんですけど……」

「あの時彼は、私達の突然の攻勢に狼狽するばかりのコスティラの諸将の中で、軍勢を集結させ、そして分散している我が軍の本陣の位置を割り出し、一気に突いて来た。並大抵の者じゃないよ。戦いは私が勝ったから、それ程評価されてはいないけどね。だが私に勝っていれば、彼は5千の軍勢で4万のバルバール軍に勝利した名将。そう呼ばれていただろうね」

ディアスの言葉に、ケネスは表面的な勝敗しか見れずその過程に意義を見出せなかった自らの未熟さを恥じ赤面した。だが最終的に勝てなければ意味が無いのではないか、とも思い食い下がった。

「ですが、４千の軍勢しか率いていなかったディアス将軍に、５千の軍勢で勝てなかったのは、やはり指揮能力に問題があったのではないのですか？」

「そうだな……。例えば私が彼の立場だったら、戦わなかっただろね。なぜかと言えば……。私が戦ったとしても多分負けていた。軍勢とはそれぞれの兵科が揃ってこそ力を発揮する。彼は急いで軍勢を集めた為騎兵を用意出来なかった。時間的な余裕がなかったから仕方が無いんだけどね」

騎兵のみで編成された騎兵部隊や長槍を持った兵士が整然と整列する密集隊形。それらが初めて戦場に現れた時、それぞれの兵科はそれだけで無敵と言える程他を圧倒した。だがそれも過去の話だ。今ではそのような偏った編成では勝利は望めない。

「極端に偏った編成でもその長所を生かせる戦場、相手なら勝てるが、実際そう上手く行くものじゃない。多分彼も勝算は薄いと分かってはいたと思うよ。だが、ここで我々を止めなければコスティラ全土が蹂躙される。それも分かっていたんだろう。だから一か八かの賭けに出たのさ」

もっともディアスには、一か八かの賭けに出る考えは無い。それは能力の差ではなく、考え方の違いだった。或いは立場の違いと言ってもいい。それは、一度の敗戦で国が滅ぶバルバールの将軍と、負けても後があるコスティラの将軍との立場の違いだった。

いくらアウロフ将軍が有能でも、その後の国境での戦いでコスティラ軍が３万５千もの死者を出す大敗を喫するなど予測できようも無いのだから。

「とにかく、幸いにも我々は先の戦いでコスティラの名将と言ってもいい指揮官を討ち取る事が出来た。これでコスティラ方面はさらに安泰だ。しかし、人の死を喜ぶなんて、ろくでもない人間だよ、私は」

「いっいえ！　ディアス将軍は、……えーと、そんな事はありません」

ディアスの言葉が、軍人になるのならお前もそう考えねばならない事になるのだよ。という自分に対しての遠まわしの訓戒と気付かない少年は、慌てて発言者を宥めた。その様子にディアスは肩をすくめた。

「さあ、家に帰るとするか。だが、ミュエルには今の会話は内緒だよ。自分の夫がこんなに酷い人間だと知られれば、妻に愛想を尽かれてしまう」

そして返答に困る少年に、また肩をすくめ、苦笑した。

年も開け、2月となった。

ランリエル王国の反乱は予測通りに事は進まず軍勢の損害無し。との結果に終ったが、それでも当初予想の春に戦いになるという想定が前倒しに成った訳ではない。

バルバール王国では予定通りバルバール軍総司令官フィン・ディアスと、ハッシュ伯爵家令嬢ミュエルとの結婚式が行われる事となった。

ハッシュ家からはミュエルの両親もやって来た。そして母親は愛しい娘に、自分が結婚式で来た花嫁衣裳を採寸しなおし贈った。

大好きな母親と同じドレスを着られた事を愛娘は素直に喜んだ。

「お母様。ありがとう御座います！」

ディアス家で暮らす事となってから早5ヶ月。ハッシュ家を出た頃より幾分背も伸びた花嫁衣裳姿のミュエルは、髪も綺麗に結い上げ、まるで精巧な人形の様な非の打ち所の無い造形と、人形では決して持つ事の無い生命の輝きを放っていた。

「ミュエル。お前はバルバール一の花嫁だよ」

新婦の控え室で、お父様はそう言って自慢の娘を抱き寄せ頬に口付けし、そして次にお母様が包容しお父様と同じところに唇を重ねた。

そこに花婿衣装に身を包んだ花婿が現れた。軍人としては良い体格とは言えないディアスだが、武門の名門にしてバルバール軍総司令としての地位。それらから得る財力によってあつらえた、純白に金糸、銀糸で精巧な刺繍を施した衣装は、十分彼を際立たせていた。

戦場で身を守る鎧すら地味な物を身につけている彼だが、今日だけは特別だった。折角美しく着飾る妻の横に立つのだ。夫として並ぶに相応しくあろうとするのは当然である。

「綺麗だよ。ミュエル」

衣装の効果でなんとか一目を引く程度には垢抜けた新郎は、新婦

の頭に手をやりかけたが、折角整えた頭髪を乱してはいけないとその寸前で手を止めた。その変わりに軽く肩に触れる。

「ディアス様も、とてもご立派です」

見上げ微笑む妻に夫も微笑み返す。そして夫は自分の義父、義母となる年下の伯爵夫妻に改めて顔を向けた。

「まず先にご挨拶をする所を失礼致しました。大切な御息女は私が必ず幸せにして見せます」

バルバール軍総司令官である義理の息子の言葉に、伯爵は恐縮して答える。

「ディアス殿は、バルバール一の婿。安心して娘をお任せ出来ます」

その伯爵の言葉に伯爵夫人も微笑を添える。ディアスはそれに応え右手を差し出した。伯爵もそれに対し右手をそえ、硬く握りあう。

そしてもう一度新婦の肩に軽く触れた。

「じゃあ、また後で」

「はい。ディアス様」

ディアス様……。実際これからミュエルは、ミュエル・ディアスになるのだから、そう呼ばれるのは相応しくないのだが。とも思ったフィン・ディアスだったが、まあそれ程気にする事も無いかと思い直し、控え室を後にした。新郎の控え室に戻ると総司令をその従者が待ち構えていた。

「ディアス様。ミュエルはどうでしたか？」

こちらも相応に着飾ったケネスが、関心ありげに問いかけた。それに対しディアスは苦笑しつつ応じた。

「そんなに気になるなら、お前も見てくれれば良いじゃないか」

「それはそうなのですが、なんて声をかけたら良いのか……」

ミュエルにほのかな恋愛感情を抱いていたケネスである。すっぱりと諦めたとはいえ、やはりその心中は複雑だった。頭では、にこやかに笑って新婦の控え室に出向き、おめでとう、と一言言えばいい。それくらいは分かっている。

だが、その、やってみればどうせ簡単に出来るのだろうと、自分でも思う事にケネスは躊躇していた。そこに新郎が幾分強い口調で命じた。

「いいから、行って来い。簡単な事だろ？」

「ですが……」

だが、ディアスの言葉にもケネスは煮え切らない。ディアスはため息をつくと、ケネスの傍に近寄りその肩を叩いた。

「頼む。行ってくれ。お前が行かないと祝って貰えないと思ってミュエルが悲しむんだ。お前はミュエルの家族だろう？」

その言葉にケネスは、はっとした。ディアスの様に、自分の事よ

り相手の事を考えられる人間になりたいと思ったのではなかったのか。にもかかわらず結局自分の事しか考えていなかったのだ。

「すみません、僕自分の事ばかり考えて……。今すぐ行ってきます！」

大声で返事をし急いで駆け出す少年の背を見送りながらディアスは思った。自分の方こそ自らの妻の事を優先に考え、ケネスの心中に配慮していないのだが、と。

ディアスは自他共に認める現実主義者だった。目的の為には手段を選ばない。だが現実主義者のその目的が、必ずしも理性的な物ばかりとは限らない。今の彼のその目的は、妻を幸せにする事だった。

彼の浅はかな軽い言葉から、愛する両親から引き離され、にもかかわらず妻として扱われず、自ら死を望ませてしまった少女。その彼女に対しての贖罪の気持ちがある事を否定はしない。だが、それ以上に、この素直で優しい少女は幸せになるべきだと考えていた。そして自分はその少女を幸せにし得るのだ。

ミュエルは誰からも愛される少女だ。もちろんディアスからも。

ミュエルには娘に対するように愛情を注いでる。だが少女が花開くのは早い。それによって娘の様に思う感情が消え去るものではないが、それでも、少女を女としてみる日もそう遠くはないだろう。

ケネスが帰ってきて、

「やっぱり行ってきて良かったです！」

と報告し、そのしばらく後に結婚式が行われた。

２人は神の前で誓いの言葉を述べた後、接吻をする事になっている。だが花嫁はなんと言っても１２歳の少女なのだ。その誓いの口付けはお互いの頬にする事になっている。

そして予定通り式は進行し、誓いの口付けをする段となった。１２歳の少女の結婚式。珍しいが無い訳でもない。列席者も新婦が幼い時は、誓いの口付けは頬にするもの。そう認識している。

このお人形の様に美しい花嫁が、新郎から頬に口付けされ恥ずかしそうにはにかむ姿。なんと可愛らしい事か。それを予想してすでに笑みを浮かべ、人々は手を叩く姿勢でその時を待ち構えていた。

だが実際にそれが行われた時、人々は手を打ち合わせる事無く固まった。列席した老婦人は笑みを湛えたまま呼吸すら忘れた様に微動だにせず、ケネスですら唖然とした。ミュエルの両親すらも。

少し横を向いて頬を差し出す美しい花嫁に、そこそこ見られる花婿の唇が触れようとしたその時、花嫁の顎に手を添えていた花婿がすっとその手を動かした。その為少女の可憐な唇は正面を向いた。公衆の面前で行われた３５歳の男と、１２歳の少女のまぎれも無い接吻に、人々の思考は停止したのだった。

花嫁自身も目を見開いて驚き、そしてディアスの唇が離れると自らの口元を両手で覆って、頬を赤く染めた。そしてその時になってようやく、我に返った１人の参列者が手を叩くと、その音で他の参列者達も我に返り手を叩く。式場に拍手の音が響き渡った。

「ディアス様！　手順と違います！」

披露宴の前に、一旦奥に下がったミュエルは、あまりの恥ずかし

さに、珍しく大きな非難の声をあげた。剣幕をあげる妻に、怒った表情も可愛いものだと、余計怒らせそうな事を考えながら、ディアスは謝った。

「いや、すまない。私も始めは手順通りにしようと思ってたんだが……。なんて言ったらいいのかな。頬にするのは、正式なやり方じゃないと思ったら、つい……ね」

「つい、では、ありません！」

ディアスの言葉は、ミュエルとちゃんとした式をしたかった。と言う事でもあり、その意図を正確に察する事が出来ればミュエルとて頷いただろう。だが恥ずかしさのあまり、それを察する余裕の無い少女は頬を羞恥で染めながら、正式に夫となった男を再度非難した。珍しく怒声を上げる少女にその姿も愛らしいと夫は思った。

しかし、そうは言ってもいずれ時が経てば「私は恥ずかしいから嫌だったのに、この人ったらみんなの前で私に口付けたんですよ」と、そう言ってミュエルは、人々に惚気る事になるだろう。その時は、笑みを讃えながら幸せそうに、そして誇らしそうに。

だが、それも次のランリエルとの戦いの結果如何によっては「あの人はみんなの前で私に口付けたのですよ」と過去を懐かしみ、影を落とした顔でいう事にもなりかねない。

そうはさせる訳には行かない。彼の妻は、悲しむ為ではなく、幸せになる為に彼の妻であるべきなのだ。以前より自ら戦う事を避けていたディアスであるが、改めて誓った。敵が来れば逃げる。たとえ誰に笑われようと。

もっとも彼をそこまで追い詰める事が出来る人間はそう居ない。だが残念な事に、次の敵はそのディアスを追い詰める事が出来る可能性を秘めているのだった。

第２８話：王子の結婚（１）

ランリエル王国では反乱も戦火無く収束し、次期国王たるサルヴァ王子の名声はさらに高まっていた。

そしてその妃には、寵姫のセレーナ・カスティニオがなるべき。民衆はこぞって持てはやした。

そもそもアリシアは例外とするとしても、寵姫という身分の女達は家柄も良く教養もあり、宮廷内では評価され敬意もはらわれている。だが、それを理解せぬ民衆達からすれば、王子の寵姫といえど市井の金持ちに媚びる妾と区別はつかず、蔑む者も多かった。

当然、サルヴァ王子の寵愛第一位というセレーナに対しても、王子が一番お気に入りにしている妾。ただそれだけの認識だったのだ。

だが、先の反乱を機にそれが一変した。セレーナは「ランリエル一有名な妾」から「王子の危機に、公爵令嬢にもかかわらず身の危険を冒し王子の元に駆けつけた、神話に出てくるかの様な賢婦人」とみなの認識が変わったのだった。

そしてセレーナら寵姫達が暮らす後宮でも、セレーナの地位は不動のものとなった。他の寵姫達にしてみれば、もはや張り合うのも馬鹿馬鹿しい。ある寵姫は、次期王妃など望まず本当の意味での妾として暮らすしかないと諦め、ある者は将来の王妃たるセレーナに媚びようと群がった。

とはいえそれらの者達の前には突破すべき障害があった。以前からのセレーナの取り巻き達にしてみれば、今更セレーナに媚びよう

と近づいてくる者達など、厚顔もはなはだしい。せっかく苦労して耕し芽を出し実をつけた果実を、その苦労をせずのこのこと現れた者に、どうして分け与えてやらねばならないのか。

新参者達はセレーナに媚びる前に、古参の者達に媚びてその仲間に入らなくてはならなかったのだ。

だがその早くからセレーナと競う事を諦め取り入った「未来の王妃の古くからの友人達」にも、目の上のたんこぶと言える者が居た。

セレーナが行った「賢婦人の険路行」に力を貸し、一躍その「親友」となりおおせたアリシアの存在だった。彼女達はそのアリシアにさんざん嫌味を言い苛めの標的にしていたのだ。しかしそれが、「大切なお友達」であるセレーナの親友になりおおせてしまった。

彼女達にして見れば、セレーナがアリシアを敵視していると思ったからこそ、アリシアを標的にしたのだ。それが突然手を取り合って後宮を抜け出し、王都を脱し、カルデイで孤立していたはずのサルヴァ王子の元に揃ってはせ参じた。青天の霹靂と言っても生ぬるい状況の変化である。

いつの間にアリシアはセレーナに取り入ったのか？　いや、それどころか、セレーナの方から「アリシア様、アリシア様」と彼女を慕っている様に見える。その為セレーナとアリシアは共に過ごす事が多く、セレーナの古い友人達は彼女を独占出来ない。

彼女達はセレーナに大切な話があるのに、その話がいっこうに進まない。セレーナが王妃になったあかつきには、セレーナからサルヴァ王子にお願いして貰い、自分の父を大臣にして貰わなくてはならないし、自分自身の嫁ぎ先もお声がかりとして名門の子息を選ん

で貰わなくてはならないのだ。

それはまさに彼女達にとっては死活問題であり、自身が王妃になる事を諦めた今、後宮にいる存在理由だった。いくらサルヴァ王子が、才能が有り自信に満ち溢れ純粋に男としての魅力があったとしても、妾として抱かれるだけでは意味は無い。次期国王として得られる利益が重要なのだ。利益を望まず、純粋に王子からの寵愛のみを望む寵姫など誰も居ないのだ。

いや、唯一1人だけいた。その唯一の寵姫は、後宮の中庭で侍女に用意させた紅茶の味を、姉とも慕う親友と楽しんでいた。ティーカップに軽く口をつけ、そして彼女にすれば珍しく苦笑の表情を浮かべる。

「みなさん、私の事を王妃になるとおっしゃっておいでですけど、殿下は私を王妃とはしないと思います」

彼女の対面に座る姉と慕われる女性は、その言葉にティーカップを持った手を止め、カップをソーサーに戻した。

「どうして？　殿下も貴方の事を愛していると……そう思うけど？」

「そう言ってくださるのは嬉しいのですが……。ですが、殿下は大望のあるお方です。その大望をなす為に必要な方を王妃になされるでしょう」

「それって、たとえば手を組みたい国の王女様とかって言う事？」

「……はい」

カップに視線を落としそう呟くセレーナの姿に、アリシアは心の中で舌打ちをした。今のセレーナの言葉は彼女にそぐわない。知能は低くないセレーナだが、その能力は貴族令嬢としての教養と王子への気配りに注がれている。今語ったような政治の話は彼女の発想には無いはずだ。

「サルヴァ殿下がそう言ったの？」

セレーナはアリシアの予想通りに頷いた。アリシアは大きく息を吐き、テーブルに肘を付いた右手で額を押さえ俯いた。その様は「まったくあの男は！」と言う台詞を態度で表していた。

聴覚によらず視覚によってその言葉を聞いたセレーナは、慌ててアリシアをなだめる。サルヴァ王子に遠慮ない態度を自然に取れるアリシアを羨ましく思うこともあるが、あまり人目のつくところでそれを行うべきではない。ここは後宮の中庭なのである。

「アリシア様。良いのです。考えてみれば当たり前の事なのです。それに……」

その言葉に、アリシアは額に手をやったまま微かに顔を上げ、上目遣いにセレーナを見た。

「それに？」

「前までと何が悪くなったという訳ではありません。今までも私は殿下の傍に居れて幸せでした。それで……十分なのです」

アリシアはまた、大きく息を吐き額に手をやったまま再度俯いた。その態度は「まったくこの子は！」とセレーナにぶつけるものだっ

た。

セレーナは困った様な表情で、俯くアリシアの額を見つめ、その視線を感じたアリシアが視線を上げると2人の目が合った。

セレーナの表情を見止めたアリシアは、彼女を困らせてしまったと顔を上げて気を取り直す様に口を開いた。

「さあ、お茶が冷めてしまうわ。頂きましょう」

そしてすでに冷め始めてしまっているお茶を口にしながら、彼女は、まあ、お似合いと言えるのかも。と、無理やり自分を納得させた。

同じ王宮にある軍部の執務室で、サルヴァ王子は配下の猛将ラディと面会していた。

ランリエル軍全軍を指揮する者が使用するに相応しい重厚な机に座るサルヴァ王子は、その机を挟んだ対面に直立する猛将にねぎらいの言葉を掛けた。

「今回の反乱ではお主も色々と大変だったであろう。何かと言う奴も居るだろうが、気にすることは無い。今まで通り励んでくれ」

「は！　お心に添える様、精進いたします」

軍部では虎とも称される男は、まるで猫の様に縮こまり低頭する。勿論虎が猫に変ずるほど恐縮しているのには、理由があった。

長年王子の配下として仕え、その片腕とも称されていたにもかかわらず、虎は恩知らずにも理性を発揮せず、先の反乱時にはなんと反乱軍側に身を投じたのだ。万事抜け目ない王子にしても予想外の事態であり、わが耳を疑った。

王子と共にカルディイ帝国内でその報を聞いた諸将の中には、ララディと戦う事になったと戦慄した者も数多く

「ララディならば相手にとって不足なし！」

と口々に、勇ましく、或いは、強がって吼えたのだった。

もっとも、反乱はサルヴァ王子の指示の元暗躍したカーサス伯爵等により戦闘無く鎮圧された。その為、それは現実のものとはならなかった。

だが戦闘にならなかったとはいえ、ララディが反乱軍に組した事実は変わりない。他の武将達は、ララディへの処罰を訴えた。

サルヴァ王子は反乱軍の首謀者であるガリバルディ公爵、アラビーソ侯爵ら首は差し出させたが、反乱に組した他の貴族達対しては不問としている。ゆえに彼らの意に反しララディに対しても処罰は行われない事となった。

しかし諸将の追及は止まない。敵対行為をとったと言う事もあるが、ララディが失脚すれば、彼に代わってサルヴァ王子の片腕と呼ばれる地位を狙えるのである。せめてサルヴァ王子の幕僚からの更迭。当然といえる要求だった。

だがサルヴァ王子にララディを更迭する意思は無かった。反乱に組した事から分かる様に思慮には欠けるが、そこは王子自身が補え

ばよい。王子の指示に従い、突撃せよ！　と命じられれば突撃し敵を粉砕する。それが彼の役目なのだ。

とはいえ、ララディを幕僚に残留させるにしても諸将の感情をまったく無視する訳にもいかない。たとえ次期国王であるサルヴァ王子と言えどもである。諸将の間に遺恨が残れば組織として正常に機能しない。

諸将がいがみ合った結果、抜け駆けが横行し作戦が崩壊する。疎まれている武将が率いる部隊への物資の補給が滞る。例を挙げれば枚挙にいとまない。

それゆえサルヴァ王子は手の者を使い、ララディの血縁関係を数世代にさかのぼって調べ上げさせた。そして望んだ結果を得たのだった。

反乱の首謀者であるガリバルディ公爵、アラビーソ侯爵は名門の当主であり、その一族は多い。当主を討たれたその者達が敵対すれば無視できぬ勢力となる。王子はそれらを封じる為に手を打った。

彼らとて当主を打たれた恨みだけで王子に敵対しようと考える訳ではない。当主が反乱の首謀者として処罰されたのだから、その一族もいずれ家を取り潰されるのではないか。その恐れが大きいためだ。

王子は彼らのその不安を取り除いてやる為、彼らにはむしろ「当主からの要請では、断りきれなかったのは仕方が無い」と労わりの言葉を掛けたのだ。その為極一部の心から当主の仇を討とうと考えていた者すら、他の大勢の者達から

「せっかくの殿下の御温情を無駄にし、家を絶やす気か！」

と一喝され、矛を収めるしかなかった。

サルヴァ王子は、ララディの母方の祖父の従兄弟が、反乱の首謀者の1人であるアラビーソ侯爵の妹の夫の叔母の夫の父である事を探り当てた。このララディ本人ですら把握していなかった「アラビーソ侯爵家の一族」という事実に、王子は他の一族と同じ様にララディにいたわりの言葉を掛けた。

「いかなランリエルの虎といえど、一族当主からの要請ならば断りきれぬのも仕方が無い。すでに済んだ事と気に病ます出仕せよ」

自邸で自ら謹慎していたララディの元を訪れた使者は、そう王子からの言葉を伝えたのだ。そしてその後同僚の武将もララディ邸を訪れ言った。

「サルヴァ殿下の御温情を忘れず、これからも忠勤に励む事だな」

猛将ララディは感激し、そして今日の出仕となったのだった。勿論同僚の武将がララディ邸を訪れたのは王子からの依頼によるものなのは言うまでもない。

結局反乱は王子にとってなんら損失とはならず、それどころか利益のみをもたらした。

国内の不満分子は核を失い分裂しその力を失った。さらに大きいのはカルデイの諸侯が王子の求めに応じて、軍勢を出陣させた事だ。もはや彼らも未来を王子に託すしかあるまい。カルデイ貴族達はカーサス伯爵の様に続々とランリエルに鞍替えするだろう。

カルデイ帝国は徐々にやせ細り、従う貴族の居ない名ばかりの帝国となるだろう。勿論カルデイ帝室は残してやる、帝室と名乗るの

もはばかられる小国としてではあるが。

かつてカルデイ帝国と共に、ランリエルと3国鼎立の一角をなしていたベルヴァース王国にしても、ランリエル王国第三王子ルージが、ベルヴァース王女第一王女アルベルティーナ・アシュルと結婚する予定だった。王女は国王夫妻の一人娘。その夫が国王となるのだ。ベルヴァース王国もいずれランリエルの傀儡となる。

そして次の標的は西に国境を接するバルバール王国。総司令官フィン・ディアスは強敵だ。指揮能力に優れ、ランリエルとさほど劣らぬ国力のコスティラ王国との戦いに常勝を誇っている。戦いはコスティラからの攻勢を防ぐというものがほとんどであり、戦いとは守る側が有利と言われるが、それでも尋常な事ではなかった。

だがサルヴァ王子にはその総司令に勝利する算段があった。そしてその準備は着々と進められている。

すべて順調だった。もはや王子の進み行く道を阻む物は何も無い。

ララディ将軍が退出した後の執務室で、一息付いていたサルヴァ王子の元に、1人の男が飛び込んできた。服装から軍人ではない。後宮を管理する役人の1人と思われた。

まさかまた寵姫同士の諍いでも起こったのではあるまいな。と、王子は自らの後宮が整えられた当時の騒動を思い出し、懐かしく思った。

当時は、セレーナすら王子にとって、他の寵姫と違いは無く大勢居る女の1人に過ぎなかった。それが……。王国の次期国王として育ち、傲慢の気がある王子にして、自分がセレーナを愛していると

認めざるを得なかった。

だが、たとえそうであっても彼女を妃には出来ない。王子には野心がある。今はバルバール王国との戦いに心を砕いてはいるが、それで終わりではない。バルバールの次にも征服すべき国々は存在し、その時次期ランリエル国王の妃の座は高い値で売れる筈だ。

なに。セレーナは自分の傍にいる。ただそれだけで満足する女だ。よい条件の妃を迎えた後もセレーナの元に通ってやればよい。この時王子はそう考えていたのだった。

後宮の中にはでお茶を楽しんでいたセレーナとアリシアの元に、同じく後宮の寵姫であるヴァレリア・ダルベルト侯爵令嬢が近寄ってきた。

ヴァレリアは、かつて自分こそはサルヴァ王子の寵愛第一位と吹聴し、一時は多くの取り巻きを従えていた。だがそれだけに現在の状況を考えれば、滑稽な事この上ない。

かつての取り巻きは、むしろ彼女との関係をなかった事にしたいかの様に手の平を返した。そしてセレーナの取り巻きの、さらに取り巻きに転落していた。そればかりかセレーナの取り巻きに取り入る為、ヴァレリアを笑い話の種としたのだ。

「よく殿下の寵愛第一など言えたものですわ」

「まったくです。私など初めて殿下がこの後宮にいらっしゃった時、セレーナ様を見つめる殿下の目を見て、ピンっと来たものですのに」

「それを、どう勘違いしたのか」

その後、上品に、おほほほ。と笑う彼女らの声はヴァレリアにも聞こえた。その笑い声は一日中耳から離れず、常に誰かに嘲笑されているかの様な幻覚にヴァレリアは襲われた。彼女はその様な日々を送っていた。

そのヴァレリアはセレーナの傍に来ると、

「こんにちは。セレーナ様」

と上品に挨拶をしてきた。勿論セレーナも

「こんにちは。ヴァレリア様」

と行儀良く、椅子から立ち上がって挨拶を返した。

「おめでとう御座います。殿下との御結婚が近いと聞いております」

微笑み祝辞を述べるヴァレリアにセレーナは、慌てて否定した。

「いえ。みなが言っているだけで、その様な事は無いのです。殿下にはしかるべき王国の王女を妃に迎えるのが相応しいのですから」

「そうなのですか？」

「はい。ですから、私は他の方々となんら変わる事はありません」

その言葉にヴァレリアは見る見る間に目に涙を浮かべさせ、溢れた雫は頬を伝った。

「お優しいセレーナ様……。思えばいつも貴女は優しかった。私が貴女を敵視している時ですら……」

「いえ。そんな事は……」

「申し訳ありませんでした。貴女には酷い事ばかり言って……」

顔を覆って泣くヴァレリアをセレーナは抱き寄せた。

セレーナを敵視しているはずのヴァレリアの出現に、アリシアも内心身構えていた。しかしこの光景に胸を撫で下ろし、和解できたのだと喜んでいた。

ヴァレリアはセレーナの胸に顔を埋めたままか細い声で言った。

「お優しいセレーナ様。最後に……一つだけお願いがあるのですが聞いて頂けますでしょうか？」

「私にですか？　ええ、私に出来る事でしたら」

「いえ、貴女にしか出来ない事です。それに簡単な事」

「ええ、それでしたら喜んで」

この光景を微笑みながら見ていたアリシアはふと気付いた。最後に一つだけお願い？　それはどう意味なのだろか。

「居なくなって下さい」

そのヴァレリアの言葉の後、現在の寵愛第一位の寵姫は地面に崩れ落ちた。そして顔を涙で濡らした、かつての寵愛第一位の寵姫が立ち尽くしていた。その手を血で赤く染めながら。

第２８話：王子の結婚（２）

セレーナを刺したヴァレリアは駆けつけた警護の者にすぐに拘束された。そしてセレーナは急いで部屋に運ばれる。

「セレーナ！　気を確かに持って！」

部屋へと向かいながらアリシアは懸命に彼女に声をかけた。だが微かに意識はあるものの、セレーナにはその声に応える力はない。そして部屋に着くと間もなく医師も到着した。

「出来る限りの事は行います。今夜が峠となるでしょう」

医師のその言葉により部屋から追い出されたアリシアは、部屋の扉に張り付く様にして立っていた。中の様子を窺う為にではない。少しでもセレーナの傍近くに居たいが為だった。

冬ももう過ぎようとしていたが、木製の扉は冷たく、張り付いた彼女の頬と手を容赦なく凍て付かせた。だがアリシアはそれを意に介さず、むしろ抱き締めるかの様に手の平に力を込めた。それはまるで扉を暖めれば、血を失い冷たくなっていくセレーナの身体を、温める事が出来ると考えているかの様だった。

ヴァレリアは何故セレーナを刺したのか？　彼女への嫉妬なのか？　それとも寵愛第一位の座は自分の物と思い、それを奪ったセレーナへの憎しみか。それとも道連れの……心中の積もりだったのか。

だがアリシアにはヴァレリアがセレーナを刺した理由などどうでも良かった。どの様な理由を聞かされても納得など出来ないのだか

ら。

そこに報告を受けたサルヴァ王子が副官のルキノを従えやって来た。

「セレーナは無事か！？」

アリシアの姿を見止め問いかけた王子に、アリシアは扉から身を離しその問いに答えた。

「今夜が……峠との事です」

「そうか」

王子はアリシアの言葉にそう呟くと、彼女を押しのけ部屋に入ろうとした。だが扉に伸ばした王子の手を、アリシアは押し留めた。

「殿下。今殿下が部屋に入っても邪魔になるだけです」

そのアリシアの言葉に王子は激し

「どけ！」

と彼女を改めて押しのけようとした。だがアリシアは頑として動かない。そして、王子に対してのこの無礼な振る舞いに、いつもなら王子に加勢するはずの忠実な副官は、どうすべきか態度を決めかねていた。アリシアの言動はあまりにも無礼。しかしその内容は彼女の方が正しいと、ルキノにも思われたのだ。

王子とアリシアはしばらく睨み合っていた。だが……不意にアリシアが身を引いた。この思いがけない行動に、傍観者であったルキノは思わず目を見開いた。

今まで王子が部屋に入るのを拒んでいたアリシアが、何故身を引いたのか。もちろん、王子の地位や剣幕に今更恐れをなした訳ではなかった。彼女はある可能性に思い至ったのだった。それは考えたくも無い事だったが、無視出来ない事でもあった。そしてアリシアが今更自分に恐れ入る事などないと知る王子も、何故突然彼女が身を引いたのかを察した。

サルヴァ王子は、僅かでも音を鳴らさぬ様にそっと扉を開けると、静かに部屋に入った。そしてゆっくりと愛する寵姫の傍へと歩み寄る。そして震える唇からその名を呼んだ。

「セレーナ」

その声は、治療の邪魔にならぬ様に小さく、それでいて彼女からの返答を期待する様にはっきりと聞こえた。そしてその声に、王子の意にそってか意に反してか、セレーナは微かに瞼を持ち上げた。

だが、その彼女の反応に王子がさらに傍に寄ろうとした瞬間、また瞼は閉じられた。近寄る事も出来ず、離れる事も出来ない王子はしばらくその場に間立ち尽くしていたが、不意に数歩後ずさったかと思うと、背を向けた。そして扉をもくぐり廊下に出る。

「殿下！　セレーナの様子は？」

部屋から出たサルヴァ王子に、アリシアは声をかけたが、王子はその問いに答えず、ほとんど駆ける様にして部屋から遠ざかる。その後をルキノが慌てて追いかけた。

王子の背を見送ったアリシアは、扉に寄りかかると崩れるようにその場に座り込んだ。

その夜遅く、アリシアが、見るとも無く部屋の一点に視線を向けて椅子に座っていると、ノックの音も無しに扉が開け放たれ、黒衣の男が部屋に入ってきた。そしてその後にサルヴァ王子が続く。どこに置いて来たのかルキノの姿は無かった。

黒衣の男は王子に無理やり連れて来られた様で、この部屋にも入ったというより、王子に押込められたという方が正しかった。

アリシアは、何をする積もりなのだろう？　とは考えたが、それでも特に声をかける必要を感じず、黙ってその2人を見ていた。王子はなにやら黒衣の男にさせたい事がある様だが、男はそれを必死で首を振り拒んでいる。

しかし、王子が腰の剣に手をかけると、遂に男は屈した。そして重い口を開き、王子が望む通りの口上を述べ始めた。その男の言葉に、今まで思考が停止していたかの様に無関心だったアリシアの目が、次々と変わった。はじめは驚愕の色を呈し、次に恐怖が広がった。

「殿下……。何をなさるお積りなのです？」

サルヴァ王子は、その声に顔を向けずに応えた。

「決まっているだろ。セレーナとの結婚式を行うのだ。セレーナは私との結婚を望んでいたからな」

アリシアは、横たわるセレーナの傍に立ち、黒衣の男、神父に顔

を向けるサルヴァ王子の背に言葉を掛けた。

「ですが……セレーナはもう……死んで……亡くなっております」

それは彼女の認めたくはない、目をそらし続けていた事実だった。だが口に出したその言葉は、彼女自身の耳を打ち、それが現実だと認めさせた。そして気付いた時にはすでに頬を涙が伝っていた。

セレーナの両親であるカスティニオ公爵夫妻の元には、彼女がヴァレリアに刺されてすぐ早馬が発した。だが、折悪く公爵夫妻は避寒の為別荘で過ごしており不在だった。その為セレーナの最後を見取ったのは、アリシアだったのだ。

すでに医師達は引き上げ、今セレーナの部屋には、アリシアとセレーナの侍女、そしてサルヴァ王子と王子が連れてきた神父のみ。いや、もう1人と言うべきか、セレーナがベッドの上に横たわっている。白い肌を透けるほど白くして。

セレーナと傍に立つ王子の前に神父は居たが、アリシアの言葉に、自分は無理やりさせられているのだと、目で訴えた。侍女達は、王子の所業に部屋の隅で身を竦ませ、アリシアに救いを求めるかの様な視線を投げかけた。そして王子も部屋に入って初めてアリシアに顔を向けた。

その顔にアリシアはぞっとした。サルヴァ王子は笑みを浮かべ言った。

「アリシア、あまり私を馬鹿にするのではないぞ？　まさか私がセレーナが生きていると勘違いしていると思っているのではあるまいな？　セレーナは死んだ。だが、だからどうしたというのだ？　死

者と結婚しては行けないと誰が決めたのだ？」

サルヴァ王子は気が狂った。アリシアがそう思った瞬間、王子の表情は激したものに変じ、怒声を発した。

「誰が決めたのだと聞いている！　セレーナはそう望んでいたのだ！　その通りにして何が悪い！」

宿敵カルデイ帝国を打倒し、三ヶ国鼎立の一角をなしていたベルヴァース王国をも従え、さらに領土を広げんとバルバール王国への侵攻を目論む稀代の英雄。だが今の彼には、それらをなしえるに発揮した、理性と知性の欠片も存在しないかの様だった。

死者との結婚。その忌わしい行為に、それを行う神父もそれを見守る侍女達も恐怖に怯えていた。単にその儀式に携わる事への恐怖ばかりではなかった。

今や並ぶ者無き英雄にして、大国の次期国王たる第一王子。それが後宮の一室で死者と婚姻したなどと知られれば、大問題では済まされない。次期国王の座からの失脚すらあり得た。この儀式の事を少しでも漏らせば命は無い。いや、場合によってはこの儀式の後、口封じに人知れず殺される事すら考えられる。

自らの命に執着しないアリシアにしても、この儀式はすべきではない。そう思えた。この様な事をしてもセレーナは喜びはしないだろう。この事によって誰も幸せにはなれない。その程度の事が分からぬとは、やはり王子は気が違ったのか？

だが、返答をしないアリシアから背を向け、神父に向かって儀式の再開を促す王子の背を見詰め、アリシアはある事を悟った。王子

は気が違ったからこの様な儀式、セレーナとの結婚をしようとしているのではない。こうしなければ、気が違ってしまうから、セレーナとの結婚をするのだ。

セレーナは王子との結婚を夢見ていたはずだった。だが、己の妃の座の政治的価値を知る王子は、それを拒みあくまで寵姫の1人としての立場にセレーナを留めた。そしてその結果が彼女の死だった。

王子の妃とする。そうなればセレーナは後宮には居なかっただろう。後宮から結婚の儀式の場へと向かうなどあり得ない。結婚の準備を行う為、一旦実家である公爵家へと返されていたはずだ。

もちろん、それでもヴァレリアの凶刃から逃れられたかは怪しい。たとえセレーナが王子の妃になったとしても、何かしらの理由をつけてヴァレリアがセレーナに面会する事は可能なのだ。だが、セレーナが王宮に居ないその間に、ヴァレリアも現実を見詰め冷静になっていた可能性も否定は出来ない。

王子はその可能性に気付き、己の意思でセレーナの死を回避しえたという思いに囚われているのだった。重く、深く。

居なくなってから大切な人だと気付く。その誰もが聞き飽きるほど聞き、それだけに間違いの無いその言葉は、今、王子の心を実体として引き裂いていた。それはその言葉の悲しみゆえに、涙が重ねられたかの様にその先端は鋭利ではなかった。

こうすれば良かった。そうすべきだった。そう思うたびに、その鋭利ではない物体は、王子の心に、完治し得ない傷跡を穿っていくのだ。

それを止める為の行為。王子の精神が逃げ込んだ、今からでもセレーナと結婚する。その行為。それを理性に寄らず直感によって悟ったアリシアは、この忌わしい行いを止める言葉を失い、元の椅子に倒れ掛かる様に座り込んだ。そして両手で顔を覆った。

万人に見守られ、祝福されながら、サルヴァ王子とセレーナは結婚すべきだった。そうでなければならなかった。なのに何故……。この様な場所で、僅かの人の前で、忌わしげな視線を受けながら……。アリシアの嗚咽が響く中、サルヴァ王子と死せるセレーナとの結婚式は静かに進められた。

第２９話：バルバール軍出陣

まもなく春という時期、ランリエル王国が王都に軍勢を集結させている。その報がバルバール王都にもたらされた。

住民達は慌てふためいたが、これありと準備を進めていたバルバール軍総司令部の者達には今更驚く事ではない。だが緊張は駆け巡った。

「サルヴァ王子は擬態を行わずに正面から堂々と侵攻してくるようだね。もっとももはやどう小細工したところで、狙いがバルバールというのを誤魔化せる状況でもないが」

総司令部の会議室で、幕僚、諸将達を前に総司令官フィン・ディアスがそう口火を切った。

それに続き、参謀の１人が壁に掛けられた地図を差し棒で示しながら現状を説明する。

「先の戦いでコスティラに大打撃を与えたとはいえ、ランリエルとの戦いが長引けばコスティラもどう動くか予断を許しません。その備えを残すとすればランリエル国境に展開出来る我が方の軍勢はおよそ４万です」

「ああ、コスティラにして見れば我がバルバールは長年恋焦がれている想い人。それを横からランリエルに寝取られるとなれば、黙っては居られないだろう。ずいぶん一途に想われ、ありがたい話じゃないか」

総司令の不謹慎な表現に眉をひそめる者も皆無ではなかったが、大半の者はいつもの事と受け流す。そして気を取り直した将軍の１人が挙手しつつ発言する。

「現在コスティラが介入すると想定した場合、どの程度の戦力をバルバールに向ける余力がありますでしょうか」

その問いかけに、ディアスは別の作戦参謀に視線を向け説明を促した。その参謀は進み出て説明を始める。

「は！　コスティラの海軍戦力については、ほぼ壊滅状態に追い込みましたので、回復には数年掛かると想定されます。こちらは１０隻も海峡の入り口に展開させれば封じ込める事、間違いありません。陸戦戦力についても、最後の決戦だけでコスティラ軍は３万５千の死者を出しておりますが、それ以前の段階でも多くの損害を出し、文字通り戦力は半減。そしてコスティラとて国境を接するはバルバールのみではありません。今までは充実した国力でそれらの国とは争い無くすんでおりましたが、半減した戦力をさらにかき集め、全軍こぞって我が方に攻め寄せるのはあまりにも無謀。我が方に向けられる戦力は精々２万程度かと」

するとその説明に、武門の血筋だけならばディアスを超えるシルヴェンが疑問の声を上げた。椅子から立ち上がり、参謀にではなく総司令ディアスを睨み付けながら口を開いた。

「しかしコスティラの陸戦戦力はそもそも１０万を超えよう。そして以前はそのほぼ全軍の１０万を差し向けて来ていた。半減なら５万ではないのか」

この発言に幕僚、諸将はざわめき、誰もが反射的に口を開こうと

し、そして慌てて口を噤んだ。腐っても武門の名門の当主である。無用に恥をかかせ恨まれてはたまったものではない。

みなの視線はついこの場の最高責任者、ディアスへと集中した。みなから責任を押し付けられた総司令官は内心舌打ちしながら口を開く

「コスティラ軍１０万が我がバルバールと戦っている隙を狙い、その背後を他国が攻め寄せたとしてどうなる？　緒戦を優勢に進められても引き返してきたコスティラ軍１０万に巻き返される。彼らもそれが分かっているから今までは空となったコスティラを攻めなかった。だが現在の５万のコスティラ軍ではその巻き返しは難しい。コスティラがバルバールに攻め寄せるとしても、国内を空にする事が出来ず十分な戦力を国内に残さねばならない。その為、バルバールに攻め寄せるコスティラの軍勢は精々２万と推定されるんだ」

このディアスの言に、シルヴェンは

「ならば初めからもう少し分かり易く説明して欲しいものですな」

と憎まれ口を叩き不満げに腕を組んだ。諸将は密かに冷ややかな視線を彼に送る。

ディアスはシルヴェンにかかわってはいられないと、気を取り直し参謀に視線を送り先を促した。

「それでは、続けさせて頂きます。最大２万を想定されるコスティラ軍に対し、我が軍は王城に３千。国境の砦には７千を篭城させます。砦には武器、食料、燃料など必要な物は十分蓄え、たとえコスティラ軍が砦を尻目に国境を越えようとも、討っては出ず立て篭もり続けさせます」

敵軍を素通りさせようという作戦に、武将の1人が表情を歪ませ懸念を口にする。

「それでは、領内がコスティラ軍に蹂躙されるではないか」

だがその危険性に参謀は落ち着いて答える。発表しているのは彼だが、その内容は総司令官ディアスが入念に検討したものである。武将の指摘も承知の上であった。

「はい。勿論そうなりますが、国境付近の住民にはすぐに避難出来る様に勧告を出します。それに後背に7千の我が軍を残したままでは、コスティラ軍も我が領内深く進攻する事は出来ません。物資の輸送も困難となり、住民に避難させれば現地調達もままなりますまい」

そこにまたもやシルヴェンが口を挟んだ。彼は今度こそはと自信に満ちた表情で口を言った。

「我らがランリエル軍と対峙している間に、コスティラ軍が国境でもたもたせず一気に王都を突いたらどうする積もりか！　我らは進退窮まり窮地に陥るではないか」

その顔はバルバールの危機を訴えているはずにもかかわらず、下品な笑みを浮かべていた。シルヴェンの本心が、母国への愛情からではなく、単にディアスへの揚げ足取りの発言なのは誰の目にも明らかだった。そしてまたもディアスへと視線が集中する。

「確かにそれをやられると我が国は窮地に陥るだろうね。だがコスティラ軍がそれを行って、誰が得すると言うんだい？」

「誰が……」

単にそれを行われては危ないとだけ考えていたシルヴェンに、ディアスの問いかけは答えられない。ディアスは返答を待っても無駄と、話を続ける。

「コスティラ軍2万に王城を突かれても、王城に3千が立て篭もればしばらくは持ち堪えられる。だがそうなれば、国境でランリエル軍と対峙する我らも王城へと引き換えせざる得ないだろう。コスティラ軍2万は、背後を7千の軍勢に塞がれつつ、引き換えしてきた4万の我が軍と戦う事になる。全滅は必死だ。勿論、そうなればランリエル軍は国境を突破する。我が国は滅亡し、ランリエルの物となるだろう。コスティラ軍の犠牲の元にね。シルヴェン将軍。コスティラが多くの犠牲を出してまで、ランリエルに利する行動をする理由を聞かせて貰えるかな?」

シルヴェンはディアスの質問に答えることは出来ず、絶句した。ディアスは大きく溜息を付いた。もはや馬鹿馬鹿しさを隠そうともしない。

「我が国に2万しか派遣できない状況では、コスティラはランリエルに勝って貰っては困るんだよ。万一コスティラに損害無く我が軍が消滅しても、１０万を超える派兵が可能なランリエルと、コスティラは2万でバルバールの覇権を争う事になるんだからね。彼らが考えているのは、精々国力が回復したその時に備え、国境付近に足場を作る。それくらいなものさ。我が軍がランリエルに負けてしまわない様に気を付けながらね」

そして幕僚、諸将を見渡す。今言った事などシルヴェン以外はわきまえているとは思うが、一応他に意見を述べる者が居ないのを確

認し、改めて参謀に目をやった。

「さて、コスティラへの備えは以上として、ランリエルへの対応を説明してくれ」

軍義の後、総司令の執務室で疲れきって椅子に座るディアスにケネスが労いの言葉を掛けた。

「無駄に沢山説明させられて、大変でしたね」

結局ランリエルへの対応の説明時にも、シルヴェンからの的外れな追及は連発され、その度に総司令としてディアスが説明をせねばならなかったのだ。

慰められた上官は、忠実な従者に力なく答える。

「なに、表面上は分かっているふうに装っていても、本当はシルヴェンの様に分かって居ない者もいるだろう。その者の為にも、ちゃんと説明する事も必要だよ」

「なるほど。そういう事もあるんですね」

感心するケネスに、ディアスは肩をすくめて見せた。

「いや、そうとでも思わないとやってられないだけさ」

そして、ランリエル国境に向け出陣を翌日に控えたある日。

いつも通りにミュエルと共に寝床に着いたディアスは、目を瞑りながらも明日の出陣を考え眠れずに居た。すると隣で寝ているはずのミュエルの身体が近寄って来るのに気付いた。

夫が翌日には出陣するのだ。妻が心配のあまり寝付けなくともし方があるまい。そう考えていたディアスだったが、その幼い妻は近寄るばかりか恐る恐る自分に触れて来たのだった。

ミュエルの指先がディアスの腕に微かに当たり、慌てて引っ込むかと思うと次には軽く触れ、そして遂にディアスの腕に手を置いた。

ミュエルの身体がさらにディアスに近づく。小さな手は、今度は襟の隙間からディアスの胸の辺りに置かれる。

何の積もりかと妻の好きにさせていたディアスだったが、その意図を察し口を開いた。

「どうした。ミュエル？」

ディアスの言葉に慌てて手を引きかけたミュエルだったが、すぐにまたディアスの胸に手を置いた。

「私は……ディアス様の妻です」

やはり……。とディアスは思った。妻は夫ならば出陣する前に自分を抱けと言っているのだ。

ディアスはミュエルの標準的な１２歳の少女に比べてもさらに小さな体を抱き寄せると、自分の体の上に乗せた。

そして力を入れれば折れてしまいそうな薄い体を抱きしめ、小さ

な唇に己の唇を重ねる。ミュエルはされるままになっているが、緊張の為腕を胸の前で縮込ませ、微かに震えた。

純粋な愛情以外の成分を僅かながらに含んだ口付けを終えた後、ディアスはミュエルを見詰めて口を開く。

「今日はここまでだ。続きはまた今度にしよう」

「どっ、どうしてなのです！」

勇気を振り絞りディアスに触れ、そして夫も応じてくれるのかと思っていたにもかかわらずの言葉に、ミュエルは取り乱した。

自分はフィン・ディアスの妻のはず。それが今まではともかく、夫の出陣を前にしても抱かれないなんて。

ディアスは幼き妻をなだめる様に優しく語りかける。

「どうして今お前を抱かなくてはならないんだい？　まさか出陣すれば私が死んでしまうなんて思ってるんじゃないだろうね」

「いえ……そう言う訳では……」

だがそうは言ってもミュエルの声にはまだ不安な響きが含まれていた。ミュエルは、戦いに出るのならばやはり危険なのではないかとディアスの身を案じていた。

そして……万一の事がある前に、ディアスの妻である証が欲しかったのだ。

「いいかい。お前の夫はバルバール軍史上最高の総司令官フィン・ディアスなんだよ。そう簡単に死ぬ訳が無い」

妻を安心させる為とはいえ大言壮語が過ぎるな。とディアスは内心苦笑した。そして自分の身体の上に乗る軽い身体を改めて左手で抱きしめ、右手は妻の真っ直ぐな黒髪を撫でる。

「お前にはちゃんと私の子供を産んで貰う積もりだ」

「本当でございますか？」

ディアスに抱きしめられさらに頭を撫でられているミュエルは、動く事が出来ずディアスの胸に顔を埋めたまま言った。

「ああ。勿論だとも。だがまだお前は幼い」

「はい……」

世には１３歳、１４歳で子を産む女も居る。世間体を考えなければ１２歳のミュエルが今妊娠しても産むのは１３歳の時になるであろう事を思えばおかしい話ではない。だがミュエルは一般的な１２歳と比べても身体が小さい。それはミュエル自身自覚していた。

「でも、いずれお前には沢山子供を産んで貰うんだから、覚悟しておきなさい」

ミュエルは抱きしめられて首が動かせない為、心の中で首を傾げた。何をどう覚悟するのだろう？　と。

だが、幼く知識の少ないミュエルは、それが沢山お前を抱くのだ

と遠まわしに言われていると気付かず、とにかく夫がそう言うのだからそうしなければならないのだろうと判断した。

「分かりました。がんばります」

と自分の腕の中で素直に返事する妻を抱き寄せて、改めて軽く口付けた。

そして夫は考えた。さて、このままミュエルを身体の上に抱いたまま寝る事は出来るだろうか。

翌朝目を覚ましたディアスは、ミュエルが自分の身体の上ですやすやと寝息を立てている事に、案外寝れるものなのだな我ながら感心した。

むしろそれより、眠りの浅いらしいミュエルが大人しく寝ている事の方が意外だった。だが、実はやはりミュエルは何度も目が覚め、朝方になってやっと眠りに付いた所だったのである。

もっとも夫の上で寝るという事が嫌だった訳ではなく、夫に抱かれながら寝るというのは彼女にも嬉しい事だった。

ディアスが起き僅かながら身じろぎするとミュエルも目を覚ました。

「おはよう」

「おはようございます」

間近で行われた挨拶の後、妻は夫の上から降り夫は体を起こす。

「いててっ」

３０歳半ばのディアスに、いくら幼いとは言え、人一人を乗せたまま眠るのは体勢に無理があったらしく、身体のそこかしこが痛い。

だが幼い妻に年齢の事で弱音を吐くのは躊躇われ、

「どうなさいました？」と心配そうに聞くミュエルに

「いやなんでもない」と強がって答えた。

そして二人は部屋を出て朝食を取るべく食堂へと向かうと、そこにはすでにケネスが先に座っていた。

「おはようございます」と挨拶するケネスにディアス達も挨拶を返す。

だが椅子に座るときディアスはついまた、「いててっ」と声を出し、寝不足のミュエルは小さく欠伸をした。

その二人にケネスは不審に思い問いかける。

「大丈夫ですか？」

「ああ。昨日の夜ちょっとな」

ディアスは何気に答えたが、その答えにケネスは赤面した。そして視線をミュエルに移す。さっきから頻繁に欠伸をし明らかに寝不足の少女に。

ミュエルは何の事かと首を傾げたが、その夫は甥の勘違いを敏感

に察して慌てて口を開く。

「ケネス。誤解するなそういう事じゃないからな」

ケネスも急いで首を振る。だがその顔は赤面したままだ。

「いえ。そんな僕は別に……。それにお二人は御夫婦なんですから特におかしい事じゃないですし」

するとやっとミュエルもケネスの言っている意味を理解し、狼狽して弁解する。

「ちっ違います！　ディアス様の上で寝ただけです！」

その言葉に夫と年上の甥の動きが止まる。そして自分の発した言葉の意味気付いて幼き新妻も固まった。

結局三人は使用人が朝食を運んでくるまで終始無言でお互いに目を合わせることもなく、その後も続いた気まずい空気の中で黙々と朝食を食べたのだった。

自邸の前でディアスが馬に跨り、その轡を従者であるケネスが持つ。

「では行って来る」

馬上から妻に声を掛けるディアスにミュエルも答える。

「行ってらっしゃいませ。御武運をお祈りしております」

と武人の妻らしい挨拶をした後、

「必ず生きて帰ってきて下さい」と付け加えた。

ディアスは妻に微笑む。
「分かった。必ず生きて帰ってくる」
そしてケネスに視線で合図を送ると、彼が率いる幕僚達が待つ王城へと向かったのだった。

第３０話：ランリエル軍出陣

セレーナの葬儀の夜、後宮にあるアリシアの部屋の扉を叩く者が居た。

「誰？」

この様な時間に寵姫の部屋を訪れる者など後宮の主であるサルヴァ王子しか居ないはずなのだが、王子が来るならば前もって後宮を管理する役人から連絡があるはずだった。だがアリシアの言葉に返事は無く、またもや扉が叩かれる。

アリシアは仕方がないと扉へと向かった。厳重に警護されている後宮で賊が押し入る事もないだろう。アリシアが扉を開けると意外とも言え、当然とも言える男が立っていた。

「……殿下」

王子はアリシアの言葉に無言で答えると無造作に扉をくぐり、アリシアは王子と体がぶつからない様に身を引いた。そのまま椅子に座る王子をアリシアの気遣わしい視線が捕らえる。

無言で来訪し、無言で部屋に押し入った王子の態度は礼儀を忘れたかの様だったが、もはや言葉を発する事すら煩わしい、アリシアにはその様に見えた。

本来自分の部屋とはいえ王子が訪問している時に、王子の断りもなしに椅子に座る事など無いが、無言で椅子に座る王子に対し、アリシアも机を挟んだ対面の椅子に座る。

二人の間には暫く沈黙が流れた。

今日行われたセレーナの葬儀にサルヴァ王子は列席しなかった。王子が何を考えているのかアリシアには分からない。だがどうしてセレーナの埋葬に来なかったのか。それは聞く必要があると思った。

「今日はどうなさったのですか？」

アリシアの言葉は僅かながら持って回ったものだったが王子には正確にその意図が伝わった。だが王子の返答に、彼女は王子の意図を理解する事は出来なかった。

「……あそこはセレーナの墓ではない」

呟く様に言った王子の言葉にアリシアはリヴァルの墓の事を思い浮かべた。

リヴァルの墓は礼儀的に一度訪れたがそれ以降一度たりとも足を向けては居ない。アリシアはそこがリヴァルの墓とは思っては居なかった。何故ならリヴァルの遺体がそこに無いからである。アリシアの婚約者であるリヴァルはカルデイ帝国との戦いで命を落とした。遠い異国での戦いに多くの者が亡くなり、リヴァルを含めたそれらの遺体は、戦場となったカルデイに埋葬されたのだ。

だがセレーナの遺体は間違いなくあの墓に納められている。なぜ王子はそれをセレーナの墓ではないというのだろう。

王子は気がふれたの？　もしかしてセレーナがまだ生きていると思っているの？　いや、さすがにそれは無い筈だった。王子はセレーナが死んだ事を理解していた。そう思い、アリシアは王子を見つ

め続けた。

アリシアの疑問に答える様に王子がまたポツリと呟いた。

「あれはセレーナ・カスティニオの墓だ……」

その言葉に、アリシアはそっと目を閉じた。頷く事の代わりの様に。

あの夜の事を知る者はアリシアを除いてすべて王宮を去っていた。神父は元の小さな教会に戻り、セレーナの侍女達はセレーナの実家の公爵家へと戻っている。王宮に残って居るのはアリシア一人だった。彼らは一生あの事について語る事は無いだろう。

ならば王子は埋葬に出る代わりにこの部屋に来たのだろうか。セレーナが、セレーナ・カスティニオではなく、セレーナ・アルディナである事を知る者の元に。だがそれも推測の域を出ない。

その後、また口をつぐみ沈黙を続ける王子に、アリシアも沈黙で答える。

アリシアは王子の目を見つめながらも、その思考はセレーナとの思い出の中を浮遊していた。嫌な女。それがセレーナの第一印象だった。初めてアリシアがセレーナとあった時、セレーナは彼女に散々嫌味を言ったのである。

だがその考えはすぐに改められた。セレーナは王子を愛する事だけを考え、愛される事だけを望んでいた。セレーナのアリシアに対する態度は王子を失う事への恐れだった。

そして危機に瀕する王子に会いたいというセレーナの思いに、リ

ヴァルの最後に立ち会えなかった自分とを重ね合わせたアリシアは、彼女が王子に会いに行くのを手伝ったのだ。王子の元にたどり着くまでの道中、様々な障害を共に乗り越える中で二人の間のわだかまりは消えた。

それからセレーナはアリシアを姉の様に慕い、アリシアもセレーナを妹の様に想った。

セレーナはいつも王子の身を案じていた。

セレーナに思いを馳せていた為、王子に視線を向けてはいたが見てはいなかったアリシアの視界に、弱い明かりに照らされる王子の横顔が映る。セレーナはこの男を愛していたのだ。

今この男は自分と同じ様に、俯くその視線の先に何も写さずセレーナとの思い出に耽っているのだろうか。自分とは比べ物にならないほどすごしたセレーナとの時間を。

セレーナと過ごした時間も想いの質も違う二人だったが、アリシアにはセレーナに対する王子の思いを感じられた。勿論その思いのすべてを理解出来た訳ではない。ただ王子はセレーナを愛していた。その、単純だが、それだけで十分な事だけは理解する事が出来た。

今更ながらとも改めてともアリシアは思わない。無粋な言い方を強いてすれば、これほどとは、とアリシアが感じるほど王子はセレーナを愛していたのだった。

セレーナの事を語り合うかの様なその沈黙は、窓の外が白みがかるまで続いたが、不意に王子が立ち上がる。そして彼女から背を向け、扉へと体を向けた。

「お帰りですか？」

王子に続いて立ち上がりながらアリシアは王子の背に声を掛ける。
その声に王子は振り返り顔をアリシアに向けた。

「今日は軍議があるからな」
「軍議？」
「ああ。バルバール攻めが近い」

この様な時に戦いの話をするとは、なんと血も涙も無い冷血漢なのだろう。以前のアリシアならば間違いなくそう考えたはずだった。だが今の彼女の脳裏に浮かんだのは、ただただ疑問であり、そしてその考えをそのまま言葉にした。

「なぜ？」

その寵姫が一国の王子に対するには不適切な問いかけに、王子はその無礼を咎める事無くアリシアに体を向け素直に応じた。

「カルデイとの戦いで、俺はお前の夫のリヴァルを死なせた。いや、お前の夫ばかりではないだろう。そして今度の戦いでも死んで行く者がいる筈だ。今俺の妻が死んだからといって止める訳にも行くまい」

王子を見つめるアリシアの視線が変わった。痛ましげなものに。

ならば戦う事自体をやめる事は出来ないのか。今回のバルバールとの戦いの事だけではない。すべての戦いを。アリシアはそう言葉が出そうになったが、今それを王子に問いかけるのは躊躇われた。

自分を見つめ続けるアリシアに、王子はまた口を開く。

「リヴァルの兜をお前に返そう。あれはお前の物だ」

だがアリシアはその言葉に、視線を王子に向けたまま小さく左右に首を振った。

「いえ。……それは殿下がお持ち下さい。リヴァルは殿下をお慕いしておりました。リヴァルも……夫もその方が喜ぶでしょう」

「そうか……」

王子はそう言うとアリシアを見つめたまま沈黙した。そして何度か口を開きかけまた閉じるという事を繰り返した後、意を決し言葉を発した。

「お前にも済まぬ事をしたな」

「……リヴァルの事でしょうか？　ですがそれは戦いでの事です。殿下の所為とは考えておりません」

今度は王子がアリシアの言葉に首を振る。

「そうではない。俺がお前にした事についてだ。数え上げればきりが無いが……まずはお前を売女と言った事だ」

だが王子の謝罪の言葉にアリシアは僅かに苦笑を浮かべ答える。この声には自嘲の響きも微かに込められていた。

「私は確かにお金を貰う為にこの後宮に来ました。そう呼ばれても仕方が無いでしょう」

アリシアの言葉に王子は一歩彼女に近づく。だが、アリシアを見詰め続けるその目は、自らの非を認めるかの様に力は無かった。

「だがお前には、そうするしかない理由があったのだろう」

王子が近づいた為、背の高い王子と目を合わせるには見上げなくてはならなかったが、アリシアは王子の目を見据えた。その視線は幾分鋭かった。

「違います。それは違います殿下。私も、すべての、とは申しません。ですが女がお金の為に体を売るのに、そうするしかない理由が無い事などありません」

アリシアの言葉に王子は頬を打たれたかの様な表情となり、アリシアを僅かに見開いた目で見つめた。そして数瞬後、我に返る。

「そう……だな。すまない。埒もない事を……。いや、……とにかくすまない」

己の気持ちを表すに適切な言葉を見つけられぬ王子は、謝罪の言葉を繰り返しつつ背を向けた。そして廊下へと通じる扉に向かって足を踏み出したが、やはり寝ていない事が堪えたのか足を縺れさせる。

「殿下。大丈夫ですか」

アリシアは慌てて近寄ったが、王子は彼女に背を向けたまま、それを手を上げて制す。

「大丈夫だ」

そう言いながらすぐに体勢を持ち直した王子に、アリシアは心配

そうな視線を投げかけた。しかし王子はアリシアに顔を向けなかった。

改めて扉へと足を進ませる王子の背にアリシアが声を掛ける。

「お体にお気をつけ下さい」

王子の体が扉に手をかけたまま止まる。そして暫く躊躇った後、アリシアへと顔を向けた。

「お前も体には気を付けろ」

王子はそれだけ言うとまた前に向き直り部屋の外へと姿を消し、扉は静かに閉じられた。アリシアはその扉に静かに頭を下げた。

数日後、ランリエル王都フォルキアにサルヴァ王子が率いる軍勢が整えられた。

軍勢の大半はすでに王都の外にて待機しているが、王子は近習の者や幕僚達と共に王宮から出陣するのだ。その光景は後宮のアリシアの部屋の窓からも見えた。先頭に、首から下に銀の鎧を身につけ、頭に無骨なリヴァルの兜を被るサルヴァ王子が白馬に跨り進む。

その光景が目に入ったアリシアは、突如部屋を飛び出した。服の裾を物ともせず階段を数段飛ばしに駆け下り、庭を走り抜けた。

門番達も出陣する軍勢に目を向けている事を幸いに門を一気に通り抜ける。門番達が慌てて追ってきたが、アリシアは裾を乱しながら構わず走り続けた。

「どいて！」

王子に声援を送る者達を掻き分けて進み、みなの声援を受ける為ゆっくりと馬を進ませていた王子にアリシアは遂に追いつく。

そして王子が乗る白馬の前に滑り込むように飛び出した。飛び出してきた者に王子は思わず手綱を引いて馬を止める。そしてそれがアリシアである事に気付いた。

「アリシアか……。どうした」

そう言いながら白馬から降り、そしてリヴァルの兜を脱ぐ。王子の近習や幕僚達も王子が下馬した事により、続いて馬から降りる。

王子の行軍の前に女が飛び出し、その行軍を止めるという前代未聞な状況に、群衆も王子に続く将兵も戸惑った。だがその肝心の止められた王子が激する事も無く下馬した事に、誰もが手を出しかねる。

後宮からここまで走り抜けてきたアリシアは肩で息をし王子の問いに答える事が出来ない。その内彼女を追いかけて来た門番達も追いついて来た。だが追いかけてきた女を王子が見咎めない事に、門番も彼女を捕らえる事に躊躇した。

やっと息が整ってきたアリシアは、それでも荒い息で王子を見つめて口を開いた。

「どうかご無事で」

王子もアリシアを見つめる。

「ああ。必ず勝つ」

しかしアリシアは王子の言葉に首を振った。

「その様な約束はして下さらなくても結構です。ですが約束して下さるなら……必ず生きて帰ってくると……そう約束して下さい」

必ず生きて帰って欲しい。それは出陣のたびにセレーナが王子に向けた言葉だった。そしてその度にサルヴァ王子は、言葉を贈ってくれるなら武運を祈ると言えと、セレーナに言い聞かせていたのだった。

王子は天を仰ぎ、そこに誰か居るかのように視線を投げかけた後、またアリシアと向き合う。

「分かった。必ず生きて帰ってくる」

王子はそう言うとアリシアを改めて見詰め、アリシアの視線も王子に応えた。アリシアを追いかけて来た門番。王子の近習、幕僚達。そして王子を見送る為に集まった多くの者達が見守る中二人は見詰め合っていたが、おもむろに王子が動く。

「では」

と短く言うと改めてリヴァルの兜を被り、王子は白馬に身を乗せた。他の者達もそれに続く。王子はもう一度だけアリシアへと顔を向けると白馬の腹を軽く蹴り、ゆっくりと進みだす。

アリシアは王子が城門を通り過ぎ、その姿が見えなくなった後もしばらくその場に佇んでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7857u/

愚者達の戦記２

2011年11月5日02時13分発行